女子文壇

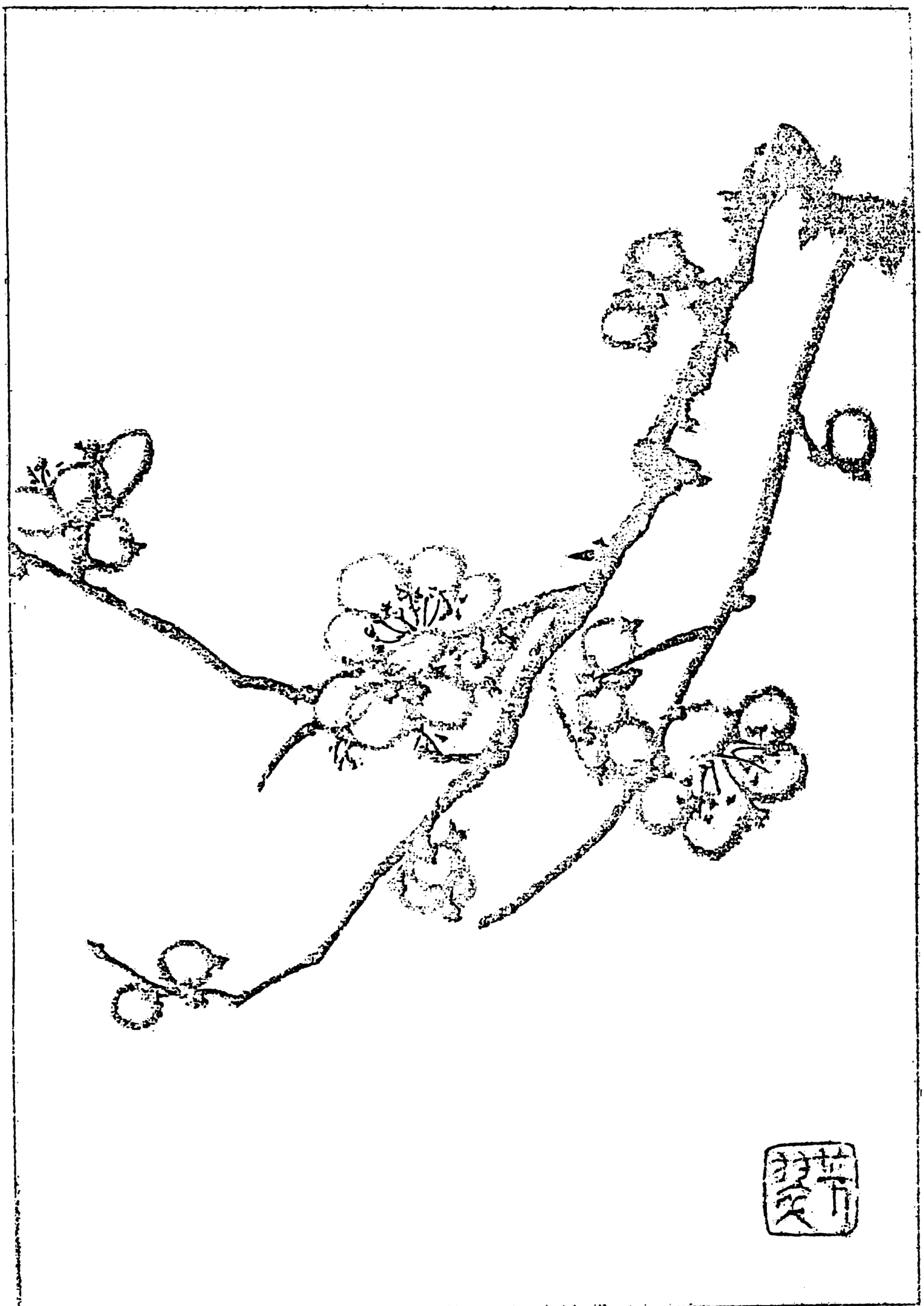
第三巻第二號

明治四十年二月一日発行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY

梅花

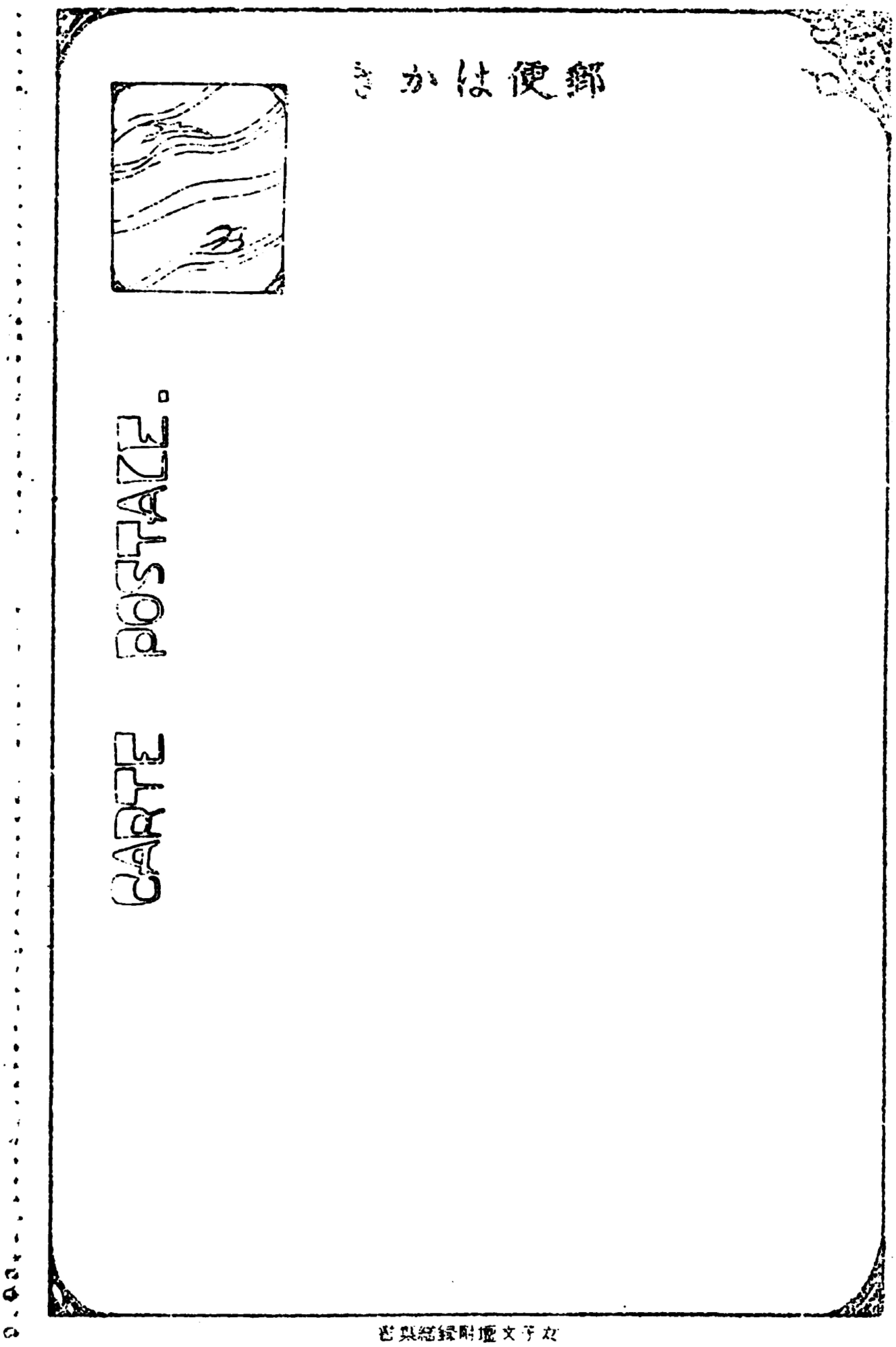


高野ゝ松芝子筆

Digitized by Google
Original from
HARVARD UNIVERSITY



Digitized by Google
Original from
HARVARD UNIVERSITY


郵便はかき
CARTE POSTALE.
女子文壇附錄繪葉書

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

本社創業第三年紀念廉賣

◎廉賣期限 四十年二月中（滿期正價に復す）

廉賣書目

（各書とも製本出來取揃あり）

書名	體裁	正價	廉賣價	郵税
詩と美文 王むし	全中形 新式上製	正價金六十錢	廉賣價參拾錢	郵税六錢
女子懸賞文集	第壹中形 洋裝並製	正價金二十五錢	廉賣價拾五錢	郵税六錢
美文作法	全大形 洋裝並製	正價金四十錢	廉賣價廿五錢	郵税四錢
小説美文 朝ばれ	全中形 洋裝本綴	正價金四十五錢	廉賣價廿五錢	郵税四錢
言文一致文範	全大形 洋裝並製	正價金四十錢	廉賣價廿五錢	郵税四錢
卅九年実地精査 女子遊學便覽	全大形 洋裝並製	正價金三十錢	廉賣價貳拾錢	郵税四錢

◎好機不可逸

（郵券代用は必ず壹割増に申受く）

特約取次所

東京神田表神保町 東京堂　京橋尾張町 東海堂　京橋中橋廣小路 前川文榮閣　京橋鎗屋町 良明堂　日本橋呉服町 北隆館　神田裏神保町 上田屋

（甲の一）

非常の盛况

各書の詳細は次頁にあり

出版元 ◎ 女子文壇社 ◎ 東京京橋大鋸町十

（郵便振替貯金口座第壹七貳九番）（電話本局六百七番）

見落す勿れ ◎ 後るゝ勿れ

卅九年新刊 女子文壇社出版＝紀念廉價書の批評一班

（正價及廉價價格は前頁にあり就て見よ）

河井酔茗著　山中古洞畫入

詩と美文 玉むし

▲婦人世界評

酔茗君の筆のやさしさは、本誌の讀者諸姉が御存知のとてありませう。この玉蟲は君の美文と新體詩とを集めたもので、いづれも婦人のために書いたのですから綺麗なものばかり、體裁もなか／＼凝つたものです。

（四六判色クロース金箔入本綴上製）

諸大家序文　小森松風著

美文作法

▲中央新聞評

本書は總論に於て美文の起源名稱種類を說明して抒事文、抒情文抒景文に關する古今東西の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文翻譯法漢文の素讀讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳說したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

（菊判二百卅頁並製）

諸大家序文　小森松風編

言文一致文範

▲中央新聞評

言文一致の起源より發達、種類、作法等を示し文範として諸名家の論說、抒事、抒景、日記等數十編を示したり斯道研究者の歡迎を受くるものならん

（菊判二百卅頁並製）

鈴木秋風著　太田三郎畫入

小說美文 朝ばれ

「萬朝報」曰く　どれ是れも極めて溫雅な文體で女學生の好きさうな册子なり。

「都新聞」曰く　いづれも短篇の小說ながら、著者が所謂寂寞の歷史に得たる感興と省察とは、能く此種に顯はれたり。

「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小說で何れも未だ浮世の荒波にもまれない青春の女の幽情を寫したものです

（四六判金刷厚表紙本綴上製）

諸大家選評（第三版）

女子懸賞文集 第一

▲電報新聞評

當選の詩文を一纏めにしたるものにて短篇小說、消息文、抒情文、叙事文、論文、新體詩、和歌、俳句、はがき文　圖畫の諸欄に分てり近頃の青年男女の文章は一體に進み來りしが殊に本書は女子と云ふだけに時節柄歡迎者多からん

（四六版四百二十頁並製）

中村報知新聞記者著　學校長肖像入

實地踏査 女子遊學便覽

▲萬朝報評

都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案內が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば、調査は善く行屆けり、尚ほ職業案內及學費の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を鼓吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、昔て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば、上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

（四六判二百卅頁並製）

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



(卯の三)

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御申添を乞ふ

沼波文學士。廣津柳浪
巖谷小波。河井醉茗　先生選評
佐々木信綱。女子文壇編輯局

女子懸賞文集

目下印刷中　三月中旬發賣

第二

洋裝美本　紙數五百頁餘

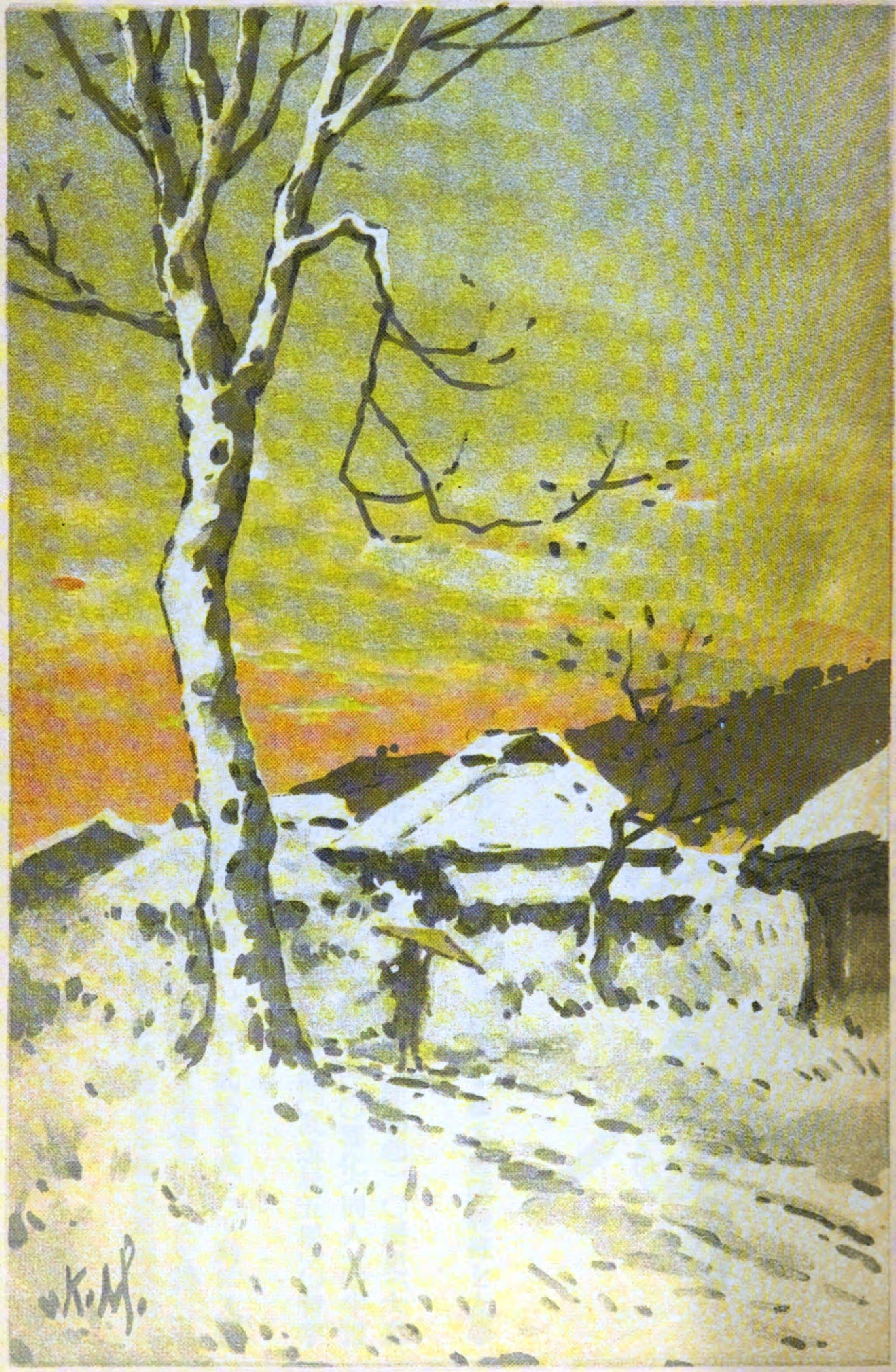
正價金三拾錢　郵税六錢（郵劵代用必壹割增）

本書第一輯は曩に大好評忽ち數萬部發賣の盛況を呈せしが、今又第二輯成る、滿卷實に奬學五百金余の重賞を懸けて募れる天下女秀才の金篇玉什明治文壇の珍品なり

出版元　東京々橋區大鋸町　電話本局六〇七番　（郵便振替貯金口座第一七二九番）　女子文壇社

特約賣捌所　〇東京堂〇東海堂〇北隆館〇前川文榮閣〇上田屋〇良明堂外書店

雪のあした



三宅克己先生筆

Digitized by Google
Original from
HARVARD UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
HARVARD UNIVERSITY

名譽總裁博恭王妃經子殿下　會長侯爵夫人鍋島榮子

大日本女學會

本會は女學通信教授に從事すること玆に拾參年此度第七回の學期を開きて新に會員を募集す●本會講義錄を女學講義と稱し其學科幷に講義囑托講師左の如し

○修身（後閑菊野）○禮法（佐方鎭子）○國文（同人）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香、桂湖邨）○歷史（大森文學士）○地理（喜田文學士）○地文（脇水理學士）○數學（藤野了祐）○博物（脇水理學士）○理化（同人）○生理衛生（三宅博士）○家事（後閑菊野）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○書學（武村千佐子）○史傳（下田歌子）其他附錄數欄あり

學期終了は貳ヶ年にして一個月の紙數菊判百五十頁以上之に對する會費は僅かに一個月貳拾五錢にて別に入會金を要せず●講義は其文章極めて平易にて總かな附なれば高等小學を卒へさる人々にても講習することを得べし高等女學校に入學し難き事情ある女子達は此書の配布を受けて女の道を辨へられよ●詳細なる會則希望の向はハガキにて申込あれ直に進呈すべし（尚此外に高等科もあり入學を許す）

新學期開始會員募集

東京市麹町區下二番町三七　大日本女學會　電話番町一三三〇

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥顯る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑム子スカシ的齒式賣藥)のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ 輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價) 壹劑四拾貳錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割增し

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艷美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢 特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑壹劑分を用ゆれば二三ヶ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢 貳劑分壹圓廿錢 參劑分壹圓七拾錢 特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき斬世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢頑症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送附す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御申添を乞ふ

依田百川先生序文

幻堂内山正如君著

實用普通作文寶鑑

〔全一册洋裝中判總クロース仕立五百餘頁〕

定價金七拾錢
郵税金拾貳錢

卷頭内外勝景及古今人物寫眞銅版數葉入

本書は方今の文體を匡正せん爲に作りたる者にして全篇を分て總說○作文作例○熟語類語の三に分ち鼇頭には邦俗本諺東西格言を掲けたり著者は多年作文に洗錬の特技あるを以て本書の完全無缺なるは言を俟たず左に概要を掲ぐ

總說

●文章とは何ぞや●文章の優劣●文章の種類●散文及美文韻文●文章の組立●放膽文と小心文●短文と長文●觀察の必要●多く書を讀め●多く文章を作れ●多く商量せよ●文題の選擇●文章の命意●文章の結構●文章の段落●辭句の修飾●文章の鍛錬●文章の口調●文章の平易●文章の雄健●文章の優美●文章の簡潔●文章の崇高●文章の誠實●文章の變化●文章の新機軸●事物の形容●譬喩法と擬人法●對照法と進級法●送假名の法●漢字の使用●漢文模擬の弊●金言の引用●格言名句を記憶せよ●文章の含蓄●文章の病弊●剽竊と暗合●踏襲と祖述●飜案●外國文の飜譯●外國文の補助●文中の諸法●漢文の修辭法●句讀の法と圏點●古人の文章談……

作文作例

文章の體裁▲書簡文▲記事文▲戰記文▲敍事文▲日記文▲紀行文▲序文▲題跋▲傳記文▲行狀▲祝文▲祭文▲吊文▲小說文▲廣告文▲敍情文▲論文▲說文▲評文▲辨▲贊▲敎誡文▲表▲上奏文▲解說文▲俳文▲漢文

熟語類語

時候▲地理▲遊覧▲器具▲動物▲植物▲戰陣▲學藝▲道德▲人品▲人事▲慶賀▲傷悼▲感情▲勤作▲生活▲以呂波▲引俗諺集▲内外格言集

發兌元　東京市本町三丁目　博文館

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

少年之友

雜誌 少年少女の作文唯一
誌友と紙數の増加。新年より大發展

二巻 第二號
二月一日發兌

懸賞 少年文壇

▲作文 ▲和歌 ▲俳句
▲考物 ▲笑草 ▲筆蹟
▲友達會皆有益の文字

滿載々々

正價（一册がたツた五錢 六册郵税共金廿七錢 十二册五十四錢）

發兌元 東京神田旅籠町二丁目廿三番地 文光堂 振替口座一九五五

市內特約賣捌 神田區表神保町東京堂 裏神保町上田屋◎京橋區尾張町東海堂其他北隆館良明堂外

少年之友

三宅克己先生畫（第一輯より第四輯發賣）

美景水彩 繪ハガキ

上等舶來紙八色密刷新式砂目模樣

無比廉價壹輯三枚（一組）金拾二錢 送料九組まで二錢

平和紀念端書

こゝの重

一枚特製 金五錢

東宮侍講 本居豊穎先生閲
大町文學士 中內文學士序
國學院學士小森松風君編纂

古今名家 短文軌範

（全一册中判美本 正價金三十五錢 郵税四錢）

製本發賣

本書は○師範學校○中學校○高等女學校其他同程度の男女學生諸君の為めに作文上最も先にすべき短文の指南として極めて懇切に古今名家の傑作を編纂せられたる者なれば學生以外何人に取りても益する所大なるべし

發兌元 東京市神田區旅籠町一丁目 文光堂

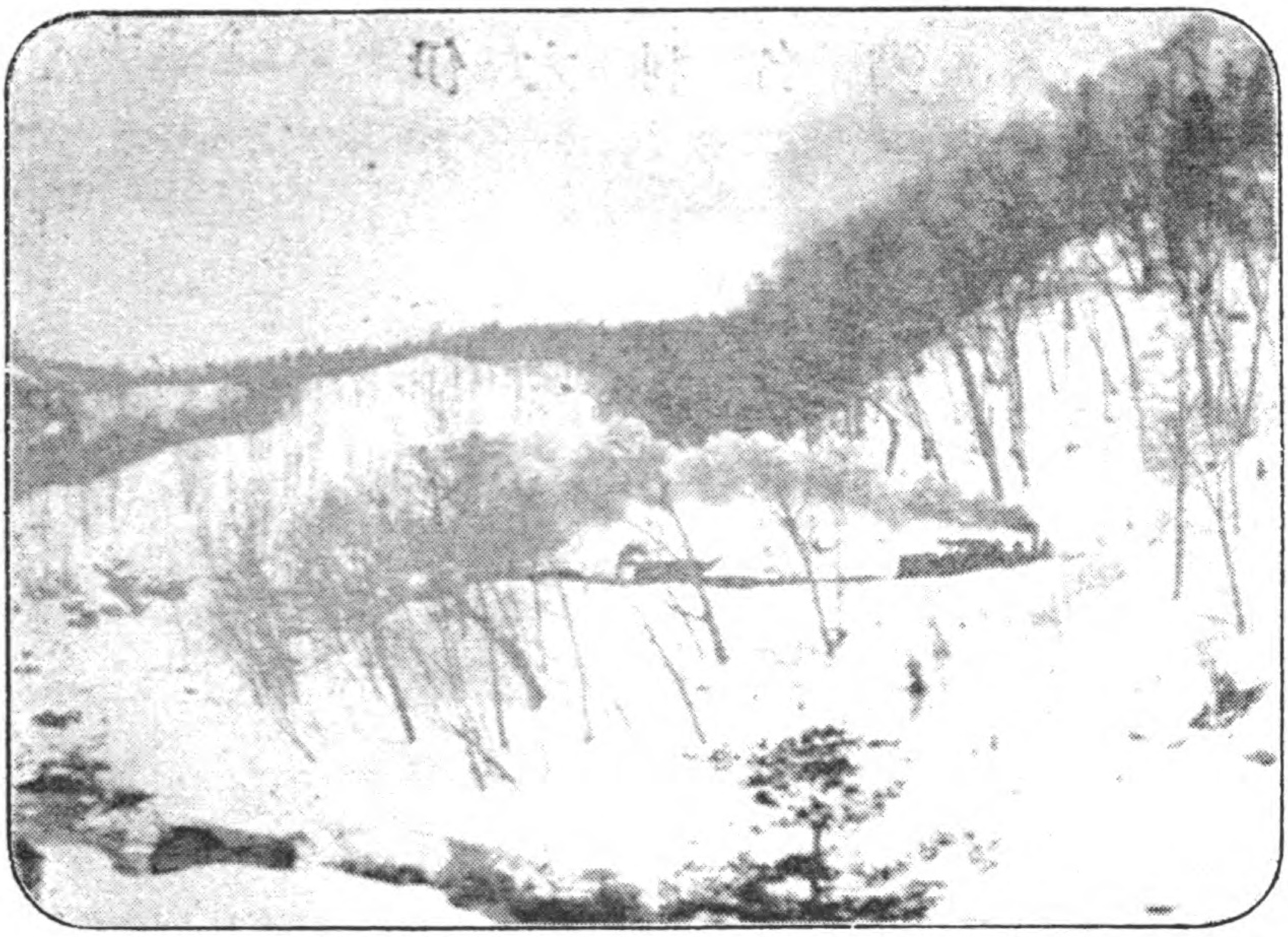
（乙の四）

伊太利名畫



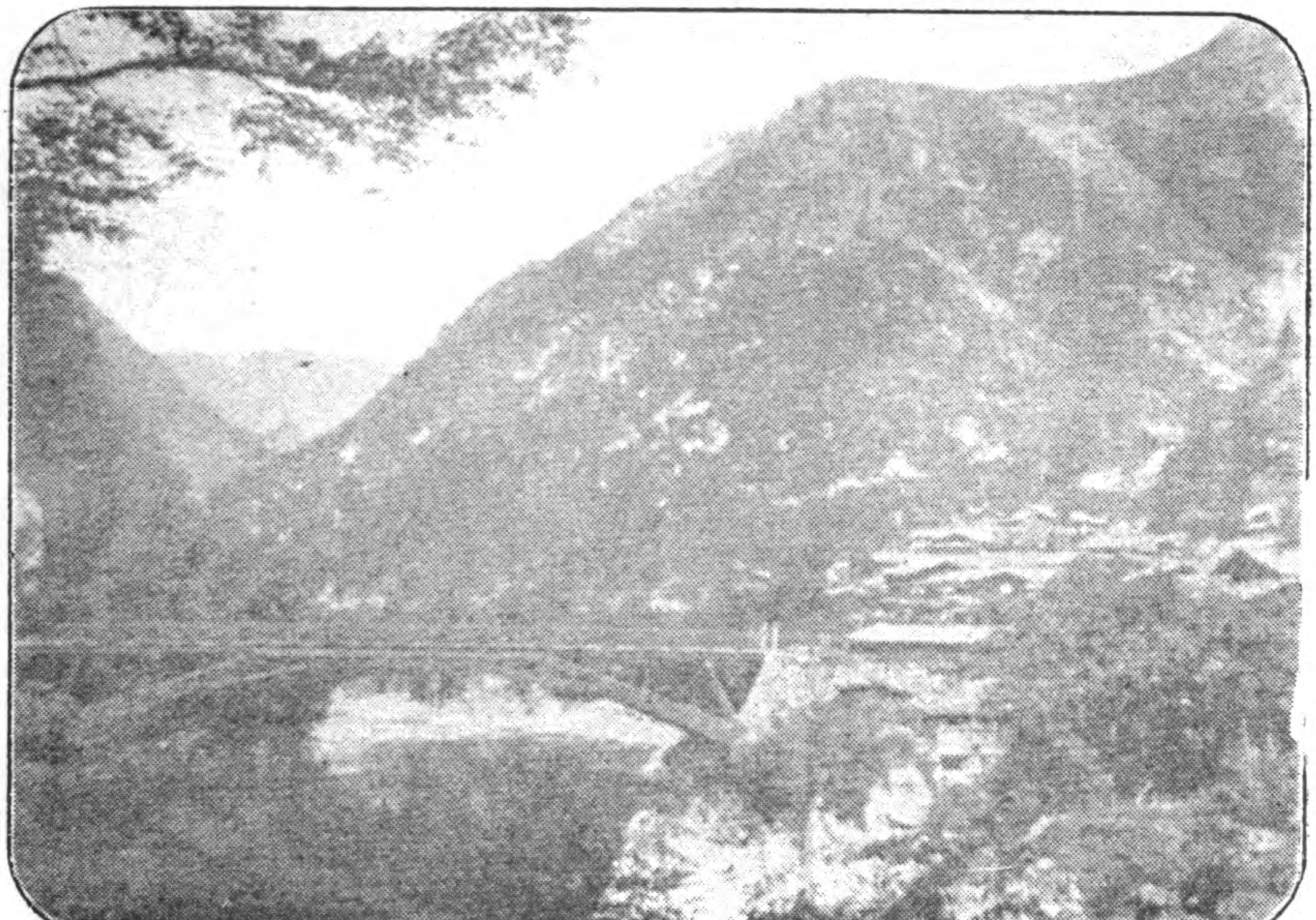
Digitized by Google
Original from
HARVARD UNIVERSITY

雪中の汽車（北海道歌志内炭山と砂川間の雪景）



（梶水仙子寄贈）

飛驒船津町たから橋

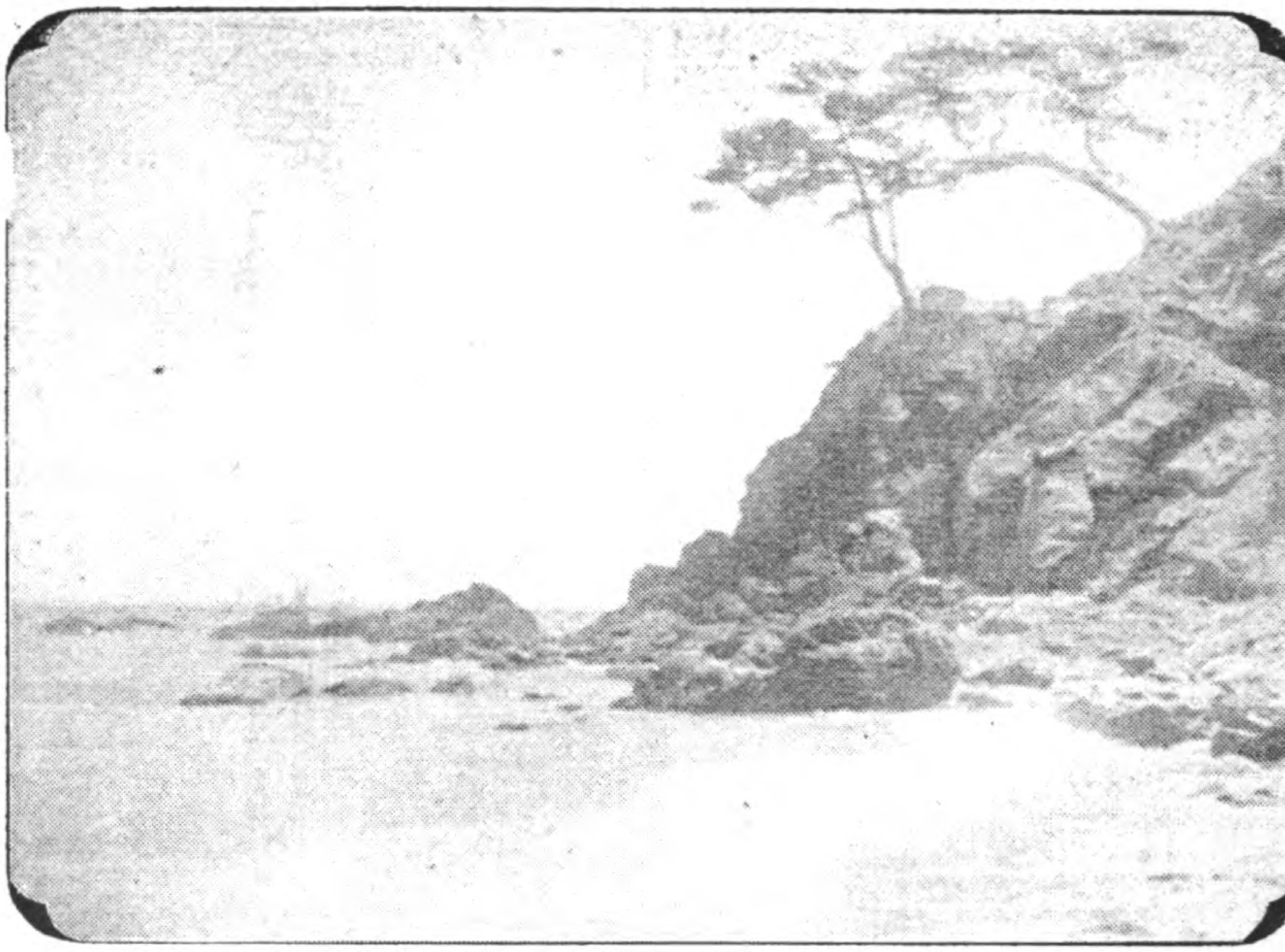


（荒垣千代子寄贈）

Digitized by Google

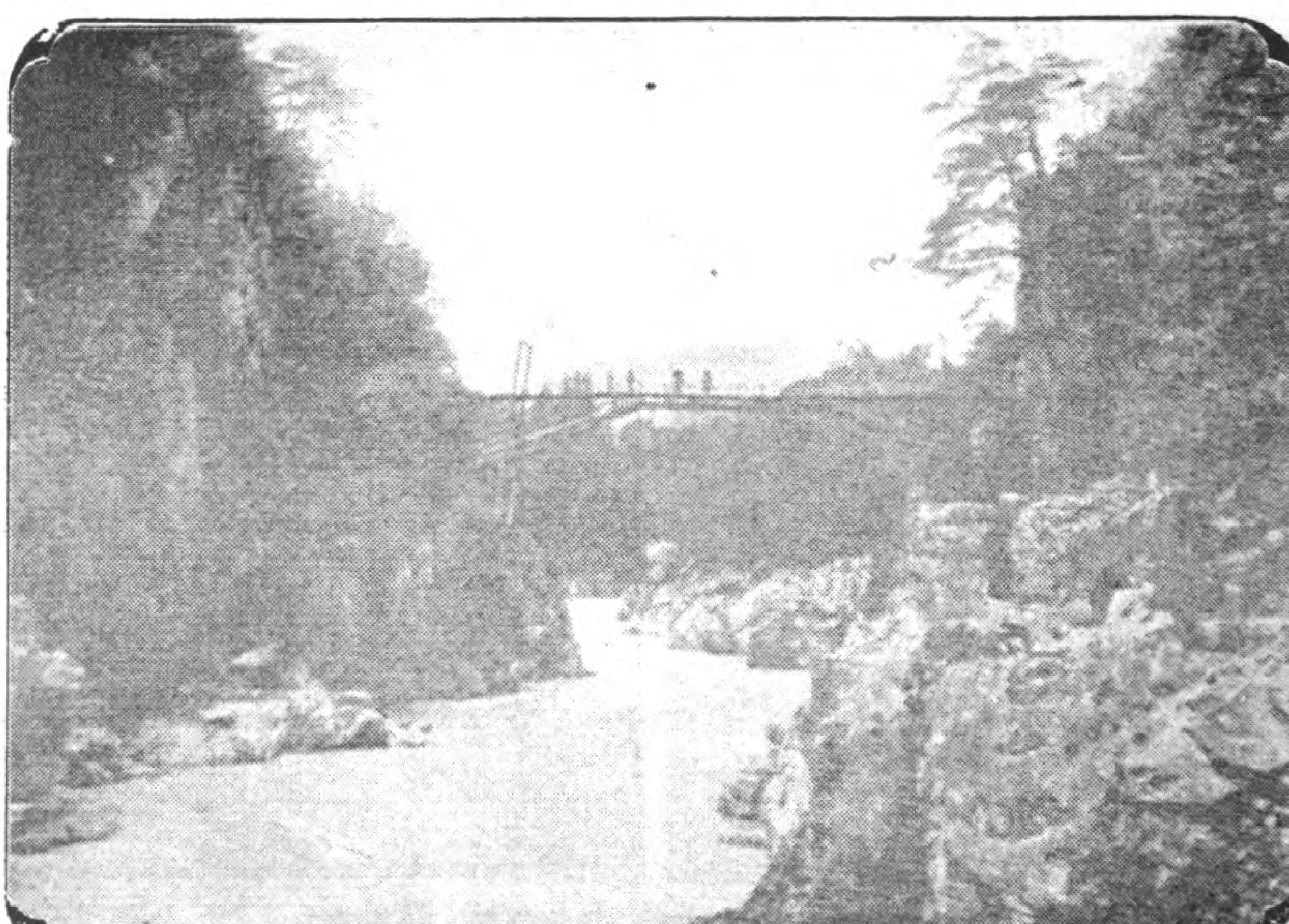
Original from
HARVARD UNIVERSITY

土佐（月の名所）桂濱



（包國生寄贈）

信濃（伊那の名所）天龍峽



（今村元子寄贈）

Digitized by Google
Original from
HARVARD UNIVERSITY

誌友おもかげ（三）







大阪市 辻 椙子
神戸市 大谷壽惠子

青森縣 高山武枝子
上海 岩永くに子





秋田市 花野梅子、森田靜子、春野かほる

《記者申す 續々寄贈を願升、御望により御返し致ます》

Digitized by Google

Original from
HARVARD UNIVERSITY

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御申添を乞ふ

女子の爲になる作文唯一雜誌

▲新年大附錄◎聲と姿(石版極彩色密刷額繪)岡田三郎助先生筆◎明治文壇出世作一覽







頁數百三十
定價金拾錢
郵稅金壹錢

新年號(三卷壹號)大懸賞當選發表

大好評

▲水彩畫

○新年の富士(石版數遍密刷)……三宅克己筆

▲繪手本

○羽子板(石版色刷)……重松せい子筆

▲繪にが

○美の神(石版數遍密刷)……

▲寫眞

○勅題新年の松と佐々木信綱先生謹詠

○誌友おもかげ(一、二)

○手がとどかぬ(ポンチ畫)

【女子文壇】

◉第三卷の始に……編輯同人

◉おんなの歌……與謝野晶子

◉女學生とは何ぞ……羽仁もと子

◉夜店……大塚楠緒子

◉三つの道……小山内八千代子

◉先づ品性を作れ……伊藤銈子

◉東京だより……

◉姫小松……

【圖畫】

○雨(一等)前田民子○渡場(三等)岩谷綠子○はり物(四等)山本とし子、お洗濯(五等)中島縫子○娘義太夫(同)江原とり子○しらべ(同)大島きよ子

【敍事文】

○忘れ物(二等)わかな子○風の行衛(三等)有賀まさ子○古御堂(四等)房枝子○

【新體詩】

霜のあした(五等)金子れん子

○元旦の賦(二等)藪智子○未だ見ぬ花(三等)宮島なみ子○白指(四等)石川潔子○わが思(五等)川島たへ子

【短篇小說】

◎甲種一等 愛の花……高仲菊子
(賞品)銀側懷中時計(拾圓)

○海の光(三等)赤倉とみ子○喜び(五等)齋藤茂子

【和歌】

○(二等)暮の山○(三等)木塚紫水○(四等)磯雅井薫子

【文藝遊戲】

○課題…姉妹合せ(一等)相原壽美子、井澤蘂江子○(二等)高山浪子、村林やす子○(三等)井上靜枝、今西初野○(四等)中山浦子、森部蝶子○(五等)齋藤茂子、博田しか子

【抒情文】

○失明の妹(三等)みつ子○冷たきれや(五等)紅薔薇

【俳句】

○(二等)山田くに子○(三等)洒葉貞子○(四等)乙部菊子○(五等)鏡花女史

【書簡文】

○主家より伯母の許にある妹へ(二等)しのぶ子○姉君の許に(四等)田中常子○下駄を送りて(五等)翠波女

【新歌謠】

○(二等)村山よし子○(三等)紫濃子○(四等)椽子○(五等)齋藤さわ子

【評論文】

○四駿(三等)内山美子○苦痛の福音(四等)山田冲子

【新笑話】

○お白粉(三等)丸山たつ子○稽古日(四等)朝井松子○落書(五等)尾崎雅江

【短文】

◎乙種一等 松葉杉葉…根本松江
(賞品)流行絹張洋傘(五圓)

○私の願ひ(一等)戸張とめ○松並木(三等)平谷たつゑ○袴のたけ(〃等)岩淵國子○美しき夜(七等)ゆき子

【誌友俱樂部】

○日記の始に課題○諸孃と記者○繪はがき交換○諸孃の交際○圖書換讀○剽窃詩文

【英文】

津田梅子閱
河井道子述

○新年○新年の感○サンタ、クロス

最寄書店になくば直接女子文壇社へ注文を願ます

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御申添を乞ふ

●婦人科
●小兒科
專門
午前宅診
午后往診

東京市麹町區飯田町四丁目九番地
女醫 鷲山彌生

女醫學生募集

五月一日ヨリ新學期ヲ開始シ入學ヲ許ス志望ノ姉妹ハ四月廿日迄ニ入學手續ヲ完了ス可シ
規則ハ郵券三錢ヲ要ス
東京市麹町區飯田町四丁目九番地
東京女醫學校事務所

▲竹柏會は佐々木信綱氏指導のもとに清新なる和歌を研究せむとする會なり▲竹柏會は師友に乏しき人の爲に和歌の添削質疑に應ず▲竹柏會は會員の機關として毎月一回文藝雜誌心の花を發行す▲郵券貳錢を送られなば規則書を送附すべし

東京神田小川町一
電話本局一一一四
竹柏會

陰萎特効新劑（獨逸新輸入藥）

◉内服 ヨヒンビン

内服用壹劑
藥價送料共
壹圓九拾錢
郵券貳割増

本劑は獨逸國伯林大學教授スピーゲル氏の發見に係る男女生殖機不能即ち陰萎病（陽物無力）腎虚神經衰弱遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰無力生殖虚弱手淫に起因する諸症早老者に天下無比可驚奇効ある新發見藥也 精力を增進し生殖器を强健に勃興せしめ人生の最大快樂を得んと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に電光の如し世にありふれたる賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

專賣元
東京市神田五軒町拾九番地
日新館藥房

世界無比
最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必らず美麗に除去すること保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らること確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥▲價は壹劑分壹圓、參劑半分三圓、六劑分五圓、拾貳劑分拾圓、送料各拾錢宛、必ず添送の事郵券代用二割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）着金即刻小包郵送す

專賣元
東京市神田五軒町拾九番地
日新館藥房

Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY

曾て高評を博したる本書増訂十五版發賣

正二位東久世伯題●依田學海先生序

學生の寶藏

井原豐作編

美文良材

袖珍美製本

近體文章之熟語字彙

美文良材は所謂文語粹金の最も完備せるものにして且之れを編するに（いろは）順を以てし各項毎に、熟字。形容詞。格言。等を以てしたれば記事にあれ論説にあれ苟くも言はむと欲する所の思想は凡て良材を之の書中に得ざるなく恰も詩學者の、詩語粹金、幼學便覽、に於けるが如く苟くも近體實用の文に入らんと欲せば本書に依らざるべからず、然して天下幾萬の學生諸君に向つて如何に新思想表白の便益を與べきやは初刊忽ち版を重ぬる十四以來絶版：：今や諸文士並に學生諸君の渴望を慰すべく、訂正増補第十五版なる速に之れを座右に驗せられよ。

（正價一册貳拾五錢　郵稅四錢）

新刊發賣

學生寶藏　續美文良材

井原豐作君著

洋裝袖珍美製本　正價金廿五錢　郵稅四錢

發兌元　東京神田東福田町　萬書堂

東京神田　東京堂　大阪梅田　盛文館

毎號皇太子殿下賜上覽

第七卷第參號

（四十年二月一日發行）

秀才文壇

▲天下無敵青年筆戰雜誌之覇王

▲壇友之優待毎號奬學大懸賞付

大判百三十頁

正價表

一册郵稅共金拾壹錢〇六册全六十三錢〇十二册全一圓廿錢〇廿六册全二圓卅四錢

每月一二回

一日十五日發行

定期增刊二回

發兌元　東京神田旅籠町一丁目　文光堂

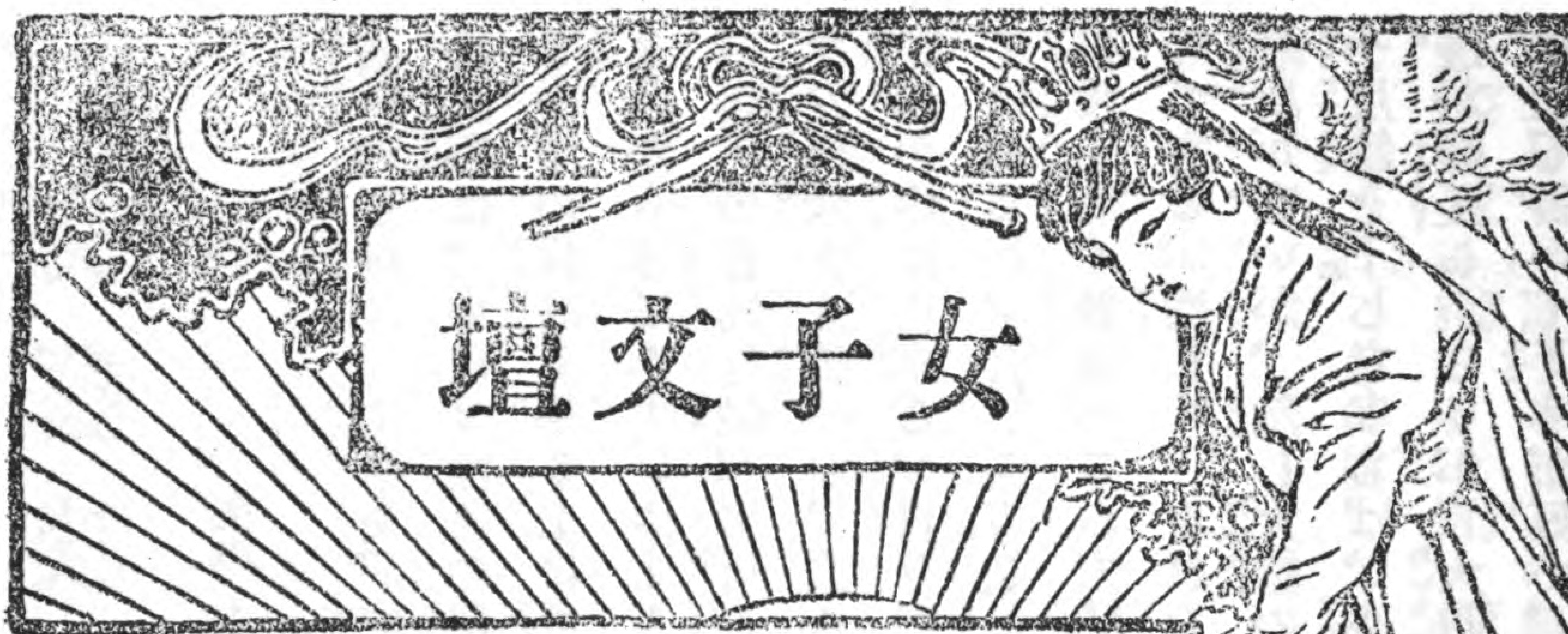
（振替貯金口座壹九五五番）

全國各地新聞雜誌書店にて賣捌

女子文壇

第三卷第貳號目次

Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY



第三巻第貳號

明治四十年二月一日發行

十五六の時代

男子でも、女子でも十五六の時代は、最も智識慾の進んで來る時で、一つの事でも多く知りたい、覺へたいと思ひ、見るもの聞くものが、其精神を刺戟する。殊に少しの讀書力でもつき、文學と云ふ事を知つて居ると、手當りばつたり周圍關はず、書物を讀む、小說も可し、詩集もよし、論文も可しと云ふ風に、解つても、解らないでも讀む、地方などの讀書機關の乏しい地に居る若い人ほど猶、渉獵つて讀む、いろ〳〵讀んで居うちに多少、才氣のある者は、これくらゐの事なら自分にも出來そうだと思ひ、文章の眞似や、歌の眞似をしてみろ、作つて見ると出來ない事はない、自分だけでは承知が出來ないので友人や誰かに示して見ると、傑作だと言つて褒めてくれろ、いよ〳〵面白くなつて作り出すと云ふのが、先づ大抵の方が經過する順序らしいです。此時です、最も用心せねばならぬのは、作る事にばかり骨折つて、讀む事が後になるのも此時、生意氣になるのも此時、一生の方針を誤るのも此時、成功の基礎の定まるのも此時、而して又一面から見ると此時ほど純潔な時代はないので、寢食を忘れ、名利を忘れ、世間を忘れ、只もう、文藝の中に包まつて了ふので、此一生懸命の態度は、又他日成功の曉までも殘して置きたいものです。



Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

文藝談片

文學士　佐々醒雪氏談

自分の目的は、文學史研究にあるのだから、それ以外の文藝は、いはゞほんの慰みであるが……左樣さ、或る一つの作品を得る上に於て、其ヒントが如何なるところから來るかといふことは、何うも能く分らん、いろいろの書物を調べて居るうちに、何時ともなしに、また何物とも云へぬ、或る一つの凝塊のやうなものが頭腦の中に出來る、自分でもどうも何だか分らぬものではあるが、それが十日も二十日も頭腦の中に在つて、幾度となく繰返へされた後、或る一つの作品が生れるのである、而して、それを書く場合には、可成閑靜な場所が宜いが、然し大體の纏りが頭腦の中に就いて、一度筆を下したならば、少し位は小供が騷がうが、四邊が騷擾しからうが、大體の筋道によつて、一氣に終結まで書いて了うが好い、そして更に其物を、今度は極く靜かな場所で、頭腦の具合の宜い時を選んで淸書す、……尤も急ぐ時などは、淸書さないうちに持て行かれて、直ぐ印刷される、其樣な場合には、如何する暇もあつたものでは無い……さう爲ないで、着筆かけて、途中で失念た字があるからとて、辭書を引たり、考へ込んだり抔して居ると、遂知らぬ間に、肝腎な最初の考へが外れて、結末が何處かの方へ行つて了ふ、だから字を忘却た場合には、假名でも何でも關はんから、書いて置いて後で正すやうにすれば、假令少し位、最初の考へと違ふところがあつても、途中で氣の脫けるやうな患が無いから、大體に於て先づ、最初の考案通りのものが出來る、例之ば、途を歩くにしてが、疲勞たまでも勇氣を皷して、すた〲歩いて通へば、何うか斯うか目的地へ達するが、それを、俥に乘らうの、汽車に乘らうのとすると、遂最初の考へが紛れて、何處かの方まで行くことがあると同じてある。

それから又、何か一つの考へが浮んだならば、其事を飾らずに、有の儘に書いて、裸體その儘の眞價値を人

に見せて、耻づることの無いやうに爲る、此事が詩文を作る上に於ての、第一義であるとおもふ、自分は少なくとも此ことに就いては、深く心がけて居るのである。

又、或る景色を見、或ることを考へても、何うしてもそれを書き現はすことの出來ぬ塲合がある、之は自分の一例であるが、自分がまだ書生で大坂に居た頃、何處かへ旅行した歸りに、夕がゝつて闇峠の頂上から、大坂市を見下したことがあつた、眼を放てば、西の方一帶は大坂灣であつて、丁度眞夏の驟雨が來やうとして、闇黑な凄じい夕立雲が渦を卷いて、今しも大坂市を一呑みに呑まうとして居る、其悽慘な雲の隙間を漏れて、夕日の日足が市から灣へかけて、パッと射した時の眺望は、實に何とも云へぬ景色であつた、自分は其時以來二十年、何うか彼の時の有樣を描寫いて見たいと思ふが、どうしても描寫すことが出來ぬ、今に海を見る度に、其當時を聯想して、自分ながらも齒痒ゆくてならぬ、尤も芭蕉の如き、西行の如き、自然と密接して同化することの出來る大人物には、何うにも書くことが出來るが、それ以下の者には、其景色に接して、直樣その思想を筆にすると云ふことは、到底六ケ敷い。

斯う云ふことが或る書物にあつた、確か蓼太であつたとおもふ、伊勢の濱邊を歩いた時に、非常に好い景色であつたので、弟子が蓼太に向つて、「先生如何です。此景色が直ぐ詠まれますか」と聞くと、蓼太の答へに「何うしてなか〳〵、先づ旅宿に着いて、湯にても浴つて横臥になつて、足を長く延してからである」といつたとある、して見ると、流石の蓼太も、この大自然の美に接しては、矢張力負けがしたものと見える。

大抵なものがさうである、歸つて家に來ると、當面に見た景色の大部分が、記臆から消え去つて、其中で最も印象の強かつた一部分丈けが頭腦に殘る、其物が歌なり文になるのである、それも其物が直ちに、其儘歌になり文になると云ふことは少ない、其物がその景色に對して、昔て古人が詠んだ歌なり、文なりを通して

……換言れば、自分の頭腦に殘つて居る或るものが、古人の同じ場合に詠んだ、歌なり文なりを漉して來て其處て初めて、一つの自分の作品が出來るのである。其處て自分は、女子文壇の多くの讀者に向つても、斯ういふことを質ねて見たいとおもふ、諸孃は、諸孃の或る文藝上の作品に對して、此作は何時幾日に、何ういふ場所て、何ういふ景色を見て、直ぐ作つたものてあると云ふことを、諸孃は明かに答へ得るや否やと云ふのである、此事は自分が最も、女子文壇の讀者から聞き度いところである。

(文實在記者)

詩を味ふ力

河井醉茗

新躰詩を作るには、新躰詩を味ふ力がなければなりません、新躰詩を味ふ力を養ふには、相當の用意が入ります。

普通の讀書力を持つ上に、想像力、推理力、玩賞力等が無いと、新躰詩を味ふ事は出來ません、新躰詩を味ふ事が出來てこそ、詩を語る事も、詩を作る事も出來ますが、味ふ事すら出來ないものが、詩を云云する資格はありません。詩を味はないて、一寸見た許りてむつかしいものてあるとか、くだらぬものてあるとか分らないものてあるとか、斷定を下すのは甚だ當を得ない、新躰詩を輕蔑した仕方て、先づ新躰詩を判斷する前に、其れを味ふ力を養はねばならないのです。其處て新躰詩を讀み味ふのは特別の知識が入る譯となりますが、特別の知識と云つても、數學とか、語學とか云ふやうに、專門的に多年、師に就いて學ばねばならぬと云ふのではなく、たゞ今まで世に出た新躰詩、及び其れが基礎を爲して居る韻文を知つて居れば宜のて、廣義に云へば韻文を解する力が、乃ち詩を味ふ力です、散文を解し得るだけて、直ちに詩を解するとは云へません、世間の人の多くは散文を解し得る眼を直ちに詩に移して、難解を唱へるやうてすが、それ

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

は間違つて居ます。散文と韻文との間には劃然たる區分があつて、是を同一視するのは無理でせう。又譬へ韻文を解し得ても、必て新躰詩を解し得ない處もあるので、徳川時代の和歌を讀んだ人が、萬葉集を讀んでも直ちに理解し得ない如く、萬葉を讀むには萬葉、語格、文法を知つて居らねばならず、新古今を讀むには新古今の解釋法ある事を知て居らねばならぬのです。文章でも然うてす、今日の言文一致ばかり讀んで居て西鶴、近松の文章を見ると、なか／＼分らない、矢張西鶴を味ふには西鶴を一通り讀んてからでないと分らぬ、兎に角一わたり讀みさへすれば、自然に理解する處が出來て來るものてす。新躰詩を知らうと思ふにも先づ第一に、名家の作を讀んで見ねばならぬのです、されば何を讀んだら宜かと云ふ事を聞かれるてせう、勿論悉くの詩集を讀むに越した事はありませんけれど、初期以來、かなり多くの詩集が出て居ますから一す、揃へるのは困難てせう、其內て模範ともなるべきものを二つ三つお話しませう。

新躰詩に一期を劃したものは島崎藤村君てす、藤村君以前の詩と、以後の詩とは大いに其歩調が異つて居ます、君の以前に詩を作つた人は十人乃至二十人位はあつたてせう、其中て生色のある詩を作り、始終工夫を廻らして居たのは山田美妙君てした、君には譯詩もあり、言文一致風の詩もあり、歴史の詩もあり、創作もあり、随分多方面に其才を試みられた、惜い哉半途て詩を廢し、且其作る處も多くはなかつた。宮崎湖處子君も亦當年の作詩家て「歸省」の中に在る新躰詩は優美清新、優にウオヅヲースの面影があると云ふので湖畔詩人の名さへあつた、君の詩は自然を主題としたのが多いやうてあつた。中西梅花君は僅に「梅花詩集」一冊を止めて世に亡き人となつたが、確に覇氣のあつた詩人らしい。同じく世に亡き人て落合直文君の如き。詩に指を染められた一人て、鷗外博士なども一緒に詩作も少しはあつた、君の調子はなだらかな和文調で、先づ今樣から脫化して來たやうな詩風てあつた、孝女白菊の歌は、最も永く生命を有して居るやうてす。鹽

井雨江君、武島羽衣君なども新躰詩には心を傾けられた方て、羽衣君の作は『この花』と云ふ集にも見え、雨江君には『湖上の美人』一冊の譯詩がある、一柳芳風君も亦詩を作つた、大和田建樹君、外山ゝ山君なども初期の新躰詩作家として數へる事が出來る、亡き北村透谷君は、藤村君と相前後して詩を作つたが、君の作には熱情が籠つてあり、殊に詩形にも獨創の才を試み、劇詩風のものさへ試みてある、若し彼の儘進まれたなら立派の作家になり得たであらうと思ふ。其外藤村君以前の新躰詩に指を染めた人は、名家にも無名家にもありますけれど、概して幼稚て、軍歌と、唱歌と新躰詩の區別さへ判然しなかつた位で、ほんの新躰詩と云ふ名が起つたと云ふ位てした、勿論世間ても注意を拂はず、餘白黨など云ふ渾名があつたものてすが、今は餘白澤山の詩集さへ出版されるやうになりました、進歩したものてす。

藤村君の詩を出す舞臺は『文學界』てした、纏つたのは初めが『若菜集』て、次が『夏草』、次が『一葉舟』其次の『落梅集』以後、詩はありません、以上の内には文章も交つてゐるので、詩ばかり拔いた『藤村詩集』が出來ました、君の詩は根本から詩人的要素がある上に、工夫もあり、西洋の詩も多く味はれたのてすから、初めて我國に詩らしい詩が君に依つて起された譯てす。格調は流麗温雅と云ふ方て、多くは七五調、材料にも、詩語にも新しい分子は盛んに加はつて來ました『若菜集』の初、おえふの第二、三節に

水靜かなる江戸川の
流れの岸に生れ出て
岸の櫻の花影に
われは少女となりにけり

都鳥浮く大川に
流れてそゝぐ川添の
白菫咲く若草に
夢多かりし若身かな

と云ふ二節があります、世間ては此頃詩人の事を星

菫黨など丶云ひますが、詩には既に十年も以前に菫の語があつたのです、夢と云ふ詩語も藤村君から多くつかはれてるやうです、其外雲であるとか、星であるとか皆藤村君以後の詩人が活用して來た詩語で、今では普通になつて居ます。それから質に於ては君と比肩する事は出來ませんけれど、形に於て多數學生に愛誦されたのは土井晩翠君の「天地有情」でせう、君の詩は漢詩から來て居るので、壯大、雄渾な漢語が多い、漢詩が吟誦に適する如く、君の詩も學生の間には好んで吟誦された「天地有情」以外には「曉鐘」「東海遊子吟」等の集があります。

「暮笛集」以來、一意專念、作詩に努力しつ丶ある薄田泣菫君は、詩集每に格調が變つて居ます、「暮笛集」の詩は最も熱情が籠つてあつたやうで、次に「行く春」は圓熟の境に入り「二十五絃」、「白羊宮」は圓熟の極、古典的に傾かうとして居る。君の詩も初めから一家の風があつて、一作每に向上のあとは著しい。君の詩を讀むには矢張「暮笛集」から順々に見るが宜しい、或は難解の詩もあるか知れぬが「暮笛集」「行く春」「二十五絃」の三集を讀んで「白羊宮」に移れば分らない事はありません。君は詩語の拾集に努力する點に於て、外に比類なく、君の詩には新しい美しい詩語が、綺羅星のやうに輝いて居ます、後進の詩人が其おかげを蒙る事は非常でせう。

泣菫君の集に對して、有明君の集を擧げねばなりません、有明君の初めの集は「草わかば」と云ふのでした、次は「獨絃哀歌」でせう、最近の集は「春鳥集」て、是に依つて世に名を知られましたが、矢張「草わかば」から見て來ると君の調子が能く分ります、「春鳥集」には成程難解の詩も見えますけれど、君が詩を作るに如何に思考を深く凝らすかは、此集を見て初めて分るのです、君の詩には最近の詩想を代表して居る處がありまして、銀行とか、魚河岸とかを歌ひ出したのは君です、集には僅少しか入つて居りませんけれど、此の現在の實社會を對象として歌うと云ふ事は、昨今の一思潮でありまして、今年以後の詩壇は、此方面にも

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

活動があらうと思ひます。

岩野泡鳴君は『悲戀悲歌』に其詩名を知られましたが、外に『夕潮』と云ふのがあつて、合せて一冊の『泡鳴詩集』が出來ました、君の詩は暗黒な方面で、人を引きつける力を持つて居ます、悲劇風のものにも力を注がれるやうです。英文學者として知られて居る上田敏君には『海潮音』と云ふ詩集があつて、全部譯詩ですけれど、差當り西洋の詩に觸れる機會のない者などには是非讀むべき集でせう、讀んで感興が湧くと云ふより、參考になる方です。與謝野寛君は短歌界の革命家として推奬すべき人ですけれど、新躰詩の方面にも隱れたる功勞が多からうと思ひます、詩集には今迄の處『毒草』『むらさき』『鐵幹子』など、長短詩を交へたものがあります、最近『明星』に出る新躰詩にも宜のがあります。平木白星君も多年新躰詩には力を盡して居らるゝので、君は短いものより、時々一冊に纏つたものを出されるやうです、初めの集は『日本國歌』と云ひました、次に『心中おさよ新七』と云ふ戯曲風のものが出て、『耶蘇の戀』『劇詩釋迦』など題目の大きなものに眼を着けるのも君の特色です。兒玉花外君の詩集は『花外詩集』と『行く雲』とありますが、『行く雲』の方が詩も多く君を知るには宜でせう、君の詩は波間に片鱗のひらめくやうに、折々きらりと眼を射るやうな詩があります、元氣の好い詩も君の本領でせう。前田林外君の集は『夏花少女』と『花妻』の二つありますけれど『夏花少女』の方に好い詩が多いのです、君の詩は詩語の美しく、派手やかなのが特色で、濃艶な側でせう、佛典から來た詩語も君の集には澤山發見する事が出來ます。

中央文壇に立つて花やかな作家ぶりをこそ示さね、紫にほふ月波根の麓、肉體の苦痛を詩に慰め、青年の間に少からぬ潜勢力を持つてゐる横瀨夜雨君の集も見發してはなりません、最初の集は『夕月』と云ひましたが、今は殆んど世に無いので近く再版されるさうです、次に『花守』と云ふのがあります、君の詩は暗愁を帶びた淋しい處と、野の香を傳へた素朴な處と二

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

方面あるやうです、多くは七五調、整うた格調です。それから私の最初の集は『無弦弓』と云ひ、次に『塔影』を出しました。

　以上の外に詩集を出された方も多く、又出さうとした居られる人も多い、青年の間に有望な作詩家も決して少くはありません、詩集は年々新しく出版されて行きますから、又來年の今頃には何れだけ好い詩集を增して居るか知れません。

　少くも以上に擧げたゞけ、否擧げたより猶多くの詩集は是非眼を通して居なければ、詩を語るには足りないので、決して味ふ力も養へないわけです。而して是等の詩集を讀むに何う云ふ用意が入るかと云ひますと、先づ作家に對して、同情を持たねばならないと思ひます、同情と云ふのは決して、ひいき目に見てくれと云ふ事ではありません、是等の作詩家は戯談や、道樂ばかりて詩を作つたのてはありません、實に藝術的良心の産物てあつて、名利以外に立ち、努力した結果が是等の作になつたと云ふ事を、先づ讀詩家の胸に收めて、眞面目に讀んで貰ひたいと云ふ事です。

　詩を味ふ力を養ふ事に就いて、先づ讀むべき詩集の事を概略述べました、ほんの概畧で、詳しい事は別に云ふとして、初めに擧げた想像力、推理力、玩賞力などが、詩を味ふ上に何故必要だと云ふ事を、實例を擧げて云ひたいのですが、餘り長くなりますから、追ての事にいたします。

魂の向上

窪田うつぼ

△この頃、年若い友の一人が、手紙をよこして、自分も歌を作つて見ようと思ふが、歌を作る上に就いて、何か心得に成る事があるなら、聞かせて呉れないか、と言つて來ました。

△私は之れに對して、次のやうな意味の答をしました。

▲此の問は、多くの人によつて繰返されたもので、それに對して、多くの先輩の答があります、その答を讀み、その中に好ましいと思ふ敎に從つたならば十分でせう。併し、私の知る限りに於いては、それ等の答は何れも斯う〳〵の場合には、斯く作るべきものと樣に、修辭の上、形式の上に就いての敎が多いやうです、それも無論必要の事ですが、それよりも、歌を作るには如何なる覺悟を持つべきか、といふ方が一層必要の事と思ひます。私は之れに就いて、私の感じてゐる聊かの事を言ひませう。

▲私は歌を作る場合には、我が魂を向上せしめた事を歌はうと思つてゐます。たゞ其れだけです。そして之れが歌だと思つてゐます。

▲併し、之れだけでは、甚だ漠としてゐますから、それに私の註を加へて見ませう。

▲我々の願の中、最も切なる願は、我が魂を向上させようとする事です。他の一切の事は、此の爲めの手段とも見えます、さて此の魂の向上は、何に依つて出來るでせう。私は、我が魂が、他の物の爲めに、動かされ、感じさせられる事によつて、始めて出來ると思ひます。全く、感動は、魂の生活です、否、我が魂も、此の感動の蓄積です、感動はやがて向上で、之れを離れては向上する事が出來ません。

▲宇宙の間にあるものは、悉く我が魂を動かすべきものです。人に對へば人は我が魂を動かします。自然に對へば自然も然うです。天に對へば天もやはり然うです。宇宙の間にあるものは、一として我が魂に囁くべき聲を持つてゐない者はありません。我が魂は、其の力が鈍いながら、或る時は朧げながら其の聲を聞く事が出來ます。そして其の聲を聞いて感動した時に、我が今まで知らなかつた或る物に觸れたと思ひます。或は知つてゐながらも、深く知る事の出來なかつた意味に觸れ得たとやうに思ひます。

▲宇宙間には新しい者はありません、人も、自然も、天も、其の姿の上から言へば昔も今の通りです、後も然うでせう。併し幼なき日に見た者と、長じたる今に

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

見る者とは其の感じが異ひます。即ち我々は、同じさ者にも異なる意味を感じるのです。此れ我々の向上ではありませんか。

▲我々の最も切なる願は、魂の向上だと言ひました。之れは我と人と同じき願です。さればこそ我々は、我が魂を向上せしめたと思ふ事は、之れを他人に告げようと思ふのです。又、告げるべき權利があると思ふのです。そして他人に讀んで呉れと要求も出來るのです。若し我々の歌が、我が魂を向上せしめたと思ふ事でなく、唯かりそめに見た夢を語る言葉に過ぎなかつたならば、其の歌は如何に果敢ないものでせう。我々は之れを他人に讀んで呉れるやうに要求する事が出來ませうか。

▲世に「たゞごと歌」といふのがあります。此のたゞごとといふのは、我が感ぜざる事を歌つたものです。即ち我が向上に縁なき事を歌つたものです。如何に修辭が美はしく、如何に形式か美はしくても、その中に、我が魂を動かし向上せしめた事が包まれてゐなければ同時に、他人の魂にも關はりなき者とされてしまひます。

▲歌は、我が魂の、向上の願を杖とし、宇宙の美しさ怪しさに導かれながら、一歩〱進んで行つた其の紀念碑です。道中記です。我々の魂の力が弱く、鈍く、他人を感動させる事が出來ないにしても、少くとも自分に取つては然あるべきです。

▲私は歌を作る人を夢みます。歌を作れば、少くとも作らぬ時に較べて、我が感動に注意を拂ふ人と爲ります。我が感動を語らんとする時、言葉にせんとする時我々は深かつたと思ふ感動の、案外に深くなかつたのに驚きます。此れ有益な事ではありませんか。更に、その爲め、我が感動が深く成つたとすれば、此れ我が魂の生活が、深く成つたのです。魂の深き生活、此れ我々の向上です。

▲以上は、私の感じた大體です。

▲私は頻りに向上と言ひました。向上には向上するべき的がなくてはなりません。感動と言ひました。感動

には、如何にせば比較的多く感動する事が出來ようかといふ問が起ります。此の事に就いては、何れ愚見を申上げる事に致します。

御用仕舞

文學士 沼波瓊音

今日十二月二十八日は御用仕舞である。僕はこの役所を今日限りで退いて來年元旦からは新聞記者に轉職するのであるから僕箇人としては殊にこの御用仕舞の意味が深い。解囑願も既に差出し一昨夜は課長初め課員全體からの送別會も受けたのであるが、省務の遣りさしたのもあり又僕は己が事を爲すに判然と段落を附けたい癖があるので、來年は殊に四十年といふ段落の數の年であるから其の一月一日から新生活に入ると云ふとが僕に規律的快味とも言ふべきものを與へるからこの最終の日迄省に勤めるとにしたのである。

今日は珍らしく早く來たものだから、未だ誰も居ない、煖爐は今燃附いたといふ所でボツ〱と氣持の宜い音を立てゝ居る、例の通り課長室へ行つて出勤簿へこれて捺納と力を入れて捺印し部屋へ歸り煖爐へ背を向けて暫く立つて窓外を眺めて居る。竹平町の敷石を押込む爲に汽關車の化物のやうな車が昨日も運轉して居たが今日も未だ厭な音をさせて少し動いては止まり少し動いては止まりして居る、運轉の遲鈍な割合に其煙突から煙を出すと汽車よりも夥しい、一吹き煙を出すと忽ち濠端の柳や櫻が隱れてしまふ。遲鈍な人間が大息をつき一生懸命になつてそして僅の事業しかし得ないのに似て居る、併しこれは笑ふべきては決して無い、たとひ僅でも其事業を爲すが爲に一生懸命になると云事は實に尊い、僕の如き鈍物はこの汽關車の化物に學ぶべしだと思ふ。竹橋の方を見ると荷車の往來甚だ頻繁である、あゝ過日あの橋の袂で肥車が轉覆した時大人氣も無くこの部屋總體窓に面をならべて見たとが有つたつけ、と馬鹿〱しい事を思ひ出して

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

クツ〳〵と獨笑いをする。
突如腋下に人の手、ワッと云て飛退くと、何時の間にか中田君が來て惡戯したのだ。
「どうも君は何時までも小兒だな」と僕が呟く「別れ際までこんな惡戯をする」
「なに僕が此處へ來たのを更に知らずに茫然考込んでるから何かして驚かしてやらうと思つてるとクックッと君が笑つたから咄嗟の際名案も無い笑ひ序に笑はせる積りで擽つたのさ、しかし君、君はこれから新聞記者になるんだが、新聞記者なるものは身躰に五分の隙も見せぬやうにして居なければならぬ、人に擽られて驚くやうな隙があつてはならんよ」
「これア驚いた、惡戯が意見になつた、君も中々禪機を得て居るな」
淺川君も大高君も河口君も追々とゴト〳〵と靴を響かせて出勤して來る。「もう今日ぎりですな」とか「今日でお別れだね」とかいふ同じやうな言葉を受けてるうち、給仕が文珍堂と寛濶舍と南北書店が來ましたと報ずる「よし來た」と夫れ〳〵の書籍を持つて應接室へ行き一瀉千里に指示をして遣る。そこへ又樂々社唐岸堂等が來る、それ等に「内閲本」を返し「引換」を命じたりする。頓て課長からの呼鈴が響く、行くと愈解囑の辭令が出たのだ、これで明らかにこの省で僕との緣の絲は斷れたのだ。僕も本省へ勤めるやうになつてから時々厭になつちまふ事もあつた、併し別れ際となるに然ういふ厭な方面は更に見えず唯々良い方面計り目に着く、仲の惡い夫婦が喧嘩をし續けて遂に離婚になると云際ですら其別離の際には互に名殘惜しいやうな心持がするに違無い。別離の涙といふものは實にこの別れの對象の良い方面のみが一時に簇々と胸を射る時に溢れるものである。と這んな考が浮ぶ。
人が一の境遇から他の境遇に移り、其當時の事を後日になつて追想して見ると、後境遇の前の部分より前境遇の後の部分の方が新しい事のやうに思はれるものだ、これは前境遇の後の部分は其境遇に慣れてる爲に印象が明らかであるが、後境遇の前の部分はまだ新境

過に慣れない爲に印象が明らかならぬためて、後に至ると時の前後を逆に感ずるのであらう、今までの經驗ては僕の感じは然うてあつた、これは僕の發明する前に既に心理學者が論じたかも知れないが僕はまだ聞いた事が無い。省の昨今の出來事は新聞社に入社しがけの時の出來事よりは屹度また新しく感ぜられるてあらう。と這んな事を續いて考へる。

考へつゝ自分の書籍やら書類やらを纏め、圖書館から借りた本や本省から借りて居た本は悉く書籍係へ返し、まだ「指示」を受けに來ない書籍の事を河口君に託し、數入式の風呂敷包を提げ諸君に暇乞して階を降り待たせて置いた俥に乘つて行くと、西洋紙鳩のやうな顔した僕の大嫌な省丁が手を揚げる、併し今日は叮嚀に「左樣なら」と云つて、心の內で「鷺は飛翔てども跡を濁さず」と云つて、門を出た。

雜談

日に三字

新渡戸稻造

もう一つの事は、これから文字を覺える必要のある人や、外國語の稽古を初めたいと思つてゐる人たちに、日日三つ宛文字または言葉を記憶なさいと云ふことてす。例へば英語てあるならば、會話の本からても讀本からても何てもよい。目に留つた文字を拾つて、今日はこれとこれとこれとを覺えるときめる。さうして手帖に書いても書かなくつてもどちらでも構はないが、兎に角一寸した休みの時ても、雪隱に行つた時等ても何ても暇のあり次第に、その言葉を暗誦し練習する。一人て云つて見る計りてなく、出來るだけその日の中に、その言葉を人の前ても使つて見る。例へばストーブといふ言葉を覺えた日に、丁度友達を訪問して、そこにストーブがあつたならストーブがありますねえと云つて見る。なかつたらストーブを用ゐませんかと云つて見る。花といふ言葉を覺えたならば、アノ花が奇麗てすねえ。あの花があるために、あなたのお庭が引立ち

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

ます。私は花が大好きです。何でも構はず出來るだけ餘計に其言葉を云つて見る。即ちこれが熟練するためと忘れないためになるのです。そして日に三つ宛覺えて行くと、一年の間には千だけ覺える。三年たつと三千覺えるのでありますが。三千の言葉、三千の漢字といふものは大したものです。尋常小學校で覺える漢字が約五百、高等小學で覺えるのが大凡一千合せて千五百にしかなつて居ない。三千の漢字を覺えてゐると、文字を讀み得る點に於ては、中學校の卒業生と匹敵します。（家庭の友新年號より）

本年以後の女子教育

三輪田　文學士

單に女子教育の趨勢から云へば、昨年の女子教育界は三十四五年に見えた樣な、急激な勃興の形勢はない女學校に就學する學生も三十七八年に比べて見て、大して多いと云ふ事は無く、市内の私立女學校の過半は生徒が定員までに達すると云ふは未だにむつかしい、從つて學校の新たに起つたものとては殆んど無い、僅に暗々の間に多少宛進歩し往く事を認めるだけに過ぎなかつた。概して女子教育の趨勢には、一定のリミットがあるらしく、もう此の二三年は其のリミットに達した、此上時勢に大した變動がない限りは今年以後一二年は、少許の昇降を見て往くだけに過ぎぬと思ふ。（日本及日本人）

ハイカラは禮の末

下田歌子

夫れて世の中が文明になつて參りますれば、どうしても禮儀正しいと云ふ極めて禮の美しい秩序ある國民にならなければなりませぬから、皆さまも大國民として、文明の國民として、外國人から見られても粗野なりと言はれないやうに心掛けると云ふ事は實に必要でありますけれども、禮儀作法はひよと致しますると人を軟化する方に導き安い、能く此頃流行の言葉にハイカラと云ふ事がありますが、あれは西洋の禮の末を見て末を學んで居る人を言ふ言葉だらうと思ひます、夫れてすから禮は學ぶべし、けれども學ぶには餘程注意しなければならぬ、禮の末に流るゝと其人が極めて花のやうで、女の眞似をしたやうになるが、實の確乎した所を缺く、大いに注意しなければならぬ、禮法を知らない人は、必らず野蠻な粗野な人てあると、爪彈きさせらるゝから、一通りの禮と云ふものは是非心得て居なければならぬ云々。（教育の實際）

東京だより

▲新年も夢のやうに過ぎ去つて、もう二月の雜誌を皆樣の前に捧ぐるやうになつた、此新年は暖かであつたが、初雪は二日に降り、後は東京日和の晴れた日が多かつた。歌かるたは昨年ほど盛んでなく、年々すたりさうて、すたらないのは追羽子であつた。女子の風俗、時好は益す華美に赴くやうである▲初刷の本誌に美くしい繪筆を揮はれた岡田三郎助先生と、同じく本誌に面白い話を書かれた小山内八千代子孃は良緣纒りて舊臘三十一日、結婚の式を擧げられ、元旦早々、新婚旅行に出發された、記者は本誌の初刷に端なくも斯る目出度い話の含まれて居たことを欣ぶ▲今春、女子大學に於て慈善市を開き、餘興に同校生徒の演劇があるとの事、既に昨年より準備して居るのだから、定めて見物であらう、演劇を行るに就いて、世間で是非の聲もあるやうだが、深くは怪むに足らぬ、演劇も素之れ一種の藝術、吾人は習慣的に演劇を卑む癖がついて居るけれど、是を離れ、獨立して考ふれば繪畫、音樂、文藝の三者を調和する演劇は、將來必ず立派な藝術として尊重されるであらう▲文章又は詩歌を作るのに、未だ花鳥風月の夢が覺めない人が少からず有るやうだ、最も十年乃至二十年以前の少年少女の作文作歌に比べると、進歩のあとは著るしいけれど、未だ諸孃の作には、昔の夢を繰返して居るのも見受ける。他所行の衣服を着て立派にする時ばかり女は美しい譯でなく、平素服を着て別に化粧をせぬ時にも、天眞の趣味があるやうに、文藝上の作物にも、他所行ばかり作らず、平素服のまゝのもあつて宜しい、其方が諸孃にも作り易く、讀むにも趣味が深い。諸孃は學校の先生から家庭日記を書けよと言はれることがあるでせう、つまり其日記を書くつもりで文章を作れば、乾度優れた作は出來る▲毎年多少文壇に名を成す人は出來るが、昨年は以前から知られて居る人が更に地歩を占めたと云ふ迄で、新しい天才は出なかつた、今年も出ないか知れぬ、明年も出ないかも知れぬ、けれども現れるべき準備は斯う云ふ間にも忘れてはならぬ。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

懸賞當選圖畫（二）

山中古洞先生選











(1)押しちやいかん／＼（二等）　南多摩郡恩方村中島縫子

(2)草かり（三等）　牛込市ヶ谷富久町藤澤方佐野さた子

(3)辻商賣（四等）　小樽色內町六一岩谷綠子

(4)目白の郊（五等）　日本橋小綱町三ノ一七鈴木すみ子

(5)うら口（五等）　京都市堀川梅小路西江入長谷川香山方德永花都

敍事文

文學士沼波瓊音先生選評

◎霽れぎは

三河　病葉子

裏の棟割長屋の方て、眠たげな三味線の音がばつたり止むと、何處からともなく杵の音が聞えて、製糸の汽笛があちらでもこちらでもなり出す。

先程から障子の間へ大きな蠅が來て、がさ〳〵と藻搔いてゐたが、疲れたと見えて凝乎として、頭をくる〳〵廻しながら手を揉んでゐる。

そつと障子の棧を鉛筆の端で叩くと、又がさ〳〵と藻搔き出した、可笑な虫だと考へる。

外の明るみをしたつてあの樣に藻搔くだらうが、此の蟲には到底障子の紙を破る丈の力は無いのだ。それに外へ出る窓は他にいくらもある、彼の數限りない眼を以て、夫れさへ見出せば、具へた翼で極めて容易に望を達する事が出來るのだに、などと、蠅の愚を哀れんであると、不圖、人間にも恁麽輩が澤山あると思ひ浮べた。

慌しげに句を切つて響いてゐた雨垂れの音がゆるやかになつて、西日がぱつと窓を射る、蠅は益々藻搔く、『おや』晴れるのか知らと獨りごちながら障子を開くと、蠅はブーンと單調な羽音を殘して去つて了つた。

西の空は一面の夕映、千切れ〳〵の雲を彩つて、雲は染められながら何處とも無く消えて行く。頭の上には恐ろしい灰色雲が一團、ふちを彩つて動くとも見えて東の方へ。

横町の方から專賣局の女工が喧々と話しながら來る。其の先へ立つて、十三四の印半纏を着た小大工が、腕組をして、あちらこちらの店を見ながら、所憚らぬ大聲で、喇叭節を唄ひながら來る。

向の湯屋の子障子が開いて、銀杏返しが二人、出かけにそつと空を仰いで。

『晴れたんだよ。』と嫣然して、仔細らしく蛇目傘をポッチリ。二人並んで、土のはね返るのを

氣遣ひながら行く。

夕映が次第に薄らいで、權現樣の銀杏の梢に、夕づゝが仄かにまたゝいてゐる。

突然、下座敷で、弟のハーモニカが聞え出した。

（評）目に觸るゝもの悉く採て筆にのぼす自在なりといふべし殊に蠅の條最趣味あり。

四等

◎小春日

鳥取縣西伯郡波村　門脇まさ子

何處からか烏が一羽、枯芒の流れに沿うて二丁餘り輕く飛んで、堤の柳の下の朽ちた杭の上にとまつたが、兩の翼を廣げてゆつたりとかまへた。

森陰から帆掛舟が二つ三つ、又一つ、だるさうに里川を上つて行く、つい近くに川舟が一艘、白手拭の翁らしいのが乘つて、煙草をくゆらし乍ら、棹を取つて居ると、向ふの堤に水鳥が鳴き出した、流れ木が一二本だぶり／＼とたゞよつて居る。



赤ん坊の御年（賞外）　仙臺　木村しく子

鷄の聲がのんびりと聞えて、製絲場の煙が木立の間から、すうつと上つて居る、廣い野原には牛の群があちこちに黑うなつて見える。

堤の茶屋に馬が一疋、柳の幹に繫いであつて、馬子らしいのが、床几の端に尻どつかとかけて、息休めの煙草一服と笑ひながら、菓子棚の傍に糸車をひいて居る雪の樣な白い頭の婆さんと何か話して居る。

婆は兩の眼を摩りながら、卷上げに冠つた手拭を一寸とつて車をとめた、山茶花の花が風に散つて、背戸の柴垣にふりかゝるを、面白いと云つた風に振り向くと、垣根の花陰に家鷄が四五羽、美しい翼をはゞたいてコク／＼と遊んで居る、十七八の娘が赤襷のまゝで、右の手に小さな籠を持ちながら、コヽと鷄を呼んで纖やかな手先で餌をまいて居る。

里の方から太皷の音が鼕々と野面に響いて、家々からは晝餉の煙が斜に、小舟の翁は、艫に腰据ゑて、綸を

垂れ乍ら、默つて水の面を眺めて居る。

空車が一臺、菅笠の車夫は寒さうな聲で、鄙歌をうたつて通つた。

（評）淡々たる文中に小春日の詩趣を描き盡せる才筆といふべし。

秀逸

○秋日和　　愛知　壽千代

農夫が突然稲田の眞中へあらはれる、と夫れに驚いてか雀がパッと立つ。農夫は立つた儘煙草をくゆらしだす、煙が長閑にすつと流れて、遠くから見ると遙に眠つた衣笠の嶺の頂を掠めるかのやう、軈て其の煙が消えると、衣笠の袖から、灰色がかつた雲が一團あらはれる。

蝗蟲が亂れ飛ぶ道添の畔路には、花莚を敷いた小さなる團欒が始まる。作男らしいのが鉢巻をしたまゝ、芋を食べながら大きな聲で何か言ふと、六十位の爺さんが元氣な聲で又何か言ふ。皆が一度に哄と笑ふ、それが澄切つた四邊に響くと、彼方の畦の方からも、清いのと、さびたのと取交ぜて哄と笑ふ聲が聞える。

茂みの方で鵙が威勢よく啼いた。

村は靜に、白日の夢でも見てゐるかのやう、折々鷄犬の聲が長閑に聞える。

畑つゞきの新しい小構は、誰れかの分家であらう、南日をうけて暖かさう、大戸口の敷居には、赤い首紐をした小猫がゐて、眼をつぶつたり開いたり。うつばりを這ふ茶を沸す烟が、暖な軒を掠めて、もや／＼と立登る。

軈て、厨の方から、姉さん被りの、眉の濃い、頸のふつくりした愛くるしい娘が、紫の襷をして、白木のさし歯下駄をからころ言はせながら、敷居際まで來て、开處に眠つてゐる猫を見て、嫣然して、遙の畑に脇目を振らず鍬使をしてゐる男の方を、眩しさうに手を翳して眺めやつた、此の家の花嫁だらう。

男は猶鍬を使つてゐる。暫くすると、兩手を柄の上に置いて此方を見た。女が蓮葉に手招くと男は頷いて又鍬を使ひだした、女は其儘踞んで小猫にからかふ。

靜な庭には南天が獨り赤く、落穂に勇む雞の對の雛がこゝつと羽搏いて、未だ覺束ない鬨をつくる。

疎な竹の籬には、黄菊が一もとほゝ笑んで、赤蜻蛉がツーイ／＼／＼。

末上りの畑には、麥播く人だらう、ちらりほらり、蕎麥刈るらしき菅笠も見える。枝豆の葉を燒く煙が、ほーつと、あちらこちらに這つてゐる。空には灰色の雲

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

が千切れ〳〵に飛んで、薄ら寒い影を野面に落してゐる。

突然、森の方で、鳥銃の音が懶げに聞えた。と名も知らぬ鳥が二羽、羽搏荒く舞上つて、空高く聲もたてずに飛んで行く。しばらくすると、鳥打帽をかぶつた狩人らしい人が、森から不意に露れて、空行く鳥を見送つてゐる。

日が雲に蔽はれた。

（評）各節皆善くべし。

○深　夜

三河　房枝子

護國寺の鐘であらう、氷るやうに響くと、恰も其れを追掛けるやうに、柱時計は十二時を報じた。宵から枯木に鳴つて居た風は吹止んだが、人の往來もばつたり絶えて了つて、遠い〳〵處で犬の吠えるのが、幽かに聞えるばかり、目を閉ぢ耳を澄して居ると、霜を浴びた逞ましい獸が、爛々たる眼に青白い光を投ぐる寒月を望んで、物凄い音を、深夜の氣に傳はらする樣が、鼠色の霧の中からはつきり浮んで來る。此瞬間、彼は遠い祖先から受けた血汐を一時に漲らして、白い牙に生暖い血を滴らした、野性の俤をも見るのであらう。と思ふとどつとして、目を開くと、電燈は眩ゆく六疊の書齋を照らして居る。私は此下で、母樣が拵へて下された炬燵にあたりながら、試驗の調べ物をして居るので。母樣はじめ、さんも夢に入つて、妍さへも聞えない。あゝ其夢の覺際――それは、人間が今の世の激しい鬪いを忘れて、矢張祖先の心に歸る瞬間であらう。彼の犬の聲と此の電燈、夢の覺め際と試驗、と慇う、結び着けて見ると、何とも知れぬ感のむら〳〵と胸に湧くのであつた。

しばらくするとゴロ〳〵と車の音がして、次第に近づく。鼠も騒がぬ深夜の、炬燵の炭のはねるさへ耳立つて聞える程ひつそりとした折柄なり、地も凍えて居るから、其音は恐ろしく高く響いたが、走るのではなくて、とぼ〳〵力なく挽いて來るのであつた。

何の車であらう？なぞと考へる中に、私の家の前へ來た。こんな氷るやうな夜を、何處迄行くのかと思つて居ると、直ぐ隣の路次へ挽込んだのである。

其れと共に此車が人力車であつたのを知つた、隣は棟割長屋で、其端の家には車屋が住んで居るから。

其音が止ると同時に、かつたり戸開ける響がした、内では今か〳〵と待つて居たのであらう。

「お歸んなさい、お前さん嘸寒かつたらうねえ。」と聞覺えあるかみさんの聲。

「むゝ、隨分こたへるなあ。」

「さあ、風邪でもひくと大變だ、お前さん早く内へお入んなさいよ、車は私が片着けるから。」

「何、いゝや、それよりか早く夜食の膳を出してくれ、滅法腹が空いた。」

旋て水を汲んで來て、じやぶ〳〵と車の泥を洗ふ音、膳を出すらしい音、皿小鉢などを置く音がした。

「お前さん、今夜は一合はづむで置いたよ。」

「然うか、そりや有難い、熱くしてくれ。」

車の始末も濟んだと見えて、亭主は内へ入つた樣子、戸を閉める音がして、話聲が少し遠くなつた。

「お鶴はよく寐て居るな。」

あゝ、お前さんが歸る迄起きて居やうつて言つたんだが、會社は朝が早いから、もうおやすみつて今し方寐さしたのさ、今日はね、會社の何とかいふ役人さんにほめられたつて嬉しがつてたよ。」

「然うか、そいつは感心だ、ほんにな、金の野郎さへ眞面目にやつてたら、俺も此年になつて梶棒なんぞは握るめえ、お鶴もよ、工女なぞに出ねえでも可からうに……ほい、又愚痴になつた、や、もう愚痴はやめ〳〵、處で酒が、ほう上燗だ、こんな晩にや是に限るて、はゝゝゝ。」

其中夜食も濟んだらしく、狹い家に溢れて居た笑聲も止んで、二人は眠に就いた樣子。あゝ、着る衾さへも薄い彼等の、夢は何處を彷徨ふのであらう。私は又勉強に取懸つた。

（評）前半の想像、後半の和沖、木に竹つげる感あるは、うらむべし。

○敎員となる記

土浦　山口波峯女史

土曜日の午後、義兄に伴はれて校長を訪ねた、敎員たるべき者の品性責任、生徒に對する態度などを、諄々と重々しい語調で說き聽かされた時は、自分には迚ても窮窟な敎員は勤まりさうもなく思はれて、無雜作に義兄の勸誘に應じた輕卒を悔んだ、で受持は三年級、次の月曜日から出勤と決定つて、歸宅した。

翌日曜日の午前は出勤の準備で過した、「明日から先生になるのだから肩上を撤らうネ」と母上に言はれた時は理由もなく悲しかつた、午後は義兄の指圖で、挨拶旁々職員一同を訪問して夕方まで費つた。

愈々月曜日となつて、玄關まで母上に送られて家を出た、半年振りの袴穿で學生時代が偲ばれたが、胸を張り濶歩した快活な往日の態度は全く失せて、何となく躰が窮窟で、俯向き勝ちに學校の門を潜つた、職員室には一人も來てゐない、早過ぎたが仕方ないから、隅の方の椅子に凭つて色々と空想に耽つてゐる間に、ボツボツと同僚が出て來る、併し普通の挨拶だけで別に口をきかない、軈てベルが鳴つて敎場へ入ると、生徒

全體の視線が一時に自分に集つたので、思はず下を俯いた、講義を始めると、自分の言葉が遠くで響くやうだから、聲を高めたら、それが調子外れてゐるので、自分ながら「ハッ」とする、生徒も隣席同儕て密々囁く、一時間目のベルで敎塲を出やうとすると「あの先生は」といふ聲がして、それが非常に氣に懸つた、職員室では矢張り無言、何となく淋しかつたが、其日は無事に濟んでホッと一息、校門を出ると、がう〳〵と俥が二臺來る、何氣なしに見ると、此春某法學士に嫁いだお友達なので、慌てゝ復た門内に引き返した、氣の弱いには自分ながら呆れた。それから一週間も經つ間に、漸々勝手も判り、同僚とも親しみ、生徒も馴付いて來て、今日では、敎塲で莞爾〳〵して居る生徒の無邪氣な顔を見るのが、一番愉快になつて來た、愿くして自分は小學校の准敎員となつたのである。

（評）寫實の中に十分の悲みありあゝこの悲の意味の深さよ。

○寫眞帖

松山市　堀田内花子

うら〳〵かなる小春日をまともに浴びつゝ妾は白菊匂ふ欄によりて寫眞帖をくりひろげぬ。亂菊をあしらひたるハート形の中に未だうら若き乙女が裙摸樣長う着流して、やゝ伏目に佇める傍に小さく菫インキもて玉水菊子の文字。次に、百合を描きたるが中にリボン長き下げ髪に改良服りゝしく、紫陽花手に持ちて笑ましげなるは花岡春子。懷かしの君よ、樂しかりし思ひ出の緑を手ぐり〳〵思ひはさながら三年の昔にたち歸りぬ。菊子樣は妾より三つの姉樣にして級中一の美しの人、歌の上手漸う小學終へたる頃早くも三ッ柏の徽章りゝしきさる若人に嫁ぎ給ひしが、水々しき丸髷姿美しと見しは束の間、昔氣質なる姑御の御口やかましうて、今は飽かぬ中を破鏡の悲み。永へに盡きぬうらみは深尾の山奥に戀しき君よりの雁の便りをたゞ一筋の力草に、露繁き袖たゞまるゝとか。折々の御文の美しさ水莖の墨薄きを見るにつけ、御いたはしさは一しほぞかし。

かるた遊びに更たけて、今は敷蒲團となりし更紗の未だ布の香新らしき夜着なりしが中に、春子樣と小枕並べしは實に今頃なりけむかし。翠帳紅閨の中に生ひ立



小春（賞外）　常陸　酒葉貞子

ちて浮世と云ふもの夢にも知り給はざりし御身なりしが、父君が些かの相場の手違ひより、山なす財産もまたゝく間に消え去りつ、果ては御家も人手に渡りて、妾が大切のあの蒔繪の重箱も他方の人がもつていつてよと、妾の膝に泣かれし事もありき。今は藻の香高き高濱の磯邊にあるかなきかの細き煙立て給ひ、自ら世を窄らせられて、此方よりの文にそよとの返り事だに無し。さはれ忘れがたなの其面影よ、御聲よ。あはれ悲しき我友よ、二人ながら如何なる儚なき星の下にか生れ給ひし。さるにても幸多きは我身よ。榮ある花を名に負ひたる妾は實に花の如き十五年間を送りきぬ、今も胸には若き血漲り、瞳には美しき希望輝く。

（評）優しき思ひ出なり。

○日曜講談

名古屋　小山かく子

『彼は前科四犯の惡少年であつたが、或動機に觸れて心から其罪を懺悔して眞人間になりたい考て、先之を牧師と親戚とに談つたのてある。泣いて煩悶して父母兄弟に告げたのてある、然し乍ら彼が眞實の煩悶も涙も皆僞りてあると認定されてしまつたので、かくて世に生き永らへんよりはと其夜線路に身を投げたのが彼の末路てある、あゝ此の如きは何人の罪てあらうか……』と、壇を叩いて三百の聽衆を見廻した途端に牧師の眼は不思議に輝いた、……堂の一隅にほろ〳〵と感涙を流した一青年があつた。

壇下に挿された梅の一枝は半開いて清香を放つてゐる、徐にハンカチーフを取て口髯をなでたる牧師は一段聲に力を込めて『……眞の改悛者に改悛の餘地を與へない社會の制裁は此の如く冷酷て間違ひてある、基督教の必要がそこにあるので彼等を救ふは神の思召てある、教會は宜しく世の惡例に習ふことなく大に寛容の德を發揮せねばならぬ責任がある……』と滔々辯じ去つたのてある。

『先生……』と突然靜粛を破つて起立し乍ら『……私は只今お噺の青年に等しい罪人て、又全く悔いて悲んて救を求めて居る一人てあります、けれども社會は……人は……』語は窮して見る〳〵涙のみ頰を傳ふのてある。六百の眼は悉く彼に注がれた、彼は終に『……おゝ神よ、罪深き僕を憐み給へ……』と、天を仰いて祈つた。

『……深い事情は兎も角、我ら今日此悔い改めし一人の兄弟のために祈りませう……』と、牧師の勸めに信者中の七八人は熱心に祈つたので、彼は涙と共に己が境遇を物語つた、神の恩惠と人の同情とに充たされて。

讃美歌に續いて閉會の祝禱が終ると、希望は青年の顔に感謝は會衆の心に、かくて集會は喜びの中に……

（評）聖き場面なる哉。

○髮結所

横濱市　長谷川波南子

お母樣のおすゝめて、髮結に行く。桃破れにしやうか、銀杏返しにしやうか、島田にしやうか等と、考へながら歩いて居る内に、髮結所に着く。

お客樣が一人來て、結つて貰て居るので、側に座て見る。漉手は何處かへ行たらしく、家には見えない。お内儀樣が、『此位て……。』と、鏡を覗きながら、客に言ふ。客と言ふのは、二十二三の色白な、美しい奥樣風てある。奥樣は鏡を見て、『もう少し出して下さいな』と言ふ。

外て柏子木の音がする。お内儀樣は右手の窓の障子を開けて見る。面白い風をした男が、二三人『〇〇おしろい』と言ふ旗を持て、廣告に來たのてある。やがて長い口上が終つた。而して其れが行く。

『然うでしたかねェ。』とお内儀樣が、思ひ出したやうに、奥樣に言ふ。『其れて何てすよ、其娘はとう〱其男とね……エ、……而して〇〇踏切て、二人鐵道情死をして……。』と、奥樣が答へる。『オヤさうてすかねエ……何時てした？』『逃げたのは、一月許り前てしたがね、死んだのは一咋日て……。』『へエー。』とお内儀樣が、感心したやうな、驚いたやうな、返事をする。

丸髷が出來上る。お内儀は毛筋で綺麗に、なでつける。終る。肩懸けの白い布を取る。奥樣は妾に、『お待ちどほさま。』と言て立つてお内儀樣も、『お待ちどほ樣……サア此方へ……。』と言て、疊を白い布でポン〱はたいてくれる。

妾は鏡の前へ座る。自分の姿が映る。妾は鏡を一寸見て『おばさん、妾何に結たらいゝてせう？』と問ふ。『さうねエ……──島田におしなさいよ……此頃島田はちつとも結ないてせう。島田が似合ますよ。』とお内儀樣が言ふ。『島田におしなさい。近頃の若いお方は、皆廂髮にしますが、あれより島田の方が、よほどいゝのよ。』と奥樣が、妾の居た處へ座て、斯樣口を入れる。妾は嶋田にしやうと思ふ。お内儀は元結を切る。癖直しをする。『お高さん何にします？島田に？……。』と又お内儀樣が問ふ。『エ、ぢやア島田に……。』と答へると知らずに顔が赤くなる。奥樣は帶の間から莨入を出して、細い品の良い銀煙管て、吸ひ始める。芝居の話が始まる。

奥樣の嫌ひな、廂髮に結つた女が來る。上つて奥樣の側に座る。話がよく合ふ。『さうてすか三年て……元街の女學校の……さう……。』と奥樣の言ふのが聞える。廂髮は得意になつて、遠足會の有樣を話す。奥樣は一

一感心して、聞いて居る。島田が出來る。時計が四時を打つと、奥樣は急いで歸る。

次の間で、赤ン坊の泣き聲が、盛にする。お內儀樣は見に行く。後は無言。

(評) 達者なるかきぶりなり。

○春の磯邊　豐後　あけぼの女

前は一面鏡の樣な、いとも靜けき別府灣、和風を孕んだ眞帆片帆も三つ四つ、遙か國東半島の山々は霞の衣裝うてうす紫に、何とも云へぬよい景色である。

うす霞を透して來るぼか〱と暖い春の日かげを身に浴びながら、銀色したる眞砂の磯を逍遙ふと、ゆるやかな浪の音は太古ぶりたる神秘を語つて、美しさうなゆかしい小貝があまたそこにもこゝにも散らばつて、白沫の花ひるがへる波打ちぎはの玉藻には雄蝶雌蝶の夢圓かに、なま暖かい汐風は折々その優しい髭を音づれてそよ〱吹き靡かして居る。大蟹一疋鋏ふりたて泡をふきつゝ今し小岩の角にかくれてしまつた、程近き大岩の上には海士が一人烟草の煙を輪に吹きながら釣をして居る。

貝殼光る海士が苫屋の軒端を飾る緋桃白桃、早や落花と見えて、干してある網の目洩れてはぽた〱と寄する男波女波に呑み込まるゝのである。磯馴松のほとりほの〱と霞めるは藻鹽燒く烟の末であらう。

空には雲雀が二つ三つ、美しいこの磯邊の春を讃へて居る。

(評) 和暖なる春の光に浴する心地す。

○海の曙　備後　松本菫子

午前五時頃でもあつたらうか、日の出を見んと、紅緒の麻裏草履を突きかけて、淸らかな曉の氣に滿ち滿てる小松原づたひに、海岸に出た。ヒツソリとした海の世界は、後一時間の夢を貪つて、靜に眠つてゐる、油の樣な海面には波一つ立たない。

彼方此方に散ばつてゐる沖の小島は、淡く〱紺のやう、薄き紺靑色の霞に包まれて橫つてをる。稍白み渡つた東の空、綿の如き浮雲が、フワリ〱と海上を漂うて、南の方に流れて行つたが、それも直ぐ、薄墨をなすつた樣な、豫州の山々に含まれてしまつて、空は朗かに霽れ渡り、恰もダイヤモンドの小粒を撒いた樣な、曉の星が眠たさうに煌めいてゐる。

毎朝日のみ子を産むてふ神の島の高峯に、妾は眼を注いだ、と、鉛白色の東の空は次第〱に薄紅色に化して、追ひ〱紅く紅く、蛟龍の吐く火焰のもえ立つよと見る間もあらず、煌々たる紅輪悠々として昇り、一

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

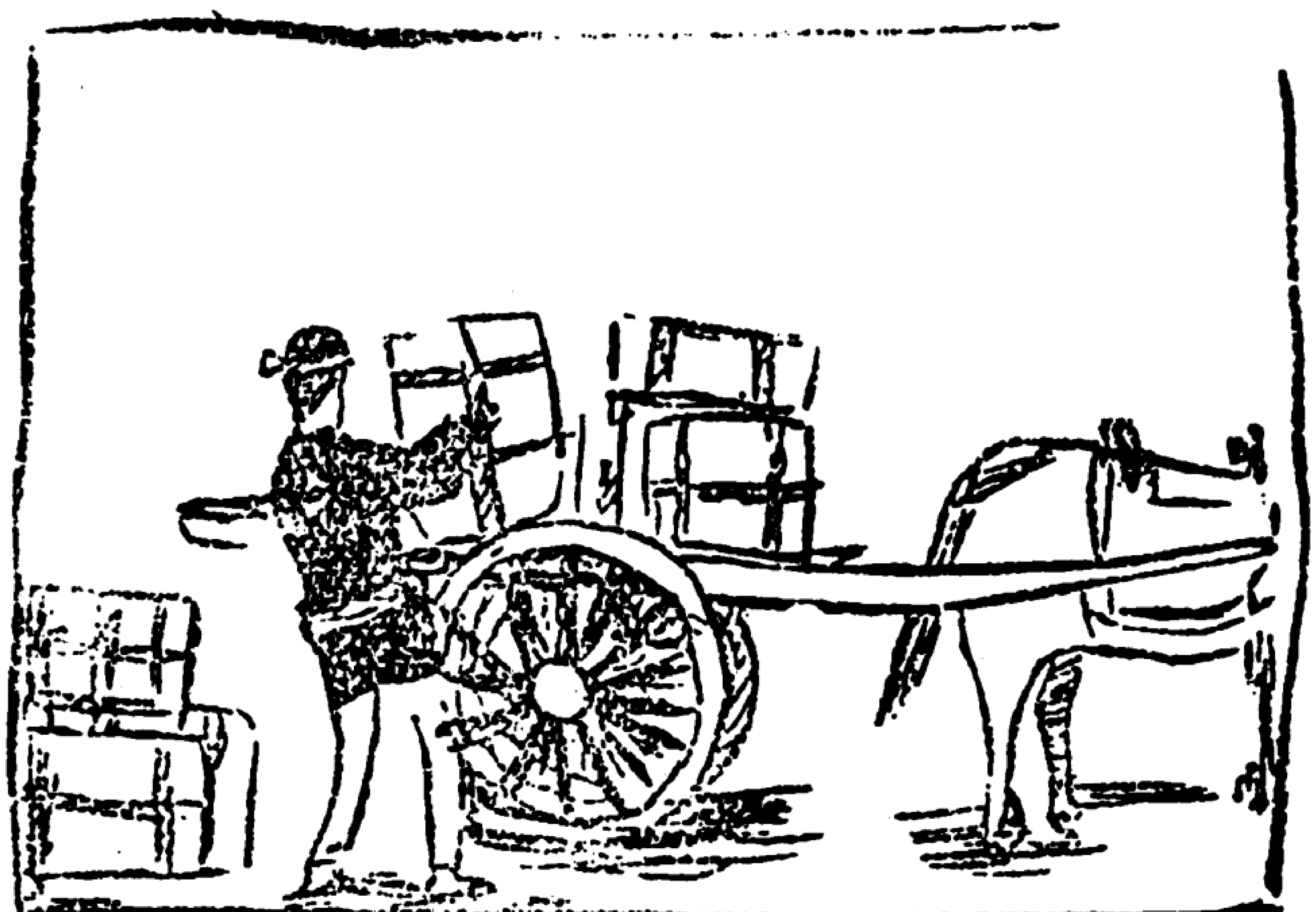
條の金線サット碧瑠璃の如き蒼穹を彩れば、水平線上金齋俄にゆれて、金のアマルガンを流した樣な海面に、沖行く白帆の影手に取る如く見える。妾は今、あらゆる胸の惱みを忘れ、そが崇高の美に打たれて、思はず掌を合せて伏し拜んだ。と見ると、檣旗飜々と白波を蹴立てゝ、船首を此方に進ひ來る汽船の、虎の嘯く如き汽笛一聲、二聲、蜑の賤家に雨戸繰る音、やがて櫓拍子面白く、エーホー〳〵の掛聲諸共、勇ましくこぎ出づる大船小舟、かくて世は凡て活動の色を表はすのである。げに尊嚴にして、美はしく華かなるは日の出の景なるよ。

（評）さら〳〵と書き流したる中に趣あり。

○夕立

播磨　高見琴子

むして〳〵、まるで釜中に居る樣な思ひ、流るゝ汗は瀧の如く、針持つ手さへ儘ならぬ、時しも西の空に一團の黑雲、朦々として人を攫まんとする如く、見る〳〵一天摺墨を流し、迅雷轟き、電光閃きて實に凄じき摸樣に成つて來た、忽ち一陣の暴風颯と吹けば、豆粒大の雨が篠つく樣に降つて來た、あゝ實に面白い、あれあの夕顏の棚や、葡萄の棚などは、皺をうつて、窓側に弓の樣に反り返つて居る四方竹の葉とちよんきなを初めた、あれ〳〵柿の葉に止つて啼いて居た、雨蛙が何處へか彈き飛ばされて了つた、今迄庭先に幾千とも數知れぬ程集つて戰をして居た蟻も、何處へ逃げたか、一疋の影さへ見せぬ、それと入違ひに降る雨は、殘らず勢揃ひをして、いと勇壯に、そして嚴肅に、見る間に小溝目懸けて突貫を初めた、獨り燕は此雨中も厭はず、高く低く翔づて居る、やがて鳴神も漸くに靜れば、中空に迷ひし雨雲も東北さして走つて行く、すると何とも云へぬ涼しい風が吹いて來て、鉛の樣に頭苦しかつた五體が、舞揚りでもしさうに輕く成つて來た、先頃迄眠つて居た樣な世の中は、急に夢から醒めた樣に、潑剌として來た、塵を帶びて茹られたかの樣に打萎んで居た、百合撫子石竹百日紅等が、恰度行水でも浴したかの樣、點滴たる汗を拭つて、さも涼しさうに靑々として居る、常なればとつくに凋んで落ちて居る筈の、垣根の朝顏が、其儘に咲き殘つて居て、層一層美はしく色


つみ荷（賞外）　下總　隆子

彩を見せてゐる、獨り罌粟の花のみは、綺麗な瓣も剃り落されて、憐れや俄か發心のくり／＼坊主にされて居る、仰げば翠色滴る計の大空には、夕陽輝きそめて、東空には燃え立つ樣な虹が懸つて居る。

（評）巧を弄し過ぎたり。

○田舍の秋　大坂市　吉田さい子

麗かな秋の大空は何處迄も高く澄み切つて、向ふの鎭守の森の邊では、ほろ／＼と鳶が啼いて居る。

天は高く、日は暖く、萬頃の稻田は風をうけて黄金の波を打たせ、肌心地の快い袷の袂を弄ぶ、それと同時に何處からとなく花の香が鼻をつくので、あたりを見廻すと、其處には美しい一莖の野菊が咲いて居るのである。

折柄消魂しき鳴子の音にふと吾にかへると、清き流れの小川の畔に親子の農夫が鍬を肩にして歸りかゝつて居るが、顔には悦びの色あふれ、そして互に豊年を語り合つて、わけもなく笑うて居るのである、やがて二人はとある脊戸に柳の木がある茅屋へ這入つて了つた、屋根からは夕餉の烟が細う上つて居る。

彼等は定めし一家團欒の夕餉の膳につくのであらう、あゝ田舍の秋は實に平和である、吾は黒烟漲る都會のそれよりも、清淨にして平和なる田舍の秋を好むのである、我は實に彼の農夫が羨しいと思つた時、雁の一つら空を渡つて日は早西山に傾いた。

（評）「田舍の秋は實に平和である」

○狐の井　小石川　吉田斐子

我が家のほとりに古びたる井あり。狐の井といふ。草生ひかぶさりていと物凄く、道行く人も、大かたは近づかぬに、故こそあらめと、老いたる人に問ひしに、かくは語りぬ。

「昔、このあたりに狐あまた棲み居けるが、かたへに住める嫗によく馴れ、しばしだに離れがたげに見えければ、嫗も可愛きものに思ひて、養ひいたりぬ。さる程に三歳の春秋は過ぎ、霜おく頃となりしあるあした、井戸をめぐりて悲しげになく狐の聲のたゞならず聞えければ、程遠き家の人々までいとあやしみて、のぞき見しにかの嫗の落ち居たるなりけり。あなやとばかり救ひあげて、さま／＼手をつくせども甲斐もなく、終にことされ候ひぬ。その日より狐どもは食事もせず、泣き悲しみて、井戸のまはりをまどひありきしが、遂に飛び入りて死したるなり。」

いとあはれふかく、かのにくさげなる狐すら情はありけるよとやさしうおぼえぬ。

（評）如是畜生發菩提心。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○諏訪湖の朝　長野縣　桂石

深紫なる東八ヶ嶽の絶頂には　曉の光早くも爽かに照りそえて、あたりの空は橙紅に紺青を加へたらん如き一種言ふ可からざる色を呈し、其の薄赤き餘紅は東の端、深碧なる湖水の上に、岸を縁取れる林と共にいと微かに映じ、四圍の山皆靜かに其影を倒まに水に醮したり。

仰ぎ見れば、時々刻々、山と空との劃線は明かになりて山上に棚引たる長き旗雲は錦の如く輝き渡りぬ、守屋山、駒ヶ嶽の絶頂は早くも朝日の光を浴びつ、と見る内、其の光は次第に山の半面を照らし、竟に今迄暗かりし小坂の觀音堂、下濱に並び立てる製絲場の煙突、四層五層に作られし繭倉の白壁、水に臨める旅亭など、やう／＼明かに見え初めて、やがて其の光は、向方湖畔の一端を照らし、物皆其の光彩を受けて輝きわたれるさま著くが如し。

山々の翠は更に一層の美しさと一層の明かさとを加へぬ、東南端の晴碧なる水面に映りたる空の色の、俄に赤くなりしと思ふ間もなく、火の玉の如き朝暾は八ヶ嶽の凹處より轆るが如く昇り出てゝ、湖面は忽に千頃の金波を漲き、山皆色を生じ、樹皆光を放ち、わが絶愛する諏訪湖の朝は、遺憾なく其美を發揮し盡しぬ。

（評）清新

○かへり途　岩代　根本松江

『では氣を付けてお歸り、母さんに宜しく、明日一日位は持つだらうから、また夜が明けたなら來て頂戴。』青白いお顏して洋燈片手に私を見守つて云ふ、叔母さんの言葉を後に獨り家路を忙ぐのであつた。

振り返つて見ると、今出た門は堅く閉ざゝれて、門内の大椿が眞黒になつて見える、俄かに寒さを覺えてきた。

灰色の雲の切目から顏を出してをる圓い月の光りに、電燈の光りと添うて夜は眞晝の樣である。私は商家の多い本町通りへと出た、一時打つて何分もたゝない夜の寂寞は一しほて、物の音ひとつ聞えない、唯我下駄の音の餘りに高すぎるのに氣が付いて、折角廻つて居る人の夢路を破るやうでは、となるたけ音を立てぬ樣、足元斗り眺めて歩いて居た、ふと束髮のピンが今にも落ちそうになつて地にうつつた、人が居なければ月迄ものを數へてくれると、淋しく頬笑てそれを抑し込んだ。

處々に立つてゐる電信柱が地上に十字形を印して居る、と此刹那耳元に人の叫び聲が聞える、それは今病んで居る從姉が目をつぶらうとして、大勢の人が呼ん

て居る樣てもあるし、また病人が頻りと私の名を呼んて居る樣てもある、若しや／＼私が家へゆかない内に、お信さんは彼の世へ逝くのてはあるまいか、今年のお正月彼麼に樂しく遊んだものを、來年のお正月は…あゝ世の中は恁らいふものか知ら、と思ふと昨日醫の爲めに死の宣告が受けた、從姉の、肉落ちて血の氣のない面が目に浮ぶ、おゝ寒い！お母さん一人で嘸ぞ待つて入被るだらう、早く行き度い、此處は、藥種屋、此處から六軒目が私の家、もう馳け出さない許りてある。　アレ彼麼に赤坊を泣かして居る家が在る、可憐に。お信さんは什麼なすつたらう…おゝ彼の犬の遠吠えの氣味の惡い事。

（評）凄涼の氣、言外に溢る。

〇小兒の遊ぶ樣　　長門　原田春子

靜枝とて四つなる妹あり。二月頃叔父上より土產にとて羽子と羽子板とを戴きしが、その嬉び例へんにものなく、日々庭にいてゝはそを打ち遊ぶ樣、つく妹より見る我の面白さ。一つといひて打ち上ぐるに、手は動かて、體よりとびあがるに、羽子は驚きて横樣に小さき肩を越して後ろに落つ。自身も打ちあげしまゝ恐ろしげに目をつぶりて落ちしのちまでも肩をすぼめて立ち居るをかしさ。

日を重ぬるにしたがひ、追々慣れて手の働く樣になりたれど、羽子はなほ横樣にとぶ。そを受けんとしては、あなやと思ふひまもなく、打ちたふれて紅のはなをきらせし事もいくたび。されどその都度泣かぬは不思議なりき。

或日裁縫してありしに、小さき足音近づき、障子の外より「チーチヤマ、パンコパンコヤルノガアッチイッタノ」と訴ふ。急ぎ行きてあちこち尋ねしも、池にや落ちけむ、かげだになし。こたび家をいづる時、妹より羽子の注文を受けたれば、先頃送りやりぬ。今頃は彼のつゝじ咲く庭にて打ちつゝ遊ぶならん、その樣目にみゆる如し。

あはれ可愛ゆき靜枝よ。

（評）好寫生。

〇日記の一節　　本郷　なてしこ

病後の保養にとて、去月の初めつ方より、鎌倉のとある山かげの草の庵に、しばしがほど心のどかに日を送る身とはなりぬ。

一日、母君の都より訪ひ來給ひしが、年頃我が家につかへたりし翁と嫗と御供したり、此翁は日頃謠曲を好みて、わがつれづれの折など、よびてうたはするならはしなるが、こよひも淋しければ、例の松風の一ふしは如何に、岸うつ波もしらべを添へんに、などうなが

せば、扇子とり出し、ものゝしくうたひ出づる口つき、頸のあたりにすぢをあらはしたる姿の、あまりにをかしければ、そを寫生して人々に見するに、母君のいと幼きたはふれかなと笑ひ給ふ。

思ひ出づればこぞの此頃にやありけん、母君の御供して江の島に遊びたることありき、磯山の松の木の間にやゝ染め出でしもみぢ葉のあまりに美しきに、われ知らず歩みを早め、辨天の祉に登り、木の根岩かどふみならして、岩屋におりたち、そこ此所と足にまかせてありきつゝ、夕日西山に隠るゝ頃、庵に歸りたりしが、我はさまで疲れたりともおぼえず、供なる媼の江の島ははじめてなれば、いかにおもしろく見しならんと問ひたりしに、田舍人のかざりげもなく、今日のみ供は歩みのみ心にいそがれて、道すがらのけしきなどよくもおぼえ侍らず、げに苦しかりしなどいふに母君笑ひ給ひて、さもありしならん、若き人には若き道づれこそよけれ、さるにても後れはせでよくも隨ひ來つるぞとのたまへば、あなあさまし、かくても昔は人におくれしことのなき身なりとて、わが若かりしときの物語りなどほこらしげに語りいづるもをかしかりき。


老婆の内職　(愛外)

(評) 流暢。

○病める友　紀伊　文子

兄が山がりの家づと、紅葉の枝美しきに、黄菊白菊取りまぜて、今し妾は病める友がり訪はんとて露しげき小路をたどるなり　若松　しづ子

門邊の高き柳をめあてに心は急げど、後れがちなる袖の何にひかるゝにかあらん、尾花の末にすがる露、いづれ秋野の眺めにあれど、友の上おもひやる身の我には何をかしかるべき。はかなき想は胸に迫り來て、何とはなくに涙さへ溢れつ。

先きつがた、つれ〳〵のあまり讀み出でし、小説の奇しきまでに、友の身の上に似通ひたれば、胸は怪しくおどりて、いろさま〳〵の想浮ぶなる。

友は幼きより父母に別れ、他家に養れぬ、其養父母は富みたれど、心ざまいやしく、金の外に尊きもののあるを知らず、人格いたく劣りたれば、よろづ友と心合はぬ事多かりき、さりとて、友を憎むにあらず、否、怪しきまでに優しく、其美はしき容貌を誇りとし、黄金

惜まず着かざらしめぬ、かくて友は榮華のうちに育ちぬ、されど榮華のうちに眞の苦を知りぬ。

飽くまで理を辨へぬ、養父母は、祖父の如き、年老いし某富豪と黄金のための結婚を、友に強ふるなりけり、友は義理を思ひ身の行末を思ひ、なやみの餘り、病の床に打ちふしぬ。

さればこそ此里に、病を養ふなれ、吁神よ我友に眞の幸をあたへてよと念じつゝ、妾は今、柳の門をくゞりぬ、今日は友も快きか、病室の窓より此方を眺むるなり、日毎に訪ひ來て相見る事ながら、今更の如く懐しく、走りよりて無言のまゝ其手を取れば友は握り返しつ、其窶れたる青白き頬には、熱き涙のはら〳〵と溢れかゝりぬ。

（評）悲惨。

○縁日

神田　長井惠美子

遠くより見れば火事かと怪まる許りの縁日、妾は友訪れてのかへるさ立ちよりぬ。先づ目につきしは怪しげなる洋服着たる男、本を手に持ちて『これは諸君に無代で進呈致しますが、一寸待つて下さい、此限りある本を限りない諸君に上げるのですから、困つたな、ぢや、ごく熱心なる諸君丈けにあげる事にしませうと云ふと、鼻たらしの小僧迄が、叔父さん、私も熱心だなど〻云ふから、かうしませう、只實費の紙代印刷代の五錢であげる事にしませう御賛成の諸君があつたら買つてくれ給へ』と云ふと、書生外五六人の人が買つて今度は書生サノサ節に集まつた。向ふがはのせり屋は競賣とかいた高張提灯つけて『エー三十五錢エー三貫と五百』『四貫だ』と印半てんの男が叫んだ『エー四貫』『小便だ』『オヤ〳〵小便なら向ふでしろ、そんなら元の三十五錢エー三貫五百、實際こんな上等のシャツが三貫や四貫ではかわいさうですどうか御手に取つて御覧下さい、未だ之から股引、靴下、手袋、毛布、歯磨いろ〳〵せりますから、エー三十、五錢、三貫ト五百』十四五の小僧『七貫ー、二枚て』『二枚て七貫、同じ事だ、矢張三十五錢、中々熊公はそろばんが達者だ』皆どつと笑つた。そこを通りぬけて繪はがき屋、本屋、小間物屋、茶碗屋等の前を通つて、蓄音器の前に來た、前に赤き幕を張つて、今若い男がしやべつて居る『初まりましたら皆さんで聞いて下さい、當時は大分浪花節が流行して居ますから、浪花亭の愛吉さんの鏡山奥庭の段に、辰丸さんの千代萩御殿場、それに小榮さんの成田利生記桂川力藏とそれに甚句が一つ御まけになつて居りますから、都合四つて、只の小錢の一錢、初まりましたら皆さんで、聞いて下さい、一寸聲調べにラッパ節をやります』ラッパ節をうなりだしたのを後に妾は家路に向つた。

（評）縁日商人の口吻うつし得て眞に迫る。

新體詩

河井醉茗先生選評

二等

○煩悶

京都市六軒町今出川下ル藤山元七方　大澤こう子

魔にや醉ふ波の囁き、
薄闇の寂しさもれつ、
さてはかの夢の小笛の、
胸にやは消えもしなづむ。
げにや夢、それよさなりき、
黄昏をえしらぬ悶、
たふれゆく雲のかげにも、
あくがれよ、とはに朽ちせじ。
夢に生き夢に甦る、
吾がなやみ、畏怖あらじか、
虚空匂ふ虹の高さに、
吾うれひ、悔はあらじか。
とおもふにこれや惑の、
幻のさにやはあらぬ、
白銀の獵矢をふせつ、
浪こえて水はうかゞふ。
譬ふればさつきのもりの、
さゆり花ほのめく匂ひ、
闇さきつ、胸をゝそふと、
白はとの夢醉ふ心地
さもあれやとはの寂しさ、
人しらぬ酒甕くだきて、
たち惑ふ彼方のなみに、
苦きをや注ぎて出でし。
あはれこのむねにひかりの、
匂ひをし深く彫らばや、
狂ほしき戀の泉に、
新らしき生命やわかむ。
わがなやみさらばこの矢に、
碎くとも射ぬきたらばや、
霧迷ふ野邊のを鹿の、
亂れはやとはに消えなむ。
堪へやらぬ煩ひぞいま、
雲か、あな遠くゆきぬと、
みるまゝに胸のあらなみ、
再びは、などかよせぬる。
わづらひや悶やとはに、
さてはわが命をふらむ、
便りなきこの胸、さらば、
大神の心のまゝに。

煩悶は實に生命の一面なるかな、斷くて詩も美くしく、人もやさしく、世も活く、此れ煩悶の詩としては充分に聞えて居ます、やゝ格調のしどろなるが疵ですが、感情の高まりはあらはれて居ります（醉茗）

三等

○夢の恨

下野小山町　新井　琴子

生命の路の木立暗、
眠りの陰に忍びより、
安息を得む願ひにて、
隱れし我に咎ありや、
愛の木の根の妨げに、
惱みの旅は疲れたり。
大理石の床――水晶の、
柱がくれに掛け渡す、
緋房の華に沈の香の、
燻ゆる樂所の亂れ琴、
朝の日射に醉はむ身は、
美き平和のものあらむ。
これは北なる氷山に、
つくばい居よる醜の男の、
鋭槍に胸の安からて、

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

寂寥の子よ迷ひの子、
唯青白くさゆらぐに、
一夜は夢のあらざれな。

少し印象がはつきりしませんけれど、夢のうらみは想像出來ます、詩語をあやつる自由は手に入つたもの、好い考さへお持ちになれば、作家の城に入るにわけはありません（醉茗）

○遠の空

下谷上根岸百廿五　太田秋津子

（三月我は弟を得ぬ我薄幸の子遠く越前にあり）

あゝ雲幾重遠の空、
百里を遠く隔つれば
われ未だ見ず君が顔。
一つをまさる我れなれば
泣くに疲れし若人が
少女我身の弱うして。
さらばよ姉と呼びたまへ
奇しき緣しに引かれては
又結ばむ來生未了因。
猜疑の魔は間裂くと
「信」の盾にて防がむを
血温かき胸に倚れ。
あゝ空遠き越の國
涙の痕を吹かむとき
若き姉が名呼びたまへ。

冬は來ぬらむ越の國
夢には通ふおもかげの
姉と云はむはふさはじも
縋る袂を拂ひ得ぬ
弟と云はむ約言の
東坡が詩ならぬ世をつぎて
勢するどに、襲ふとも
涙おさめて弟よ、わが
初冬の風寒くして
東路はるにひとりなる

しつかりした作です、但し前半は今一層の力が入れて欲しかつたです、それから詩中に漢詩の一句を挿むなどは餘り感心しません、なほ幸ひに好き詩を示したまへ（醉茗）

○蜃氣樓

四谷第一小學校　河野槙子

渺々とせし海の彼方、
あらはれたりな龍宮城、
薔薇咲く頃逝きましゝ、
そゞろ懐しあゝされど
「神よ！よき術賜はれ」と
ふと見かへれば懐しき
只かすみのみ深かりき。
三年ののちの今もなほ

霞のとばりおし開き
朦朧として夢のごと。
母の呼ぶらむ心地して
ゆかんにも我に羽はなき
あつき祈を捧げしが
龍の宮居はかげもなく
袂にのこる潮の香に
憧憬るゝなり海の彼方を。

私も十四五になりましたらば少しは作れるやうになるだらうと思ひますが云々とお言葉が添へてありましたが、して見ると、あなたは十四五よりお若いのでせうが、それで是れだけお作りになるのは、只感嘆の外ありません、何うか其才を善い方に發達させて、天晴な作詩家となつて下さい（醉茗）

秀逸

○若き靈

佐世保　葉の人

萌え野過ぎ綠野ながれ、
栄は雪消の水
つがひの鶺鴒行きくれて
かへり來ぬごと若き靈

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

野末の雲にかくれけり

あゝ王ぶりにかこまれし、
土手の蒲公英春深み、
ほふけて飛て日のきらめき
あゝ若き霊かへらざり

夕月ひかる花びらに
薔薇の七穴音を細み
細くもつよき高鳴の、
伶人めけるひとの後姿
垣間見しより若き霊、
あゝ夢のごと消え失せぬ

詩に享けませし霊なれば、
かく隠しふもおはすなり
うすにび色の野の雲や、
根にこそ凍れ葉蔭には
かくても霊はかへらじと
かこみもしたる雌雄蕋の
陽炎ふすきひるすぎを
空にまぎるゝかのよふや

冬枯（賞外）八王子　乙幡もん子



萌え野の水は穂薄の
秋なり笛の人も消ぬ
隼鳴ける夕の想ひ

何となく神秘の感を起さしめ、若き霊の返らざるを呼びて詩情の動くところ、一片の風韻、遊野にさまよふ趣があります（評者）

徳島市　富士谷あい子

○車上

（悲しき嫁ぎの子に代りて）

凶光巽に流れては、われ今京に
京に入る、壯麗し京は灯に榮えて
今宵を悲し物思ふ、敬くにつらき
輕羅の、素絹に流る月代や。

悲哀面わに照入らば、朝を死灰に
歸らんか——衣は七草裾に咲けど
繻紗の帶の下にして、胸に秘ると
小き息の、なか〳〵高き血の脈搏。

君に別れの詩ならむ、わが手花輪は
糸たえぬ、戀に背きて嫁ぐ身の、
車上につらき煩悶あり、仰も入ん
星の界の、星に歸むの妾ならて—。
光明の外に立んには、あまりに冷し
血潮かな、他意なき人の笑與に
ゆらり灯影の六つ五つ、妾を迎ふと
かつ見えて、また一曲り辻角を曲りぬ——。

斯ふ云ふ場合を歌ふのは古い事ですが、殊に小説には澤山ありませうけれど、此れを詩にした許りでなく、新しい詩風で歌ふとしたのは感心です、辭の多い筆つきですけれど、又棄てられない趣があります（評者）

○詩集『花守』を讀みて

（夜雨先生に）　高知市　田内いねき

「二歳まさりの姉君は、森の館に嫁ぎぬ」と、
崇きみ詩をくりかへし、くりかへしては己が身の、
似たる運命の悲しさに、あゝ幾度か泣きにけむ。
美しき十九の花の身の、燃ゆる情をそゝがせて、
父母なき吾を養育らせし、慈愛の姉は永久に、
歸らぬ黄泉に嫁かれて、世にはぐれたる吾なれば。
霞の丘に麥笛を　鳴らしたまひし面影や、
小笹に蜆の子を貫きて、避たまひたるおもかげを、
なつかしとのみ慕ひては、夢に現にあてがるゝかな。

『花守』の作者、詩編に富む（評者）

○白駒の歌

東京　大村澄子

芦毛栗毛は闇の色、月毛白銀雪白の
男神が姿はなやかに、おのづからなる威ぞ高き
されば秋艸踏み碎き、仰ぎて高きあさの氣に
嘶けば尾はひらめきて、それ九つの天の馬
往かん霜氣に高梁の、朽ちて碎くる西伯利亞の
しこのして草踏みにしり、蹄に仇の血ぬらさん
名も白桂の湧らなる、かぜに嘶く駿足は
鞭をあぐれば瞬間に　噫々千里なり萬里なり

强さうな調べ、第三節の西伯利亞など言はずとも、もつと白駒の實を歌つてほしかつたです（評者）

○花蔭

近江　花泉琴瑤

甘露したゝる森の宵、薄紺粧す嫦娥を見て、
花より花にさゝやける、しゞまゆかしみ我が立てば
影はおぼろに地にひいて、宵を讚美の花吹雪。
風あたゝかく頰をなでゝ、何とはなしの耻らひに、
我れにもあらぬ思ひ出や、ふと聲ひくうみ名よべば、
あな面ぶせの遠こだま、靜かなれよとうつゝなの、
吐息かすかに木によるに、花も木立もぬくき夜や。

君の詩は詩語の撰當を以て優つて居ますが、詩語をわけなく並べただけでは、全躰の意味が閃えません、何か捉えどころがあると好い詩を作れるやうになります（評者）

○樂しき家庭

門司市　彌吉はるみ

家は狹いが八疊と四疊、家内三人と下女とて四人、
夫は毎日役所にかよひ、内ぢや嫁女の縫針しごと、
可愛子供はよき衣着せて、辨當造て學校にやるし、
下女は十六娘も同樣、好きな衣服は縞向選らせ、
絹は出來ぬが木綿は出來る、暇な折々梭をば織らす、
子供歸れば夫もかへる、優し嫁女は門まで迎へ、

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

夕餉御膳にや四人笑ひ、　膳が終れば車座とりて、
樂し遊びの歌がるた。

俗謡の調子を上手に應用しました（酔茗）

○夕暮の詩　大分縣　後藤さゑ子

み惠深き天津女が　利慾に迷ふ人の子の
心の夢をさますべく、　作りましゝか夕暮を
見よ夕陽の影おちて　紅ふかき彩雲の
西のみ空にみだるとき　そこに快樂の光あり
彩雲淡く色あせて　時もとむる百鳥の
鎮守の森にさはぐとき　そこに美妙の調あり
鳴く百鳥の聲たえて　天のみ空に新星の
すゞしき眉をひらく時　そこに無言の啓示あり
かくも靜けき夕暮も　暫しが程に消えうせて
暗き惡魔の闇の手に　蔽はるゝこそはかなけれ

一寸好い詩のやうに思ひましたが、能く見ると整ふたと云ふだけて、創意はありません（酔茗）

○二つの故郷　陸中　大立目白羊

樂しかるべき故さとに、　幸ある盃を汲まんにも
はや犂とりし野に立てり
世は屬くものを愛せども、　選び給へし君なれば
すべてをエスに任かせたり
ヤコブの井戸は盡きずとも、濁かぬ水に我れ行かん
世の戰ひに疲れたり
あまりに近き物は見えず　村と親族に教へんは
イエスもこれをなさゞりき

信仰に伴ふ詩の聲はいつも清らかです（酔茗）

○夜の潮　越後　中村なほ子

あゝ綠なる野に臥して　いこひの水濱に彳めば
またと見ぬ故園の夢幽かに、
虚飾を忌む詩の神が、　此所を永劫なる我領と
壯厳の靈集め來て、　守りて居ます清き海
夜の潮の韻たかし。
悶え悶えて我立てば、　寂寞める息の夢さます、
莫告藻ゆらぐ波がしら、　そこに靈ある聲有りき、
『夢みるものよ夢な見そ』。
なやみ療ずる偈ぞこれと、　我は眞砂に額づきぬ
おのづからなる微笑よ、　自然と人ととくる處
たくみは祕めて海に在り。
弱き我が魂さゆらぐは、　今宵けがれの身を出て、
御神がもとに行くらむや、　あゝ我れ遂に人の子と
弱き涙は示さざれ。

夜の海の神秘は幾度歌れたか知れませんけれど、未だ／＼歌い得て眞に近きものは見當りません、眞に夜の海の神秘は、なほ多く皆さ

んに歌つて頂く必要があります(評者)

○沙漠にして　長野縣　山田くに子

神にそむきし罪の子が、魂の亡びの凝かそも、
熱砂火を吹く砂原や、愛宿らざる境なれば
緣見ん世も遠い哉。
運命の鞭におはれつゝ、石に入る日の征矢受て
行く手も知らず迷ひ行く、若き子旅のさすらひに
忘れがたなの面影の、いづく共なく浮びきぬ。
そのゝく胸をおさへつゝ　憧憬遠く故鄕の、
花野の末の一つ家に、青春き柔肌病つかれ
やつれ姿に世をば泣く　面影人を偲見て、
墮つる涙の止まらず、裂けなん胸を抱ては、
沙漠の空に泣く身哉。

沙漠の歌としては未だ沙漠があらはれて居りませんけれど、沙漠の感じは多少あらはれて居ります(評者)

○秋光　近江　馬場みつ子

窓に倚る女の優し頰に、ほつれてかゝる黑髮や、
秋に恨みは長うして、寢覺わびしとかこつ子よ、
吐息迫り來る病人の、瞳に似たる秋光を、
浴びたる額は蒼白う、あはれ苦患を語れども、
道歡いみじき市人が、顧らで過る門の戸に、
愁恨の賦を刻まずば、平らかならしこの胸の、
天火の焔地を燒いて、情冷えたる罪の子の、
骨は紅蓮と燃えん時、わが微笑の時來る、
あなうすれ行く秋光の、西の大海に落ち行くよ、
殘んの熱の消ぬ際は、瘦せたる頰に血を惠め。

激烈なる情炎、却つて之をたわやかなる女性に聽く(評者)

○夕雲　佐世保　秋蝶

夏のみどりの色うせて、秋風立ちてはげ山の
烏帽子岳の其の上に、影うすくらく橫たはる
をも〳〵らしきくろ雲の、魂そこに迷ひ來て
雨かと人はみやるとき、西のみそらのすみゆきて
裳裾に得たき夕雲の、山の端近く流れたり
美し雲の彩色は、天のみ川の錦かと
流るゝ末も尋ねたく、み船もほしき夕かな
いさ棹とりてなつかしき、雁なき渡る其の空へ
漕ぎてゆきたき思ひかな。

好い句もあり、力のない句もあり(評者)

○百合束　福岡町　村山秋子

落ちて久しき葉を踏むに、神秘も深き谷あひの、
苔[illegible]綠の岩かげに、世を白玉の露に醉ふ、
あゝ其百合の氣高かけれ。

房にくまどる牧場に、
小さきまげにかざしたる、
薄紅梅の巻紙に、
乙女何にか微笑みぬ、



あめや(賞外)　京都　浪部郭公女

若葉もえぎの夏草の。
羊を招く乙女子の、
あゝ其百合のいとしけれ。
白百合緋百合束になし
いとしの様と掟ちて
あゝ其百合のゆかしけれ。
流れも清き卑川の、
　水面にうつる姫百合に、
淀みはうすく色彩りて
　水は巴とめぐる哉、
あゝ其百合の美しさ。

＊　＊　＊

あゝ我れ百合の歌にゑひ、
おばしま近くそめば、
花賣る少女百合花を、
かざして我が家訪れぬ。

百合束は美くしい題でした、ゆかしけれとか、かなしけれとか、一つ〳〵断るの餘り上手なよみかたではありませんけれど、此詩は皆それ〴〵詩情が浮動して居ます(醉茗)

なれが秘語きかせよと
可笑しと笑ふ母上の
耳かたむけてきくわれを
今宵のみ顔若き哉

思ひ切って變った題をお取りになりました、何んな事でも歌ひやうさへ上手であれば詩になるのです(醉茗)

○豆煮

岩代　笑子

煮え立つ音のきこえねば
小なべにみつる豆白し
またとり上ぐる詩の巻
わがよむ詩をつゝみけり
そと蓋とりて眺め入る
炭火くづす右の手に
やがて少さき湯煙の香は
何低語くよなべの豆

○夜の雨

麹町　山下里子

それよ昔しの夢ならず
我身ばかりの世ならねど
さびし悲しき夜の雨
胸に悩みのあればとて
など目が伏するわれならむ
悲しきことはつれごとの
こゝぞ多かるものぞかし

暗きに迷ふ人の子の
よわきさだめをとこしへに
定めん雨か夜の月に
細く絲ひく亂れ緒や
かゝる時こそ聖鐘に
かなひし人のあるらむか
異なる人も交るらむ
あゝうきことの夜や悲しき、

○口うつし

赤坂　梅津治笑

五色の羽根の麗しい
小さき聲して飛舞よ
金地光りて安樂の
神かと思ふ美しの
羽根を休めてとまる時
尾長くたれし離し島
室もあかるき窓掛の
椅子にかけます白衣して
人ほゝ笑みて飛鳥の
立ちて口出す何やらを

鳥の口へと口うつし

○秋の温泉

上野　大沼波子

時雨ふる日は殊更に
色一しほに深くして
夙としもなき身にあれど
みだれし髪の幾筋を

二十里、郷里は遠ければ
山の一つに目標して
暮れ旅立ちて二七日
何處も同じ秋の日を

庭に散りしく紅葉の
憂ひ勝なる秋の温泉や
若きが性の煩ひに
疎さんとての山宿り。

十重二十重にそゝり立つ
巖の邊を戀ふるかな。
山は笑しき黄葉紅葉
君は如何にか過すらん。

○道羽子

常陸　しづえ子

かれて聞きけん世の戀の、
希望たのしき年立ちぬ。
日影麗けき新年や
打合ふ音の調一つ、
優しきみ手のくるひしよ。

煩悶をわれは知らずして、
一日君とのやり羽子に、
わがひと打ちの高うとび、

○春の牧場

安房　忍足ぶし子

香りにもゆる若草の、
萌ゆる日の光り背に浴て、
幽かに低き牧笛の、
朧ろげなせる人影を、
ふと眼を上げて眺むれば、
花の香きさむ鐘の音の、
薔薇色の雲たゞよひぬ、
聞け天樂の音なりと。

風やはらかき床のへを
花ふくみくる小羊や
起る彼方は花の色
我れは少女と見とめしが
春藝術の御神が、
響くみ空を横ぎりて
野末をもるゝ薫風を、

○菫の賦

羽後　渡部美耶子

友どち多き蒼穹に、
菫の榮に誇りてし
されど嫉妬のまぬかれて
塵世に落ち來し枯生野の
誇りしことも仇なれや、
衣は破れ緑髪みだれ、
何處へ飛びしか失うなひて、
いつかはかんの望みなき、
また來む年の春風に、
佐保姫君にまゐらせん、
日毎降りくる五月雨の、
袂のはだ破れては、

佐保姫君に寵されて、
われは天上の舞姫よ。
西空の魔神に射かけられ、
手掌に足らぬ小き園。
榮ある夢のさめぬれば、
小さきゆかりの春は。
身は早や褪る花葉、
愁の心たれかしる。
衣の袖をなびかせて
のぞみ空しく消えはてつ。
花にうたるゝわれはしも、
神いまさぬと怨かな。

○密蜂

伊勢　佐藤しづま子

『痛たき姫は來む春に、
祝歌をみたせよ』と、
女王立ちます長さに、
密甘たるき小春日の
枇杷花昨夜の霜に散り、
胸の小翅はうつろなり。
笑な迎へて、終日の
勞動冠光らせて、
透羽鳴らして飛び廻る。

産聲高う生るゝぞ、
おろそかならぬ御詔して、
『戀』と小羽根に風別けて、
稲花、尋ねあさりしが、
山茶花寒に色褪せて、
『密花あれよ、女王の
幸を捧げん、花あれ』と
まめ〳〵しげの小密蜂。

○十一月卅日の夕

横濱　指田温子

あゝさびたりな
秋も今宵に
今年の秋も

世のけしき
暮れんとす
くれんとす

かへれよ返れ　わが秋よ
今宵かぎりの　日ならじを
など今宵に　秋はつく。

あゝさびたりな　世のけしき
あゝうらぶれの　わが身かな
十九の秋は　今すぎて
いつ世々にか　めぐりくる
天なる星よ　夜の露
わが泣く涙　秋のかたみに。

○朝霜　周防　小藤

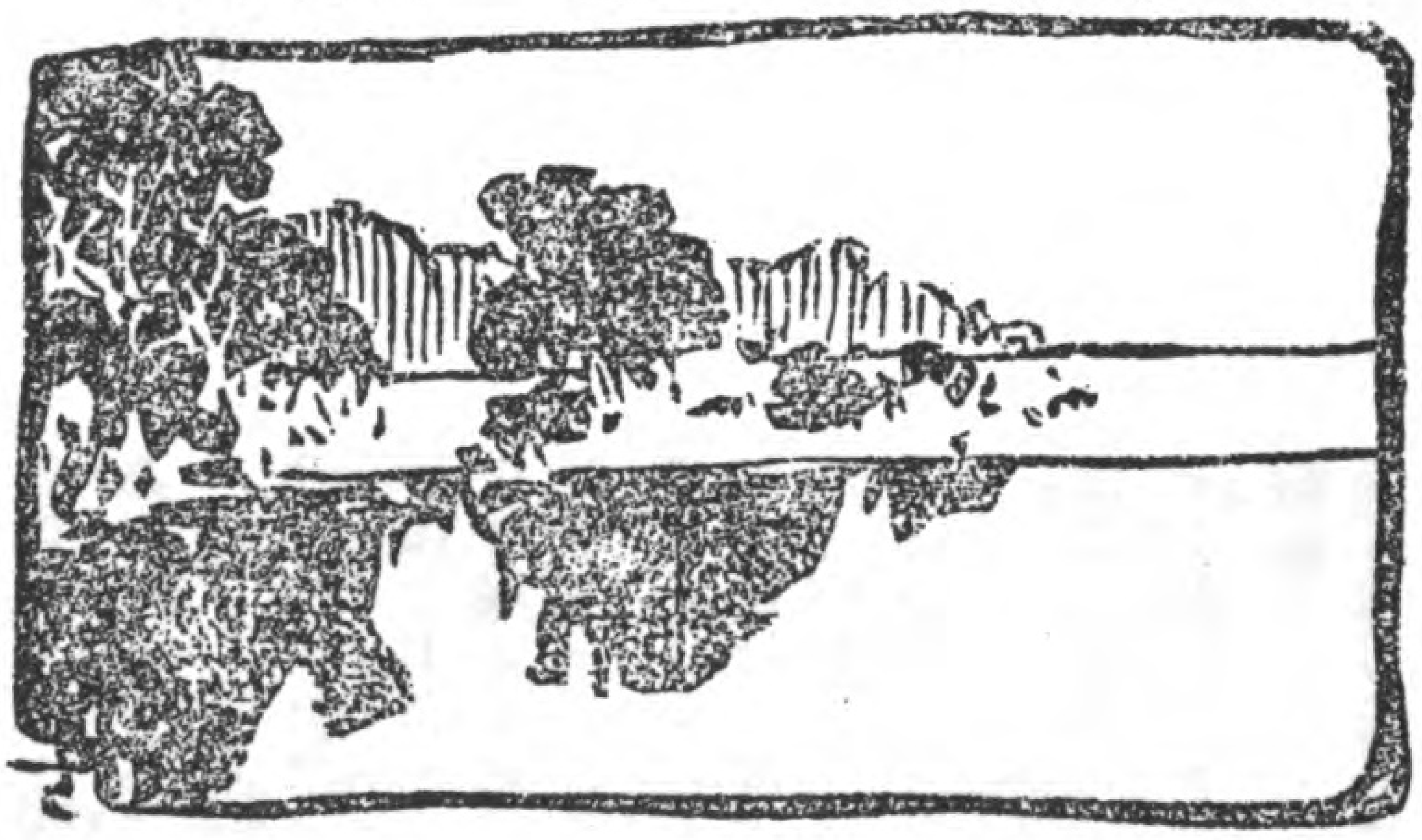
朝早く洮はんと　積み置きし大根に
薄雪とばかりに　大霜の朝なりき——
涸れ涸れて片よりし　砂川の水黑う
流れ行く岸の邊に　石寄せて坐を占めぬ。
白き手に息吹しつ　冷たきを洗ふ間に
いつしかと朝日出て　人影の長うさす。
驚きて見上ぐれば　軍してかへりたる
たくましき若人の　馬曳いて市に行く。

眸と相逢ひて　ほゝ笑みつかけられし
一と言にほのかなる　嬉しさの湧きてしか。
相笑みしそのかみを　偲ぶにも堪へがたき
その言はなほ忘れど　あゝ！大霜の朝なりき。

○子守の歌　播磨　吉田翠子

「寢たら桃やろ起きたら炎、　炎すえるより桃もらう！」
まだおさなげの身の裝かるく、　羞ひ知らぬ肩あげむすめ。
寢てもさめても夢現にも、　稚子を大切と手にすげたてゝ、
朝は早うから大切の稚子を、　負ふて行衛はいつもの橋よ。
橋の下ゆく大船小船、　水の流れに帆をばまきて

みづうみ（賞外）　美濃　下川さく子



歌もさまざま身裝もちがひ、　楫とる人の面影なかし。
折から逝ろこの橋の上　學校に急ぐ子供の群は
指さし笑ふ—たれかと見れば　人にはあらぬ姿が身の上ぞ。
「わしはだんない何い言はれても、　たとひ乞食と言はれても！」
あゝ姿も父のゐますれは、　ああ姿の母のゐますれば。
大足小足せはしく去りて　「あら土井先生が」とみな其あとを、
水の流れはかはらず澄みて。　また船見ゆるこの川つゞき、

○人形　兵庫　柳田白百合子

猫うまいして百舌鳥なきぬ、　はら／＼と散る山茶花の
白ふ薫ずる椽近う、　父が晴衣をぬひなれば
今年八つの妹の、　あづま人形かゝへつゝ、
肩より我にさゝやくよ、　ふさはしぎぬのほしとこそ
紅きうるはしきぬ裁ちて　おまち打ちてぞ教ゆれば、
いと嬉しげにゑまひつゝ、　おぼつかなげに針運ぶ
乙女心やおどるらむ、　やがて仕終へて着かざりて
ふさひぬとゑむ母ぶりの、　よろこぶ樣の目に見へて
我にもあらて微笑めば、　「嬉しいのよ」とほゝ赤ふ
愛らしひとみ輝きぬ。

○冬來　上毛　金子尙子

秋は去ぬ——
垣の白萩小さき朝がほ、　いつしかちりて影も止めず
秋は去ぬ——
四方の山邊の紅の葉は、　すさぶ木枯しにあはれ散り果て
冬は來ぬ——
月影冴えて霜深き夕べ。　冷きれやに水鳥をきゝて
冬は來ぬ——
汀氷りし里の小川に、　殘月澄みて朝風さむし

○醜女歎　大阪　北川さだ枝

冬の初めになりぬれば　今年も已につきにけり

歌ふ童児の聲きゝて　たちまち起る物思ひ
この年までも赤縄なく　嫁きかれつゝむなしくも
淋しき園に只ひとり　身の行末をかこつなる
妾の身こそかなしけれ　せめて顔だに世の常の
少女の如く有ならば　たのしからざる家続を
歎はんすべも有ましを　何の因果かあなにくや
疱瘡の神に悪まれて　我から恥らふ顔かたち
戀に思ひはもゆれども　戀はるべき身にあらざれば
燃る思ひも何かせん

〇不二見ゆる國へ

阿波山　葛子

露光る野の夕霞に　捲かれまかるゝ物思ひ
重き惑ん地に垂れて　行きたきものは吾妻かな
春に遅れけん鶯の　羽がひ痛めて鳴く聲に
おどろを分けし孤獨の　涙は人に似だるもの
月見草咲く片岡に　下道ふ畑かへりみて
風に迷へる白蝶を　傷みし秋もくれにけり
富士見ゆる阪湖ある國　白きは雲の小野の家
行きて内海の汐風に　吹かれし袖の氷るとも
影青白き月の窓　人も寂しと思ふらむ
紅濃かる蔦の葉に　『待つ』と記せし鉾はかすれて。

東京　秋山紅淡子

〇畑に立ちて

半道ふ子のそびらより、　夕の色は迫りきて、
金風嵐とゆらめけば、　山紫の月波根や
横なびく雲は紗の色か、　すゞろに起る簫の氣に
あゝ旅衣、正さるゝかな

〇若草

伊勢　中村てつ子

見よゆるやかに行く小流の、　川邊に小花が咲て、
光をやどすこのあを草の、　しげれる方の靜けさよ、
花より白む東のそらに、　草刈に行くあの田吾作の、
聞けや浄瑠璃その一節は、　彼がすさびの歌なるよ、
天の月もれて吹く春風に、　心地よき哉あゝ若々と、
あの麗しきかはべの草は、　岸に坐りて人を待つ、

〇古き森

備後　ゆき枝女史

太古の秘密もらさじと、　神代のまゝの古き森
檜檞のしげり立ち、　鳥さへ啼かずものすごく
荒き杣子も腕揮れ、　み斧をすてし幾千年
靜寂を汲む青き苔、　山氣靈あり骨をさす、
落葉をふめば清水わき、　あつき血潮もこゝに冷ゆ
妖雲のせて吹く風に　葉ずれの響もれて來る
あゝ靜寂のふりし森、　清く氣高し長へに
あゝ此森にて誰か亦、　自然に感ぜぬものやある

〇秋の歴史

讃岐　香川榮女

廣庭の銀杏の　落葉つと走りぬ、
そよ風に。さながら　おほ蛇に追はれし
蠑螈。
手に取りて一つを　すかし見る夕日に
ありありと讀みたり　この秋のおもしろき
大歴史

〇ひひのてぶくろ

栃木縣　谷　靜子

こひの月夜に曇りは見えぬ　冴えた空ならまたさむかろに
さぞやひえなんみ手のさき　はやくあげたい此手袋を
一人心はいそげども　いとも亂るゝ胸の中

一つひとつに目をひろふ　針の先をや如何にせん
れよとの鎚はひゞけども　猫もあむなり心をこめて
望を糸に願ひつゝ　ゆくへを針にたのみつゝ

○雪の朝

尾張　歌字田　愛子

明方は月を見てしを、　いつの間に降りつもりけむ、
起き出て小窓開けば、　燈籠は綿帽子着て、
万両も綿帽子着て、　翠濃き常盤の松も、
青のみの楓や柿も、　眞白なる花を咲かせて、
己がじし榮へし姿を、　ほこらしげなる。

○友いづこ

高米　露子

漲ぎる水に舟うけて　夏の夜すがら遊びてし
長良の川の夕すずみ　今年は誰と涼まゝし
眺め果なき大海の　寄せては返す篠の島の
浪打ちぎわに下りたちて　涼しき風にあこがれし
親しき友よ今いづこ　花幾度か散りはてゝ
月も幾度か満ちかけて　思へばよろづ夢のごと
君をばしたふ一筋の　いつか思ひの忘るべき
杜鵑血になく夕まぐれ　君がみ魂を迎によべば
手向けし菫さゆらぎて　あやしく光る露の玉

○夜

横濱　長谷川　波南子

筆を執り紙にのぞめど　進まずてしぶりにしぶる。
夕の鐘淋しく響き　枯葉散る音かすか。
てる月の光をあびて　歌歌ふ童樂しく
面白し其歌の譜の　吾れは筆すてゝ窓よりぞ見る。

○菫と星と蝶

下總　若杉　登利子

星と菫と舞ふ蝶は、　春姫様のみつれ人
春姫様の御令に、　菫は花の王となり
若紫袴線の冠の、　春野を守る少花王
星はみ空に輝きて、　菫花王の守り人
蝶は少きあや羽もて、　下界はるかに舞ひ下りて
春姫様の宣言を、　菫花王にさゝやくぞ
清き三人のエンゼルを、　などて汚すぞ戀の子と

○旅中寒夜

長門　照子

寒月白う霜冴えて　行く人稀れに夜は更けぬ
抱ける火桶火は消えて　讀書進まず膝寒し
外には嵐聲たけて　芝居踊りかがや〳〵と
此方の燈はうすらぎて　時計の他に音もなし
枕冷き一人寢の　旅のやかたの淋しさよ

○少女子

福岡市　三葉女史

殘月高き樓の　吹雪は花を亂るゝを
跫音も輕う少女子の　梅の一枝たづさへて
歌へる聲のやさしさよ。
少女はしばし止まりて　鶺鴒あそぶ河岸を
清き眼にみいりしが　そとほゝ笑みてあゝまたも
樂しき歌にたどるなり。
聞へずなりぬその聲の　見へずなりにしその姿の
いづくにゆくかわかれども　珊瑚の指の冷へもせば
さぞつらからん少女子の。

○露

名なしの菊

夜は更けぬ、月清し、　草葉に添ふ露の玉
美しき戀神の色、　風吹かば散りもせん
戀あらば光きえん、　果敢なき戀露の玉
束の間の逢見する、　我が戀に似たるかも露の玉
果敢なきかな我戀は、　風もやあらん雲もあらん
さもあれど我戀は　美しき戀神の愛。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

短篇小説

廣津柳浪先生選評

○乘合舟

三河　靜千代子

船が三ケ日の町を發したのは朝の九時過である。初冬の晷ぼか〳〵と、布子に袷羽織でも汗がにじむ。舟に乘合せたのは私と、五十になるかならぬの婦人と、七十前後の老翁と、それと同伴にゐる十八九の醜からぬ娘とである。

舳に立つて櫓を押す舟夫は、血氣盛りの二十恰好、小聲で舟唄を唄ひながら、何處か間のぬけた面相を、例の娘の方へ向ける。娘は夫れを避けるでもなければ物想はしげに舷に靠れた隨、折々行手の方を見遣つては幽な吐息を洩らす。

顧れば三ケ日の町は弓形をして横はり、汀に沿つた庫の白堊が、折からの日に輝いて、行手の崎には薄りと靄が被つてゐる。

私は今朝の未明に、氣賀なる婚家を無斷に出て來たので、之れから故郷の豐橋へ歸らうとするのである。

乘合へる三人、皆思ひ〳〵の事を考へてゐる風情、御互に敵同士の樣に暫時は會話もなかつたが、軈て爺樣が温和しやかに、

『何方へお行てがす？』と婦人に訊く、婦人は笑ましげに『豐橋迄行りますので。』

豐橋！と聽くと妙に其の人が可懷しくなり、挨拶をかけて見たい樣な氣がしたが、世間馴れぬ私には、夫れさへ口へだせぬのである。

黑の無紋の羽織に、小紋の極く地味な布子を着て、色褪せて褐色掛つた襟卷をしてゐる。見た處、さまで富豪める人とも思へぬけれど、瞳の優しい、鼻筋の通つた、唇のしほらしいあたり、春や昔の俤を偲ばせて、可懷しさは一入。

婦人は娘の方を見遣りながら

「お息女てムいますか。」
「え……」と忸怩する。娘は氣遣はしげに私の方を見る、互の目が礑と逢ふと狼狽て俯向いて了つた。
「おたのしみてすよ。」
「左樣だと佳いんてがすだが、何から何迄世話がやけますて。」
「そう被仰るてすが、子供の無のも淋しいものてすよ」
「貴女御一人も無えてがすかな。」
「えゝ……。」
「持つて苦勞するよりやあ持たぬもようがす。」
「だけど、手格が無いと第一働く氣になれませんから



ねェヽヽヽヽ。」
「そらや、一人二人は助にもなりやしよが、三人四人……否、女の子を持ちやすと……。」言ひさして一寸娘の方を見て、
「運よく縁があればよし、縁がねえと、はァ親苦勞でがすだ。」
「そらやあ左樣てすわね。」と深沈いふ。娘は面恥ゆげに首垂れてゐる。美くしい眉根に溢れた寂しい影、今の老翁の言振から觀察へると、私と同じ境遇の、嫁入いだ家を逃げて來て、故鄕へ歸つたのを、老たる父や、兄弟の、理を分けた訓戒に攻められて、すゝまぬながら、彼樣して餘

樣に送られて、再び婚家へ送らるゝのだらうと思ふと、他人事とは思はれず、悧げな姿が殊更哀れに、私が娘を瞶めると、爺樣も意味ありげに私を眄めてゐる。瑠璃色に澄んだ空には、白い雲が一片漂ふて、宛然の秋日和、靜な湖は風も吹かず波の音もない。午近い日影を正面に浴びて、櫓拍子も眠たげである。

「……自分の恥を話す樣ですが、私なども恁う見えて之で隨分若い時代には我儘者でしたから、兩親が念入れに之れならばと定めて呉れた家にもよう居らずそれかと言つて、自身と卒先んで嫁いだ家でさへ、一緒に住居んで見ると、左程嬉れしくも樂しくもなく、舅姑の氣嫌も取らねばならず、小姑の心も慰めねばならず、夫れ等の面倒がはし無くも、緣の亂れの緒となつて、初な心の、遂には其所にも居堪らず、暇を取つて戻ると云ふ始末、彼方此方してゐる間に、年は段々老けて來る、嫖致は落ちる、嫖致が落ちれば四邊からの結婚申込が疎くなる、遂には勢此方から申込むと云ふ樣な理由て、揚句の果が這麼境遇の家へ嫁入つて、夫れて滿足めにやならない樣になつて了つたんですが實んに女は娘の間の辛抱が大切てすよ、私などても最う少し、那の時分に忍耐があつたらば這麼貧困はせなかつたらうにと、折々は愚痴らしい事を言ふのてムいますが、ホヽヽヽもう遲いんですから」と言つて、婦人は淋しく微笑んだ。

老翁は無言の儘頷づく、娘も今は何か考へてゐる。私は故鄕の兩親から、引いて自らの前途を思ひ浮べて今迄の淺はかな考へが、此の婦人の話しの面前に、何とは言へぬ恥かしさを覺えたのである。

磨いだ樣な湖面を、櫓拍子輕く、船は無言の感慨を乘せて、滯りなく辷るのである。

情景ふたつながら到れり盡せりで短篇にこれだけ複雜した趣向を捉え得たのは、構想の上に於ても成功して居る、文章もやりつぱなしてなく、謹嚴に書いてある、只婦人の述懷が説明じみて、船中の乘合話としては稍作り過ぎて眞に遠ざかるかと思はれる位のことが疵と云はゞ疵であらう、全體には善く出來た作。（選者評）

○燒跡

岩代須賀川町　服部水仙子

實に魔の手、鬼女の舌。空を燒かんず焔は、宵からの北風に煽られ〳〵て、家を攀ぢ、地に這ひ、逞しき勢に火の手を延せば、破竹の響頻りなるに續いて起る一大爆發の音。見る間に一棟は落ちてしまつた。

屋並揃ふた中頃の家の、裏手から揚つた怪しの煙を見

出してから未だ半時間とは立たないのである。西側ずらりと舐め盡して猶、足れりとせぬ烈火は、向ふ側に一際高き老舗の屋根に飛火して、其、店に、庫に、堆き幾千種の薬が焼ける怪しの臭氣。

亂打の半鐘もの凄く、彼方此方の叫喚！悲鳴！風は益々猛り狂へば、焔は彌々勢を得て、此所を必死の消組が目覺しき消防も、今は、鍋から溢るゝ水の爐の火に落つるのに價せぬ。

「ポンプ！ポンプ！酒に火がついたッ」氣魂しき叫びは何處からともなく起つた。酒屋を襲ふた火は、早くも幾桶の酒を焔と化して、其焔を八方に、一面眞紅の大手を擴げさせたのである。

此火を裏手より浴びた一續の長屋は、見る〳〵火塊に包まれてしまつた。

「おつ母さん!!」突然血ばしりたる一聲は朦々たる天地を劈くよと見る間に、道に横れる焼板を飛び越え、火花の間をくゞつて、渦巻く黒烟の間に躍り込むだ者がある。

「おつ母さん!!!」狂し氣の又一聲。

屋根を舐めたる火は今、軒に迫つた。

「おつ母さん！」——

バラ〳〵と頽れ落ちた屋根の響に、幽かに細き又一聲

* * * * * *

全焼三十九戸、半焼十五戸の調査を終へたる頃は、纔るが如き大路の提灯、一つ消え、二つ滅じ、やう〳〵に見舞の人足稀に、斗樽を下げて走る小僧、焚飯擔つて急ぐ若者の、ねぢり鉢巻ほの白く、早鐘の未だ耳底に殘る午前二時！

昨夜の猛風は何處に潜んだろう？あまりに著しい寂寞てはあるまいか。

黒裸にされた立木の處々〳〵。彼方に燻る黒き烟、此方に崩るゝ焼瓦、見渡す限り一面の焼野は、道か、屋敷か狼藉たる木材の黒々〳〵と。

佩劍の音がチャーン〳〵黒影頻りに動くは物調ぶる警官である。一人は手帖に何やら認むれば、三人は高く馬乗提灯を差上げて居る。其つかれた如な灯影に現し出された此場の光景を見よ。戸板の上に横れる黒きものは何！猛火のうちに烟を飲んで、母を呼び、母を尋ねて狂氣の如く、つひに其狂氣の境より覺むるを得ぬ宮川眞一の母と云ふことは、つひ今し方分明つたところである。衣は焼かれ、肉は爛れて、目も當てられぬ母の死骸を、彼は何と見るてあろうか、と警官は皆一

樣に眞一の顏を見戍つた。
「何だこれあ、犬か？」「ハ……」
一聲高く笑つて、さて昨夜の負傷に、血の滴る右腕を訝し氣に眺めて居る。四人が四人、皆息を飮んだ。
「火事だ！？」「何處だつ」
血走りたる眸に邊見廻して、やがて矢庭に驅け出した
「おつ母さん！」「おつ母さん!!おつ母さん!!!」
熱灰の間を、續け樣に呼はりつゝ驅け廻つて居る。
あゝ、應との答はいつ彼の耳に響くてあろう？
今こそ此麼職工てこそあれ、私だつて男一匹、今に必ず宮川の家を再興して見せる。と常に半身不隨の母を慰めて居た眞一は、かくて此まゝ、憐れな者よとのみて終つてしまふてあろうか。
星の數々、雲に入つて、白みかゝつた空に、光弱き夜明の明星一つ。寂しき、寂しき曉は來た。

別に悲情を歐つたものてはないが、火事場の光景、睹るが如く描かれ、慘憺たる親と子の境界を描いて、人をして其場の有樣を想像させる、これ作者が獨得の筆の力て、文章の技は益す熟して來るやうだ。
（選者評）

四等

〇映れる花

愛媛縣溫泉郡
北吉井村　　水口菊子

重信の流れに今は日も入りがての、晒映す雲を背にして、鹿毛の若駒に梅水仙の菰包み、父へ土産の心てあろう、少さき樽さへ添へてあり、やさしう細の手綱をとつて、小褄は帶に兩端を、紅き蹴出しの脛を包むで白き素足に藁草履、痛々しうも小砂利づたひ、少女は小股に刻みながら、渡場近く來るのてあつた。
暮の渡りに人もあらず、流るゝ水に臨んて、草葺の小屋、風にも倒れず、戶口に小さく雌松の枝、春は此處にも來たことか、と乙女は暫時駒をとめた。
『彌平さん、氣の毒だけんど、新村のお光だに、船え出してくれさつせえな』
可愛き口から漏れた一言、聞えてか、彌平爺小屋からのそ〳〵咬へ煙管、皺の額に鉢卷して、乙女を見ると腰を伸した。
『やア、お光坊か、今日は何處まで行つたゞな、元日からさう拵いては、おッつけ土藏が立たうかへ、鹿毛も能く働くの、今に運が向いて來るわ！』
小屋からする水馴棹、押取つてとんと一つ、砂に士突きの威勢がいゝ。
『さあ來なせえ、新造て渡してやるべえ』
元日に下せとばかり、新らしき船一隻、木の香はふん

Digitized by Google　　Original from HARVARD UNIVERSITY

と鼻を打つ。

「どう、〳〵、〳〵、手綱あ押へたら胴の間だ、新造船へおぬしが乗つたら、水際三尺すつこんだわ」

高く笑つて杭の先き、諸手でぐつと突張て棹はざぶりと鏡を破つた、ゆつたりと出る胴の間にお光は駒を抑へて立つ。

「喃、お光坊、おぬしもまあ長い間苦勞したゞが、今年から運が向いて、めつきり様子が變つたゞな」

老爺は、するりと皷を、お光は入日に瞻つた眼を、駒の背越に老爺へ向けた。

「去年の元日は眞に心細くつて、女一人の正月でのう誰一人訪ねてくれる人はなし、餅一つも燒かなかつたが、今年や父さんも東京から歸つて來る兄さんも病院出られて賑やかだつて、夜なんざ、それはそれは、根太が拔けるかと思ふ位さ」

「さうだらう！吉の野郎は能くおぬしの家へ行くさうだが、食ひ醉つて世話あ燒すべえ、何しろ目出度い正月だ、お光坊の正月が來たやうなものだぞや」

お光は莞爾片頰に笑て、

自炊（藏外）　隣中　大立目向畢



「兄さんの病氣も去年の春はもう危いと云ふ事だつたし、父さんの要事もどうなる事か解らないし、眞に心細かつたのが急に安心した故だか、何だか氣拔えしたやうさ」

「えゝわ」

と棹を左へ返して老爺は昵と乙女を見た。

「えゝわ、氣拔けえする程嬉しい正月だらさ、これでおぬしが嫁きやあ、云ふ事なしの坊主頭だ」

「わし等のやうなもの貰手はねえだから、それだけは安心さねえ」

「何が安心だか、吉と云ふ立派な男が、疾からおぬしを望むて居るわさ、溝の口にまた一夫婦殖るつてな彼方に噂があるだよ」

雲に消えたか晒の色、乙女は頰に媚と漲らし鬟のほつれを風に吹かせて、渡る彼方の岸近く、迎いに立つた吉の姿

「えゝ見るがいゝ、婿様あお迎にござらつせえた」

駒嬉しいか嘶き高く、荷鞍の梅に春は滿ちて流るゝ水

に映るや花の、こゝにも春は立つのてあつた。

ひやうきんな船頭、氣輕な娘、新造の小舟、田舎の渡しなどをあしらうて、新年の別天地を描く。獨り人物が洒落な許りでなく、筆路までお輕快なもので、思はず一氣に讀ませる、上乘の作。（選者評）

（等五）

○良き家庭

攝津高槻町　富美子

山寺の入相の鐘の音が村里に響き渡つて日はやう〳〵西の山に近く、彼方此方の山里に早や夕炊の煙り立ち上る淋しい夕暮てあつた、古曾部と言ふ村に連なつて彼の伊勢物語に名高い芥川と言ふ小川がある、其川に沿ふて上り行く二人の男女、男子の年は二十四五てあろう、丈はちんまりとしたそして何處やら氣高く見へる、女は顔の圓い方て髮は新式の束髮てあるが少し田舎めいてる、して其二人はどうしても夫婦の樣てある。短い冬の日は最早暮れ果てゝ方りは淋みしく二人は尙も進みて堤の枯芝生に座を占めた。男子はシガーを吸ひながら「お光、お前をこんな淋しい處へ連れて來たのは外ぢやないが内に居ては言へない、て暫くしんぼうしてをくれ、ねッ」と男は言ふのてある、お光はたゞ「はい」と言つたきり、男は亦言葉を續けて「お光、それてねお前も私の家へ來てから早や五ヶ月にもなるが常日見てもお前の樣子が内の老父や老母に仕へるのがしんきな樣に思はれるが私しはそれが一番つらいのだ、ねッ、私しがお光に氣を付けると老母が亦腹立る、老母ばかりに氣を付けるとお前が下女奉公の樣だと言つて腹立る一躰如何すれば良のだ、ねッそれは何處の家ても間々ある事だ、そこて世間てはそれが爲折角善い家庭を結ばうとして居る愛の鎖が切れてしまう、して其末は分別する外はない、てお前は決してそんな事は無だろうが、若し有とすれば此家も亦亡びる、てお前もこうやつて姑のそばに居ればずいぶん厭だろう又悲しい事もあろう、それは私しも同情する、然しねお光、あんな老父や老母は今から十年も二十年も長生出來る物てない、だからお前も厭だろうが暫くしんぼうしてをくれ、私は其が一番の頼みだ」と男子は目に涙を宿しつゝしみ〳〵と物語るのてあつた、お光も亦諸共に涙を雨雫と流しながら「はい、それは妾も御家へまゐる以前父上や母上からも言はれて存じて居ります、てすからそんな心配なんかは決して……」「そうか、それじやお前がそう言つてくれりや私も安心する……」と言つて男は亦シーガーを吸ふのてある。

冬の夜はだん〳〵と更け渡つて伊勢寺山下ろしの木枯

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

は川原堤の老木若木の松の梢を吹き鳴らして居る。男子は亦「お光もう歸ろうか、餘り遲くなると寒くもあるし内が亦心配するから」と言つて二人は家路をさして歸り行くのであつた。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

其後二ヶ月に餘らずして彼の老母は或病ひの爲に此世を去つて永き旅路に行つた、其後は老父と共に三人て其若い男と言ふのは村て名高い奥村光徳と言ふので今は大阪の某郵便局に奉職して居る。彼の老母が死んでから家内が増々平和に成て、今ては村中て一番と言はれる位の良き家庭を結んて居るそうな。

文章は上手てない、書きこなし得ない處があつて、讀むにも骨が折れるけれど、純朴無垢、田舍の家庭にはありさうな眞實を語つてゐる、之れ此小説が書きぶりは下手てあつても、價値のある處てある（選者評）

秀　逸

○初産聲　　石川縣　今永君江

キッス（賞外）　　失名氏



今日こそ三十九年の日記の書納てある。雨降の夕、月澄む夜半に獨り孤燈の下に記いて來た。懐かしの日記帖も今日て頁の終てある。今日を限りの名殘として、書棚に仕末せねばならぬかと思ふと、私は、つい哀しうなつて、寂しい／＼心が胸の底から湧立つて來るのてある。

雪は根氣よく終日降て、短い今日の日もとんぼりと暮れた。あゝこれが今年の日の納めかと思ふと、過去一年の來方が走馬燈のよーに、廻り廻つて、胸は千々に亂れ、何とも形容のできない淋しみが、犇と身に逼てきて、底深い哀みが身を襲つてくるのてある。外には吹雪凄まじく身に泌む程唸つてゐる。時も時。日も日だのに、義姉ちやんが急に産氣づいて來たといふので、一家大騷になつた。そこて私もかれこれと世話をしてゐる中にも「なんなら明日の元旦、即ち四十年の新空氣を吸つて生れてくればよいが」と心ひそかに祈つてゐた。其中に産婆がきて診察して、「まだ少しお間が御座います」との言て、私は少なからぬ喜びを浮べた。

折しもあれ幽かに「ごーん」と餘韻を長う引いて、除夜の鐘がなり響いた。あーなんと悲しい音だろー。と思ふと續いて又遠近になり響いた。なんと寂しい音だろー。腸も抉ぐられるよーだ。それでどうしても、じつとして居れなくなつたので、弟の靜坊をつれて、私の部屋へ歸つて炬燵に暖たまつてゐた。

雪はいよ〳〵激しくなる。鐘もいよ〳〵寂しくなる。ともすると凩の音、吹雪の音のために、鐘も絶入ばかり寂しい。今まで、私に抱かれて鐘の音を數へてゐた靜坊は、いつのまにか眠つてしまつた。

＊　＊　＊　＊　＊

美くしい夢に、眠をさました。枕時計は三時半。雪は晴れたが外はひつそりしてゐる。義姉ちやんの部屋はと耳をすませば、お産もまだだろーいと靜である。刹那。勇ましく、一番鷄＝初鷄＝がないた。而も私の日頃育てゝゐる鷄である。續いて二三ヶ所にも鳴聲が起つた。

もう夜の明けるのに間がない。初日の出るのも間がないと、胸躍りつつ、床を離れた。そして井戸端へいつて身を清めまして、まだほの暗い東天を拜んで、新年を祝ひましてから、急に義姉の部屋へ行きましたとき産婆の聲で、「もうお間がありません」嬉んで色々立廻つてゐる中、夜はほの〴〵と明けました。そして美くしい初日の影が、「パッー」と障子に映つた其瞬時。初産聲美くしく「ホギアー」と名のつて、而かも玉のよーな女の子。

折も折。一輪二輪咲きそめた、庭の梅が枝に、鶯の初音美くしく、「ホーホケキョ」續いて「ケーケヨケヨ」。あー何と美くしい聲だろー。

飛立つ思ひに窓押あけて、見ますと、あー何と美くしい初日だろー。

いざ私は、若水を硯にこぼして、初日記の初頁に、花花として、慶事を書かん哉。

初産祭を元日に聞く、目出度い事に相違ない、作者は此目出度い事を叙する反應の爲に、前半には哀しい半を描いた、併し强て哀しがらずともよいのであつた、全体には氣の勝つた書きぶり、讀むにも張合がある（選者評）

○淋しき笑　　播磨　古月女

上

「まあ何故てす、あなたの樣な明晰頭を其儘隱すのてすか、級中でもあなたが一番好く出來るんじやありませんか、それに皆女學校や師範へ入學ると云つて勉强

して居るのにあなたは最早廢學るのですか」筒袖姿で立て居る日頃最も成績の良い、そして一番可愛がつて居る生徒に斯云つたのは當附屬の女教師である。首を垂れて居た正子は眼を上げ「先生私もつと勉強したいのは山々なんですけども、どうも内の都合が惡くて……」語尾が掠れてホロリとなつた。先生は「そりやあ御兩親がないのは兼々聞いて居ますが、でも兄様も姉様もお在りなさるでせう、それからお祖母様も、だから其様都合が惡かあ無いじやありませんか、ですから爲丈なら強くお頼みして入校てお貰ひなさいね、學校の事など先生が盡力して上げますから」と、先生は可愛い教へ子の爲を思つて熱心に勸めて下さる。

正子は日頃から先生の親切が遙かに他の友よりも深いのを知つて居るし、今又茲で斯様に云ふて下さるものを……嗚自分とても、もつと勉強したい心はどうして皆さんに劣らうぞ、況して此親切な先生の御志に對しても此儘にするのは如何にも……と思つたが思ひ定めて、「先生實際に色色と有難ふ御座いますけども、あの姉様は私の實の姉

たそがれ（賞外）福岡縣 古賀つれ



て最早直にお嫁に行かれるのですて、兄様も今冬入營する事になりましたの、ですから後は祖母様一人て、心細いと云はれますから、私てのお祖母様一人家に殘して行く氣になりません。」關口正子は判然と、決心の顏色を見せて。

先生はその心根の優しいのに愈可愛く愛情潮の如く湧き、不覺正子の手を堅く握りしめた儘暫時……後の唱歌室にはやがて卒業する生徒の歌ふ師の恩の唱歌微に…………文讀むわざを――と。正子は覺へず涙を落した。

下

花咲き鳥謡ふ彌生の一日、友に羨まれて正子は目出度附屬を卒へた。越えて一月、其姉は良縁あつて遠くへ嫁いだ。

此縁談に就いても妹思ひの姉は、自分が嫁つたならば妹は學校へ入れないから、せめてもう三四年内に居て妹の希望を遂して遣らふと思つたが姉思ひの正子は、自分の爲に徒らに花の盛りを過すは如何にも氣の毒と人知れず悟つたので、遂に自分の目的を犠牲にして、悲し嬉しの思ひを秘め、強いて

笑顔で姉を見送つたのである。

淋しき笑も姉おもひの正子の事であるから、美しき笑に變つたであらう、女子と學問と云ふ事には必ず伴ふのは此に書かれたやうな事柄でなほ此種の趣向はいくらもあるであらう（選者評）

○三年間

小石川　奈美木翠子

左は見渡す限り刈り盡された儘の寂しい田の面、一方は漸く青い若芽を短く出した麥畑、續いて種々の菜の畑、それを劃ッた茶畑を越して點々〳〵藁屋が隱見してゐる。此の田と畑との狹い畦道を辿ると、其所には淙々〳〵たる些やかな流があッて朽ちかゝッた土橋が昔ながらに架ッてゐる。

今其所に表はれた軍服姿の壯者は上等兵横山英一である。思へば今から三年前、野も山も淋しく暮れ行く丁度今頃であッた。父を亡くして未だ間もあらず一家悲嘆の涙んはく閑もなく英一は老いたる母と若い妹とを殘して蒼然と空寒き北海道の營舍に銃を捧くる身となッたのである。

て、その三年の義務も恙なく終へて目出度今日は懸しい懷しい夢にも忘れ難い故郷の地を踏む事となッて今再び此の流に對してそゞろに想ひを廻らすのである。

オヽ家もあの森の蔭ぞ、アヽ實に永い三年だッた。村の態も此の橋も矢張昔の通りだけれど、家の容子は甚麼にか變ッてゐるだらう、始終無事だと計り謂ッてゐたが……あの悲しい折柄の入營なんだもの、淋しいのは無理もない。お母さん！お鶴（妹）！もう安心して下さい。英一は今歸りました。が併し突然に歸ッたら喫驚するだらうな、知らせなかッたんだから。

今昔の想に耽りつゝ足は何時か吾家の前に運ばれたのである。見れば結ひ廻らした垣の疎らに骨ばかり殘ッて庭の中は犬の蹂躪に委せて荒れ果てた態は見るから悼はしく何處の鷄であらう頻りに虫を啄いてゐる。ッと内に入らうとした英一は聞き馴れぬ聲が漏れるので暫時躊躇て聽耳をたてると、懷しい妹の聲で

「什麼ぞもう少し待ッて下さいな、四五日ですから」

「それに三四日經てば伜も歸りますし」是れは確かに母の聲

「イヽヤもう三四日は耳に疣だ。一躰什麼言ふ約束で借りたのだかヨモヤ忘れたんぢやアあるまいな、見た所未だ其麼に老耄したようでもないが」

「お約束は好く存じてをりますけれど御覽の通り私も此三月計りと云ふものは續いて臥ッてをりましたし、此娘一人で御座い升んで」

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

「オイ〳〵冗談ぢやない、今日其麼言譯を聽きに態々來たんぢやないよ、其麼事は什麼でも好いんだ、今日は是非所置を附けて貰ふ」

「でも御座いましようが何卒もう二三日の所を」

「エヽ五月蠅!!」

英一今は堪へ切れず嚴めしい軍服姿は驚く三人の間に跳り込んで「ヤイ！女計りだと思つて好い加減にしろ、サア是れを持ツてサッサと歸れ！」ハッしと計り投げ付けた札の一束。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「それではもう藥を廢めるように癒つたんですか」

「イヽヘ、藥は始ッから飲みません、お鶴にも叱られたけれど。それに持病の病氣だしするから」

「濟みませんお母さん！藥も召上らないで永い間紗なからぬ月々の御送金……」男の眼に涙さへ漂へて、慈母の有難さはいとゞ骨身にこたへるのである。

「それも皆お鶴の働きです」と母は語を繼いだ。

「お鶴、お前にも甚い苦勞をさしたッけな、併しもう安心するがいゝ」

「イヽヘ私が行屆かないもんですからお母さんに御心配計り掛けて」暫く三人の語が斷へたが、母は訝しそうに英一を見上げて「それにお前、今のあの大層なお金は……」

「ア、あれですか、あれは私が三年間の小遣です。細い腕から絞り出した貴い黄金、如何して空に費へませう、私は煙草も廢めました」

母と妹が見交す顏と顏、四個の眼には時ならぬ露が光つて無言の裡に言ひ知れぬ感を催したのである。

一陣颯ッと落葉を捲いてけたゝましく鷄が啼くと垣根の外へ犬の聲が遠ざかつた。

難を言へば金貸と故郷兵と一しよになつて札を投つけるなどは少し芝居じみて不自然の嫌ひもあるが、親子の情愛はしつくりと契合して美しい感情を誘ふ點は、此小説の手柄とする處であらう(選者評)

流行の色合

むらさき生

色合は段々と澁くなる傾きがあります。といふのは、一時流行した栗梅、鍋島柿、黒茶などの靈苦しい色は已に廢り、葡萄、小豆なども今日こそ數が多いが、已に藍氣の勝つたものに移らんとするのです。近頃急速の勢を以て勃興し來れる勝色、納戸色、花色などは、今日迄流行し來つた色に對しては、輕い色である、所謂ライトカラーですな。すべての色は段々と黝くなり澁くなるのは目下の形勢です、藍氣は茶味に對して已に輕いといつてもよいでせう。加ふるに藍氣の中でも段々と薄いものが持囃されるのであります。例へば葡萄、小豆などより納戸勝色に變りかゝる場合に於ても過渡時代の色合として濃納戸、錆勝色が用ゐられた事があります。納戸、勝色などの中でも、極く澁い極めて重い色が第一に用ゐられ、それから其澁色、即ち納戸、勝色、又は花色などいふ順序になつて來たのである。かくの如く、紫紺ー葡萄ー濃納戸ー花色ー納戸などいふ順序になつて居るを見れば、記者がいふ如き、色合は段々と澁くなるといふ事が、事實の上に證據立てゝ居るのではありませんか。《時好》

和歌

佐々木信綱先生選評

（第一）
紫の幔幕うちて姫三人
　舞ひますさまに露草咲きぬ
美濃國關町 金屋町　下川まさ子

【評】うつくしき趣を、よくとらへ得られたり。

（第二）
花もなき冬枯野道一人ゆかば
　亡き母上に逢はんかと思ふ
飛騨古川町四丁目 長谷川ゆの方　亮子

【評】あはれ深し。結句原作あはんとぞおもふ。たゞ一字なれど。

（第三）
扉の萩に銀糸小雨のなまめきを
　ふと君もやと燭かざしけり
熊本縣球磨郡 深田村　桑原露子

【評】艶なるうた。

秀逸

○川添の月美しき春の村
白韻子

今宵たが家に詩人生る
名古屋　原田琴子

○春の日をうす化粧してつゞみうつ
　人うつくしき白梅の窓
鹿児島　竹中ため子

○かなでます琴の調に我れ泣きぬ
　我れに泣くべくひきます琴か
讃岐　兼山光子

○雲のかげ痩せしわが影柳かげ
　いづれ悲しき秋のさゝ川
韓國　鏡白萩子

○顔書きて玉蜀黍の毛を添へて
　瓢おかしと君とわらひぬ
高濱町　籾上花涯子

○刀きたふ小鍛冶が家の垣のそと
　槌の音さえて櫻こぼるゝ
高濱町　酒葉貞子

○新らしき希望充ち滿つ初日影
　さすや小筑波靈雲こむる
徳島市　佐藤ふみ子

○妹と胡蝶うめたる萩が根の
　卒塔婆にそゝぐ黄昏の雨

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○菜の花に四方をかこめる蠶小屋の
翁甕打つ春日和り哉
美濃　傍島芳翠

○あしよわき妹つれてやまぢ三里
いつとせぶりにうばがさととふ
備中　大山梅子

○嵯峨の宿に『卯の花日記』記き終へて
夢追ふ窓に春雨ぞふる
伊豆　上原露葉子

○そとよれば月夜草花小柴垣
端居の君が團扇ましろき
築來町　芳子

○庭に散る紅葉集めて歌書きて
秋を送らん友もなき我
神奈川　小島政子

○夕暮を歌の思ひのうなだれに
小楢落しぬ白萩の庭
柏崎町　中村直枝子

○幾たびか思ひなやみて佇みし
湖の蘆影鶺鴒のなく
神戸市　今田櫻町

○高殿に鼓の音の高冴えて
梅の花ちる春の夕月
本郷區　齋藤茂子

○幾年か都の空に忍びてし
我が故郷の春は今來ぬ
下野　安生ひさ子

○紅南の靈閑にして詩を思ふ
梅の下なる人美しき
越後　五十嵐みつ

○一人して母待つ宵や春寒の
風をりをりに梅薫りくる
紀伊　文子

○雛あれと其主あらぬ此春を
淋しく咲きぬ姫桃の花
上毛　眞砂壽子

○床にかけし緒琴にちりはつもるとも
君なき秋をいかでかなでん
上毛　五十貝すゑ子

○亡き母の夢よりさめて旅館
芭蕉に寒き夜半の雨きく
岩代　岸野菊子

○鶯を聽きつゝ嵯峨の御寺に
三重縣　森田初子

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

よき人おはす白襖かな

東京　船津康子

○いさゝ川水のさゝやき微かにて
まひる靜き梅が香ながる

○京都　千どり

なき母をしたひてやまぬおとうとを
すかしつゝぬる秋の夜の月

○常陸　西野春江

鳥めぐる白帆のかげのほの見えて海原千里旭さしのぼる

○茨城　秋山隆子

いつはりの甘き言葉と思へども胸はみだれてたゞなつかしき

○神奈川　さくら子

家毎にかざすもうれし姫小松千代かはらじと年の始めに

○仙臺　やす子

御園生の梅みな笑ふこのあした玉の若く子の生れ出ましぬ

○兵庫縣　靜子

亡き姉のめで玉ひにし梅咲きぬいでや手向けん御奥津城の前

○伊豫　鴻上胤子

新らしき年のはじめに友訪へば我待ち顔に梅も咲きけり

○埼玉縣　秀子

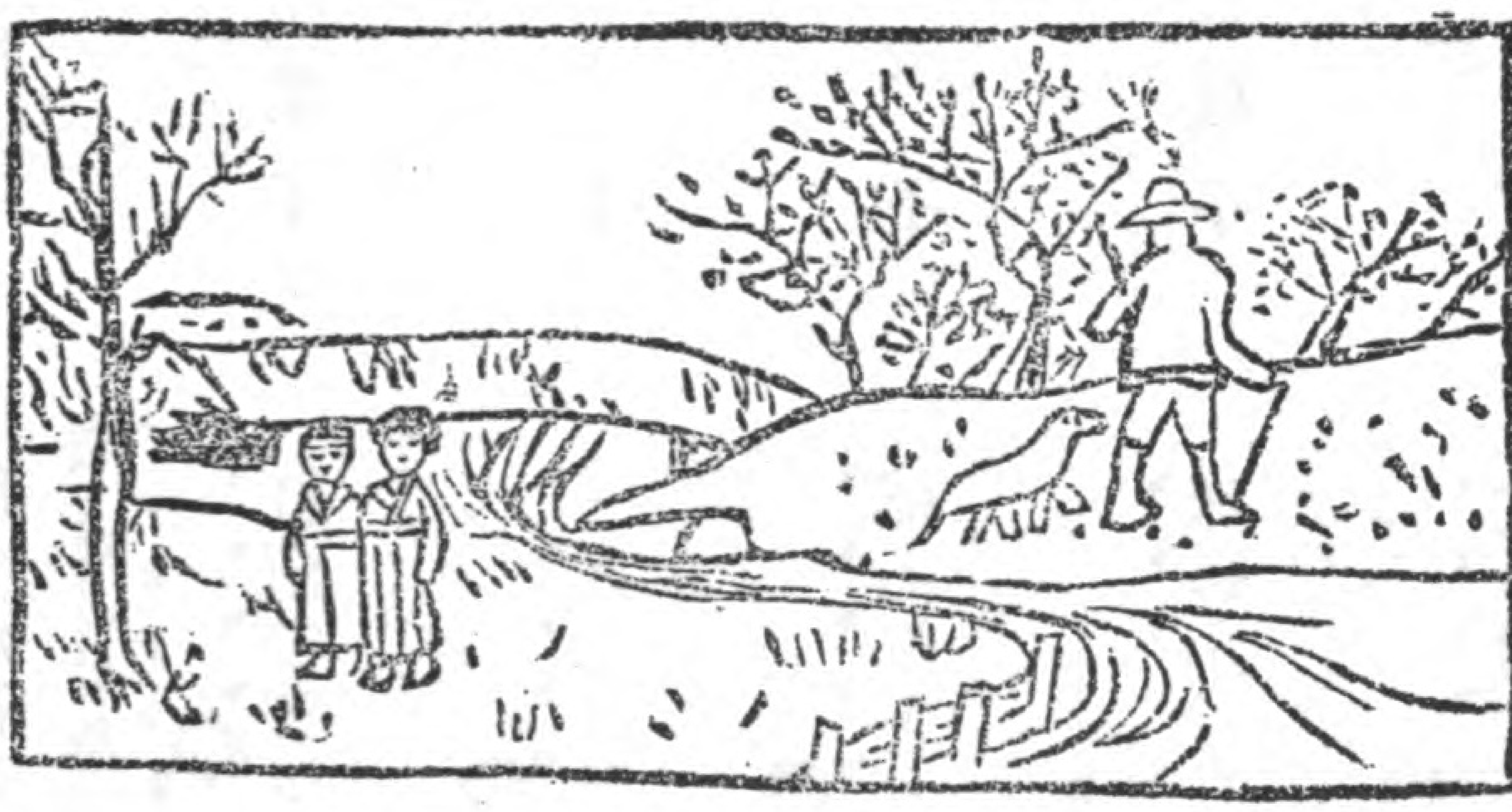
谷川のしがらみとめぬ水の如をしみもあへずすぐる年かな

○近江　花泉女史

南の洋紅の小貝やぬけいでしおぼろにかすむ春の夜の星

神戸　谷山輝

田舍の景色（賞外）　尼の道　小田富子



今日といへばいつくの人も祝ふなりわが大御代の年のはじめは

○富山　白梅

君まさぬ淋しき夕べ窓押せば清き流れに月ぞながるゝ

○仙臺市　竹むら

こがらしは冬の魔神の高ぶらぎ萬物みな飾ぢて色うしなひぬ

○錢函村　靜哉女史

秋風の寂しさいとゞ身にしみて落る葉音に秋の虫鳴く

○大阪　村瀬篤子

病む母を欄にたすけて園を見る紅梅ゑみて雪白き朝

○岩代　岸野常子

江を渡る雁のゆくへに仰ぎ見ぬ四とせ變らぬ故郷の山

○常陸　關根露草

荒れ果てし古山寺の跡訪へば秋風寒く梟のなく

○小田原　清水咲子

里つゞき梅さく園に來て見ればねぐら尋ぬる鶯の聲

○常陸　關根靜枝

さよ更けてねざめさびしき旅の舍に窓もる月を獨り見しかな

○上毛　田中早苗

白梅は今も散りぬ幼き日かざせと言ひし人のおもかげ

○備後　月光冬子

春立ちて霞たな引く狭間よりまばらにのこる雪も見えけり

○備後　ゆき惠

若き戀を笛竹にこめてふき吹かむあつき血しほの冷え終るまで

○伊勢國　中村てつ子

花とみて身の行末を語りける我が友あらずひとり月見る

○上毛　磯雅井菫子

きさらぎの雪降る宵を汽車のうちに法の道とく若き僧かな

○　上毛　五十貝露惠子
涙にて別れし磯にひとり立ちて今宵其夜の浪の音きく
○　上毛　蓮花女史
梅匂ふ風まださむき春の夜を欄に更けたる鐘の音きく
○　上毛　和田季子
今更に人の心の冷たさを知らでたのみし我身うらめし
○　富里村　綿貫ふく子
いざやとて絵のごとく間に白帆一つはや島影にかくれけるかな
○　下總　渡邊のぶ子
さらぬだに思出多き此夕庭の畑の桐一葉散る
○　長門　原田登子
たらちねの年々による年波をせきとゝむへきしからみもかな
○　千葉　大谷ちか子
賤が家の向ふが岡のふかみどり登る初日に色まさりけり
○　成田　波賤女天波
繪葉書に春の諧うつす丸窓の人美くしう紅梅のちる
○　肥前　深見靜枝
わけのぼる蹊かすみて此夕べ春雨くらし木曾の山越
○　西武田　村山美津江
冬の夜や海士の漁火數見えて濱邊は寒く夜は更けにけり
○　宮城縣　二階堂貞子
朝早く馬をひき行く畷道尾花さら／＼秋風のふく
○　岡山縣　秋吟女史
さらでだに哀しさまさる此夕窓にさびしく落葉音する
○　福岡　坂田萩子
草刈りて歸る少女の宿ならん藁屋の軒に夕煙たつ
○　下總　野々宮國子
もやはれて白帆にうつる影法師長う冷う秋の日のぼる
○　下總　長谷しん子
朝風や黄菊のうれにそよ／＼と眞玉白露落してぞすぐ
○　下總　三橋派子

ゐろり邊に老人何を語るらむ小雨そぼふる長き夜寒むを
○　佐世保　田中よふ子
秋姫の綴うて瓔玉落て野に咲くらんか白萩の花
○　伊豆　上原ゆき子
なつかしき故郷を思ふ旅の空夕日に迷ふちぎれ雲飛
○　横濱市　吉川清子
春姫が御遊の輿か野も山も霞のとばり鶯のうた
○　愛知縣　渡邊馨子
河豚汁に十年の昔語りけり木枯寒き冬の夕ぐれ
○　廣島縣　宮島浮葉
埋火に埋もれてさへ寒き夜を哀れ誰が子か溫飩賣るなり
○　三河　濱馨子
力なき秋の夕日に照らされて柩過ぎ行く森の下道
○　愛知　うつらば女史
ほがら／＼よきね啼かせてとひよりし小鳥可愛ゆき朝晴れの窓
○　廣島　靜萩會
妹逝きて寂しき秋な姿一人琴ひく窓に山茶花の散る
○　かけい
母の墓に詣てかへる此夕路に亂るゝ白萩の花
○　安藝　箕岡孝子
病む影を床の鏡にうつし見れば涙の山茶花またもこぼるゝ
○　鳥取市　上山千直子
鳥も來ず花も咲れどしかすがに春の和風ふくよ我が宿
○　大分縣　後藤たか子
猿の遠吠絶えし山の端に殘るもさむき有明の月
○　大分縣　後藤さえ子
人魂のわれて消えたる山門の太きいてふに梟のなく
○　鳥取縣　門脇まさ子
朝霧やあけしがまゝの柴の扉に繞き湖見ゆる山上のいへ
○　筑後　梧桐露子
白露に歌書いつけて思ふことを天なる神に告げてぞみたき

我れはたゞ野中に咲ける一重菊香を賤りの君は緑牡丹

○　柳河　名越草

朧月夜背戸の小川に立ち出てゝ手水使へば鶺鴒の飛ぶ

○　山口縣　周防あやめ

冬枯れの庭の落葉に霜さへて梢隠どる月のさむけき

○　埼玉縣　野崎久子

霜害なく麥畑のあたり長閑にて若き夫婦の笑みて語れる

○　越後　五十嵐笑波

君が家の淋しさまさる冬住ひ寒き眺めをたゞ友として

○　岩代　胡蝶女史

千代八千代變らぬ色の門松に治まる御代の初日拜まん

○　神田　玉川政子

姉妹が京の母待つ乳母が家をめぐりて咲けり白桃の花

○　豐後　あけぼの女

枯野十里吹雪もよひの夕まぐれ笠かたむけて行く法師かな

○　紀伊　とき子

冬木立巨人のさけぶ聲のごと木がらし吹きぬ月なき宵を

○　群馬縣　柳つぎ子

小春日や琴の手とめて小聲おせばうなづきかほによる子犬かな

○　會津　大島文子

すきまもる月影さへもさむき夜に辻占うるもあはれ人の子

○　上毛　金子すみれ

千年ふる松にも老の色みもて少しくつみしけさのはつ雪

○　伊豫　屋川千賀惠

たつた姫織なす錦色さめて流れ淋しき秋の里川

○　紀伊　有本舟子

浪枕室の泊りの月更けて夢路の末に千鳥鳴くなり

○　武藏　青柳彌生子

塗はげし赤き鳥居に小雨してみだれそめたる白萩の花

○　但馬　露子

○　岩代　蒼華林子

なき友の柩を送り歸り道鐘の音淋し秋の夕ぐれ

○　宇都宮　大岡春子

紅梅の花の香高き南窓に鶯來鳴く日は長閑なり

○　大坂　北川花園

彼の人の尼になりたる此頃を垣の卯の花さきそめにけり

○　越後　岸月子

夜ごと〳〵君がみ姿ゆめに見し心みだるゝ東路のそら

○　京都　信子

このまゝに萩の錦を都なる戀しき君におくりてしかな

○　上野　青木もり子

行き來する人もいつしか影絶て川風寒き渡場の暮

○　靜岡縣　飛奈久枝

大御代のためしとならむたかさごの松も靜かに年立ちにけり

○　靜岡縣　松村君子

うつせみのはかなき世にもにたる哉月のかゝみにかゝるむらくも

○　靜岡　雛久江

新らし年のはじめのたのしさは都もひなもかはらざりけり

○　瀬川きく

からき世の浪路遥けく漕ぎてゆく君がみ船路たゞやすかれと

○　ななしの某

小枕の黄金の鈴のさゝなりて罪なき稚兒のはや夢に入る

○　伊豫　瀬川きく

海遠く君が舟出の其日より小さき風にもむね痛めけり

○　福岡縣　中原纖子

あけがたの雲ちぎれゆく野の末に馬子唄細き小松原かな

○　沖繩縣　大島ふさ子

我もまた秋の野末に蟲となりてともになかばや心のかぎり

○　千葉縣　錦古里入千代

村時雨晴れ行く空の雲間よりもる影寒き冬の夜の月

○　千葉縣　錦織入智

遠近の野山もわかずおしなべて今朝白妙の霜ぞ積れる

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○　讃岐　白瀬女史
夕告ぐる鐘の音さびて木枯しの風さへ寒し山寺の庭
○　姫路　松下ゆき子
初ゆめを背子に告げむとゝくおきて化粧する間もそゞろうれしよ
○　赤坂　森　英子
もの思ふをとめの袖をふく風に菊の香さむし有明の庭
○　横濱　星戸霊子
君がのる舟はあしまにかくろひて夕ぐれ寒う川ぎりとめぬ
○　駿州　源　靜子
夕暮れや我つく鐘は沖の石の君すむ島に今黄昏るゝ
○　京橋區　矢代あづま
かぎりなきのぞみ抱きて拜む身にいともさやけき初日の出かな
○　仙臺市　黒澤玉容
荒磯や東さして翔ける鳥の翼しろきが初日に燃ゆる
○　下總　岩瀬信子
韓の海霞なびきぬ際なき小島の主も春や知るらむ
○　上毛　安矢子
くろ〴〵と菊のかたへのさゝ垣に草紙ならびて墨の香にほふ
○　石川縣　今永君江
花やかに流るる秋の夕雲や白鳩のむれ西に翔けゆく
○　下總　岩瀬信子
主もなき小島が陸に舟一つ梅のかをりに神やあもりし
○　駿河　かをる
星川にかゝれる橋もおぼろなり霞にや入りし十六夜のつき
○　飛鷺子
かせやみて月すむ夜半をしづの女がはた織るおさの音さむげなり
○　大分　松本露子
しぐれては又やむ秋の夕暮の故郷に病める君思ふ哉
○　下總　岩瀬乃武
罪多きこの身ゆるせの君の文あはれと讀みぬ春の夕ぐれ
○　美作　日下富子
咲きそめし母のかたみの梅の花一枝手折りて手向けまつらん
○　栃木　丸山保子
木枯に吹き殘されて老松の梢に白し冬の夜の月
○　東京　保子
尾花枯れ菊も移ろい虫もなかず思出多き秋雨の夕
○　秋田市　安藤清江子
見渡せば籬の花に日は落ちて秋風寒く衣ふくなり
○　滋賀縣　辰井花泉女史
小扇の風も戀もつ京の子に落花みだるゝ宵祇園かな
○　大和　樫根こう子
須磨の浦いその松風身にしみて袖に露ちる秋の夕ぐれ
○　南總　登山みどり
はたを織る音する窓の山茶花にひえ鳥なきて日は春のごと
○　茨城　青柳愛子
主人なき園生の菊もへだてなく昔ながらに咲き匂ふかな
○　福岡縣　大本ひさ子
雁音なきぬた打ちつゝきく程に昔を今に戀しかりけり
○　熊本　俊子
秋の夕入日さびしき西山をうす紫の雲ちぎれゆく
○　秋田　佐々木ひでみ子
燈ろうの火影はきえて暗の庭に落葉聲ある秋の暮哉
○　高田　相樂藤子
白萩のこぼるゝ窓に只だ一人り文よみ居れば雁りなき渡る
○　若狹　津田汐汀
松島の松の木影のうたた寢にさりにし人の夢をみしかな
○　大阪市　大坂ひろ子
世にそむく心と知らで春風のわがかどべをも吹きやすぐらむ
○　大阪市　島田ひろ子
汚れなき谷間を出てゝ岩清水塵の浮世に何急ぐらむ
○　長門　涙子
親鷄の後慕ひてぞ餌拾ふひよこ憐れに秋の雨降る

○　秋田　[illegible]子

名も見えぬ惢のほとりに美はしき小草わかくさもえいでにけり

○　秋田　荊萱女史

梅散りて櫻桃咲きて病める身のまたいえなくに桃又散りぬ

○　磐城　鈴木勝子

野はづれの道たそがれて別れたる人ほの白うすれ行くかな

○　磐城　荒石竹子

初雁の羽ぶきに秋の風たちて嵯山寺の夕鐘悲き

○　磐城　遠藤花子

亡き夫のふりし事ども思ひ出て一人ぬる夜の夢の悲しき

○　播摩　殿　子

吹く風は紅葉散らす秋の夕さびしき庭にもずの來て鳴く

○　信濃　村山文子

さなきだにさびしき秋を時雨降る外山のすそ野さを鹿の聲

○　宮崎　總永花子

幾度か春を迎へてとことはに御代をことほぐ松の色かな

○　青山千代子

おち葉かく小春日よりになく鳥の聲しづかなり山里の野べ



○　四ノ宮　桑井せい子

ふるさとの戀しき山のかげ見えずわれにはつらき春霞みかな

○　山口縣　山本文子

風またで自から散る桐の葉の病の窓をそゞろおとなふ

○　佐久間　吉田菊子

吹く風の一入寒う身に沁みぬ庭の籬に霜白うして

○　下總　内藤とし子

おく霜の後までかをるしら菊の色香は冬もかはらざりけり

○　福島　河野善子

一年を夢と過して今更にくりかへさなん術もなき今日

○　岩代　河野よし子

あたらしき年たつ庭の姫小松ときはかきはの縁よろしき

○　土浦　清　子

亡き父の奥津城訪ひてかへるさにいづこともなく呼子鳥かな

○　遠江　大石よし子

朝晴や山の氣清き谷影に聲うつくしう山雀のなく

○　長崎　溢江皎月

笛の音は遠く流れて里川の水底清く月すみわたる

若水（選外）　山城　幽香子

○　出雲　伊藤富多子

いかにして家づとにせむ遠山の峯にたなびく花のかすみを

○　上毛　金子落葉

さよ更ていよ〱寒し水鳥のこゑも身にしむ冬の夜の月

○　栃木縣　千葉花子

うそぶけば山たゞ高き谷間道夕べ呪ひの聲せまり來る

○　長野縣　豐田たかの

こがらしにしぐれにゆきに色かへぬ松こそ千代のすがたなりけれ

○　播摩　平谷たづゑ子

遠くはなれ朝夕思ふ故鄕も父ありてこそ母ありてこそ

○　富山縣　村山秋子

なき人のみ魂よ見ませこの夕花ちる墓にひとり泣く我を

○　埼玉縣　近藤とく子

たゞさへもさびしき秋を時雨して袖ぬらしけり寺の細道

○　和歌山　早川とし子

世ばなれし山住の身はましらなく聲より外に聞くものもなき

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○ 越中、森　森子

ほろ〳〵と水の實こぼるゝ音のして黒盤しづけき學堂の森

○ 愛知縣　宮地國子

氷る夜も母にそひねのみどり子はこゝろやすくも夢や見るらん

○ 澁谷　雅芳

まごゝろのかぎりつくしてみとれともやまひいれぬをいかにかはせむ

○ 靜岡　檜みどり

そことなく川の流れの音もして雲雀なく野の踐む長閑けさ

○ 遠江　須部たまき

日和雲高く流れて里つゞき稻かる日なり鵙の高鳴く

○ 靜岡縣　伊藤ゆわ子

きのふけふ雪けの雲もやまの端にたち居ひまなき歳のくれかな

○ 靜岡縣　伊の藤比良子

うすれゆく雲に名殘のみひかりやあはれ今年も榮なくゆきぬ

○ 靜岡縣　平　子

うまゐして折〳〵笑めるみとり子の結べるゆめやいかゞなるらむ

○ 遠江　小川幸子

恨み多き悲しみ深き此の夕べ遠守の鐘に紅葉散りけり

○ 小石川　大石波江

仰げ人ちゞの草葉の白露をあつめてかけし秋の夜の月

○ 中郡宇村　平山せい子

雨の朝椽にもだえの我が胸をなでゝは泣きぬ幸なき身よと

○ 中郡宇村　尾上には子

心して吹けよ凩愛でゝよと賜ひの菊の莖弱ければ

○ 谷山村　木原きくの

逝く秋を懸深く送るかな情も寒き冬に入るとて

○ 鹿兒島　入佐三枝子

手に受けし銀杏の枯葉罪の兒の足にかけじと棄してけり

○ 鹿兒島　樋口しづ子

故郷も冬や來ぬらん都路は逝く年見せて落葉寒けき

○ 香川　芳子

初日影のどかにうつる若水に千代の末をも掛て汲む哉

○ 安房　礎ひさし子

荒鷲の胸の柔毛の中にしも深くひそみて眠らばよけむ

○ 安房　木村ひさし子

鸚鵡病みて山茶花さむき朝の雨や仰ぐにつらき君がみ像

○ 安房　木村ひで女

つた古りし撞木ふるへば秋風の山をゆすりて鐘は流るゝ

○ 安房　内代のぶ子

籬あり菊あり少き流れあり天つ少女の住居かとぞ思ふ

○ 愛知　入千代

うき世をば露しら菊の花こそは千代萬代に香ふなるらめ

○ 鹿兒島　露淑子

むすばんと立ちよる谷の眞清水に枝さしかはす眞萩白萩

○ 富山市　小林芳枝子

せかれつゝせゞにくだくる谷川の音もしづけに御代の初春

○ 下總　英子

下もゆる蓼生の畔に霜おきて曉寒くひえとりのなく

○ 讃岐　蓮女史

世の人もとはて淋しき山里に打ち時雨つゝ冬はきにけり

○ 讃岐　玉翠

庭近くなくさを鹿の聲にさめてとぼそにせまる朝の霧見る

○ 豐後　高橋彌壽子

長き夜に長う背きたる姫君のみ文使よ白鳩の君

○ 成田町　石原三枝

雲と共に春まつ冬ごもり年の暮るゝもをしみやはする

○ 讃岐　松永茂子

雨もよひ雲ひくゝ迷ふ夕暮を枯野の末に鐘消えてゆく

○ 讃岐　林靜子

御社の御堂ましろく霜ふりて杉の木立に夕月さむき

○ 石見　歌の子

君みずや月に雲あり恐ろしき世かな戀かな名かな富かな

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○　石見　みさを
老翁のとる棹にかつ散る鷺見えて波揚涼し青柳の風
○　島根　人の子
新年は富士の高嶺にあけそめて曙染めの雲うつくしき
○　麹町　吉數里子
まかえたるみ城が上に雲むれぬ悲し心地に野をたどるとき
○　東京　船津康子
みどりこき磯の松原背葉ごしとしの初日は今出てんとす
○　高崎市　狩野蘂涙
若き僧の墨衣あやしくおのゝきぬ花に永眠りし胡蝶眺めて
○　越中　すみれ
大御代はあけてはくるゝ年浪のなみのまに〳〵ひらけ行くかな
○　小倉　吉武すみれ子
もみ殼の山なす賤が破れ庭に雀來てなく霜のあけぼの
○　長崎市　櫻女
小夜更けて衣うつ音もたへにけり月かげ寒き須磨の浦里
○　本郷區　荒木なか
みどりより外に色なき松の葉も初日にあひてつやましにけり
○　本郷區　新水仲
事もなく治まる年の始めとて東京灣も波しづかなり
○　九段　芳子
わが琴に合すふゑの音をもしろき月はおぼろの春の夜にして
○　山口　泉月女
見せまほし明日は嫁ます姉君のふり袖すがた亡母君に
○　三河　千代女
友逝くと日記にしるして夕ぐれの芭蕉に寒き雨の音きく
○　羽前　長岡千代子
霜除けに傘をふせし白菊を葉ひたづぬる秋の蝶かな
○　安房　忍足ふじ子
なきつまが面影烈む壁の手に香り淋しき水仙の花
○　徳島市　佐藤芳子

岩に似たる苫舟一つかくれ見えつ入江さびれて蘆の花ちる
○　弘前市　佐野光子
賣はれゆく身をふなばたに寄せかけてをぐらき月に友千鳥きく
○　上野　關口初子
山門の仁王夕日に冷たくて栗が綻搖く秋の暮かな
○　磐城　吉川湖月
砧ふる音にたのしき夢やれてそゞろ戀しと夢のあと追ふ
○　磐城　國友勝子
菊くづれ秋また老いてまちにまちし人は歸へらず思ひ出多き
○　三河　長坂よし子
打とけし人のこゝろともろともに氷もとけて世は春らしき
○　恩方村　橋本しげ子
手折かけまた惜まれて放す手の袖に散りくる梅の花かな
○　鹿兒島　木原しか子
君は入つ吾は五歲の世も人も共にとがめぬ齡なりせば
○　山口縣　西村蓮子
ゆく雲に思ひはそはて今日も暮れぬ病みて雁きく旅の宿の雨
○　下野　石井みち子
身を賣りて榮買はむはやすけれど病む我夫を誰れ看護るべき
○　伊勢　佐藤しずま子
忍び讀む玉章ふれて白秋の露はこぼれぬ薄月の庭
○　大嶋町　鵜澤銀子女史
湖添の岸の花散る夕間暮傷手に悩む白鳩を見ぬ
○　佐世保　秋の蝶
花うりのやさしきこゑにいでゆけばきくの香たかし門の邊に
○　伊賀　山村りやう
おそろしき夢より醒めてながめやる小窓に寒き冬の夜の月
○　大阪市　金森よゑ
木枯らしの音ものすごき冬の夜はさえたる月も見る人ぞなき
○　土佐　村田靜子
朝霧の晴れ行く沼のかなたより翠らさむげな水鳥群れ立つ

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○　　　　安藤　忍足藤子
軍勝ちて春の花咲く美し國み旗ゆたかに風かをるなり
○　　　　岡山　しらゆき
閑かなる月の夕は一しほに我故郷の偲ばるゝかな
○　　　　名古屋　林田糸子
限りなき御代を祝ひて嬉しくも今日あたらしき年をむかふる
○　　　　近江　田中紅函子
欄干によりてねむれる姫君の片頬に月の影おぼろなり
○　　　　近江　田中こう子
入相の鐘のひゞきの身にしみて松原三里木枯のふく
○　　　　秋田　比良多喜子
里の子がすさぶ野笛の音たえて小萩の花のやゝ亂れたる
○　　　　秋田　平田女史
雪の窓に嬉しくよりて筆そめぬ京への君に冬のおとづれ
○　　　　横手町　大橋貴直子
月かげの隅なくてらす菊の園に歌思ひ居れば神あもります
○　　　　山梨　なでしこ
いつも書く筆にはあれど新玉の年のはじめは改まりつゝ
○　　　　山梨　[illegible]子
波風のさはぎもなくてうな原のうちつみ國に暮るゝとしかな
○　　　　常陸　鐵子
三重なゝへ巖にからむ蔦紅葉神の織りなす錦なるらめ
○　　　　水戸市　猻和はま子
はなれやの障子の影ものどかにて靜寂なりさゞん花の散る
○　　　　伊豫　白露生
罪の身を許し玉へやあまつ父死出の山路もなどかおそれん
○　　　　在長崎　楓子
時ならぬ花とぞ見つる深吉野の櫻の枝につもる白雪
○　　　　高知市　田内いれき
高き香をしたひてきしや午さがり庭の白梅鶯のなく
○　　　　北總　呉竹
晩庭に紅菊小さく月さえて寒さ身に染む山の湯の宿
○　　　　肥前　柳原初音
少女子が調べゆかしきから箏の浦にのどけく田鶴ぞ鳴なる
○　　　　本郷區　齋藤茂子
月姫が化粧の水の滴りて草に結びし露の玉かも
○　　　　日向　吉原富子
たぐひなき年をむかへてみどりこき松ふく風も御代歌ふらし
○　　　　下毛　根岸秋水
千鳥なくこゑにねさめて窓押せば月傾けり川づらの宿
○　　　　奈良縣　中富よしみ
丸木橋積る白雪ふみわけて渡る少女に木枯ぞ吹く
○　　　　伊豆　上原露子
夢さめて聞ゆる聲に窓押せば梅の梢に鶯歌ふ
○　　　　下野　菅谷とく子
むらぎえの梢の雪をさく花と思ひなしてや小鳥とびこふ
○　　　　下野　安生桐葉
初雪や野山も里も分ちなくさまおもしろしあけぼのゝ空
○　　　　栃木縣　三品紅葉
さきのこる菊の色香もあせはてゝ木枯寒きあしたなりけり
○　　　　下野　菅谷雲葉
旅ころも今日しもときて我子等と新年祝ふ故郷の空
○　　　　京橋區　伊藤やす子
ながらへて春をたのしむ身ならねど猶惜まる年のくれかな
○　　　　陸奥　堀口ふじ子
なき渡るかりの行へを眺めても思出でらるゝ古郷の空
○　　　　青森縣　加藤美枝
立かへり鳴く聲ことにしらみけり月もいるさの山ほとゝぎす
○　　　　上毛　河内とめ子
古へを戀ふる御堂に日はさして花にたくみの顔ひこぼるゝ
○　　　　讃岐國　越茂子
色かえぬ松と竹とに末かけて千代萬代と祝ふ今日かな

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○羽後　楓女史
わが庭はまだかはられど遠山は霜やおくらむもみぢしにけり

○長崎縣　佐野穆堂
斥候の駒に水かふ朝月夜野川のほとり萩みだれ散る

○福岡市　三葉女史
牧場三里夕日うすれて美くしう鳴するあたり小羊むろゝ

○豐後　夏子
鳩よびて豆やる乳子の聲高し紅梅かなる村長の庭

○栃木縣　瀧澤秀
風寒き木の間に朝の月見えて落葉冷き深山路の旅

○上總　花澤はな子
うきふしのしげき世をしもしら露のおくにまかする軒の若竹

○備中國　大西とも子
供具してやなら道行く貴人が綾の御衣に初日影さす

○伊勢國　松本しげ子
もみぢ葉のうつろふ如き身にしあれば落葉と果つるさだめなるらん

○千葉　芳子
下もゆる蓼生の畔に霜おきて曉寒くひえとりのなく

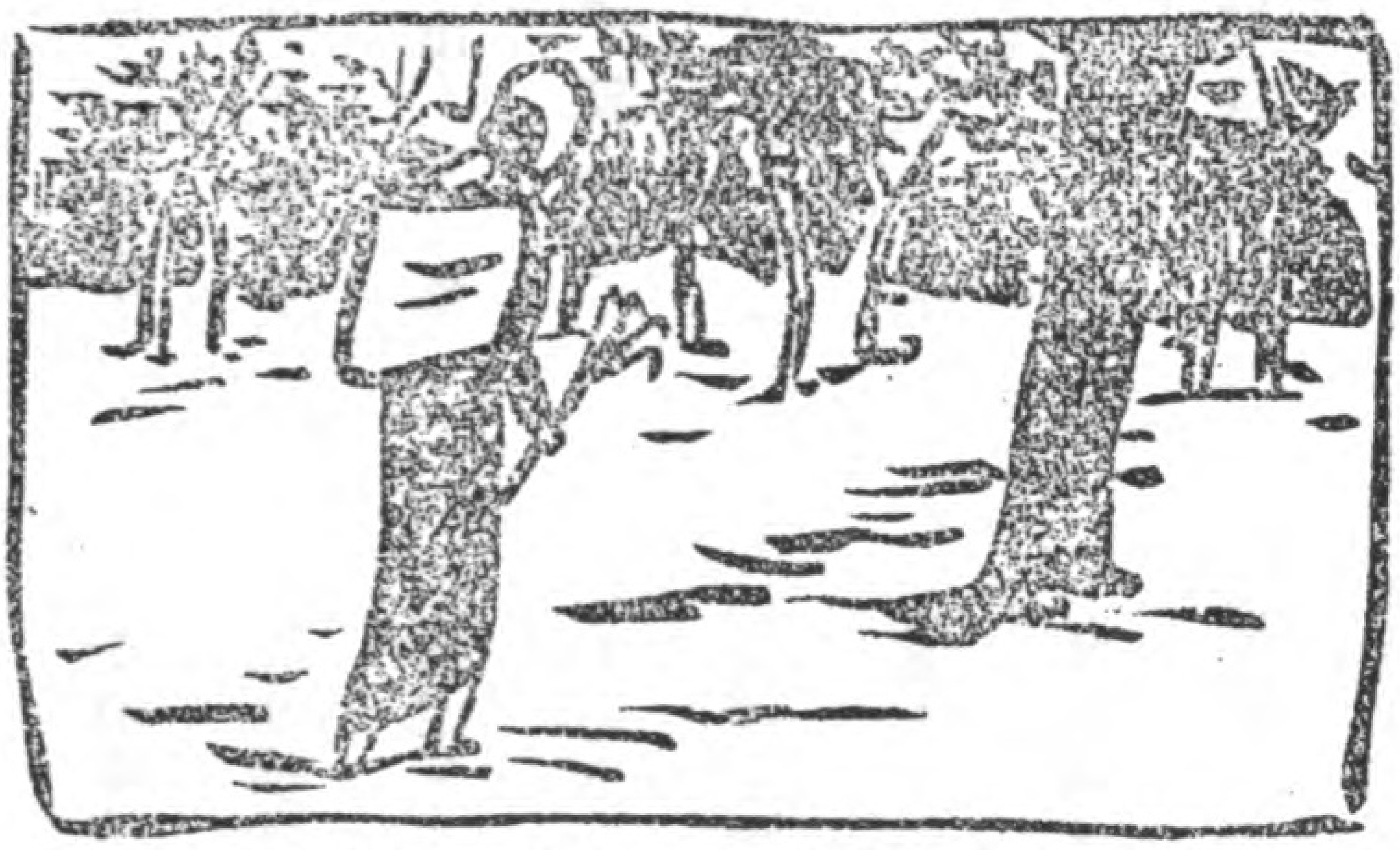
○越後　松山けん子
春の神今東に出てますと金の翅して鳥空とぶ

○明石　藤谷市子
やがてこん春をまたぬにあられどもくれ行く年の惜しくもある哉

○酒田町　波部美耶子
化粧をへて局に急ぐ渡殿に靜になびく青柳の糸

○上野　關口次子
旅の人憩ふ峠のふもと茶屋ところ〳〵に紅梅の咲く

○上毛　綠苗女史
こうばいにつゞく麥ばた桑ばたけみなおほひけり春のかすみは



落ばかき（賞外）　伊豫　福井白百合

○上毛　關口綠子
家いゑのあさげの煙たちこめて十戸の小村雞のなく

○瀾江
村をさのやかた問はれて野のすゑのしら萩みたる垣とおしへぬ

○南豐　藤の家　瑠璃子
懷かしき君がうつしゑ眺めては身のさちなさをひとりなげきぬ

○仙臺市　三浦もと子
見ゆる山みゆる里みな火と燃ゆるもみぢのなかを走る汽車かな

○日本橋　水呂子　とき子
波荒き四方の海原風絶えて年たつ今朝は靜かなりけり

○信濃　濤子
江の南しづかに明けて朝靄の絶えま〳〵をゆく白帆かな

○橫濱市　長谷川　波南子
小障子に映るは友のみ姿か忍び音に泣く聲洩れ聞ゆ

○下野　兒島かく子
月花の契りも今はふりゆきて面影寒し鬢髮の雪

○下野　兒島とく子
仇浪もをさまるみ代のうら安く年たち返へるふるさとのそら

○四武田村　玉利しも子
星月夜さむき書院の窓に倚り君がすさびの琴の音を聞く

○上野　大沼楓子
歌ひ居る小島の群をおびやかし秋風樹の落葉さするよ

○彥根　馬場みつ子
下京に賣りし蜜柑の錢かぞへ少女歸るか黄昏の宿

○宮城　菊地滑子
小雨ふる秋の夕べの窓あけてそゞろにこふる故郷の山

○相模　岩澤紅梅
棗の實もつ夏草身に纏ひ瓔珞と笑む山の子なれば

○尾張國　堀田愛子

君が代はとかへりし花笑はしく千度八千度咲き匂ふまで
○　大和　みどり
幸なくてうきこと多き此の身にもたゞたらちれのましませばこそ
○　伊豆　加藤岱子
姉君のかたみのちごを抱きつゝ夕野小路をひとりさまよふ
○　鶴來町　白峯雲子
朝夕を羊追ふ我身老いたりな踏む足寒し今朝の初霜
○　下野　猪口美枝
さしのぼる初日のひかりわきみちて都も里も春は來にけり
○　下野　兒島節子
長らへし身の今更にふるさとの年の初日を仰ぐ嬉しき
○　播州　雲子
しきりなく百舌鳥の高音もさやかなりあしたうれしき背戸の篁
○　金澤　古木喜巳子
年たてばましば折たく賤が家も門松立てゝ祝ふ御代かな
○　備前　松本もと
森かげにおちばかきよす山の子のかた頰に寒く夕日さすなり
○　恩方村　中島麗子
畑を打つ人影さりて山の端に月の漂ふ夕時雨かな
○　小石川　吉田愛子
何となう物に引かるゝ心地して失せにし友の垣根に立ちぬ
○　備後　高木蔦代
ふりもせず照りもやらざる秋の空先づしぐるゝは我が涙かな
○　美濃　傍島みゆき
珊瑚島羽白き小島飛びかひて繪を見る如き磯の月かな
○　美濃　傍島敏子
三合の酒に人まつ夜半の庵芭蕉の破葉雨に音あり
○　靜岡縣　鈴木舒江
駿河路や往來ふ雲の片晴れて夕日輝く富士の白雪
○　小倉　松江孤舟
なく蟲にそゞろ昔を忍ぶなり逝きし我妹子思ひ出てつゝ
○　牛込　阿部絹子
おく霜に野邊の千草は枯はてゝあはれさびしき冬のあけぼの
○　伊豫　福井白百合
誰がために袖もみじかきをとめ子の雪かき分けて若菜摘むらん
○　德島市　富士谷あい子
君は牛にわれは羊にまたがりて美しき天女と共に住まばや
○　備中　大山ゆかり
ちるまゝにまかせし庭のもみぢばにあさくおきたるけさのはつ霜
○　備中　大山益子
憂ある胸をいだきて欄干に思ひ出多き夕雲を見る
○　備中　青山松子
砧うつ音たへ〳〵に聞ゆなり雁鳴く里の秋の夕暮
○　備中　大山正子
土橋まで君を送りてかへりくればをちば時雨るゝ森のしたみち
○　備中　大山泰子
千曲川濃き朝霧の晴れゆきて流れの末に鶺鴒のなく
○　德島縣　大久保桂子
瀧江の蘆の戰ぎの身に泌みて一ひら雲の時雨ゆくなり
○　德島縣　堤菊枝
高砂の尾の上におひし姫小松千とせの春にあふぞめでたき
○　小石川　雄子
まろび入る毬のあと追ひて見出でたりかきれにひくき水仙の花
○　麴町區　淺井千鳥子
うつくしう紅梅咲ける扉に立ちてありし昔を思ひ泣くかな
○　鶴來町　美雪
いくたびかをごとにかけて調べけん君がよみたる夕づゝの歌
○　高岡市　北本歌子
金髮の少女がすさぶ銀笛の聲に暮れ行く霜枯れの野邊
○　藤枝町　紅薔薇
たゞ一人わが影長う世野にひく旅悲し老の身にして
○　弘前市　てる子

瞑想して夢をきりつる夕窓に桐のひと葉の音なく散りぬ　小倉市　松江孤舟

○

君なくてたれに語らん白糸の千々に亂るゝ胸の思ひを　靜岡　石原勝江

○

見る人もかれにし冬の山の端に嵐に冴えて出る月かな　靜岡　石原絹子

○

散りはてゝ山もあらはになりぬれば殘る松さへ淋しからまし　弘前市　佐野てる子

○

七村にきこえし名主の奥津城をめぐる小川べやまぶきの花　弘前市　みどり子

○

青蘆の末に君住む島見えて白き帆のかげかもめ飛ぶかな

○

悔ひまさむ母なき幸とほゝ笑みてみぐしおろさす姫美しき　三河　しぐれ女

○

したはしきわが亡き母のいましなば又こん春も笑みてむかえんを　函館　本庄谷　八重子

○

川添の柳のかげに人見えて渡し呼ぶなり冬の夜の月　紀伊　米田光枝

○

霜ふかき朝靜れよる神鳩の羽風に散るや山茶花のはな　門司　瀬吉はるみ

○

日もすがら桃の花ちる里川の堤を播へ網傘つゞく　兵庫　柳田白百合子

○

よびかはす川原千鳥の遠なきも淋し今宵は君まさずして　磐城　石竹子

○

我れもまた終りを花になぞらへて咲きて見まほし寒梅の花　磐城　遠藤きさ子

○

うたゝねや寶舳の夢におどろきてそゞろ淋しき一人居の夜や　磐城　関友照子



柿の實（賞外）　青森　熊川喜代子

○

來ぬ人をまつほの浦に舟うかべ磯邊に一人夕雲を見る　磐城　宍戸梅子

○

白菊や去年にかはらず匂へども主なき園ぞ淋しかりける　安藝　まさ子

○

小夜更て燈火細き賤が家に吹雪はげしく窓叩くなり　安藝　六歳泉

○

川口の泊の舟の灯のさゆらぐ風に千鳥しばなく　船橋町　隆子

○

筑紫野の雁鳴き渡る寂寥は晩鐘の響きに尾花搖れけり　筑後　恒子

○

雛僧の阿伽くむ手先き寒げなりやれし古寺霜白うして　臼杵町　安部ふじ子

○

牛ひいてかへり行く影見えずなりて紅葉に暮るゝ秋の山里　佐渡　谷川桂月子

○

君のせし眞白帆早う雲に入りて夕ぐれの海を知らぬ鳥とぶ　藤枝町　石神喜恵子

○

谷川も落る木の葉に埋もれてそら吹く風の音ぞさびしき　陸前　小野寺みさを

○

懐かしき君が門出の此夕磯邊に立ちて千鳥啼く聞く　鹿兒島　玉利いれ子

○

白菊の花の垣根にねむりけり園の小蝶も遊び勞れて　信濃　桐原敏子

○

幼兒と學びの道をいそしめる我が身はいとも樂しとぞ思ふ　岩手縣　伊藤宗枝

○

訪ふ人のあらば答へよ庭の松ぬしなき宿となれる此の家を　京都市　松尾佳子

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

文藝遊戲

人形の衣服（課題）

（賞品圖書切　符金五十錢）　紀伊國箕島町　田中文子

上着、紫紺地に赤い鹿の子形の源氏雲其間に白ばらと小さい白と朱との結び蝶の摸樣の縮緬友禪、表は白、筒袖て袖口をオリブのリボンでくゝる。

下着、とき色の紋縮緬（千羽つるの紋柄）共うら。

襦袢、白縮緬袖口を牡丹色の絹紐でしめる衿は白羽二重。

帶、とき色のちりめんのしごき。

袱布、淡い梅ねずみに白い大きい鹿の子形と其無地との荒い市松其上に一面に赤と白とのみだれ菊美しう染め出した友禪ちりめん裏は緋の紋綾飾紐はとき色。

（評）筒袖は人形に何うかと思ひますけれど、文明的で希望があります。

（賞品圖書切　符金四十錢）　神戸市　大谷しはす

ホヽヽ、人形にだつて坊ちやんも在ればな孃ちやんも御ざいますわ、ねそれじや孃ちやんのを申し上げませう、最も日本仕立て二枚重ね上着はオリーブ色に白百合摸樣の友禪縮緬に共八ツ掛を付け袖裏及胴は極上等の紅絹を、下着は紫お召矢がすり八ツ掛は表と同じオリーブ縮緬共ゝ、フキて一寸、袖裏や他はやはり、紅絹でございます。お袱布は亂菊に小蝶の摸樣ある紫羽二重、裏は緋紋羽二重の通し、房は白絹打紐で梅鉢結びお襦袢の身はもみ板でお袖は友禪縮緬の通し。襟は白鹽瀨に瀧田川の縫出摸樣。帶は上等海老茶博多に帶上げは人形の事ですから牡丹茶縮緬の紐とします、手袋は白絹レース、足袋は白キヤラコ、七ツ道具に金銀兩打のハコセコ。

（評）最も詳しく書かれたやうです、此れなら立派なものでせう。

（賞品圖書切　符金三十錢）　あやめ子

玉のように美しい、妾が秘藏の京人形、名は露子、白メレンスの改良下襦袢、襟は白綾、紅地の縮緬に白百合染め摸樣の長襦袢、襟は赤地にこぼれ梅のぬいもよう、上着は藤紫の五ツ紋に秋草の江戸褄摸樣、下着は白綸子の、ひよく仕立、緋の厚板織の丸帶を立矢の字に結び、淡紅色縮緬の扱帶長うたれて、尤も之れは平常着では御座いませんお正月の盛裝です。

（評）要領を得て居ます。

（賞品圖書切　符金二十錢）　神戸橘通二丁目　高橋紫峰

上着は縮緬梅鼠の濃き桃色がゝりし

地色に桃山か御守殿の如き花摸様て下着は地質は同じく色は赤地に白ぬきの匹田鹿子、ふきは何れも共ふき襦袢は桃色の紋縮緬て袖裏は白の縮緬、襟は白羽二重の事、帶は草色の地に金銀て亂菊摸様の繻珍、帶上げは卵子色の無地の縮緬、何れも袖は平袖丈は長き方てす。

（評）純日本風、色彩の配合も宜しいやうてす。

（賞品圖畫切符金拾錢）　豐後臼杵新町　安部ふじ子

可愛き洋風の人形に、袖口にレースを付し白の襦袢を着せ、裾に時色の飾りを用ひしレースを付しペテコートを着せ、其上に、胸と袖口に同じく前のレースを用ひしビショップを着せ、衿の上には飾りに水色を用ひしレースを付く但し前の上衣は時色メリンスを用ゆ、靴下は赤にして帽子は、極薄色の水色メリンスにて作りし雪帽子を被らしむべし。

（評）西洋人形も一つはほしいものです。

○　廣島縣　德永トワ

襟は濃ぶどーいろへ、壁に小蝶の七入羽までおしろーたがよろしいてす。襦袢の身頃は、あかのむぢて、袖はあづきいろへ、元祿模様（こーし、襟の中へすみれや、ばらのはなのちりみだしがた）おすそよけは、うすもいろて裾には松葉につるの織だし。下着は赤色へ、大形のぼたんのがら。仝下着は白地へ梅の花散し松葉竹こぎまぜてよろし、上着は黒の五つ紋て、裾模様は春の曉のごとく、うす紫色となし、まがきに、梅もどきのうきがた。帶は紅梅色にらんぎくの、なりだしのこと。

○　埼玉縣　高山ふく子

妾は人形の衣服は、西洋風よりも、日本風の方が、何となく奥床しい故、日本風を好みます、總べて人形の大きさに數はつて、拵へますが、時節てすから、綿入にして、襟は人形に應じて作り、袖は丈の割合より長く、裾も割に大く、きちんと作り、襦袢の色合は、白地に緑の大形の模様あるを用ひ、上着は色合を、黛地に桃色の、梅か櫻の花の、優美な模様あるものを、着せたいと思ひます。

○　大阪市　橋本賀壽尾

衣服は黒地ちりめんの五つ紋にしてぼかし裾模様の、ふり袖、模様は金絲にて波形をあらはし巧に赤茜色、のまんじゆ菊を配合して、其處より縫上げのところ迄赤色てつたを面白く配合する、ふきは共ふきて袖模様は同じ、又下着は赤と白との紋ちりめんの二枚て、襦袢の襟は白地のしなぜて、袖は赤地しぼりがよかるべし帶は赤地しなぜにして金茶色て御守殿模様を織り出し藤紫にて垂れ藤をあらはせるもの。

○　大阪　大坂　白桃

妾の今持ている人形は丈一尺三寸てそれはく愛らしいのよ此お正月に縫って着せようと思ふ着物れ先づ上着から申しませう之は地が緋縮緬て振袖右の袖の前に「ゲッキン」後に「ケイキン」左の前に「コキュー」後に琴上前の膝には蛇が巻いてゐる處之だけが縫てしますの下着の二枚は白の紋羽二重長襦袢は黒地の友禪縮緬て紅入模様は秋の七草衿は白しほぜに福壽草の縫裾は三枚共七分ぶき襦袢は胴が緋縮緬袖は緋紋羽二重紋は五つて藤わにつた帶は紫地に金糸てくぢやく帶締はとき地模様は梅に雪之だけを着せようと思つています。

○　大阪　政　眞

姉ちやんといつて持つて來た妹の人形その時私の目に映つたは藤紫の紋附、縮緬の松竹梅の裾模様とき色の下着白襟を巾廣く新年の松を縫ひ出した襟、緋繻子の丸ぐけを矢の字に長く脊負せた帶赤縮緬の丸襦袢、ずい分富家の娘ちやん「どうして」といへは「東京のおぢちやんに」と嬉しさうな顔を斜にして人形をだいている時手に持つ人形とどちらが可愛い。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

陸中　白雪女

○私は極少さい丈三寸位の佛人形を緋縮緬の落花流水を白く染め拔いた着物に、下着の衿は水淺黄に、とき色のつゝら織を十分袖口より見せ、オリーブや赤白などで面白い戰捷模樣を袖なし被布にして、着せ桐の小簞笥の上に御化粧道具と一しよに飾つて置きたい。

八王子　井澤菊江子

○人形の衣服は肌着を晒木綿にお腰卷は緋縮緬、長繻絆は、桃色へ草色にてこぼれ松葉、襟は白縮緬へ金絲にて鴉の縫、上着は小豆色の㶚、模樣は水に花いかだ水は青く、いかだは濃茶色、花は牡丹梅櫻、いづれも赤みどりにて染出し裾は無垢、下着は紅染綾を二枚に帶は、緋の繻珍へ金絲にて蝶に櫻しごきは黄の縮緬にしたいと思ひます。

尾張　すみれ子

○私の人形は日本服にしませう、先づ襦絆のえりは赤色地に白の霜降として袖は濃紅色、上着は總水色としまして裾模樣に御題新年の松に因んで薄赤あけぼの色のボカシに聚皮茶の霞を入れ白色茶て光琳風の松を拔きます、そして帶は薄すみれ地にこぼれ水仙の花と梅の花の模樣と致します。

深川　元子

○上着を紫縮緬の三ツ紋、下着をとき色縮緬、上下共、ひつかへしにして重れ、胴着はほんのりとした藤色縮緬へひわ色とこげ茶色の萩を大きく出して、あとを小さく現はした七草模樣へ、緋縮緬の裾をつけ、八ツ口は黄赤にして、びんと擶へ、襦絆の衿は白綸子、胴から袖は緋縮緬へ、白く大きく牡丹花を染め拔いたのへ、是も緋縮緬の裏をつけ、何れも袖は大きくして、帶は程よき巾の緋緞子を、立矢の字に結ばせ、うこん縮緬のしごきを、房々と格好良く下げさせたいので、ございます。

埼玉縣　一少女

○人形の衣服を作るには私はこう作りたいと、思ひます、先づ緋縮緬の長繻絆は同じ縮緬に金糸て縫のあるのに着物はアヅキ色地に水に楓のこぼれ模樣裾は緋縮緬の上衣緋綸子の下衣に帶は緋緞子に白牡丹の模樣のあるのにして帶揚は時色絹縮み、帶留は繻珍の丸ぐけにしたいと思ひます。

福岡　細川落葉

○人形を娘とすれば三つ紋付振袖藤色紋綾の袷裾模樣は梅竹松、友裾下着はぼたん色の紋羽二重裾は友裾、繻絆は白綾、襟は紅梅の羽二重、帶は黑地の繻珍に竹に雀の模樣、帶上絹ちゞみ。人形を男の子とすれば。袷は琉球絣。羽織も琉球絣、裏かへきは羽二重に波に千鳥の模樣。下着は八丈裏はあさぎ色。繻絆は極上の白モス。帶は銀鼠のあさぎ色水ちらしの博多織。私が子供を持てば以上の如くして着せます。

福岡　坂田とよ子

○姪の君子が初節句に頂いた博多人形色白て丸顏の絲のやうな振分髮名は桃子と申して丈が凡二尺からあります藤色無地の紋付裾は秋の七草袖下は菊水のちらし腰上げの所のボカシが一だんと美しく緋縮緬の下着がちらり〳〵見えてお袖は地を去る事一寸許り襟は白綾に櫻の縫模樣それに桃色綾が「ヒヨコ」にして實によく似合ます矢の字に結んだ紅の博多織は肩の上まで來て：：鈴のやうな眼を見張つてる所はほんに接吻したいやうてす。

伊豆　加藤爲子

○上は五ッ紋付て、藤色の地に櫻のあけぼのを模樣に置きし縮緬の無垢。下は小豆色紋羽二重の無垢二枚を重ね〳〵て三枚とし、紅地に金通しの狂ひ牡丹の模樣ある繻珍の丸帶に、鐵金紋縮緬の扱帶。緋紋縮緬の無總の長繻絆。但し袖裏のみいヒヽ色縮緬。下繻絆を加へて二枚重れた襟は白羽二重。

備後　慶子

○上着三ッ紋縮緬江戸紫下を薄くぼかし裾模樣はしだれ櫻を縫にす袖もぼかし同じ模樣奥裏袖裏は羽二重もみ八掛は共付ひもは上着と同じ色にてさきをぼかし下着は時色縮緬一面に御殿菊模樣奥裏袖裏は羽二重もみ八掛は共付ひもは緋ちりめん長繻絆、緋紋縮緬奥裏袖裏はもみ衿は赤羽二重へ牡丹の縫ひ模樣。

周防　桔梗子

○おゝ可愛こと女の兒てございますれ然し田舍のこと記者樣の御滿足遊ばす衣服は出來ませぬが一寸申上ます繻絆胴は二枚共白モス下繻絆衿袖白綾同袖は筒にして口を時色リボンて結び、上繻絆衿袖緋紋縮緬、袷は上下同じ縮緬小豆色に

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

七草模樣を比翼仕立上下の八ヶ掛と袖口に緋縮緬を挑し 紐も同じく以上襦袢、帶は時色縮緬しごきそして白時桔梗色縮緬て頭巾涎懸を作って被ひませう。

○　北海道　羽衣

羽二重黒紋付こぼれ梅のすそ模樣を、上着とし下着は白い絹でこしらへ二枚共裾は友、帶は、ちりめんて地はあづき色、それに、おりーぶまちりの模樣それをおたいこにむすんて桃色の帶じめを横てむすんでさげ縮絆の袖は赤て襟は白くしたいのこれが私の理想なのよ。

○　水戸　重子

襟は時色と白の羽二重縮絆緋縮緬に大つきなぼたんの染抜きの質し裾は藤色上着は小豆色地の縮緬にやぐるま草の腰模樣に下着は七子緋と白の紅葉模樣帶は繻珍の丸にて赤の地に黄菊の模樣扱紐は時色縮緬。

○　西ノ宮　森井せい子

上着を縮緬あづき色地に霞にしだれ櫻の模樣、平袖にして入掛は共、下着は薄とき色紋縮緬同じく平袖にして共入掛、繻絆は緋紋縮緬にして白羽二重の襟をかけます、そして羽二重紅しぼりの兵兒帶を後ろて結び下げます。

○　羽前　渡邊智恵子

私は人形の着物は日本風よ友禪縮緬て大きな花の模樣の着物て下着は赤地縮緬にかの子形のさや形裾は肉色縮緬長繻絆は赤綸子襟は白紋羽二重襲枚も重れ帶は郡織の赤地に花車の大模樣。

○　越前　靜子

私が人形に着せたき衣服は先づ眞紅色縮緬の襟ほそやかに見せ、赤地に雪降り笹の友禪染ちりめん緋綾の裏長繻絆となし。純白なる紋羽二重共裾のお下着上には藤色八ッ橋織紋付模樣は、松にこぼれ梅緋繻子の帶立て矢に結びます。

○　東備　坂東須美子

人形の衣服は色々ありますけれども、洋裝の婦人服て、色合はトキ色が最も似合ふと思ひます、そして無論筒袖だが袖口は多くヒダを取るがよい。

○　越後　長澤ふく子

黒ちりめんの紋付に、すそ高く、白菊をそめこめる、上着に、白ちりめんの下着をきせ、一番下は、ひちりめんのじゆばんきせ、そして、赤じのしゆちんの帶を、あはせて、結んだなら、どんなに美くしいだらう、人形だから赤ひものがいゝやうてすが、やつぱり、黒に白が一番品よく、美くしいと思ひます。

○　相模　土筆

色合は、鶸色て襦袢の襟と、上着の裾と、彦帶とを作り、襦袢の胴は緋縮緬、上着は藤紫の無模樣。作り方は成る可く、細い絹糸を用ひ、彦帶は長くて廣く、裾は極く少し出す事、丈は長過ぎる位の方がよいのであります品は皆薄物許り。

○　岩代　倉作より子

人形の衣服は上着は薄い小豆色に葵の花のやうなあつさりした模樣の縮緬にて造り下着は絹入丈裾は上着下着共に緋縮緬を附け襦袢は緋縮緬に萩の模樣を白くぬけたるものにて造り襦袢の半襟は下に白縮緬上に緋縮緬を掛け其れから一番上には空色のアケボノの交りたる黒色の模樣の縮緬にてヒフを造り着せしめば似合ふかと思ひます。

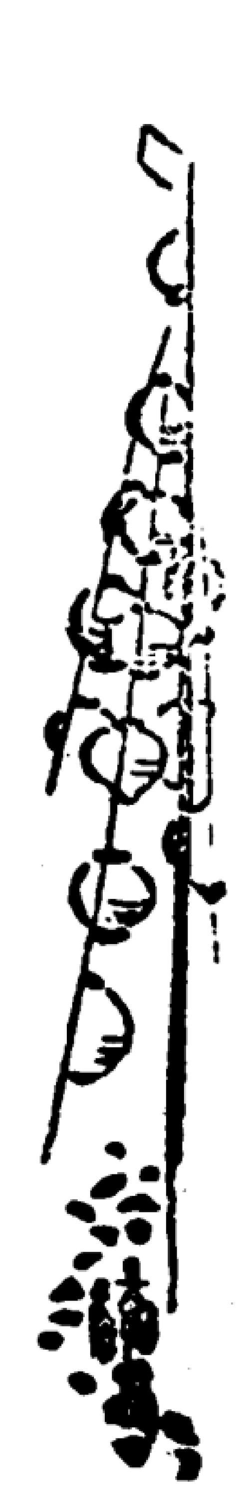
○　滋賀縣　松ヶ枝

一、長襦袢、緋縮緬　一、衿、赤地紋羽二重に白牡丹の染拔所々金糸ニテあしらふ

一、着物上着、縮緬梅鼠地に袖及裾模樣は新年の海に初日の出

一、着物下着、白地紋羽二重

一、袴、淡色古代紫　一、袴下帶、時色縮緬



人形に就いて

一記者

女の子が人形を愛すると云ふ事は全く自然の性質とし申すべく西洋ても日本ても變りはありません、佛蘭西の有名な文士ユーゴーも其作の中に女子が人を愛するのは人形に接吻する事から初まると言つてある。日本ても人形を愛するのは殆んど全國一體變りはなく、人形に上下こそあれ、芭蕉翁が「雛祭り人形天皇の頃かとよ」と歌つた以來、殊に三月三日の雛の前後は人形月とも云ふべく東京ては十軒店、美しく飾り立てられるのです、人形は京都、又は伏見の伏見人形など細工のみごとなものが多い、各國それぞれ人形にも變つた風俗があるやうです。

Digitized by Google　　Original from HARVARD UNIVERSITY

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

○牧場守

靜岡縣藤枝町 紅薔薇女

私は牛飼ひの子でございます。

一週すれば二里半にあまるといふ天然の大牧場、そこに私は此牛の群と共に起臥して、高原の清い空氣を吸ひ、水々しい青草を眺めては、人生を樂しんで居るのです。

今わが父は病んで居りまする。

然るに他人の事には極めて冷淡のやうで、實は甚だ神經質な世間の人さまは、私の身の上を樣々に云うて下さいまする。

村の學校の先生樣は仰しやりました「お光さんは大へんにたちがいゝ、物覺えが宜しい、都へ出して金を掛ければ、どんなにも立派なものになれる、あゝして置くのは實に惜しい、老父の世話は親戚へでも賴んで、女學校へ入れる譯にはゆくまいか、學資のだしては、いくらでもあらうに……」と。

娘の容色がいゝので、樂隱居になつて、食ふとのむとより外には思ふ事のない、隣りのお作婆は、口を極めて嘲りまする「牧場の太作爺ほど、無慾な人は又とあるまい、つぶし島田に結はして、友禪の着物きせれあ、箱と纏つた金ともならうッてお光坊に、たぼもすべたも見分けのつかぬ畜生の世話アさして、己れは年中貧乏してぴい〳〵云ッてる、こんな馬鹿氣た話があるものか」と。

聞きたがらねど、村の噂は、親切にも告げくるゝ人あつて、病床の父にも筒ぬけに知れまするけれども、父はきいたとて笑ひもしなければ、怒りもしませぬ、石のやうに沈默して居りまする。

けれども、ひと朝、私がいつもの通りおかゆを煮て藥を煎じて持て行きました時、父はこんな事を申されました「喃お光、己ほど惡い親はあるまいなあ、年よつて足腰たゝぬやうに成

て、いかい世話ア掛けるさへあるに、何にも心づかなかつたが、己れは我が子の出世のさまたげをして居るのだ、喃、おれが無ければ好きな學問も出きる、どこへでも出掛て行つて自由なことがしられる、何もこんな山ン中に見苦しい襤褸さげて、畜生と一緒になつて爆ッへるには及ばない、夫も是もみんなおれの故だ、なあお光、濟まねえよ、おりや、それ思ふと、いつそ首でも縊つて死んでしまつた方がお前の爲に……」。彼は涙にきゝとれませんかつたが、何といふ悲しい有難い親心で御座いませう、わが子に出世をさしたい、榮ある生活を送らせたい爲に、生を疎んじて死を冀ふとは……。されど父さま、先生さま、をばさま、私は袴の裾で風をきらうとも思はなければ、まして唇に脂粉を塗つて、榮華を盡さうとも思ひませぬ。ただ一人の父に事へて、罪もけがれもない牝牛を友として、一生を送られゝば、夫で充分でございます。

ごらんなさい、そこここの小松のかげに、我友は寝たり起たりして、むれて居りまする、一握の鹽を持て私がたてば、處々から尻尾を動して近づいて來て、とり巻きまする、可憐なこと、モーと甘えるやうに鳴いて鼻をうごめかして……。あゝ友禪のきもの、オサーブ色の袴、夫は私は着たくはない、袖のない白晒しの半着に、紅い腰巻一ツ、是でもう澤山でございます、どうぞもう心配して下さいますな。

（評）たしかに人を動かす文なり。「他人の事には極めて冷淡のやうで實は甚神經質な世間の人さま」の一語最味ふべし。

○新年の心

岐阜　三本松　薑女史

良人は何時迄平の巡査で、そしてあんな樂天觀で居らつしやるのか、丸六年、未だに嬉しい樂しい新年を迎へられた事はない。‖妾は夫れを悲しいと云ふではないが。‖「身自ら侮て人吾を侮る」とか、いつも良人の仰せてはあるが、誠に思へば女ほどつまらないものはあるまい、女は男の影法師だとか云ふが、ほんに全くの事、良人の位置すら高まつたら、女は自然と人からも尊敬せらるゝのに違ひない。

向ひの奥様なんどは御主人が裁判所の御役人で、今から一年の後には判事とか檢事とかにならつしやるとか、まあどんなに御嬉しからう、お年も廿五六と御見受け申すのに、御主人が御出世なすつたら、吉野様へ御裁縫の御稽古とは、何とまあ御羨しい事であらう。夫を良人に云ふと、何にも言はずに笑つてばかり、：妾の胸の張りさける樣なのも知らぬ顔に、只もう胡

けても暮れても暇さへあれば俳句三昧、御餅の事も御飾の事も皆妾一人で心配、表通に往んで居る御陰には、人並の事もせねばならず、まあ彼の樣に何うなり斯うなり出來は出來たもの丶、御客樣でもあつたら何となさる丶御積りか、御役所の御式がすんで御歸りになるが早いか、御出ましになつて、あれでは御壽命の長いのは受合なれど、=時には何を御考ともなく、默つて机に靠れて御思案の體、=あ丶こんな事を思つてる間に御隣の靜子さんと歌かるたでも取つて、せめて今宵丈けでも新年の心になりませう。

（評）愚痴の繰言の裏に、俗塵を脫せる隱士を髣髴せしめたる手際、凡ならず。

秀逸

○てる女

三河國　房枝子

護國寺の鐘の音、氷らむやうに響きて詫びしき冬の夜更けたり。

假初の病ひながら、早五日餘も床にあれば、櫛の齒を忘れし髮、枕に亂る丶もうるささに、取りかたづけぬあたりの樣、薄きランプの光に、堪へ難きまでうらがはしく見ゆ。



落葉（賞外）　埼玉　關江子

咽喉いたくかわきたれど、生憎や、湯沸空しく、手を鳴らさむにも、勝手許寢鎭りたれば、是非なく、苦き水藥を仰ぎぬ。大塚の外れながら、晝はみだりに騷がしう、夜は侘く空家に似たる、下宿の二階に、一人病む身の淋しさよ。

誰が家の子にかあらむ、ものにおびえたるやうに泣き出し丶が、雨戶搖ぶる風に亂れて、ちぎれ〳〵に聞ゆ。いで、要なくものを思はんよりは、夢にこそと、燈火吹消せば、月光、糸のやうに障子に洩れさして、風の音はしばし絕え、細き女の聲にて、子守唄をうたうが、幽かに、幽かに、遠ざかりて止みぬ。

侘る時、常にはものに紛れて思はざりし人の俤も、胸に浮びて、心は昔にかへるものよ。

そが中にてる女といへるがあり、こはわが守女なりき。產後の肥立惡しくして母みまかり、父の手に育てられしわれは、七つの秋迄、いたはりくれしてる女を、誠に母ともたのみしなりけり。

てる女はよく唄ひぬ、其凉しかりし聲と、熱き情とは、

幽かにわが心の奧に殘れり、今はたゞ夢のやうなる、其頃の、彼が感化も、猶何れにか潜まざらむや。

別るゝ朝は、彼も泣きぬ、我も泣きぬ、其時はほとほと堪へ難く思ひぬ、然りながら、弱きは人の力よ、一年二とせは慕ひもしたれ、三五年經れば夢にも通はず、十年餘の此頃は、忘るともなく忘れ果てしを、慇くて、思ひ出せば、世を隔てたらむ人の心地すれど、さて昔ながらに懐かしき。

あゝ！彼は今、如何に暮らすらむか。世にだにあらば、子達をも三四人持てる、好き古女房となりて、昔の事なんど、思ひ出す暇さへもなからむ、あはれ一たびは、親子にも劣らず親しみし二人の、慇くて遂に、逢はでゆく世か。

常には悋しと見し人も、かゝるきはに訪ひ寄らば、飽かず懐かしきものなるを、まして、彼の女などと、ゆくりなくも相見るならば……噫。

（評）例の幻怪を描かずして、穏健なる筆致、亦賞するに足る。

◎里歸り

三河　病葉女史

私は豐橋の叔母の家を出た。先程茲へついた時には、夕映が燃ゆる樣であつたが、今は最うそれも薄れて、カラコロと引ずる下駄の音が何となくうら寒く、横町の夕は秋ながら冬のやう、前の木立には薄りと霧が被つた。

私の實家は此所から一里許南の一漁村なので、ひたぶるに叔母が止めたのをすげ無く斷つて、何の夜道を苦にするやうな年齡でも無いと、ひどく御婆さんぶつて叔母の家を出たものゝ、冬が來て、殊に正月になると、そこらの小賭博にまけた若い手合が、夜更けの通行人を追ひ剝ぐとか、子供の時分に二三度耳にしたので、うら淋しく辿るのだが、不圖なつかしい故鄕へ歸るのだと思ひ浮べると、今迄の淋しさは消えて、何とも言へぬ嬉しさが胸にこみあがる。

心づくと私はもう花田村へ差かゝつてゐた。

片側雜木林の田舍町は、大方戶を締めきつて、月は暈も被らず御空に冴え、氷つた通りには林の雜木が鮮な影を落してゐる、風は吹くとも思へぬに、梢を離るゝ木の葉が一つ、カサコソと落つる音！

突然、彼處の茅葺の家の耳門が開いて、燈火の光が末擴ごりにパッと通を照す。不意をうたれて思はずたぢろぐと、人は見えずに水を捨てる音がして耳門が又閉められた。

後は靜に鳥も啼かず、頭の上には肉桂の常盤木が被さつて、露を帶びた葉末が月に輝いてゐる。

行手には棟割長屋が一棟、それを出はづれると一面の畑で、遠からず縣道になると云ふ道が白く一直線に彼方の茂みに走り込む――、人里とは暫し遠ざかつて、

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

追剝が出ると云ふのも此所の間なのだが、戀しい故郷が次第に近づいて來るので――、不意に今過ぎた雜木林の方で梟が啼いた。

私の胸には急に亡くなつた祖父さんの事が浮んで來た祖父さんは俳人だつたので、よく加賀の千代女の話などして頂いた。高尾の『忘れねばこそ思ひ出ださず候』と云ふのを子供心にもうら淋しく聞かされたのを覺えて居る。父は私の三歳の時身まかつたので、私は、殆ど祖父さんに智慧を附けて頂いたのである。

小さな眼が瞳ばかりの樣で、額に大きな黑子があつた、裏山で梟が啼く宵など、風呂吹を食べながら、兄さんと二人で祖父さんに話をして頂いてゐると、禪宗寺の和尙さんがよく遊びに被居つた。

祖父さんとは俳句の友達で、それに二人共碁が大變御天狗だつたので、お母樣が折角もてなした風呂吹が、冷え切つたまゝ夜更けるなどは珍らしくは無かつたそうな。

祖父さんが死んだのは私が十歳の時、兄さんが中學校を卒業された秋であつた。其の冬に彼の和尙さんも亡くなつて了つたのである。

私は故あつて生れ故郷からは二十里を距つた所へ嫁いだので、御客にと言つても近い處の樣に手輕にゆかず、嫁入つてもう三年になるのだが、初客の時と、其の翌年用事があつて一度歸つた許りなので、有縁に生れ故郷の、わけて梟啼く此の頃は、お母樣の皺ある面影が目にちらついて、戀しい戀しいの矢先へ、久し振りにお前と同伴にお父さんやお祖父さんの御墓へ御參りをし、傍々坊やの顏も見たいから、是非一度暇を貰つて來よとの便り、折よく家の方も手のすいてゐるのを幸ひ、暇を戴いて來たのである。

もう一度啼いて呉ればよいと思つたが、梟はもうなかなんだ。

靄に包まれた森の間を漏れて、ポッチリと燈のとぼつたのが私の家。

（評）寂しき裡に樂あり。

○木枯し

紀伊　文子

鐘はなりぬ。

うら寒き夕ぐれの雲は北に流れて、嵐にさわぐ枯草いとしげき山里の草の庵、荒れにあれたる籬にせめての色そへし菊も、今はうつろひ果てゝ、淋しさ一入まさるめり、冬の日のくれやすく、早や燈火ともして、病める母がうまいし玉ふしばしを、文よまんとて開けど、心は文の上にあらで過ぎ來し方の忍ばれ、身の行末の想はれて、涙のみ多きこそ口惜しけれ。

とぼそは破れ、窻はかたむき、見るからいぶせきかゝる家に、病み玉ふ母のおん上、いたはしくもいたまし

きかな、せめて父だにましまさば、少しは心強くありなむを、あはれもとの我家ならば、世の人も捨て置くまじきを、げに頼みがたなきは人心、今は訪ふ人とてあらぬなり。

吁妾は如何なる不運の星のもとに、生れけむ、一より十までの數さへもかぞへぬ三歳の秋と云ふに、少なからざる資産を失敗のため、うたかたのみなわとなせし父は、遠きみ國に旅立ちぬ、それより後は母の情に此年月を生ひしなり。

かくて今母は病むなり、されど思ひのまゝのみとりさへえせぬ身の口惜しさ、めぐる小車のはじなき想ひはつきもせで、涙は泉と湧きて、深山おろしにむせぶ梟のそれよりも、我身の上ぞあはれなる。

母やさめたるらし、しわぶきの聲すなり。

（評）讀者の同感を惹くには未だし。

○犧牲

上根岸　太田秋洋子

（二卷十六號の疑惑により筆を起して）

思へば夢かりし十九年の夢。中々に思決めてし今は、却りて涙もなき身の、いかで此心知らせまつるべき、明日は水泡と消ゆべき圓子が、こゝに最期の一書を君がおん手に捧げ奉る。

守雄樣、弱き者は女に候とや、額髪垂るゝ幼きより、親に許され世に許されて、堅う結びてし縁の糸嬉しと見しは、あゝ覺めては悲しき夢とぞ。醒めてはつけ給ふ學士の冠、幸の世を榮えますらん人の妻よ、はしたなき人の仇口に嫐られて、すねて見せても心の中は嬉しう、來む歡びの日待渡りては君學びます都の空懐しみ、暮れかゝる渚に行雲眺入て、君が俤逐ひしも幾度。蘆分小船の障多き世とは云乍ら、怖ろしき魔は君との間裂かんとや、ありしに變るおん家の樣。小さき胸に描きし未來は影なくこぼたれつる悲しさ、名譽も希望も憂世の執着こと〴〵に抛ち給ひて、聞くに胸つぶるゝ心地ぞする、明暮を荒濤友なる岬の燈臺守と…………思へども〳〵夢か現かを分ちかぬる惑ひに、君は妾を捨給ひしか。かくばかり戀ふる心の、切なる思の、少しは御胸に通はん物を……情淺き君、根しきみ心と、すゞろや物狂ほしう泣きに泣盡くせし其時の圓が胸、何と申さむ樣も候はずよ。たとひ山は裂け海はあせなむ世なりとも、君に二心ある妾には侍らず。

守雄樣、あはれ女性の脆きを名には負へど、圓には動がぬ操の侍る。天地に君ならでと誓ひしを、此身、此命誰にか捧げむ。絶えよと祈れる玉の緒は、憂しや中中に絶えもせで、非情の親が結べと強ふる此處のえにし、明日は其日……。元より圓が身は君に捧げ奉りしもの、かくては生きじ、ゆめ生きまじ。いよゝ圓が

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

此世に形骸失ふ時の至りしをと、堅う決心せし昨日の夕暮、汐に濡ぢたる濱邊の岩蔭に、六藏率て行きて、半ば涙に打賴みしを、憂しや六藏の、眼に涙はら〳〵快き諾ひ言に、守雄樣、六藏は妾の爲命を棄て呉れ候とぞ。孤獨の身乍ら、まだ人間の定命にも滿たぬかれ、只見逃し呉れなばとの否み言も、思入りては堅く退けて、哀れ甲斐なき主の爲身を犧牲にせんと、世にも嬉しき心。荒くれ男の猛く見えても、胸には熱き血も涙も持ちし、哀れを知りける優しの者。何と禮云はむ言葉もなく、命棄つるはゆめ悲しとも覺えぬ身の、たとしへなき人の情には夜べ一夜を悲しく泣明したりし。君に捧ぐる妾が身は何かは、只なき後心なき名を負はされん六藏が身を憐れませ給へかし。

一生の大體に六藏一人率ての舟路はと、許さぬ親に、之叶はずば得行かじと張通す我意。晴れとつけむ振袖姿の在りし世ならはいかに嬉しからましを。重ぬる白無垢も死の裝ひ、偕も此世には薄きえにしに侍りしよ。日頃を戀に泣き、悶えに痩せて、身も心も弱り果てたる圓が、今日迄片時も離さぬ御寫給は、來む世もともにの願ひ、袂に卷きて、胸にして死なむ。よしや圓が形骸は長く此世に隱るゝとも、靈魂のみはとはに〳〵君が御胸に生きましを、死なば同じくばおん親ら點じ給ふ燈の光照る波に沈みたく、かくてぞ舟路を選み候。此世の戀は偕も脆かりし、悲しかりし。來む世にゆりむえにしよ、契りよ、只二世をこそは待ち奉らめ、妾亡き幾日かの後、此文み手に開かれなば。うつろはぬ圓が心よ。親の子乍ら一つならぬを、いかで知らしめさせ給へ、さらば此世に再び懷しき御俤見奉らじ。君は許されたるおん命の限り。慈悲の燈に數多の人の玉の緒繋ぎて幸くおはせ。只此期にも悲しきは身を棄てゝ圓に操立通さする六藏が情け、いつの世にかは報ゆべき。守雄樣、彼が心は哀れとも憐しとも愛で給ひて……。さらば又の世にこそ。さらば。

（評）「疑惑」は作者の筆によりて解かれたり、情に命を捧げたる六藏主に命を捧げたる圓子、二人が堅固なる最後の、それと知れては、[illegible]守、守雄が胸の乾く時なからん、此の篇、[illegible]に



寒聲（賞外）　相撲　岩澤紅梅

溢れて、作れる物とは思はれず。

(又曰) 誰か此の疑惑の解けし後の、守護が心裡の苦惱を描くものぞ。

○病日記

愛知　壽千代

窓押せば額うつ風の冷やかに雨持て來るよ、たゞ見る暮秋の山々疎に綴る梢さびて、空は雲重く、何の鳥か羽音慵げに啼いて行きぬ。

友は藥あたゝむとて去りつ、廣き室の內、人の氣もなく、とみに迫る寒さ寂しさ、襟かき合せて力無き身を柱によれば、野を渡る暮鐘陰々と、さらでも淋しき限りなるに、籬の山茶花、あはれほろ〳〵崩れ落ちて。黃昏の色軒端に迫りつ、室は華やかに火ともりぬ。亦やみもなうせき來るしわぶきに胸つぶるかと許り、窓打ちとざして床に歸れば、身內暖まりて咳も少なうなりぬ。

詫しけれど床起ち出でゝ、大裲抱きつ、詩筆かまんも慵う。横伏しに瞳上ぐれば、枕を守る絹行燈の朧の光面を射て、小さき蛾一つかさに羽搏つ影さしつ。

外には風や吹く、梢を渡る音ごうと鳴りて、木の葉か時雨か、はら〳〵と窓を打つ。言ひ知らぬ物の氣、我を襲ふ氣勢、思はずも眉打ひそむるに、又一しきり風の聲！又一しきり雨の音！

瞼閉ぢてまどろまむとすれど、眼いよ〳〵冴えて、窓打つ風にも鷄の聲かとあやしまれつ、寢ねがてに曉を待つ心の詫しさ言はん方なし。斯かる時父上！斯かる時に母上、其のふたかただに在しまさば、如何ばかり嬉しからましを、身はよるべ無き沖の藻草の、ゆられ〳〵て、たゞ一人なるはらからにさへ分れし悲しさ限りなし。

風やみぬ。雨垂れの音もゆるみたり。空は月や出でし、窓の節目洩る柔らかき光の長く薄う、燈影仄暗き室に流れて、うしろの森には梟かも、淋しき、ものゝ聲するよ。

双手胸に、主の君讃ずるに、身內輕くなりて、我とも知れずまどろめば、怪し、影なき影のそと寄りて、聲なき聲のさゝやき――、

「過去は過去、嘆くをやめよ、唯上に聖なる神を頂き生ける現在に働け。――」……それよ、詩聖ロングヘローのみ敎へぞ、――、驚きて目覺むれば、影もなく聲もなく、友は目かれず我を瞻めつ「覺め玉へりや」といふ。

あゝ由なき事を思ひけるかな、假令身は父を亡ひ、母を先だて、はらからに分れたりとて、友あり、日に夕に傍を離れず目守るものを。――、さるにても美くしきは友なり、愛なり、尊きかな、床しきかな、愛と共に住まんに、我未だ世に捨てられざりしか。

涙徒らに溢れて、み上ぐる友の面も朧ろ〳〵に、時計

は二時を打ちぬ。

（評）淋し。

○小夜中

大阪　越智満壽美

聽くも忌はしい隔離病室に入れられたと言へば、乾度チブスかヂフテリヤか、恐ろしい病氣であつたに違ひない。

天にも地にもかけ換のない只一人の可愛いゝ弟、良ちやんはもう死んで仕舞つたのか、どれ程呼んでも叫んでも、未來永刧長い〳〵眠りから、もう覺めるときは無いのか。

あけて漸う七ツのいたいけ盛り、小さな躰を如何に病に悶えたであらう、他人ばかりの冷やかな手に苦い藥をあてがはれ、淋しいしとねに、病に瘠せた身を横へて、どんなに心細くも悲しく思つたであらう、死ぬる今迄、姉ちやん姉ちやんと絶えず私を呼んだと言へば、死んだ今でも嘸や私を怨んで居よう。

母樣に別れて今日が日迄丸三年、親の無い子は一しほ不便さも増して私はどれ程その敎養に心をつくしたであらう、それにそれに、それ程の大病を煩つて居るのも知らず、臨終のきはに半日の介抱もしなかつたとは…………これでも私は姉なのか！

私は父樣やお墓の下の母樣に何とお詫をしませうぞ、オヽ良ちやん、良ちやんは何故死んでおくれなの、私は、姉ちやんはどうしませう、なぜ姉ちやんも一しよにつれて行つてはおくれてない……

ふと私は目醒めました、聲を擧げて泣いて居たと見えて、泣いぢやくりか未だ止まず、涙は枕も浮くばかり、枕元の明りは淡くまたゝいて、何所か遠くて犬の吠えるのが聞えます、何時もは私の横に可愛い、貌して寢て居る良ちやんが、今夜は父樣と田舍の親類へ行つて留守なのです、夢と知つてほつと息はつきましたが、未だ胸の動悸は收らず、餘り悲しかつたので、又ふとんを被つて暫くは泣いて居ました。

もしもこれが本統だつたら如何でせう。

（評）果敢き夢を紙にする所、女らしき文なり。

○新年の朝

廣島　恒子

明け行く空に天女の歌きゝつゝ身を清めをへ、若水汲まんとて柴の折り戸明くれば晨の氣充ち充ちて、希望の星は紫の雲に見えつ隠れつ。

千世の操と歌はるゝ常磐木の、昨日にも増さる今日の深みどり、吹く朝風に小琴弾きて、君が代を祝ふなど、神代に似たるこの靜けさ、利よ、富よ、名よと、東に西に漂浪ふ人の子も、あはれ今朝はエデンの園に淸き夢を辿りてひゞくは神の呼き！

あゝ、我は望まじ世の富、世の譽、永劫にこの美はしき心抱きて、繪の樣なる小川の里に優しの牛追ひて、平和に田畑耕さなん、老波寄せる父母の暖き心の香に

醉ひて、悔ひなきこの一年を送らなん、かく嬉しき思ひに時の移るも知らざりしが、仰げば東の空は今し白み行きぬ、いざゆきて若水汲まばや、地には鷄鳴の聲高きものを。

(評)　醉れなきは元旦の人の心。

○友!!

小山町　新井琴子

「友!何と懐しい名ではないか」

何者の仕業か、半紙一面に筆太に書いたのが、妾の机の上にあるので、其前に座つた儘、恍惚となつて心の中で叫んだこの讃美の聲が、胸の琴線に微妙の神來を與へて、聯想の絲を其へ〱と辿るのであつた。

と見る妾は今、人生の初旅に登る所である。

白く光る日が漂ふ樣に青葉の中に溶けて、綠影が乳母車の中に眠つて居る小兒に投げられ、其傍には小兒の帽子を掘んで居る母が、大理石の樣な顏に漆の如き髮玉の樣な瞳を折々小兒の方へ向けつゝある。折柄洋裝の口髯美はしい父が、溢るゝ滿足を顏に浮べ乍らやつて來て、無心な小兒の寢顏に接吻しては、抑へ難い愛の血汐を通はせ樣としてる。

若し妾が其小兒であつたら什麽なに嬉しいでせう、けれ共妾は其小兒であり乍ら、矢張り儚い運命の繼子であつたのだ。

追懐の場面は更に變つた。

蟻石で圍まれた墳墓の前に、汚い衣を着た敗殘の俤を帶びた婦人が、六七才の少女を犇と抱いて泣いて居る、それが妾の母と妾であつた。

回想の抜はしい手は不意に妾の眼を蔽つて了つた。

母と別れて花の都に物學び、其間も絶えず運命の手で支配されて居た身は、殆ど無意識に戀にも醉ひ、誇心をも禁じ得なかつた、向上の念が運命の冷い手に抑へられた時も、自然の力に逆く勇氣は無論なかつた。

かくして失意の影に包まれて再び母の許に、云ひ知らぬ寂寥を味ふ身になつた。

片親のない妾は、例へば梶のない小舟の樣、行方定めず運命の浪に漂つて、あらゆる辛慘を舐め盡し、世は罪惡の結合である、僞惡醜の代身であると、堅くも胸に刻み込み、母以外に人を人共思はなかつたが、其反動として、妾は世にも高潔な情深い、眞善美を備へた一人の友を、世に又なく思うて、愛と渇仰とを捧げた事は戀人以上であつた。

有繋に若い心から、一時は此友の爲に捨てた戀ながら、無限の寂寥を感じないでもなかつた、が、など捨てゝ戀人を得たならば、より以上の不安と悲みとを得たであらう。

妾の戀人、それは決して僞りの人ではなかつた、妾を愛する事も絶頂に達してた。けれ共妾はそれよりも友

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

を思ふ情の方が厚かつた。何故と云ふのに、戀人を愛するのは自己を愛する爲なので、自己と云ふ物を沒却したら何と無意味なものであらう、妾は自分よりも友を愛して居た。さうして友も妾を愛する事、妾が友を愛する如くてあるが、若し妾の戀人の誰てあるかと云ふ事を知つたら、友と我とは共に戀を失てたかも知れない。

しかし友は知らなかつたから、今尙其戀人と樂い生活を續けて居る妾は決して未來までも知らさぬ覺悟だ。妾は此懷い友と今は絕交同樣になつて居る、其爲に人は妾を嫉妬でもしてる樣に云つてるが、それは忍び得る、しかし友と親くして秘密をしられ、友の幸福を破る事は什麼しても出來ぬ。友は妾の心を知らぬから、何か怒つて居るのかと、月に二回程は屹度長い玉章を送るが、妾はいきなり飛びついて、十返し繰り返しては讀む、けれ共返事は出さないのだ。妾のこれからの生涯は、母樣と一所に寂寥を味ひ乍ら、いつまでも／＼友に近づかないてあらう。

『友！妾にはまあ、何と懷しい名てあらう!!』

寒菊の說明（賞外）　大阪　橋本加壽尾



（評）友を失はざらんとして戀を捨て、而して又夫を捨つ、題材宜しきを得ざるに非ざれど、筆の之に副はざるは遺憾なり。

○大津の姉を訪ふ

京都　白的女史

三年振に大津にある姉を訪ねて行くので、近江の景色を飽迄眺めたいと思つて居たが、旅支度に時を費し、京都を出て稻荷迄來た頃は、日は最う全然暮れて了ひ、朝より降り續きの雨は、夜に入つて風さへ添つたらしく、折々聞ゆるけたゝましい外の騷ぎを氣にしながら、閉切つた一室に只一人悄然と肩掛を搔き合せて、何くれとなく空想に耽つてゐるうち驛夫の忙しない聲に、山科大谷と過ぎて、馬場より大津線に乘換へ、今度は大津と待つ身には何やら其の步も鈍つたらしくも疑はれ、幾度か焦たがりし後、長く笛の尾を曳いて投げ出す樣に汽車は止つた。手早く荷物を纏めて廊下を傳うて來ると、薄暗い電燈の火影を横に浴びた顏が人待振に覗いてゐる。姉樣だ、姉樣だ、見違ふものか、三年前その儘のお顏を、如何にして混雜を分けたてあらうか、自分は最う姉の肩に取り縋つた儘、歡び極まつて言葉さへ無いのである「甚く遲かつたのね、荷物

は？あ挨拶してますよ。子供が大きくなつてるてせう。」妾は今迄夫とは氣附かなかつた、否、氣附いた今も猶、此程迄にとは思はれぬのを、强ひて三年といふ月日に托つけても見たが、就中兄の、左樣……十になるのが大人らしう莞爾として居るのを見ては、腹の底より驚かぬ譯にはゆかなかつた。妾を先に、子供二人を中に、姉を後に、設けられた三臺の俥は徐かに母衣を御して眞暗な路へ出た、雨はまだしぶいているらしく、折々濕つぽい風が竊む樣に、吹き纒はる氣味惡さに、幾度か肩掛を掛直して、氣遣つた程にもなく、姉樣の顔の健康らしいのに滿足して、獨りで微笑んでゐる、軈て大通りを左に折れて、明りが一杯に窓よりさした家の軒を過ぎると、道は再び闇へ、波の音が微に聞える、十分の後は最う火鉢を眞中に、圓う環になつた六人、姉の次男が珍らしそうに、祖父樣、祖母樣、阿母樣、兄樣、信と、吾名をも讀み込み乍ら、愛想氣もなく妾を取殘すのは、今歲七つのまだ人見知をするのであらう、夕餐も濟んだ頃、叔母樣が來られた、祖母を對手に媒介人めいた格で、頻りと二三の姓名を繰返しては、釣合ふの、釣合ないのと談してをられる、思ふに、天下物事の關係ばかりを考へてゐるものは、枝間の蜘蛛と婦女の外に多くあるまい。談話の興が進むにつれて、笑聲と鼾聲がのべづに入り代つて來るうち、十一時が鳴つたので枕についた明日も雨か知らぬ。

（評）樂しき團欒。

○今と昔

名古屋　宮脇とし子

いとせめて、悲しきうちにも君あれば、君あればこそ、かくてのつらさも忍びてありしを、君なき後の、明日と云ふ日の明日よりは……願ひて得べくばいかならんとも、海路はる〳〵事變る國、人また召もの總て異るとつ國迄も、其曉のうれし樂しきはさるとながら、左迄學の道辿らずとも。

心元なやと女々しあまりの心細さに、幾度そも、聞え上げんとせちに女の髮一筋に、大黎をしも止むと聞く——妾が髮のいかにともあれ、とまれ。

願ひて得べくば、一食一菜はおろか、食をし斷つ事三日が七日、もし、もし——得べくばと、思へば昔のをかし慇かさよ、これ許りはと、其上の學修めんの三年を期しての鹿島立。

お止めせんの、遂に一語も得云はてこそありしか。

夕霧深く、身は空蟬の、何と挨拶せりしや知らず、心は空の、偶と見上げにし太虛遠く、細々と、きらり瞬く……何の啓示の夕づゝ、一夥目に宿りては、あはれ寂しき夕なりしよ。君いにますと、棧橋辿る足取の、うれし見送る……人の數々に見送られしが、はや定めの時刻近きぬとて、わたには名殘盡きせぬを、三年を待てや、と、殿方はかかるものか、輕く禮しぬ。甲板の上に、立ちて誰とか語らひ給ふ美し君が御鬚さへ猶わかぬ迄、霧立迷ふ……暮方を。あはれ、拔錨の汽笛遙に澄渡る太氣亂して、泌々と身に鼓膜破ると……あはれ〳〵。

よろ〳〵と、よろめく身をし母が御手に支へられては辿り來し其夜の家路夢の如う、愍くて其夜の、思出はやも三年の昔ぞ、今は笑の種と也にし嬉しさよ。今朝しも彼地の港よりして、うれし電報の如くんば……錦衣目出度き御歸朝の日よ！

吁、面羞ゆな……聞くに肩聳うれしさよ。

（評）泣きて別れし棧橋に戀しき人を迎へん時の嬉しさ、そも如何ばかりならん。

又曰　徒らに語句の接續を曖昧ならしめたる痕あるは厭はし。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

俳句

巖谷小波先生選評

（賞品 流行絹張洋傘）一等 近江 白菊女

春の水圓き小山をめぐりけり

【評】春水の意寫し得て遺憾無し、凡手に非ず。

二等 越後中頸城郡寺野村 藤原竹子

初雁や明日の米とぐ宵の程

【評】何等の俳趣、何等の詩興。

三等 豐後國直入郡豐岡村字平 甲斐ふい子

朱雀路や牛車ねり行く春の宵

【評】畫卷の一圖。

四等 茨城縣新治郡高濱町東大橋九一 酒葉花舟子

大原やきゞす鳴くなり雨もよひ

【評】記行の一節。

五等 越後中蒲原郡兩川村 五十嵐美波

梅白き宿より出たる少女かな

【評】情史の一篇。

秀逸

白梅や手鞠つく少女美しき　常陸 清子
時雨けり家も小傘も松原も　岩代 岸野常子
高樓のうかれ胡弓や月今宵　讃岐 國越茂子
ほろ〱と竹の皮ちる月夜哉　鶴來町 芳子
干蕪軒にやせゆく冬日かな　播磨 山水羽子

礎幌に一首して去る男かな　田沼町 石井みち子
木枯しや非常汽笛の高く鳴る　下谷 太田樂子
朧夜や我が笛袋落しけり　柏崎町 中村直枝子
仁和寺の椿に遊ぶ目白哉　横濱市 池田政子
初空に放ちて見ばや鶴千羽　下野 岡萩枝子
窯びらき三代出入る男かな　神田區 長井惠美子
柿の木に蔕のみ殘る寒さかな　福島町 河野美子
桒の花や乘合馬車の砂ほこり　横濱 板倉美子
小坊主の炭ついで行く火鉢哉　京都市 白的女史
冬枯の野に狼の足の跡　佐沼町 泉ちよ子
木枯や大根干したる古榎　花袖女
冬の山松四五本の見えてけり　小樽 岩谷綠子
瓦斯燈に灯ともす橋の柳かな　上總 小川くに子
學生の屋根に夜具ほす小春哉　中野村 白鵠子
船人の小謡流すや春の川　總の國 文家菊枝
虫鳴くや月の小川の右左　石川縣 今永君江

Digitized by Google Original from HARVARD UNIVERSITY

俳　句

若水や口も漱がで神の棚　千葉縣　翠葉女史
君行く夜螢は草に隱れけり　筑後國　中島はま子
猫だいてつめきる椽の秋日和　鹿兒島　露萩子
虹たつて夕山ひくき秋野かな　大分縣　首藤露子
世に馴れぬ新妻つゝまき師走哉　仙臺市　黑澤玉露
人の日や前垂はづす小女房　橫濱　敷島小蘭
亡き夫の書き捨て反古や秋の暮　茨城　秋山藍子
月出て丶牛におくるゝ枯野哉　山口　奥田あき子
犬ころの渡り初めけり雪の橋　大阪　倭文子
須磨の月蜑女も打つなる砧かな　三河　ます子
春の雨紅つけられて小猫來る　弘前市　てる子
聞かまほし君初夢を秘め給ふ　伊勢　村田春子
弓張の月飛びさうな寒さかな　德島縣　堤菊香
散りもせぬ杉の枯葉や初時雨　高岡市　北本歌子
梅の宿女主人の留守居かな　麹町區　淺井千鳥子
おりくに鴨のなく音や冬の月　南豐　藤の家瑠璃子
初夢を一家揃ふて語りけり　鶉港　村井はな子
雨の門叩きて蓑を借りにけり　上總　石渡みそい
裏の柿一つさびしく殘りけり　京都市　椽子
殘菊や坐禪の僧のうら若き　長崎縣　佐野穗堂
深草野草刈る人の時雨けり　南總　伊藤一柳女
たちのぼる里の烟や小春風　高峯雪子
初花や戻りの寒き桑田堤　恩方村　橋本しげ子
雛僧の雛僧と殘る寒さ哉　彥根　馬場みつ子
紅梅や佛師かたらず春さむし　神奈川　小島政子

松の内日の吉原に遊び急　伊勢　中西女史花
屋根の草採る人もある小春哉　大和　久保染子
日の丸や日本をつゝむ紀元節　能登　白露子
大鳥の渡る枯野や月白し　上毛　河内とめ子
子關者の炬燵にお伽噺かな　下野國　山田春江子
數の子の桶に降り込む霰哉　小樽區　山下千代子
寒梅に朝日冷たき小椽かな　常陸　酒葉貞子
茶山花や伏屋に宿る旅役者　本郷區　齋藤茂子
春雨や夢のからまる糸車　肥前　柳原初音
水仙に復活の詩を誦しけり　滋賀縣　坂里綸子
大雪や佐渡は何れの波の上　仙臺市　大槻竹村
小羊の夢にも似たり春の月　備後　松本董子
晴衣裳縫ふや小春の青疊　大阪市　淺沼きみ
春雨に琴かりにくる隣かな　群馬縣　磯貝董子
凩の幾禿山を吹きにけり　香済子
秋の池底一面の落葉かな　安藝　さゝなみ
初雪や松にかゝれば松のもの　名古屋　西村浪子
朝寒を博奕に負けて歸りけり　尾張　渡邊霞石子
寒月やポストを去りし人の影　愛知縣　渡邊馨子
寒月や石につまづく下駄の音　本所區　小林千代子
世の塵を避けた色なり水仙花　伊豫　さゝれ子
小春日やさすり佛に光澤のつく　福岡　俊藤良子
誰が家の捨兒や冬の月に泣く　山口縣　西村董子
盆栽の小松に時雨かゝりけり　福岡　坂田登代子
あたゝかき春の雨夜の點茶哉　小樽區　梶水仙子

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

(三) ○召使はれてある弟に

名古屋市上長者町 渡邊卯助方 宮脇とう子

何うして恁うまア、殊には便り少い身の、妾ら二人を世は這麽にも辛くつれなくあたるかと、ほんとに、ほんとに、妾やねえ！
お前の手紙を見た時不思議涙が滴れたよ。龍ちやん、なんで這麽にもいぢらしい……もとは恁うてもなかつたに、何うして恁うも、妾を姉さんを泣かせるのかと、怨みもしました、爾て何共云へない淋い悲い様な……
心にもない此前あゝした強いきつさうな手紙を上げた、あれを眞個と幼な心の眞に受て、もうもう甚麽辛いとが有らう共、二度と再び妾に心配は掛けないつて、十二とは云へ、殊に年弱の、聞けば此節此寒いのに、朝は六時に起きるんだつて、お前は何共お云ひぢやないけ共、妾やわ、ちやんと、もうよく知てるのよ、大きな人達と同じ様に、車も曳くつて。
もしも今、生きてゝお母様がお聞きなすつたら……いえく何うして、行く所へもよう行かないで、六道の辻とやら云ふ、そこに迷うてらつしやるとてせう。龍ちんや！私もこれから猶々一生懸命て働くから、お前もねえ、折角あのよのお母様が御安心遊ばすやう、御主人や、上の人達の云付だつたら、何を置ても厭アな顔はしないでねえ。判つたかい？、皆なと喧嘩をしたり、お使がけに道草食つたりしないやう、今に、立派な人と成てお呉れよ、上でこそあれ妾や女の、唯々それがお願なの。

（評）一讀、泣かんとす。くだくしく姉弟の悲しき境遇を說かざる所、却て妙なり。さるにても此の可憐なる二人の父は如何にして何處に暮せるならん。

(四) ○都の友へ

長野縣岩村田町 大井靜枝子

四方の山々龍田の姫が色衣に、時ならぬ花の眺めをそへし信濃路も、絶えぬ思に身をや燒くらん畑も色てき淺間の嶺に、おく白雪の見え初めてより、朝夕に箒取る手も凍え勝ちに相成

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

り、炬燵の側のみ戀しくて離れ難き時とは相成り候。物の憐れの身に染むものと歌はれし秋も、今年は收穫の忙しさ、さては菜大根の始末、冬衣の洗濯などに追はれて、幸か不幸か、思出の種も涙もなくて過し候。さればにや、常より筆の廻らぬ妾、いよ〳〵筆不精に相成り、お前樣の、幾度かの御手紙にも御返事參らせて、御無沙汰致し候罪いくへにも御詫仕り候。

小春日和の朗らかなる日曜日には、都下幾萬の人を集むと聞く瀧の川や團子坂の、秋の名殘は如何に候や、當方は毎朝雪かとまがうばかり霜降りて、餌拾ふ鷄の足寒げに、湯氣立ち登る井戸端の手水鉢には、玉欺かん氷も見え候。

お前樣諸共其木の下に集ひては、幾日をか飯事に樂しく暮しし、うらの柿、三本とも鈴なりの豐作にて、大喜びなりし弟も、早く凉しう相成候今年は、澁の上らざるに、いとゞ落膽の樣見え候故、先日妹諸共三人にて落し申し候。

惡戯好きの弟が甘さうなるを、木の上にて一人味ひ居るを見ては、騷ぎ出せし妹の頭に柿落されたりとて泣き出しなど致し、二人の笑ひ騷ぐ樣の面白さに浮されて、遂樂しく柿落しに一日を興じ候。

其後夜永の手ずさみに皮むきなど致し、蚕籠に三枚程干柿作らせ候まゝ、お前樣冬休みに御歸りの節、都語り承らん一夜、こたつの上賑すべく候。

春着の代にもと機おり習ひ初め候、腰掛けにこしかくるとはちがひ、何やら胸の危きやうに覺えられ、梭の運びも覺束なうて、亂れ勝ちなるおさの音に、人の笑ひもすらんかと、要なき思ひに心亂しては、遂足踏みちがひて、糸切りなどして一人あわてをり候。

お前樣の冬休みは何日頃よりに候や、積る思ひは其時にもと先づは筆とめ申し候、かしこ。

(評)　海棠衿を脱ぎての田園生活、亦興味深し。
(又曰)　假名遣亂雜なり、ことに「は」とすべきを悉く「わ」とせるは餘りに亂暴也、注意せらるべし。

○鄙より一筆

周防熊毛郡呼坂　河村小藤子

百萬の扇さと散つては誇りかなりし公孫樹もあばれ裸體となり果て候。柿の木も櫟の木も。實に野に山に初冬の面影は見え候。さりながら龍田の姫が射給ひし寂寞の征矢も、人の心には仲々中るべくもあらず候。それもその筈今年は三割方の豐作にて候。

輪を劃いて高く舞ふ鳶の聲は碧瑠璃の空を劈き、株跡淋しげなりし十町の刈田原も大方は耕されて、世は稍閑になつて候。されば御存じの新田のお作も好太郎の許へ嫁ぐ由、明晩はその輿入にて候。小弟はお許の靜雄さんと見に行くなど申し居候。

今年も近い内に村芝居の候。下男の銀なども出演する

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

由にて夜分など稽古致し居候。藝題は何とやら申せしが、一寸思ひ出さず候、畠打つ折々われを忘れて臺詞など聲高に申すが可笑しうて姉と共にほゝと笑ひしこともこれあり候。父上の羽織を仕上げて少時閑なるまま背戸の邊へ散歩試み候。烏瓜赤う崩れかゝれる垣根に交はりて熟せるを、小鳥一羽啄み居候ひしが、風音に驚きて飛び去りたる後に、黄白の殘菊二輪、姉妹の如くに并び立ちたる風情、愛らしとも愛らしく候。お隣の『美いちやん』を抱いて鯉に餌飼かたびに花折りてよとせがまれし池の蓮の、見る影もなう枯れ果て候ひしことよ、折から不圖見下せば、怖や！何より嫌の蛇のぬけ殼の候ひき、妾は得堪へず急いで室にもどり候。時雨催すか稍薄暗うなり候、最早日の暮れるにか、さては少々用事もこれあり候へば此度はこれにて失禮致し候益御身御用心の程願はしう候。あら可笑しや只今街道を阿呆陀羅經を唱へつゝ四十男が通り候、あら／＼かしこ。

（評）鼓腹撃壤、世は冬ながら、和氣融々。

年のくれ（賞外）　大阪　俵文子



秀逸

○都の姉君へ

鳥取縣西伯郡渡村　門脇まさ子

姉樣昨日は御手紙難有う、花の都にも雪が四五寸積つたそうて、さぞお寒い事でせう、里にはもう一尺も降つて寒い事はお話しにもなりませんが、浮世を外の故郷のことですから詩的なことは又一しほてあります。

背戸の柳の梢もやせ衰へて、垣根の山茶花も雪のために淋しう俯垂れ、前栽の菊も大方枯れて、小さいのが二本、姉妹のやうに抱き合うて搖ぎ悲しむ樣も、何となう愛惡しう、すぎし年お祖父樣がお手植の寒梅も竹椽の小鉢に淋しうほゝ笑んで、手水鉢の傍なる桐の枯枝に雀が來て千々と囀り飛ぶ所なんか、どうして、どうして都に居なさる姉樣の想像の及ぶ所ではありません。

夜は大抵行燈一つて埒をあけて、一家四人が六疊の間に打寄つて爐にどん／＼榾をくべ乍ら、お父樣は弟を

相手に色々な昔話、お母樣は木綿車、妾はお針と、夜が更ける迄の浮世話、弟が爐傍でいつかすや／＼と美くしい夢路を辿るやうになると、あの濱寺の鐘がボーンと寒さうに響き、三毛の小さな瞳が闇から光る恐ろしさ、しかし之も毎晩の興であります。まあ、月日のたつのは早い者です、三毛も今年で三つになりましてね…………さよなら。

（評）田舍の冬景色、覩るやうなり。

○生活の近況

攝津　なてしこ

閑雅なる別莊の御便りに引かへ、御想像も及ばぬ面白き長屋生活の有樣を申上候、兼ねて御存じの妾が宅、前は共用の水道、即ち會議場にて候、まづ朝は早起の車夫の女房、水の冷かさ加減をふれ廻り、他の家も追々起き、朝飯の仕度にかゝり候、亭主の君は職に出でられ、あとは例の水道端に會議始まり、今日は、家主の娘が離婚問題にて候ひき、眞盛の時は米とぐ音も、洗濯の水音も聞えず相成申候、とかくする中に振り賣りの鰯屋よび込み按摩の細君主將となり、談判致し、結局利あれば晩の馳走に候、其如才なさ、たしかに外交官の價値有之候、されど君、卑しとな見下げ給ひそ、かゝる中にも云ふべからざる樂しみはあるものにて、金殿玉樓中の人も味ひ得ぬ趣も有之候、親子の愛、夫妻の情などは、實に濃かなるものにて、忙はしき生存場裡に疲れたる夫は歸り來て家内打ち集ひ樂しき語らひをなし、活氣を新にするなど、げに平和の女神の在すならば、此長屋には常に宿り給はんと存じ候、まづは右まで。

（評）此の樂や富貴を以て購ふべからず。

○溫泉より

飛驒　あやめ子

彼方の四邊に尾花の咲くがまゝ、涼しき風に送られながら、去りぬる日、妾はこゝ蒲田溫泉に着、入湯いたし居り候、此處は船津を去る、七里の山奥に候へば、人家とても僅か五戸に過ぎず、語らんに友なく、さらぬだに淋しき秋の、秋雨寒き夕ぐれ、虫の聲細き夜半等、いよ／＼秋の山里の詫しさを感じ申候、されど、只樂しきは、よべの名殘りの星いと淡き頃起きいでつ、湯あがり肌に朝風の心地よう、橋の上に佇む頃、ようよう東の空は明けそめて、金色に紅に、さては紫に、見る／＼、霧を破りて登る、朝日を眺むるの一事に候、その神々しさ、身も心も澄みゆく心地せられ候、噫、妾にして繪筆持つ手のあらば、かゝる美はしき景色をも寫して送らましものをと、今更ながら口惜しく覺え申候、尙申上げたき言葉は、かず／＼候へ共、何も何も後の便りにと申殘し候、湯の宿に歌語りせむ友もな

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

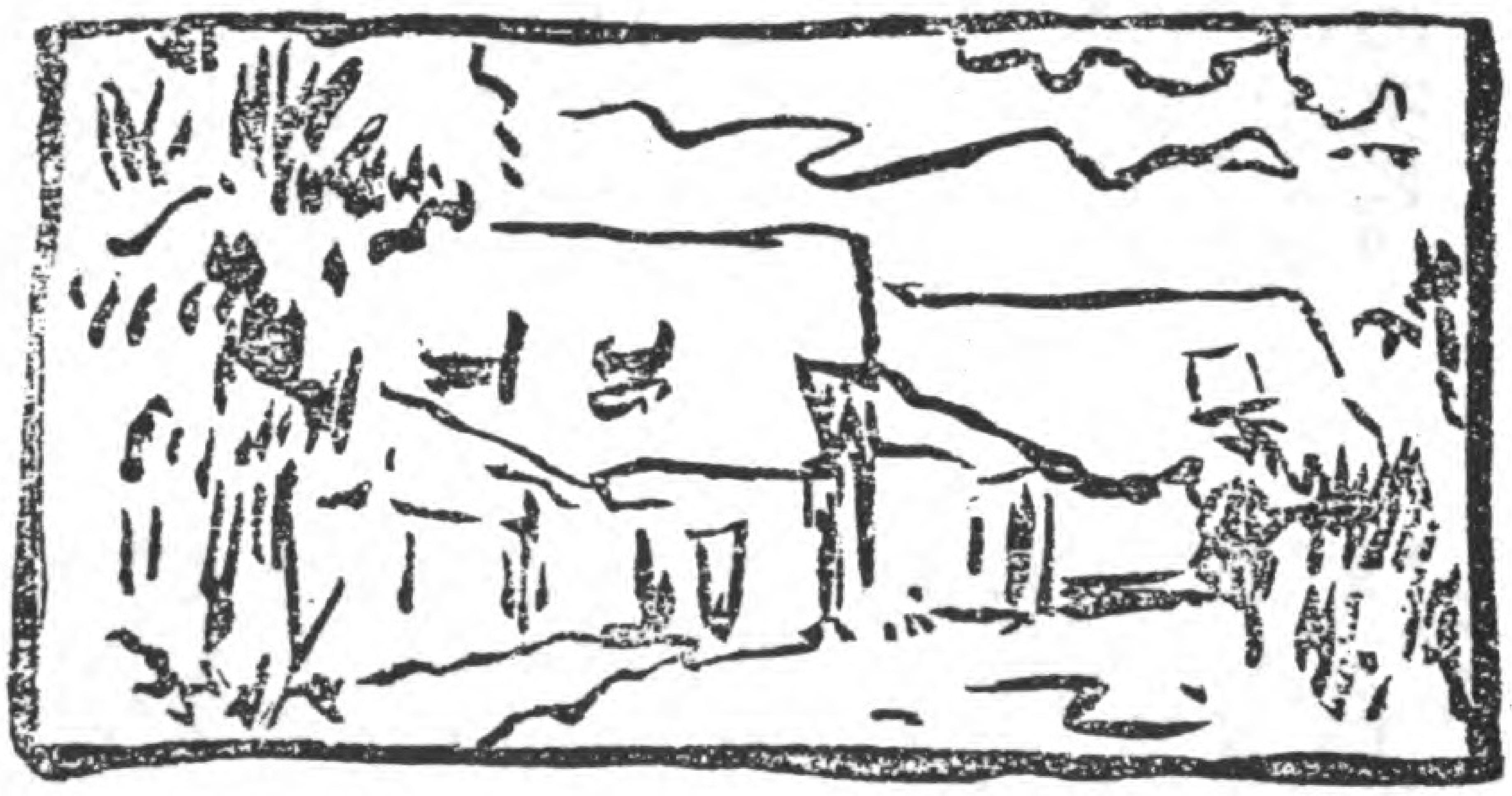
く、秋雨寒う萩の花散る。

（評）山氣身に泌むを覺ゆ。

○人への返し

學舍にて　平　子

花さく時をも知らぬ深山木の、埋れはてゝのみ暮し居り候を、いづ地の風の吹き送りけん。先つ日はゆくりなくもかぐはしき御玉章に接し、心も空に幾度かくり返しくりかへし拜し上げ候。さるはかかる身を何の思召おはしてにか。學びの道の友として文の林に分け入らばやとの仰せ、いと嬉しきものから、なか／＼に恥しさ限りなく、せばき胸の樣々に思ひ亂れ、御返事聞えんよしも候らはずなむ。されど御心こめられし御ふみに對しかくてやまんはなめげならむと申譯ばかりに拙き筆とり申候。何のなし得たる業もなしなどつゝましげにのたまへど、ゆかしき御文の詞、扨はうるはしき御水ぐきの跡に、よろづの御事までおしはかられ、いとゞ御なつかしくおぼゆるに付けても、世に後れたる身のいと口惜しうなん。たぐひなくやさしき御心をしたひて、友垣結び給ふ御方もさてそおほくおはしますらんを、如何なればかゝる言ひ甲斐なきものにての御言の葉賜はりしかと、いぶかしくも亦嬉しくも存ぜられ候。されど何を申すもこの不束者、友となし給はん價は候らはず。たゞ／＼敎へ子ともおぼし召して萬事御指南相願ひまゐらせ候。ゆくりなくもよき師の君えつと姉にも語り聞け悅び居り申候。御寒さのみぎりわざ／＼にては恐入候へ共、もし此の邊御通行の折もおはしまさば、御立寄下さるまじくや。何の風情もなき伏屋ながら汀の蓮もはや咲き出て候を。柴の戸にうき世のちりへだてたる御物語も承らまほしく、軒の松風切にふきわたり申候。時節柄一入御身いとはせ給ふ樣くれ／＼も念じ參らせ候。聞えまほしき事はさはながら、えせぶみの長からんも如何とて餘は後便にゆづり申候。先はときめく心をしづめつゝ、右申上候かしこ。



雪の家（賞外）　上毛　河内とめ子

（評）作者の謙讓なる、人がらさへ見えて、ゆかし。

○めしひの妹より

神戸　一　少女

姉樣、御手紙ありがたうございました。いつもに變らぬやさしき御言葉まことにうれしうございます。例の通りばあやが泣きながら讀んで聞かせて、くれました。

盲目の泣くのを見たいと云つて皆に笑はれた事もありましたが、今は自分がめしひとなつて毎日〱涙ながらに日を送つて居るのでございます。花ちやん雪さんなんか、お正月にいゝ着物を着てかるた遊びをするのだて、樂しんで待つていらつしやるけれど、私などいくらいゝ着物を着ても、自分の目には見えないし、大好のかるた遊びも出來ないのですもの、ほんとに悲しうございますわ。

これも皆運命てございますから私はあきらめて、花さんや雪さんがお正月を樂しんで待つていらつしやるかはりに、姉樣に逢ふ日を樂しんで待つて居るのでございます。てすからあんな事を云はずに一日も早く歸つて頂だいな、お頼みてすから。

なつかしい御顏を拜する事は出來ませんけど、やさしい清い御聲を早く聞きたいのでございますわ。

それから、いつも御心配をかけて居ましたあの事ね、やはり琴と八雲とを、專門にする事と、きまりましたからどうか御安心下さい、くはしい事は又此の次に。

さやうなら

十二月末、ばあやに書いてもらうたのです、

（評）此の文手にせば姉君もいかで歸省せずしてあらるべき。

○逆境の友に

京都　濱部郭公女

御手紙繰返し〱拜見致候、讀み行くにつれて御前樣の目下の御境遇さぞかしと泪は幾度か袖を濕し申候、凡て人として此世に生れたる以上は、何人も運命てふ者には打勝つ事の出來ざるものにて、たゞ其の運命に從ひ、よし苦しき逆境に陷るとも、心を落さず、前途希望の爲めには目下の苦境を微笑を以て忍ぶ樣なる女こそ實に眞の貞女に御座候、逆境は人をして玉と爲すとは誰やらの言葉にて候が、是は實に尊む可き金言にて、人間の意志の強弱の如何は、逆境に陷りし時に表はるゝものにて御座候、御前樣も武士の家に生れた娘、申迄も無之候へども、夢々家名に疵つくる樣な振舞なさるまじく、特に御願ひ致し候、彼の嚴寒に咲く梅は霜を凌ぎ烈風に堪へ、あらゆる苦と戰ひ、終に彼等に打勝つて、かくも氣高くかぐはしき香を放つにては候はずや、これと同じく人の光もあらゆる艱苦と奮闘し、是等に打勝つて始めて表はるゝものに御座候、抑も人間の行路を譬ふれば恰も港を出づる船の如く、長の航海中には激浪に遇ふ事も有る可く、暴風に會する事も有るべし、唯全力を竭くして彼等に堪へ、己が志す港に達する者こそ是れ即ち成功なる者にして、御前樣は今其の激浪暴風中にある時にて、これに打勝つは實に意志の堅固に他ならず候、まだ〱申上度は山々之あり候へども、仕事もせはしく候ゆゑ、これにて筆止め申可く候、呉々も御身大切に前途の光明をたのしみに全力を御竭しなさるゝやう切に〱のぞみ居候。

（評）好敎訓、好敎訓。

新歌謡 編輯局選評

一等　秋田縣平鹿郡里見村字高島　佐々木貞子

眞んに口惜しあの人故にお嫁ざかりもはや過た

婉曲。

三等　伊賀上野池町　山村りやう

わしが草刈る前行く汽車にのつて行きたや東京へ

東京の二字清新。

四等　弘前市　てる子

天のみ母がつむ綿弓の弦がきれたか春の雪

神韻。

五等　下野　きむ子

下に白むく間にひむく上はつるかめ縫ちらし

綺麗。

秀逸

◯朝も早やうから一番荷を出そと急ぐ蜜柑のせどり舟　紀伊　文子

◯廿五反の錦帆あげて眞珠船くる春の海　愛知縣　渡邊馨子

◯月は東のお森の上に汽車の煙は西へ行く　美濃　紅梅女史

◯汽車は出來たし電車も出來たそして電話も電信も　西ノ宮　森井せい子

◯私や十三て初めて奉公鳥のなくにもきがおける　酒田　柳子

◯妾わ木屋瀬裏家の住ひ金剛山とは差向ひ　筑前　白百合

◯須磨の浦から明石の姉に電話かけたか松の風　沼津　落花一片

◯妹十七室咲くうめよ白い愛をば誰れが手に　宇都宮　柏屋喜久子

◯月のご殿へ雲にて上り妾し見たいは花の宴　安房　内代信子

◯出舟入り舟この年のくれ海の上までいそがしや　美濃　みち子

◯雪に埋れた御墓の前に両手ついたる跡がある　紀伊　田中とゑ子

○　相樂なでしこ
沖にこぎ行く小舟がござる波に見えたりかくれたり
○　岐阜　智恵子
秋は刈り入れまだいそがしい春が來たなら伊勢まゐり
○　明石　すみれ子
私しやこひしき明石の里に母と二人ではたを織る
○　遠州　絹村松花
臼の軽るさと樂しい歌と唄ふ心地や米となる
○　若松市　田中紫女
島田髷より丸髷よりも當世はやりのひさし髮
○　川越在　船津千代子
わたしや十八肩上げ取つて赤い手柄で島田結ふ
○　姫路　松の二葉
ことし／＼と改良論にまたもことしの年を取る
○　下總　以波瀨野　富子
主もないのに小島の蔭に女神乘せたか捨小舟
○　大分　松木露子
今日はよい日だ繪をかきませうか出てゝ遊ばうか文書うか
○　石川縣　今永君江
日頃愛して育てた鷄が春を告げたよさきがけに
○　淺草　百合女
月の世界にや繪かきも住むか露を流した今日のやみ
○　近江國　千鳥子
今は師走で忙かしけれど月が凝れば本を讀む
○　松山　孤蝶女
松の樹下で初日を拜む尉と姥との睦まじさ
○　小田原　伊藤吟花
ひとり娘が何嬉しかろ傭になる樣でならぬもの
○　紀伊　久子
畝傍山より北原見れば遙か向ふに奈良の山

○　兵庫　野菊
始め行く時車で行たがこん度踊りは自轉車で
○　群馬　かるかや
誰が畫いても目出度いものは不二のお山の初日の出
○　下總　藤崎美奈子
ひとり娘が何嬉しかろ姿や淋しい妹ほしや
○　陸中　正木志らはぎ
わしが願ひは苔路の奥の百合と一夜を契りたい
○　信州　秋濱子
窓の水仙氣だかい姿がはづかしい
○　信濃　有賀まさ子
汲んでさゝげる此の若水に母が昔も映したい
○　横濱市　齋藤とし子
父と母とを上座に据えて坊がお屠蘇の酌をする
○　岡山　永原多計子
泣いて別れたあの人さへも今に一度のたよりなし
○　淺草　大沼象江
夕べみた夢まさ夢なれば姿うれしい身のほまれ
○　丹後　杉本しげ子
田舍娘と笑しやるけれどお茶もいれます花も活る
○　鹿兒島　前田みは子
兄は軍服わしや袴きて寫つた寫眞を母君に
○　埼玉　田舍乙女
見せてやりたい都の君に私が稻刈る此の姿
○　陸中　三光女史
お花十八村一番聞けば近頃嫁ぐとか
○　廣島　恒子
花の姿を鏡にうつしひとりほゝゑむ戀娘
○　京都　樋口波岡女
京の娘はかづらのやうに油でかためた島田まげ
○　靜田　長井富美子

鶴が巣なくむ出石の松に初日キラ〳〵雛が鳴く

○遠江　大石よし子

睦の私にやさんご珠よりもさして嬉しい梅かざし

○上總　香山梅子

窓へ影さし障子の梅にとまる鶺尾がうごく

○阿波　内田茂子

内の娘は野に咲く百合よ小野の小町が落し種

○長門　田坂濱子

母は洗濯妹は勉強私しや粉を引き歌をよむ

○神戸市　大谷秋月子

松に育つたちゝりてさへも末にや別れて地に落ちる

○博多　露子

百合に抱ける風露汲みて病む眼ぬぐへと君が云ふ

○下野　石井みち子

金風動草かけたる胸のひかりかゞやく初日出

○野島　節子

私しや山里柴刈娘小鳥合手に柴を刈る

○秋田縣　佐々木園子

小春日和に眠れる胡蝶も醒めて舞ひだす菊畑

○茨城縣　秋山眞子

ねづみ小紋の三枚がされ今日は着初めて初日見

○横濱市　吉川香都子

初日うらゝに天の戸あけて千代の色そふそのゝ松

○神戸市　大谷しはす

私しやお庭の五葉の松よ今宵切られて榊棚に

○金澤　和田倫子

梅香匂ひの墨すり出して書いて出したる新歌謠

○兵庫縣　酒見村子

潮に初日を浮べて寄する霞色織りたや初春着

○小石川　吉田斐子

銀の冠した水仙が女王めかして咲いてゐる

○尾張　河村林子

百花匂へる女子文壇を[illegible]清めて今朝も讀む

○靜岡縣　藤本靜江

修業〳〵と都に出れど修業するのは金使ひ

○麹町　淺井千鳥子

富士の白雪はつきり見えるいつも見ぬは淺間の煙

○陸中　若生なか子

わしが生れは東北田舎馬のたづなて日をくらす

○飛驒　武藤美代子

たらぬがちなる私の家に餘りあまるは今朝の雪

○伊豫　酒井白百合

今は淋しいかれ野も時を待てば笑顔の春が來る

○明石　孤蝶子

秋の暮れから紡績いだ糸て初春織るのにいそがしい

○豊橋市　ます子

君は若狹へ妾は京へこれも別れか三井の鐘

○三河國　長坂よし子

春はよいとき百鳥ないて野にも山にも花が咲く

○本所　矢澤いと子

庭の梅咲きや障子の中て島田ゆかしい琴しらべ

○のひとき子

なんぼ親でもそう壓しつけになさるとわたしは馬鹿になる

○大分　丸山たか子

羽織模樣は紫桔梗蝶々ひら〳〵舞ひ來る

○相模　山女

女波男波と寄せ來る中に何時も變らぬ鴛鴦の戀

○沼津　花舟子

わたしや深山のまきがり娘江戸と言ふとこまだしらぬ

○京都　橋本八重子

里の畠に買て植ゑたお米出來たよ二百萬

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

○自殺と道徳

京都　白的女史

自殺を道徳上罪惡とするは、個人より見たるにあらで社會より見たる也、社會に盡すべき筈の個人が自分勝手に自殺しては社會が立ゆかぬ故、自殺するな、死ぬる迄働きて社會につくせとの意也。個人より見れば餘り虫のよすぎる註文なるかも知れず、されど一般にかく言ひおきて丁度良き也、即ち道徳上のかけねと云者也。自殺が道徳上の罪惡也と云ふも賄賂を取つたり詐欺取財したりする樣な罪惡とは天壤の差あり。猶社會上より嚴密に言へば不養生なるも罪惡也。酒を呑み過すも過度の勉强するも罪惡也、其他一擧一動罪惡となるもの多し、如何に社會につくすが人の義務なればとて、萬事冷かなる倫理學上の說法で律せられては、堪つた者に非ず。自殺其事は道徳上の罪惡としておくは都合よけれど、自殺者其人を冷かなる倫理學で判決するは餘りに殘酷也。生命保險會社にても自殺者を病死者と同樣に取扱ふものあり、然るに世の倫理學者等云ものはそんな事には御構ひなく、人を人と見ずして生きたる器械と見て冷かに取扱ひ給ふ也。

人の生を珍重がるの情は萬古不易なるべし、然れども千萬年の後、人口殖過ぎて、地球に容れられざるやうにならば、自殺が却つて道徳上の善事也と、倫理學の學說も一變するなるべし。造化はぬかりなし、天災を以てし疫災を以てし、戰爭を以てし、不完全なる社會を以てして、人口の殖過ぎざらん事を計れり。人間社會に愛想つかして自殺するは、自から死したる樣なれど實は造化が殺したる也。生存競爭に敗れて病をかもして早く死するは、自殺したると同じ事也。自殺者や病死者やらは、生存競爭場裡の敗將也、敗兵也、昔情を知れる武士は敵將の首を厚く葬りたりき、今の生存競爭に勝ちたるもの、敗將、即ち自殺者を冷やかに見下して、道徳上の罪人也、意志の弱きもの也と嘲る、知らず、卿等は木石乎。我は斷言す、自殺者は必しも非難すべきものに非ず、死ぬるなら人に厄介かけぬやうにせよ、世には生きゐて社會に用をなさず、却つて害を流す者多し、かゝる人の死は生に優る、生きて社會の邪魔する者

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

死して初めて社會の用をなす也。之を例すれば父祖の遺産に徒手遊食する富豪、富豪の脛をかじる政治家、老婆の臍繰金を捲上ぐる坊主、義損に名をかる事業家、ゆすりの壯士、門付、物貰ひ等のあらゆる乞食の類、身を殺して仁をなさば至極結構也。

(評) 縱横不羈、冷かなる社會と偏頗なる倫理學とを嘲り、次に酔生夢死の徒に罵りの鋒を向けて殆ど完膚なからしむ。

(四) ○くりごと

福島　わかぐさ

纖弱き者、其名は女也。といふ語が屢見られますが、何といふ侮辱極まる聲でせう。何といふ同情の薄い冷かな語でせう。かの弱い一片の紙すら、障子の骨に貼られては、よく土石を飛ばす狂風も凌ぐではありませぬか。麻桿三本て大鼎の覆らむとするを支へた噺は、昔の童話に殘つて居ます。女子の本領天職がこゝにあるものとしたならば、纖弱き者必ずしも女ではありませぬ。柔必ずしも最後の柔ではありませぬ。

米麥粟等穀類より、野菜果物さては一葉一根の草に至る迄、地によりて其收獲を得る物は、吾人共に豐饒滿作、よきが上にも猶よかれと望まぬ者はなく、日一日と焦慮苦心、其效果の、より大に裕ならむ事を求めて止まぬてす。しかも歳に豐凶あり。天に異變あり、毎に恒に圓滿なる十全の好果を收め難いのは、一は地の利に耕す其人の勉否如何にもよれど、五風十雨の來す所、天の意に語ふ事の適否によるのです。若し夫れ一度天意に逆らうて、少しも季節寒暖を顧慮せずに、耕耘栽培の業を執つたら、果してどんな結果に陷るでせう?

夫は天也、侵す可らず。婦は地也、悖る可らず。古人の教訓これ女子が守るべき第一要義てはあるまいか。針のゆく道に從ふ糸の、しなやかに通りてこそ、思ふ衣が美しう縫ひ上がるのではありませぬか。若し糸にして節あり、針に應ぜぬ物であつたらどうでせう?夫唱へて婦之に和す。家庭の平和、一郷一國の繁榮も之より及ぶのです、女子が寤寐にも忘る可らざる本領ではあるまいか、

1=1はまだ數の範圍に入らぬ。1+1=2.2−1=1.となり、始めて數の系列に入るといふは何故でせう?生れで育つて大きくなつたのみては、まだ人といふ系列には這入れませぬ。子となり、親ともなつて、始めて人の系列に入るので、兩性相擁し相助けてこそ眞箇價値のある人間が成立するのです、ご覽なさい、人といふ字を。男は外にノ延び、女は内に乀助けて居るではありませぬか。しかもノが餘りにのびすぎて、乀が之に相應せぬものや、其反對になつて形成された文字の象はどうでせう!將亦その一片を缺いたならば……甚だ

醜い不完全な、不具な人となるではありませぬか。運筆の順序から見ても、自然にこゝに無量の妙味が含まれてあると思はれます。

日に月に開けゆく世の狀態を見聞して、そゞろに聖代の辱さを壽くと共に、唯何とはなしに斯樣な古めかしい感想が、この小さき心胸に湧くのであります。

（評）言はむとする所をよく言ひ盡せり、愉快なる筆路、

（五）

○農業

岡山　しらゆき

我國は古より瑞穂の國と呼ばれ農業を以て本とせし國なりき、然るに今の世の人の多くはこの重んずべき農業を以て賤しき業の如く心得、甚だしきは農家に生れてなほこの業をなさざらむとす實に誤謬の甚だしきものと謂つべし。ワシントンは言へり「農は人の職業中尤も高貴にしてまた尤も有益なるものなり」とう、べなる哉。

もし此業にしてあらざらむか、文明の利器いかにに多くとも、何によつてか利用し得べき、吾人の日々生を保つはそも何によるか、吾人日常の居住何によりてか得たる、吾人の躰をおほへる衣服はそも何處よりか得たる、日進月歩の今日の世、文藝日に進み、工業日に隆盛に、商業また日に繁榮を極む、あゝされど何れかその原料を要せざるものぞ、何れかその農に恩澤を仰がざるものぞ、いたづらにその本を忘れて末をのみ貴ぶ、何ぞそれ誤謬の甚だしきや。



わらじ作り（賞外）　佐渡　吉田住江

農をいやしむものは曰はん「粗食を食ひ粗衣をまとひ、終日汚物を扱ひ手も足も泥にまみれ田圃を己が天地となし、使役するはたゞ其四肢のみ、これ高等動物たる吾人のなすべき業に非ず」と。あゝ誤謬も亦甚だしき哉。憐むべし、かれ等人生至大の幸福の何れにあるかを知らざるなり。怒、憎、恨、妬、あらゆる汚らはしき浮世の濁浪に泡沫の身をよせて、浮雲のそれの如き名利を希ひ、四肢を勞せずしていたづらに一攫千金の利を得んとし、日々の苦しき生計に貴き頭腦をなやまし、しかも外面には富裕をこれ衒はんとす。陋劣なるかな其心事。四肢はこれ用ふべく與へられたるものならずや、手足は汚れは淸き小川にそゝぎつべし、心の汚れは何物にてかそゝぐべき、外面を衒はん心なければいたづらに頭腦を勞する事もなく、自ら作りて食するなれば明日の生計に心をなやます事もなし、空氣の淸らかなる中に自然の風光をたのしみ、雨ふる朝、

風ふく夕、孜々として其業にいそしみ、終日の勞はこれを家庭の團欒によつて慰む。何ぞそれ其心事の高潔なる。

見よや日每新紙に上るいまはしの記事を、大かたは塵深き都の空に生ぜしものならずや、田圃を己が天地とせる清き農民の間にかゝることのいと稀なるを「恒產なきものは恒心なし」とうべもいひけりな。

我はいたづらに農業にのみ重きを置き、他の諸職業をうとんずるものにはあらず、たゞ農業を卑賤なるものと思做せる人達の爲に、そが誤謬を解かむとするのみ。誤れる人達よ、手足の汚れは淸き小川にそゝぎつべし汚れたる心事はあはれ何にてそゝがむとするか。

（評）平凡なり然れども眞摯なり論文としては最もよく整へり。

秀逸

○朦朧の詩趣

三河　金田蜜香女

朦朧！そは詩趣の漲り渡れるものならずや。

佐保姫の裳裾を低う棚引ける霞の奥より漏るゝ月かげに、奇しき思出の多くして胸にせき來る靑春の血潮は張らん許り、空想は空想を呼び、言ひしらぬ苦惱と煩悶とを覺えし時、花の香ゆるう袂に泌み入りて、妻琴の韻微かに聞えたる、實に詩趣の漲り渡れるものならずや。

陽炎は野を包みて、若草の香り空に高く、例へば靑春の胸に愛の炎焰の燃えまさりて、五尺の人の子が物狂はしき追想の怪しき幻の影追ひては若き血潮の煮えかへる如、菫笑まひ、胡蝶飛ぶ此の野邊は、今し野火の爲に燒かれて、ひばりは己の巣に迷ひ、煙の中を飛び交ひ、一天朦朧として、小羊は遠くのがれ、牧の子がはらばひて吹く草笛の調べかすかなる、亦趣き深し。

七彩の浮雲、嶺をはなれず、綠葉露を含みて、海人が夢とはくれ行くなる朝汀、磯馴松の間より仄かに見ゆる白帆影、詩的趣味淺からぬものなり。

夜未だ明けやらずして淡墨の彩色繪の如き霜の朝、朝餉の煙空になびきて、藁屋の奥に一聲雞の鳴けるも趣味淺からず。

朝露未だ晴れやらずして、朧ろげに眺めらるゝ鎭守の杜、線香薰ずる朝風に送られて柏手の音淸く澄める、亦詩趣深きものなり。

岩にさゝやく里川の遠く紫霧の中に縫ひ入る邊、夢まろやかなる翡翠の汀の杭に、胸の和毛を朝風に弄らるる、亦趣き淺からざるものなり。

朦朧そは詩趣の漲り渡れるものならずや。

（評）一斑を知るに足る。評者も甞て「朦朧の詩趣」てふ一文を作れり

載せて「さへづり」にあり折あらば御一覽を乞ふ。

○ゆき

紀伊　森井春圃

雪といふ文字の見るから。忽ち寒さを覺ゆるこそ可笑しけれ。さはれ、心の自ら淸く澄み渡るはいと嬉し。

芭蕉は、いざさらば轉ぶ所までと、風流の心を起し、さる人の、これが雪なら錢儲けといひしこそ、商人根性の見え透きて卑しけれ。俗ても大雅と大俗とは、かかる差別の生ずるものにや。

何事も少きを愛づる世とて、京都の人の、初雪に、詩歌連俳と打興ずるを、北國の人は多きに苦み雪籠りして炬燵を抱へて鄙汁に腰を執りつ。

ある女は、我が子なら供にはやらじと謳し、さる人のあれも人の子樽拾ひ、と同情を表したるは、いづれも溫き心の籠りて尊しや。

佐野の渡しに雪降る夕、旅人はいかに見るらむ。これを雪見歸りに、竹屋の渡し呼ぶ雅人と比して孰れぞ。

忍ぶ戀路を雪に首尾して、卵酒暖めて待つ心の中、過ぎてし方行末のこと胸にたゝむも嬉しきや。

支那のなにがしは雪を積みて書を讀みたりといふを、何處の白痴ぞ屋根船に化粧のものを携へて、錄きものを無三と散らすとは、その終りは何れ、貴家と唐樣で脊く仲間なるべし。

一門の榮華その極に達したる平族の、あはれ雪中母の懷にありて、呱々として乳房を求め居たりし綠兒が、後年、鵯越に奇計をめぐらし、さては又壇の浦に活劇を演ずるの大立者とならむとは思はざりしならむ。驕者不久矣、さりとは、末路の果敢なさよ。

吉野山中、雪に埋れし道踏み分けて、泣々源廷尉と別れし靜の心裡は如何なりしか、思ひやるだに痛はし。

劉備未だ志を四海に得ず、草廬に三顧して臥龍を得たるも雪の日なり、さては櫻田の落花狼藉、開國第一流の偉人を失ひしも雪の日なり。和漢所を異にし、事を異にすれども、何すれぞ、この日に忘れ能はざるの紀念を作りしことの多き、そも〱汝に心ありてか、さては又天のそれを汝に命じたまふ所なるか。

元祿の昔、山鹿流の陣太鼓を雪中に響かして赤穗浪士四十七名、首尾よく取りし吉良上野が首級は、如何に久しき昇平に馴れて骨も、筋もなき海鼠武士の迷夢を覺したりけん。

さる家の婢女の、雪降りし晨、睡き眼を擦りながら凍る手に釣瓶繩たぐり〱て兩の手桶に盈々と入れつ、前鼻緒緩き足駄を踏みしめて、とぼ〱と提げ行く姿これを自己より大いなる竹の子笠を冠りて、破簑を地に引き摺り、聲を顫はし蜆や蜆と賣歩く小僧と比べて何れか哀れの深かるべき。

雪よ、雪よ、我は汝を愛す、農夫が豐年を祝する如く、小兒が雪達磨を弄ぶ如く、小犬がその中を驅け廻るが如くに汝を愛す、或時は愁も汝が美しき姿によりて慰められ、或時は悲しみも汝が淸き心によつて忘られぬ。吁、これ汝に向つて謝すべきか、將又皇天に向つてこの賜を謝すべきか。

（評）雪のさま〲面白く描かれたり。

新笑話 編輯局選

第三

○初奉公

栃木縣流岡町　榮谷 德子

奥樣「おまいは初奉公だといふが、なかなかすれて居る所を見ると、左樣でもないやうだね」

下女「どちら樣でも左樣申されますが、全く初奉公でムいます」

第四

○理　髪

千葉縣山武郡成東町字宮前　吉原靜江女史

お客「お前の剃刀は如何して毎も切れないんだ」

下剃小僧「切込んだ時深く入ると不可ませんから」

第五

○小説家

上總國長生郡新治村桂　小川くに子

小説家「私の小説は御採用にならんでしやうか」主幹「どうもアノ儘では」「どういふ譯で」「餘り長過ぎて」「ぢやア如何いふ處を取つて除ましやうか」「左樣さ標題は大變善く出來てるからアレ丈け殘すことにしやう」

○倹　約

北越 ほん太女史

醫師の妻「貴夫、も少し倹約をなさえな」

夫「此の上の倹約が出來るものか」

妻「いゝえ、お藥のお安いのをおつかへなさいよ」

○無錢電信

廣島 文江

鄙郷の水兵「軍艦では無線電信がやられます」

村會議員「夫れは公用だもの錢はいりますまいよ」

○禮儀知らず

三茶町 増子光子

ヘイカラ女學子郷里の大道を濶歩中向より來る人とすり逃ひさま失敬な禮儀知らずめ人の右を通つて。

○外　子

香川縣 はゐ系

お母さんと姉さんとがお饒りの文子さんは旦那樣の外で出けた子だと話して居ると傍て聞いて居た君ちやんおやまー寒かつたどろーね。

○人　形

三重 平尾すゞ子

母「てるちやんはやく御湯に盜りましやうよネー」

子「ハイ」ネー母ちやん此人形さんも私と一しよに入れてうつくしく洗つて下さい。

○醜　婦

伊賀 山村りやう

甲「林水館の寫眞師はほんとに下手ですねー」

乙「そうでしやう、ちつとも遊化つて下さいませんねー」

甲「そうですわ」

○閉　口

陸中 白露女

天理敎信者「貧女天理樣を御信じなさい乾度其の御病氣が治りますよ」

患者「あなたの御貝人は信者ても未だ治らんてはありませんか」

○乞　食

芝 香龍

乞食の子が燒芋を喰うを、其親が見て「此畜生奴ソンナ贅澤な物を喰ひやがつて貧乏したち、どをする積りだ」

○鬼が見える

讃岐 兼山光子

妾の兄樣が敵坊の耳を上へ引つ張つて「敵坊や地獄が見えるだろー」と云ふと敵坊は泣き顔て「兄樣見たいな鬼が一匹見えるよー」

○いひ初

石之卷 千葉きわ子

母子供のしきりに惡遊をして居るを見。

母「お前わるさのしそめをするのかえ」と云へば子供曰く

子「じや母ちやんはおことの云へぞめをするのかへ」

○令　狀

福岡町 高辻そと子

警察問題で收賄した村長の妻、巡査が令狀を持つて來た、と聞いて「夫れは誠に御氣の毒樣です、實は此方から禮狀を持たして上る筈ですのに」

短文

編輯局選評

○四年ぶり（賞品絹張洋傘）

紀伊那賀郡上神野　津多眞佐子

妾は久く學校に居て丁度四年目で內へ歸ッて來た御父さんも御母さんも見變してあつた。妹の美矢さんなどは大見變、ぐるりの庭木も大きくなつてあつた。自分も此のように大きくなつたのかも知れんが少しも知らない。

知らない人が一番變つた。

○蜘蛛の巢

尾張知多郡半田町、小栗三郞方　紫雲女

一度ならず二度も三度も取りましたのにまた、而も今朝は大きくそれはく綺麗に作りましたこと、あゝ勉強な蜘蛛よ、忍耐な蜘蛛よ、職務に忠實なれ、もう明日から蛛蜘の巢を取るのをやめました。

嵐は沮れよ、露はとまれよ。

○夜の口笛

長野縣諏訪郡、下諏訪　山田くに子

愛蘭土の人は、夜口笛を吹くのを、神に對して不敬だと信じ、北獨逸の農夫等は、天使を泣かすと云つて居るそうです。私の地方では之をすると、湖の蛇が天上すると云ますが、私は床しきものと思ます。

選者の故郷の方でも夜、口笛を吹くと蛇が來ると言ひます、蛇と笛とは何か神秘的の聯想を喚起させるやうです。

○隣りのお寺

越中國高岡市通町卅一番地　北本歌子

妾の隣りは大法寺と云ふ宏大な法華のお寺で、寺內廣々と桃櫻植ゑわたして絕えず子守唄が面白く聞え、そこにすゑてある腰ごろもの觀音さまは、いつも妾の書齋の窓に向つて居らつしやる。

南無妙法蓮華經ドコドンドン。

○つらゝ

福山小松前町　工藤いつ子

紅、紫の雲棚引く東の山の端、千條の金箭サッと、太陽が現はれる、……とみる、

軒のつらゝは水晶も斯くやとばかり七彩の美觀、オ、これが永久に變態らぬものならば、指輪や束髪ピンの飾りに欲しい。

焉んぞ知らん、彼女の手に輝く指環も、髪に光るピンも、彩れる氷柱のみ。

秀逸

○星

小石川　吉田婁子

今焚きつけたばかりの竈から、うつすりと引窓の方へ出てゆく煙を見送つて居ると、その煙の中から美しい星が二つ三つ輝きだした。

一番星を見付けた、二番星を見付けた。●

○私の手紙

下關市　大和きく子

私ね、東京の兄様へいつも出す手紙が長い長いのですよ、なぜつてそれは、日々の出來事や片時も忘られぬ兄樣に會ひたい事を、くり返し〱書くのですもの「マア子供らしい」つて母樣や姉樣に笑はれますわ。

文章の稽古にもなります。

○オ父さんの土産

福岡縣　權藤ツル子

オ父さんの樣な、いやな人は在ませんよ、參宮から歸つて土産下さつたので悦んで開て見てびつくりしました、大阪の宿屋で茶代と交換された着色の小さな大阪名所圖なんてすもの子供でもないものに。

まだ子供じやないか。

○妾は胡蝶であります

和歌山市　室幸子

或日遠近を飛び廻り思はずほの暗い所へ飛び込みました、そこは人間の室とかやです、妾は早く逃れたいと思ひ夢中に室内を飛び狂ひましたが、矢庭に袴をつけた令孃が妾を捕へて室外へ放して呉れました、何事かを耳語きて。

猫よりは詩的。

○花畑守

安藤千鳥

美しい花畑の守りを云ひ渡されて人に折られぬ樣にと思つて居ると小さい子供を連れた婦人が一枝折つたので怒りかけたれど其の子のあまりに愛らしかつたので何處へやら…….

花盗人。

○夢

埼玉縣　雪の江

日々谷公園の、鶴の噴水の傍で、金の重箱を拾ひました、喜んで家にかへり、開いてみますと、其の中から

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

白鳩が二羽飛びたちました。

夢は翅に乗りて去る。

○やせ男　常陸　今泉義子

私等の兄弟は順々に神棚佛壇の燈火を捧る事となりました、今日は生憎私の番て、燈心も買はねばなりません。御母樣はもう夜だから瘦男と言つて御買と仰言たのてすが、私には何うしても其事が言はれませんてした。

燈心が瘦男なら饂飩はふとり女か。

○我村の音樂　伊豫　白露生

僅かな家數てはあるが何一つ不平なく、松風はオルガンを、戯むる小鳥はヴイオリンを、農夫は田圃て稻刈歌を、梢ては樵取り歌を、淸い肱川ては水のさゝやき、妾は內て吊古戰塲の唱歌を。

自然の聲は大音樂なり。

○妾の境遇　肥前　柳原初音

妾は毎日朝の七時から晩の十時まて工塲に出て日給は二十四錢……家には病のお母さんと盲目の兄さんと今年十二の妹と居ます。

健氣。

○半日の仕事　丹後　春子

桑畠の蕎麥刈り仕終へて其跡畠に、北海道大豆を蒔いた、畦一つさかえた、里芋畠の芋堀り濟まして、和肥料を置いた、から／＼に實のつた白大豆刈り濟まして菜種植付た、先これて自分の思仕事も出來たとほつと一息、すると內記寺の晝鐘がゴーン。

午後は修養。

○兄を送りて　鹿兒島　玉利し茂子

遊學の爲め上京の兄樣を送りて、私は今阜頭に立つて居る、いつしか船は黑い煙を吐いて岸を遠ざかつた、兄さん何卒早く錦を着て皈つて頂戴、私は夫れ迄は何處にも嫁かずに、大切に御父樣や母樣に仕へますから。

眞の兄、眞の妹。

○冬休み　大和　みどり

妹は最いくつねたら冬やすみかとたづねる、祖父は冬休みは何日あるかとたづねられる、母は御馳走の用意しなければならんからとてなにがすきかと、父は年賀狀書を手傳てもらはれるかとたづねられた。

一家の花役者。

○乳の香　岩代　根本松江

煤掃をした次ぎの日私の初着を見付けた、餘りのなつかしさに抱きしめると乳の香が仄かにする。あゝ此香

之が爲め發育た私は、今十八の齡も無事に暮れやうとして居る。

乳の香は昔の夢の香なり。

○鳥の社會　伊勢　桧本紅葉

鷲は野蠻の酋長の如く暴威を以て他を壓し鶴を氣高き女皇とせば孔雀は華美なる女優なり烏は豫言者にして梟は俄師なり鶯をして聲學者とせば鳩は無邪氣なる里少女の如く艶麗なる鴛鴦は理想の家庭實行者。

鳥の社會終つて、鳥の社會初まる、之れ其二。

○押花帳　相州　ふぢ子

いとしの弟は逝きました、わづかづつ溜めたお小遣を殘して、それて買たは此押花帳。中に押してあるのは血潮のような蔦の葉、やさしい野菊、しほらしいすみれ、それから瑠璃色のホールゲットミーナツト。

一花一葉に魂殘る。

○執務前の祈　名古屋　小山かく子

出札係は忙しい仕事てすから、お釣錢をやり過ぎたり取過ぎたりして氣の毒や損をするのが毎日のようてあります。て私はお祈の時に、どうか間違つても取過ぎないようにと云ふのを忘れた事がありません。

女子判任官も容易ならず。



田家の春暖（賞外）長野　竹前翠外

○我家のたのしみ　麹町　淺井千鳥子

私の家には西洋葡萄の木と苺と柿の木と蜜柑の木とあつて果物屋のやうてす、葡萄は父樣の御丹精、苺は兄樣の、柿は私ので蜜柑は弟の所有物てあります、毎年毎年誰のが一番多く實るかと樂しんてゐます、今年は私のが大當りてした。

柿曰く、今年やかぼちやの當り年。

○小切れ　深川　元子

叔母樣に戴いた藤色の八ツ橋、薄紅色の甲斐絹、夫に緋と牡丹色の縮緬、姉樣の下すつた七草の友禪縮緬小豆色のしほせ、夫丈を三寸四方の六角に切り、色彩よくはぎ合せて表とし、私の羽織の裏の殘の緋緞子と白羽二重を元祿にはいて裏として、壽を祢へ、先日田舍

へ送りました。

元祿唐湯圃。

○日記の序に　　愛媛　美都子

火事だの地震だの恐しい惡魔を擲て遂々丙午が逃て行きました。今日からは丁未てす。白い顎鬚を貯た優しい譬て見たら慈悲深い聖の樣な羊の歲に限ッて平和に違ありません赤い瞳が初日の光に燃た時噫妾達の希望は。

平和——羊——明治四十年。

○ねがひ　　岡山　しらゆき

自分はてんどはじめて女子文壇に投書するのだ、生れてはじめて投書といふものをするのだ、出してもらへるだらうか、もしも出してもらへたらほんとにどんなにうれしいだらう、あゝ出ますよーに出ますよーに。

所らずとても紙や守らん。

○木犀　　秋田縣　佐々木園子

私は近頃東京から木犀一本下しました、そして鉢植にして書齋に置いたら、あのよい香が着物にまで染んだので、今朝お友達に香水つけたのと笑はれました。

流れぬ香水。

○我家の狀　　香川　恵女

父は朝から山畔て、人の指圖と木の培養、九段餘りの畑は皆、林檎、桃、密柑、除虫菊等、母は夕飯迄、六十羽餘りの鷄の世話、そして私しは、世帶とお針、外も內も、隨分忙しいが、其代り夜の團欒はほんとに樂しい。

九段の畑、六十羽の鷄、樂みは此處に生る。

○つま琴　　鳥取市　山根綾江

いたづきの國の母上の忍ばれて、うきたゝぬ心を慰めんと、塵うちはらひし爪琴、調べなれたる雪晨……名殘惜はとにかくにまちえし君の歸さ。三と八の合に絃は一時に截ぬ。「電報」との聲、はつと胸に答へぬ。

非情の琴、有情の絃。

○小包　　函館　八重子

今しも東京の叔母樣より、小包が着きました、嬉しい事、私には巾の廣いリボンと、美しい絹の、ハンカチがありました、兄樣には何もこないので、大變な落膽てす、きつと、兄樣は、金時計ぐらゐの物を、望んで居たのてしよう。

○冬の夜　　豊橋　須子

星燦然たる初夜過、落葉した銀杏の蔭を出た二人、男は斷腸の思て、「芳塢忍してくれ」「否貴方が惡いのぢやありません、還歷血統の家へ生れた妾の不運てす、もうお別致します。」と女も淚聲。其も嘲笑の如き風に半消された。

○初塒　　豊後　淡の月

夫を迎ふる聖父を待てる子、此處にも彼處にも爐に篝火を焚いて居る。

Digitized by Google　　Original from HARVARD UNIVERSITY

やがて船が岸につくと、若者の手より魚籠を受け取つて赤い襷出しは暗に消えてしまつた。

○元日の書齋　岐阜縣 柴田すみれ

明けて嬉しいお正月心も清く新らしゆう、美の肌、粋な晴衣!!! 妾は今美はしい書齋の机に向つたのである。嗚呼。樂しい希望の光はモー吾窓に照すのである。

○まことの嬉び　攝津 なでしこ

初夏六月、林檎あればと病床に臥し給ふ、恩師の御望みいかにもしてと一日市中の八百屋を尋ね、夕方漸く一軒!、足の疲れも空腹も忘れ、生れてから始めて眞の嬉しさを味ひ得た。

○朝の興　美濃 下川まさ子

朝の散歩を終つて、霜の多い薮陰の道が丁度裏の折戸に盡きた時、庭の方から懐しい鶯の聲が聞えましたので、私はわざ〱表へ廻りました、障子へ寫つた其愛らしい姿を、其儘に見たいと思つたからであります。

○たがやし　伊豫 福井白百合

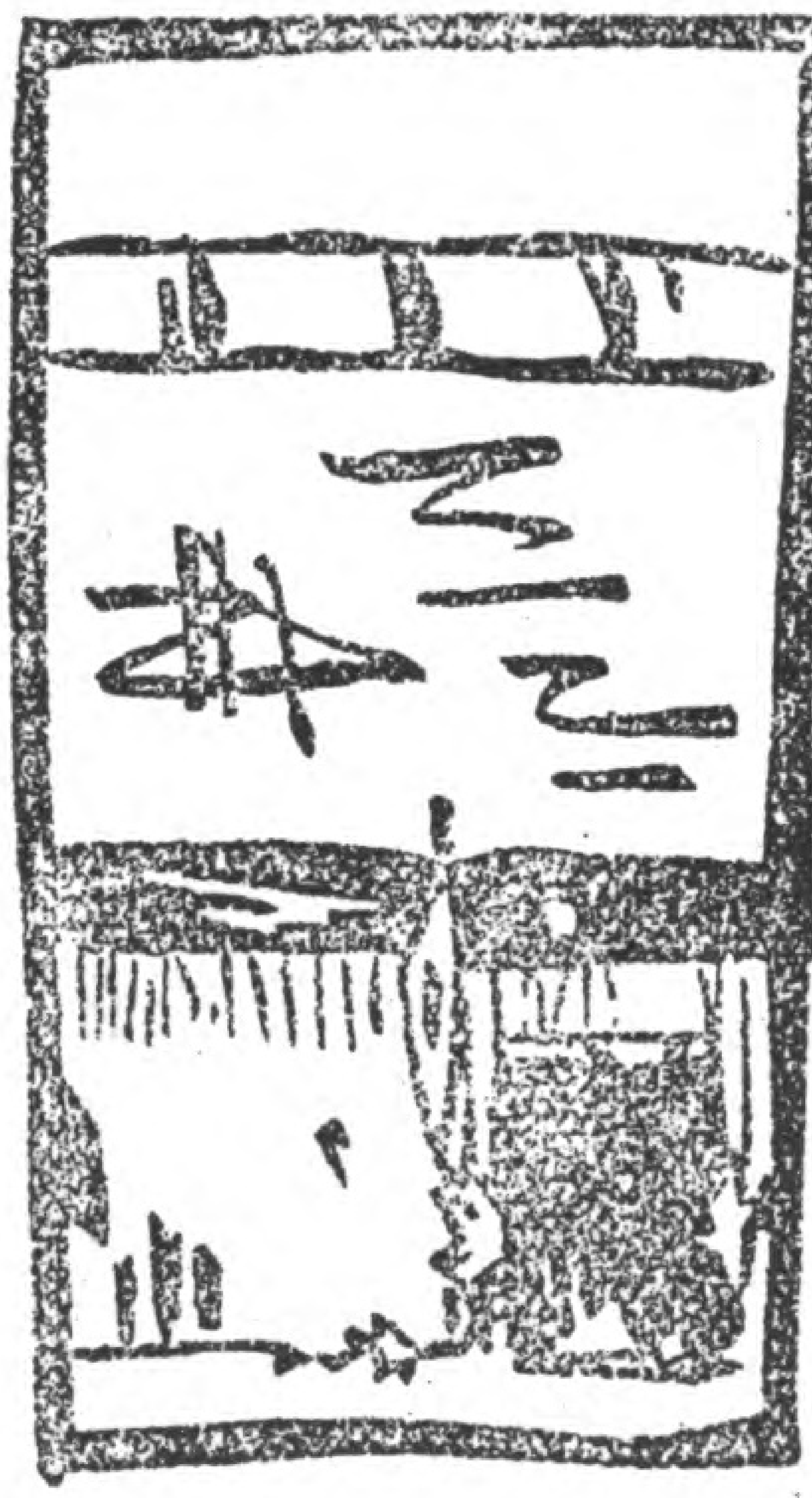
男の子は牛を追ひ、娘は飯器を持つて、ばゞは湯沸して、露かわく草のむしろに、樂しきまとゐ、よしや身に錦は着ずとも、春は雲雀の歌ひごえ、秋は黄金の稲の穗波を!。

○可愛いあん火　靜岡市 わか葉子

美くしい口許で、祖母樣々々々と甘へて、メレンス、友禪の寝着に、同じ唐縮の扱帶、ぴつたりと前髪を、皺の胸元へ推つけて、心地よささうに、小鼾をたてゝ寝入る孫嬢、好い行火だと、祖母樣は撫てゝ喜びます。

○初夢　尾張 すみれ

追羽子にすつかり疲れて机によりてうつとりとすると一羽の鳥がふと現れたかと思とはや私は富士山の頂上に來て居る、眼下に山や海が丁度繪山泉水の樣、すると鳥が私の腕をつゝいたので其痛に心付けば枕の臂が痛むのであつた。



初春（賞外）　小谷桂子

○外交家　羽前 すみれ生

私女子文壇の誌友倶樂部に交際を出しましたら愛讀の姉樣達が美しい繪葉書雑誌新聞を送つて下さいますので毎日〲二三枚ヅヽまゐります父樣兄樣が外交家だの、今すこし立つと遞信省から金鵄勳章が下るだらうと笑はれて居ります。

○妾の書齋　尾張 河村林子

庭に面した六疊の書齋を毎日妾と竹やと二人でお掃除します机と列んで五つの本箱があります一番手近にすへてあるのが此頃お母さんにねだつて買つて戴き机に高く積んであつた女子文壇を入れて其横に誌友の久子樣や高子樣達のお手紙や はがきがたくさんしてありますすぐ後に皆樣と交換した毛糸細工等が箱に入れてあります 大分私の書齋も賑やかになりました。

○養兎　久留米 木村少女

この春、少さな白兎を、一つがひ買つて貰ひました、そして、毎日通學の前後に、草摘に行きて、私の手一つで、そだてゝ居ましたら、此頃愛らしい、子を三匹產みましたので、大へん嬉しくつて、朝も早く目が覺ます。

○夕暮の雀　越後 金塚としゑ

庭の竹に雪が積つて今にも折れそうだから、起してやらうと手を掛くれば、枝の繁所に方つてチヨチヨと。オヽ可憐の雀よ、汝等は爰に一夜を明かさむ心算なのか、さりとは卍巴に降りしきる此雪に！。

○夕暮　本郷 則本しげの

坂は照る々鈴鹿は曇る、あいの土山雨が降る、と歌ひながら、松原行く馬子が鈴の音、夕べの空にひゞき渡り、今まで白かりし月も、刻一刻と光をまして、四方は次第に神秘の夜の幕に、つゝまれ終りぬ。

○新年の一夜　和歌山 神保須磨子

御爺さんは詠むで下さる御父樣、兄樣、姉さん、妹に、私と親類の子と都合十人源平に組むでかるたを初めたの、御祖母樣は孫の大勢よつたの

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

な嬉むで入らつしやろし弟は蜜柑をたべてる御母樣は臺所で皆への御馳走を。

○鶯　南多摩　橋本しげ子

夕の霧雨は拭ふたよう、旭のさした窓の内で歌集を繙いて居ると梅の小枝に小鳥の影がさしてホーホケキヨー、妾はたまらなくなつて、つと窓を押せば垣を越へて向うの籔へ。

○職業　農夫の子

元老閣員は榮誉の職業にして、娼妓は賤しき職業なり。商人は利を集むる職業にして勇ましきは軍人なり然れども農夫は榮もなく利もなくただ世界人口八億餘の生命を保たんがために活動する尊き職業なり。

○晴着　京都市　綠子

家内のお正月の晴着で朝から晩までお針の仕づめ妹の靜ちやんのてんち致ちやんのひふ兄さんの袴父さんの黑の紋付まー忙がしい事。

○露と花　潮江

月淡く、星明き夜、露と、花とは、何事か囁いた。露は瑩々と地に涙をこぼし、花は窶れ顔をして、其曉、夕の花は、はしき乙女の肩に運ばれて市へ、露は一人殘つて悲しみのあまり、其夜果敢なく消えた。

○故郷　北海道　竹井花子

昨日は千里の汽車の道、今日は百里の船の中、妾は三年振りにて今なつかしき故郷についたのである。山や河は昔に變らねど、父母の頭は雪を敷く程白くなつてをるし、信枝さんはいとしいもの迯出來てをる。

○紙入　陸前　猪俣きつ子

長松がお札樣にかみくづを捨てるなと六月頃からいはれてため初めた紙くづのあたひは一圓十錢であるちやんとやぶ入りの御金が出來た。

○我が庭　羽後　渡部美耶子

私の書齋の前が庭で其中央には恰好のよい築山があります。是は去年の夏頃お爺さんの作つたので松、梅、櫻、躑躅等が配置よく植ゑられてあります。妾は每朝此の築山の最高峯に上つて、深呼吸をやるのです。

○我家の男　石川縣　梅光史

僕は佛蘭西刈とか、獨逸刈とか、女臭い頭は大嫌だ矢張り日本式の清潔の三分刈は大好といつも涼しい頭に坊主頭をして入らつしやるは妾の兄毎朝二時間餘も鏡に向つて自分の頭に悶掻て居るのは店の藥局生。

○禁酒禁煙　武藏　新部色子

妾の夫は大變お酒も好きでしたが小供が出來てから妾が度々『莨は兎も角お酒だけはどうか』と言たものですから如何思たかフッつり止めて今までは少しも口にしません其故お正月には小供の美しい着物と羽織が出來ました。

○名の樣々　高峯露子

私の村では馬肉をサクラといひ西の町ではカナグッといひ東となりの村ではコマコマといつてうりに歩きますまだ外にもまだいろ〳〵の名がありませう。

○梅　松山孤蝶

書齋の窓に朝日がぱつと照り、珍しい好いお天氣であるから、そと窓を開けると、早咲きの梅は彼の枝此の枝に、二三輪づゝ綻び初めて、そよと吹く東風によき香を送つて來る、何處でか鶯がホーケキヨと啼いた。

○我家の每晚　尾張　歌字田愛子

私の宅では每晚九時迄、父は讀物、母と私は靴下のすくろい、弟は勉强、九時から十時迄、松風の音ゆかしき茶席で抹茶の温習を仕ます、弟は御菓子を食べて見て居ます。

○田舍者　靜岡縣　網村松花

私は田舍の一少女でございます私が近所の町へ出るとそこらの小さい子どもが私を馬鹿にするけれども何にも怒りません町と云ひ田舍と云ひ人は人、賢人もあれば惡人もあります私は町のものに敗けない樣に勉强してよき人となります。

○夜の巷　近江　馬場みつ子

二十錢といふ餅の値を、十五錢にと無理にねぎつて、停車場へと走らすと、晝すらあまり人通りのせぬ夜の衢の、人も疎に、派出所の硝子戸を漏る光線が、末廣がりに輝いて居るばかり。

○秋の暮　上野　大沼波子

日は今西の山に大小幾重かの半輪をえがいて沒せんとして居る。心地よく晴れ渡つた青空には白い雲が二筋三筋……、其下を赤い蜻蛉が嬉しげにとんで居る、百舌鳥は彼方の夕榮えた鎮守の杜に啼いて居る。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○湯歸り　　羽後 [illegible] 柳子

秀さん寒いッたらないわれ、あら手拭迄すつかり凍つてよ、まア冷い風、あれご覧な雲の速い事、月は飯の樣だわ！まあ何うしたのよ妾に計り、……秀さんは微笑ながらあら怒つてはいや、妾發句一つ考へたの、湯歸りや柳に凍る冬の月。

○慈善函　　滋賀縣 川島敬子

こゝ片田舍停車場の待合室、私は退窟に列車の着を待つていましたが、フト目についたのは慈善函、はて懷には今朝母上に貰つてきたお小遣ひの殘り、あゝこれ無益に遣ふよりと思つて、慈善函に入れました。

○愛らしき筆の跡　　麻布 奥居ひな喜久

郵便！と玄關へ、やがて下女が嬢樣、と笑顔で妾の部屋へ、貴孃の御好きな郁子樣からと一通、急いで封を切ればバラ〳〵と四五枚机上に、取上げて見れば美しのカードにクリスマスプレセントと愛らしき筆の跡。

○何と！　　京橋 今泉磯千島

東京も霜が降る樣に成てはさぞ寒いだろう、と言つて衣服と足袋を送來たので思はず、其有難さに落涙した！今朝麗初を仕樣と思つて比て見ました、餘り足が大く成つたので入りませんから、其譯を書て返しました……噫、御母樣は、受取て何と御思ひなさるでしやう?。

○姿の友　　我孫子 君子

花子樣は巡査の細君に直子樣は軍人の夫人に初子樣高等師範に妾は此の片田舍に只一人女子文壇の發行を待つのみ。

○荏荷谷　　小石川 うた子

玲瓏玉の如き噴水井戸の端に、漸く歩く事の出來る位の男の子の落ち來る水に戯れて居る、傍には「コヽ」と云ふて餌を求むる鶏の一群、折々身をそらしてときをつくる樣の愛らしさ。

お魚やさん（賞外）　小樽 梶水仙子



○春の川　　南葛飾 銀子女史

描き終つた繪筆を、清き流に浸した、忽ち穗先から湧き出づる紅紫、美しき彩雲を泛べて居たが、やがて線を引いて消え終つた刹那、上流から紅梅を乘せた一片の笹舟が流れて來たので思はず顔を上ぐれば、白い頬冠の村娘が草籠を負ふて立つていた。

○朝霧　　北總 吳竹

戸を開けるとシウと吹き入る霧に障子は美事小紋形を表はした、白く包まれた慈眼寺の森の中から隣の井戸ではぎーと云ふ音、門でお早うと嗣を掛けて行ッたのは例の牛乳屋であらう。

○湖畔の春雨　　高知市 田内いねき

立ち並ぶ岸の青柳にしつぼりとふり注ぐ春雨細う細う煙の如く、今や波靜かなる湖面は紋々と暮れそめて彼方對岸の高樓にかまびすかりし絃聲はしめりぬ。

○反省　　山口縣 中津江照子

私のお友達の濟子さんて方はいつも學校でバケツの中をのぞいて顔を見られるんですのよ。何故かと問つて見たら顔に墨が附いてゐたりすると見苦しいからそれで水鏡を見て氣をつけるんですつて。

○感化力　　神奈川縣 冬すみれ

私の學校には、女の先生が六人入らつしやいます。天長節の日に先生方が揃つて日本髮に、結つて入らしやいましたら、此頃では、生徒が殘らず、日本髮になつてしまひました。

○朝の庭　　廣島 文江

朝早く庭に出て見ますと、青き毛氈を敷いた樣な苔の上に、赤や黄の紅

菊や梅の葉が落ちて、夫れに雪白う霜が降りております。可愛らしい紋付鳥が山茶花の枝から啄露した梅に飛びますと、花が二つ三つ落ちました。

○遺品　　岩代　千代子

お前これ縫直して着なさい、とお祖母様がもつていらしつたのは亡母さんが一番お氣に入りだつた小紋の袷かゝ妾は何うしてこの着物をとく事が出來ませう、其儘たんすの底深く納めました。

○臭い物　　上毛　河内とめ子

砂糖の甘臭きは常てあるが、蛇の青臭きは小氣味が惡い。ハイカラの香水臭きは惡らしく、チヨンマゲの古臭きは昔ゆかしく、物臭きは誰れしもこれを忌み嫌ふて居るが、赤子の乳臭きは誠に可愛らしいものである。

○寒菊　　三河　長坂よし子

先々月は父上がお作りなされた秋菊が、大そー美しう咲きましたが、只今ては私が作りました寒菊が、草も木も枯れはてたる庭に、今は我が世といはぬばかりに、いと美くして咲きました。

○珍らしい物　　羽後　中村まさご子

昨日學校の歸路を仲よしの靜子様と參りますとふと傍の霜枯れた小草の中に見出した菫の二本。一本づゝ分けましたが私は押花にして置きました今頃美くしい菫の葉珍らしいので讀者諸孃にも御目に懸けたいと思ひます。

○冬の一日　　羽後　楓女史

今日は日曜、朝よりの降雪、誰一人問ひくる友もなくあまつさへ郵便配達の聲さへ聞こえず、音する物は談ゝちりの吹雪雨戸に打ちかゝるのみ。

○私の空想　　大坂　ゆき子

前が川後が山のある所て奥が六疊て半間の床を取り次が四疊臺所が二疊てはしりの方にごく勝手よくした家て妹の君ちやんと月々の女子文壇を愛讀してそして百才までも暮して見たい。

○お料理日　　京都　片木民子

私の一番樂しみは、月一回の、御料理研究日なのよ、御料理役はいつも私と妹、御馳走役は御父さんとお母さんお毒味役が義兄さん、そして皆がうまい／＼とおしやつて下さるので其れは／＼嬉しい。

○看護　　香川縣　はるゑ

妹の看護に枕元て座つて居ると妹はすや／＼眠りかけた遠くては「めぐみの波に」と幾人かの聲がかすかにきこえるあゝこの子も丈夫ならあんなに紀元節の歌を習つて居るものを。

○御正月　　神田區　玉川政子

初めて奉公せし身の如何に戀しき今年の正月よ、定めし妹達は情溫かき父母の笑顔に親しみて、樂しき正月を迎へたてあらう、一人妾は情うすき人の中に故山の樂しきまどひを初夢に見る許り。

○小春日和　　鳥取縣　門脇まさ子

空には日和雲がながれて松葉掻きの鄙歌が幽かに木立から洩れてくる、汀にに刈蘆舟が四五艘舳を揃へて何か話し合つて居ると、鷗が二三羽すうつと飛んで沖の方へ、離れ小島に小松が六本。

○客車內　　信濃　海沼靜子

小佛の隧道を出た一客車に、先月巴里より歸つたと云はん許りに、流行品を着飾りたる一御令孃、石炭の煙を浴び眞黒の顔して傲々然。

○高森山　　周防　あやめ

私の家の東方に高森山が聳えて居ます山八合目位に一本の天狗松があつて滿月の夜には誠に景色が宜しいと雪にも一層美を添えますので親友と歌の會など時々開きます。

○馬の嘶　　宇都宮　大岡春子

裏の橡側てランプ掃除をして居ると突然外の方で勇ましい馬の嘶がした、「オヤ兄さんかしら」と門口へ來て見ると正しく兄さん、胸には今日戴いた燦爛たる金鵄勳章を佩用て居る、其の姿が實にいかめしい事！。

○鶯　　仙臺　八洲子

一日天の樂師が奏樂を過つた爲め、日の神の御不興を蒙り、まだ寒き下界に落されて鶯と生れた。御子の佐保姫はそを哀れに思して、春早く梅をして慰められた。て鶯は春毎にその御恩を稱へては枝に鳴くのである。

○眼前　　備後　松本董子

お父様は今朝來た新聞を、お母様はお客の料理に、お祖母様頭布を冠つて炬燵に、弟は庭で雪達磨を拵へてゐる、わたしは書齋てお手紙を書いてゐます。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○霧もよひ　　小田原　清水春子

窓に寄てどんよりした空を眺て居ると折柄の烈風に、今を咲き匂ふ梅が、二三輪散つた。ぶる〳〵と身を屈める途端、亂菊の間から、白が、尾を振り立つて、お金の甕の方へと飛んで行つた。嗚呼今宵も雪が積るであらう。

○都の兄樣へ　　成田　夢の屋波満

兄さん此の間は大變に都のホラを御吹きだが鄕は戀しくは無くつて？此の繪は妾の畵たのよ、田居に立つ人は誰か知れますか、花さんなのよ、いつも兄さんの事を話すと顏を赤くして逃げてしもうんだわ。

○白菊　　岩代　岸野常子

寂れ果てたお庭の垣根に、白菊の花が三つ四つ咲いた。餘り綺麗なので、露の儘、そと一枝を瓶にさして、机の端に置いた。すると其淸い高い香が一ぱいに滿ち渡つて、其中で勉強してゐる妾は、丁度古人にでもなつた樣な心地がした。

○楓　　和歌山縣　池見俊子

妾の理科書に挾んであるのも楓、今朝屆いた兄さまのお手紙の中からすべり出たのも楓、「姉さんこれお向ひの兄さんが……」と楓のそれにもまがふ手によつてさゝれたのがこの楓、學校で作法を練習する時の私の顏も楓。

○採集の一日　　茨城縣　小松崎つぎ子

花うるはしく鳥長閑なる、春の一日妾と、蝴蝶生と、紗網をふりまはし、麥畝の中で蚊の姥と、たんぽゝの花で天鵞絨釣虻をえ、燈台ぐさと毛莨すみれとつくし蝴蝶探てぺんとうをたべた。

○隣の老人　　羽前　白菊子

私の家の隣に七十餘になる年寄が居り一人の子供がありますが不孝な人で年寄を邪魔にし少しの事を爭ひ年寄を置いて何處にか行きました、母樣に貰いた菓子だの錢だのやると淚を流し「私も此樣な子供を持ちたい」と。

○鍛冶屋が淚　　宇都宮市　小森谷秋子

浮雲空に二ッ三ッ、木枯のみ吹きすさぶ寒の一日、熾き火爐を吹せながら消長屋の友吉鍛冶屋は悴の太一と談り初めた、「己れもてまいに神天一つも作つてやりていがなあ、一日たつた十七錢で……。

○汽車　　大阪　かず子

私はいつもそうして頂きたいと思つて居るのですよあの汽車の一等室のふわりとしたあたゝかそうな所へはお老人達がお乘り遊ばして次の二等室へは男の方々一番下等へは私共女がのるやうに……。

○兄の好めるもの　　日本橋　大村澄子

兄さんは何が御好きですと聞きましたらば洋琴でシムソンの蝴蝶の曲ピアノでカールマーチ三味線で義太夫踊りで綱上食物であらひ果物で葡萄酒で三鞭菓子で桃山書物で八犬傳服裝で上下であつてホヽヽヽ。

○菅公傳　　土屋二三子

菅公傳を褒奨に貰ふた女兒二人が七廻りまで來ると、こは霜解けの畦道！一人は危く轉ばうとして本を落した、すると一人「あら其の本は天神樣の御本なの！！汚すと手習が出來なくなるつて先生が……」

○日記の初　　土屋初海棠

元日

晴天松の色殊によし。

葉書二通認めて下僕に托す。

早朝より作文にとりかゝる。午後英文を見れど更に要領を得ず、畵など畵きすさむ中に日は入りぬ。

○遊學せる友に　　福岡縣　後藤良子

花子さんお別れしてから早や一年、毎日紫のお袴でお通ひでせう、私もネー村の小學校へ花子さんのお袴の色も私のも同じよ、けれど花子さんのは毎日光りがますし私のは色があせて行くのよアーヽさよなら。

○寢言　　山口縣　西村薫子

あめふる、とりとぶ、と讀むで居た私の弟、不意に、火事だ、火事だ、と叫ぶから、私も驚いて、走り來て見れば、はや、すや〳〵と睡て居て、今のは寢言であつた。

○雪の朝　　鹿兒島　美津江子

野も山も一面見渡す限り一夜の内に、白妙へ六花紛々鵞毛の如く、落花の如き中を、弟の繼は滿面笑を堪へ「白雪ふーかく降り積るー、八甲田山のふーもと原」とさも勇ましく軍歌を唱つて驅け廻はつて居る、其後

から犬の遠吠。

○笑　白露

私は笑ふと云ふ字が大變に好きですの、いつも此字を見ては一人ふき出すのよ、だから何か腹の立つた時も、笑ふと云ふ字を心て書きて見ますの、すると何間の間にか心の角が折れますよ。

○お月様　韓國鏡　白萩子

『月見れば千々に心を碎くかな』とはお涙様の口ぐせ。また『數行過雁月三更』とはお隣の信雄さんの散步歌である。妾は泣く子を抱いて美しい今宵の月に『お月様幾歳十三七』となだめて居る。

○天女　山口縣　坂田芳子

瑠璃色の帷を分けて現れし雲の集りし其形、所謂天女とは此れ「裏返けに追ひつ追はれつ白き蝶の二ッ……」と見る間に天女の姿は風なきに崩れて班々とはなりぬ。

○胡蝶の墓　磐城　村岡敬子

一つの蝶が花の週圍を飛回つて居つたが花束をた左手に持換ゆる途端、ベタリ落ちたは蝶の遺骸、はつと驚いて掌に上げたけれど羽動もしないので傍の木の下に葬り、花束を手向けた。そして色鉛筆で胡蝶の墓と。

○默禮　新潟縣　金塚清志

私は片田舍の小學校に、奉職して居る敎員であるが、昇降の途々、其他遇ふ毎に無邪氣顏にて、私の顏を見守り、紅葉の樣な手を膝について、默禮するが、其時の愛と愉快とは、他賦ては求められまい。

○押花　赤坂　梅津治美

もう今日限りの朝顏と少さな花垣よりつまみ取つて葉書にぺつたり押しなつかしい友に送つたその返し文の中からは見るも愛らしいカベ色の押花が二つ三つ。

○盛り　和泉　南扇子

他處の紅葉は散りそむる頃、牛渡山は盛りだと聞きたれば、月の十八日に行つたら盛りは未だ早い二十五日頃だと云はれ本意なかつたが、二十三日枝折を强られて行くと、今度は盛りはすぎたりけりなど溢して居る。

○敏ちやんの心配　大阪　甲本鶴代

烈しき晩の夜、瓦は飛び雨は灑る、颯と吹きつける風雨に家も倒れ相、皆々眉を顰めて居た。今年六歲の敏ちやん迄も憂ひ顏をして居た。私は「敏ちやん何が心配なの」と聞きましたら、「天上の鼠はどうして居るてせう」。

○唯一の樂しみ　本吉　夏谷しげ子

私には、親友二人ありましたが、一人は、高等女學校に、一人は、女子職業學校に、いづれも西に東に遊學、それに引かへ、妾は一人居殘りて、女子文壇を唯一の樂。

○小春の目前　信濃　桐原梅香女

私は裏の柿の木へ張板を打ちかけて張物、妹は傍に得意の秋空晴れて日は高し……と硝子板の上を南京豆を轉すような聲を出して歌ふて居るし、母上は針仕事、急に聞ゆるは弟の喇叭節、空には一點の雲もない。

○紫　神奈川縣　志賀波子

紫ほど優美て、可愛らしい色はない。春の野邊の菫、池のみぎはに咲きみだる菖蒲の花、藤の花や。桔梗の花、ほの〴〵と明け行く東雲の淡き紫の雲、皆ないかに愛らしき紫、いかに嬉しき紫。

○初春　磐城國　友墨子

紫の綾絹のやうな窓があくと、美くしい初日が、いち早く、千古の雪を頂く富士の高根に輝やいた。それといつしよに、豐なる新潮は、初日を浮べ。寶の船を浮べて、濱に寄せた。おゝ樂しい、目出度い、初春よ。

○丹精　靜岡市　羽根安子

私は手紙や半紙の古ひのを溜めて母上から糸屑を頂き毎夜つなぎ糸をたてにこよりを橫にして美しき冬帶を織りました又雜誌を送つて下さる宛名の紙をこよりにして有ります一寸ちようほうです。

○一番のたのしみ　下野　きむ子

私しが、たのしみは、朝早く起きて日の出を見るのと生徒が一人も休みなくくるのと、昨日敎へた事聞く時皆手の上る時と音樂を敎へた時よくそろつて歌はれるときそれから休み時間に生徒皆てゆうぎをするのが私しは何より一番たのしみなのです。



讀友倶樂部

○我が疑問（課題）

○　　のぎく

私は精神修養の一助として宗教を修めたく思ふものですが未だ宗教の如何なる事をも存じませんし、自分の眞心のある事は信じて居ますが、天に神様のましますと云ふ事は何うもそのやうに信じられません、私は人の前などては眞く思はれたい爲に、つゐうそを申したり、何うかして眞く思はれやうく〱とあせつたり、少しの事に驚いたり、自分の分に安じられなくて、いつも後に悔むやうな事ばかりして、上べてはおさへ、全くそれが行へられた時にも、心の奥にはいつも虚榮心がひそんて居て、どうしても安心立命が出來ませぬ。それて私の心の底の底よりして淸くなりたいのてすが、之れには自分の力ばかりては出來ないやうな氣がしまして、神様のお力てもおかり申して…… つまり宗敎心てもあつたならと思ふのてすが…… て記者様宗敎の極く初め、手ほどきと云ふやうな事をお敎へ下さい、つまりごく初めから、どう云ふやうにやりつゝ行つたならば、神様と云ふことがさとれて、其お力をかりられませうか。又聖書は見た事ございませぬが、私のやうなものにも、讀めば直ぐ分りませうか。

記者曰、是は諸嬢と記者欄へ來た原稿てすが、課題と同じ題てすから、此處てお答へいたします、扨て宗敎に依りて精神修養をしやうと云ふお心がけ、誠に結構てす、信仰は信仰てす、何うして信仰の人になられるかと云ふ事は説明て分りません、先づ第一歩は宗敎的修養てせうが、それは聖書を讀むこと、讀めば分ります、牧師に就いて話を聽く事等が初めてせう、なほ宗敎的の好い書物を見る事も宜しい、なほ此事は大問題てすから、改めて其道の人の話を紹介いたしませう。

○　　大分　沖の捨小舟

私の疑問はいろ〱ありますが、私は何となく氣がすゝまず、他人の面白いことも面白くなく、をかしがる事もをかしくなく、妹が心からのなぐさめも、何だかつらく、只獨り一間の内に、だまつて居たいの、そして二三時間もたてば、大分よくなる、こんな事がたま〱ありますが、何故か自分の事が自分てわからぬのてす。

○　　武藏　波南子

妾には一人の姑がありますが、如何言ふものてすか妾と氣が合ひません。妾の方ていくら下から出ても、いくらおとなしく我慢をしても、さうは思はないて、始終小言を言います、何故てせうか、妾には解す事が出來ません。

○　　福岡　三日月

我が國に於て美術と音樂とは何方が有望て進歩の餘地があるてしようか。

次に男女の交際は何れの處まて成せば眞ひてしようか。

繪葉書の交換は如何なる方法にすれば眞いてしようか。

私の疑問以上三ヶ條てす。

○　　北海道　相原熱美子

記者様、私は次の字の讀み方を明確に覺えたいと思つて居ります。

巳、已、巳、いつも新聞や雜誌を見るときには右の字に注意して居りますが、色々てどれが眞實か分りません。

○　　蓬萊山　姫子

妾には、たくさん疑問がありますが、皆小さくつて恥しい樣なものばかりてす。けれども折角のお尋れてすから、次のことを二つ聞きます。

一、夢を多く見る人と、見ない人がありますが、どう云ふ譯てせう。

二、文章家になるには、天才がなければどうしても成功が出來ませんてせうか。

○　　豐後　木の葬

私は今の靑年男女が、或るものを熱望して居て、それが意の如く行かないからとて、失望し厭世的に、なるとか悲觀的に、なるとか申しますが其のやうな人の心が第一疑問の種てす、何となれば、將來世界に向て、大活動を爲そーとする、戰捷國の國民が少しの事に失望したりいやにふさぎ込んだりして、大事が出來ませうかてすから、私は常に其のやうな人の心を疑てゐるのてす。

○　　山口縣　美翠

Digitized by Google　　Original from HARVARD UNIVERSITY

近來頻に自由戀愛自由結婚に若ずと其理想を實現したる夫婦も後次第に冷くなり果は離縁する者間々あり又或人は双方見知らず唯親仲人の言に依り或は機械的に婚せし者も後圓滿なる家庭を作る人あるを見ては更に解し得ず實に人生の一大事件たる結婚如何して然る可きか未た配偶者なき私の疑問てございます。

○　　　　　羽　前　紅　　子

昔の人は、肉體死すれば靈魂天に昇りて星となるといつて居た。科學の進歩せし今日。實に馬鹿げた話てはあるが。夫れは兎も角、今日ても矢張り靈魂の不滅を唱ふるものが多い。殊に甚だしきは近き將來に於て靈魂の製造を見るだらうと、迄いつてゐる。然るに中には亦、無神無靈魂を唱へて居る。吾人は實に其の岐路に迷はざるを得ない譯てある。て一日も早く、其の解決を見たいものてある。

○　　　　大島町　鵜　澤　ぎ　ん　子

慈母の胎内を出てゝ未だ一年ばかりの幼子が紅葉の様な少さき手もて空になにやら畫いて泣き叫ぶ時少しの涙も出てざるこそ奇しき事なり。あゝいと嬉しい時も最も悲しき時も將たいと哀れな時も共に出づるは涙なりあゝ此涙妾が疑問なりおゝ妾をして終生暗黑にほうむるも此の涙なかるか。

○　　　　神戸市　し　　は　　す

先づ佐藤紅綠先生著、俳句作法第一ページ六行目の……何物かの藴畜たるものがある云々、全書中蕪村作（春風に阿闍梨が笠のにほひ哉）（御国活けて其陰に干鱈裂く女）の意味……新體詩とは如何なるもの、判任官とは如何なる位置を云ふか……まだ〳〵ありますが、規忘にて……。

○　　　　　備　中　百　合　子

妾の疑問は樂の次の頁？。盈ちたる月は缺け咲きたる花は散る、春宵夢醒の快樂もやがては妾の疑問、即ち樂の次の頁？。

○　　　　大阪市　東　　柳　　子

何雜誌にても大阪は愛讀者が澤山ある想てす、其に投書が極少ない是を他國から見ると、大阪は愛讀者が少ないと言はれて居るに違ひは有りません、大阪に愛讀者は澤山有りますが投書家は極少ないのてす、大阪は文士が少ない、投書する、すきもがない、其中に、わづかの學生其學生の中にも留學生などてすからとても、他國の樣に行んのてす。

○　　　　　上　毛　齊　　木　　孃

女史と云ふに至るのは何れ程學問の廣き御方がなるや否女子文壇にても何か功勞が有りまして女史の稱號を受けるのてすか。

○　　　　　豐　後　堀　　芳　　子

夏の初めに螢が火をともすはあれは何故てあらうか私は疑問てたまらない又地震海嘯及び大風の吹くのは何故てしようか。

記者曰く、わが疑問の課題にはお答へ申さぬ約束てしたから、一々お答へいたしません、右のやうな疑問に就いて、答へがお聞になりたい方は、別に諸孃と記者欄へ投書して下さい、お答へすべきものは必ずお答へいたします。

新課題

郵便雜感

（郵便に就いての事なら何てもろし、思つた事、感じた事、有つた事、郵便と諸孃との關係は必ず何かある筈てす、一寸した處てもよろしいから書いて下さい（二月五日しめきり）

○花　（三月五日しめきり）

▲少女は人生の花、花は天然のうちても最も美しいものてす▲花に就いて諸孃は何を感ずるてせう▲好きな花と嫌ひな花とはありませんか▲諸孃の家には何んな花がありますか▲珍らしい花や變つた花を御存知てすか▲花の色、花の香、花の姿を何と思ひますか▲山に咲く花、野に咲く花、庭に咲く花、何れを愛しますか▲花を見ると何んなことを思ひ出しますか▲花實は何んな風俗て、何んな花を持つて來ますか▲今、諸孃の室には何んな花が咲いて居ますか▲まだ〳〵花に就いてお尋ねしたい事は山ほどあります、一々申しません▲諸孃は何ても彼ても花に就いて言つて御らんなさい、何んな事てもよろしい、花についての事なら▲園藝上、花の養ひ方の心得などもよろしい▲原稿は例の通り半紙半枚に七八行以内「花」と題を書いて其下に姓名雅號を認めること（三月五日しめきり）

諸孃と記者

○記者樣御過者て御座いますか妾はほんとうに嬉いてすよ誌上て記者先生樣と御話しが、出來るかと思ふと嬉しいてす。妾も本誌愛讀者の一人て御座いますが是非一度は投稿して見ようと思ふてやつと抒情文と小說を作りて、見ましたがこんな

風て宜しいですか私没書になつてもかまいませんか本誌に現れるまで投書して見る考へです（岡山四口白梅）（記者曰、たのもしいお考へです、出ましたら猶おつづけなさい、それでなくては上達しません）○記者樣、御尋ねしますが、何でも當選したらその度に住所姓名を、御通知せねばなりませぬか、一度賞品を貰つた事があつても（花葉）（記者曰、當選の度に申込んで下されば間違ひはありません）○記者樣、洋畫を習ふのには何處が宜敷うございませうか苦學するつもりですから成るべく費用の少い所をお教へ下さいませそして一ケ月何程位かゝりませうか何卒お手數でも（愛讀女）（記者曰、何處の方か分りませんけれど、若し東京なら洋畫の先生に就いてお學びになるが宜しいでせう）○記者さんに一寸御尋ね申升が私の方ではラッパ節が流行してましたが今漸くすたりまして只今は別に流行歌はとぎれましたが東京ではどんな歌が流行してますか御話し下さい（上毛紅葉子）（記者曰、申上るやうな歌は流行して居りません）○御伺ひ致し升。博文館發兌日本文學全書中の万葉集は万葉假名なりや普通の假名に飜譯なしありや。蒲原有明樣の獨絃哀歌岩野泡鳴樣の泡鳴詩集以上二書の定價及び發行所。詩人夜雨樣の御住所。林外樣の花要には詩幾篇輯錄候哉而して重大なる詩篇は何々に候哉（辰井ふみ子）（○記者曰、文學全書の萬葉集は萬葉假名に普通の片假名がついて居たやうに思ひます、獨絃哀歌は白鳩社の發行ですが、今白鳩社はありませんから東京の誰かに賴んでお求めなさつたら宜でせう、泡鳴詩集は文淵堂發刊、定價五十五錢）○妾は去年の一月より愛讀者に仲間入りをさして戴いたのよ、だが投書は初めてすの今度新歌謠一首投書しましたの、あれでよろしいのですか、一度に五首六首も投書してもよろしいの、何卒御教ゑ下され度候（紀伊國勤木りか子）（記者曰、一度に五首も六首もは困りますれ、矢張制限通り一人三首として下さい）○御機嫌よくて、私先月拙ない物を送りましたが載せて戴けるでせうか、今からはどしどし投稿する積りですから可笑しくてもお笑ひなさらぬように、そして肩書の所へ移りましたから、お知らせ申します（周防玖珂郡通津村中町三井音吉方はる子）（記者曰、可笑しくありません、どし〳〵送つて下さい）○記者より札幌の山田鈴子樣にお答へいたしますが、お話の御身の上、誠にお氣の毒に存じます、境遇其まゝを文にお書きになる事も宜しいです、謹んで拜見いたしませう）○私今日投書致しましたが規則は是れてよろしう御座いますかもし違つて居りましたら誌上で御知らせ下さいましさよなら（東京市麹町區三番町五十番地山岡すみれ子）（記者曰、此稿のおたづれは幾百通あるか知れません、別にお答へしないのは皆宜しい事と思つて下さい、此處にお一人だけ抜いてお答へいたします）○私は、昨年十月に東京からこの韓國にまゐりましてからは誰れもお友達がなくて只よみものばかりをたのしみにして中にも女子文壇を唯一の友として居ります、そしてこれから熱心に投書いたしますから何分よろしくお願ひいたします（見玉鶴子）（記者曰、韓國からも大分投書が來るやうです、あなたに似たやうな方も多いのでせう）○御なつかしい記者樣私は御社發行の女子遊學便覽がほしくてたまりませんから當地の本屋に取りよせて下さいと賴みましたが取り寄てくれません故誠に申上兼ますがどう致しますと御社から送つて下さいますか代價はどうして送りますとよろしいか至急御知らせ下さい（近江松ケ枝）（記者曰、郵便爲替で本社へ代價と郵稅を送つて下さい、直ぐ本は送ります）○私は一昨年の九月からの愛讀者で御座いますが滿十五歲にたらない不束なもので今まで幾度となく文を作つて見てはやぶり〳〵してゐましたが此度は思きつて投書致しました（いし子）（記者曰、まだ〳〵お破りなさい、而して其中から好いのを月に一回づゝ投書なさい）○記者樣今年は大そう惡い風が流行するのね？妾も風邪しいてよ、記者樣は如何又誌友皆々樣は如何です（東京吉江子）（記者曰、第一の記者は舊冬發熱三十九度以上、第二の記者は今も風邪の氣味、以下社員一同引いたものもあり、引かぬものもあり、皆さまも大切になさい）○作名を出す時には本名は如何して出せばよろしうご座いますかお手數ながらお敎へ下さい（大分平田みつ）（記者曰、其原稿のすみの方へ書いて下さい）○大層お寒くなりましたが別にお障りも御座いませんか本誌諸共御健在の程を禱ります。人烟稀な信濃路はこの頃の淋しさ云はむかたなく只籬の片ほとりに微笑める南天の紅く匂ひて人懷しき風情が見えるばかり、八重なす峰巒の大かた白妙に埋もれて愈々農閑の期節となりました、これから拙いながらも澤山に投書致したい考ですから何卒御指導御引立を冀ひます。（信濃

上伊那郡中箕輪村有賀まさ子）（記者曰、御の通り山國は雪に埋る期節となりました、何うか其間に澤山、お作をこしらへて下さい）○私一昨年七月より女子文壇愛讀して居ますが寫眞を送らうと思つてゐますが私妹や弟と共に寫つたのでもよろしう御座いますか是非お答を願ひ申します（萩町照子）（記者曰、宜しうございます、是非お送り下さい、外の方でも若し御家族と御一しよにお寫しになつた寫眞がおありなさらばお貸し下さい）○私は淺學ものですから投書するのは恥しう御座ゐますがこれから恥をしのんで投作するつもりですからよろしく願ますそして投稿するには本名を記さなくてはいけませんか（靜岡縣下無名草）（記者曰、何うか記者までに本名を知らせて下さい）○誌友倶樂部の御陰げ様て伊勢に御やさしい笑子様と云ふ親友が出來ました是れも皆記者様の御陰と日々喜び居り候厚く御禮申上候此後も何事も御敎へて下さいれ願い上候これからは御寒さ強く相成ります故御身大切に遊ばしませ（駿河國沼津城内添地三二八渡邊とよを）（記者曰、好いお友達が出來て記者もお世話甲斐があります、何うか仲好くお交はり下さい）○私れ女子文壇を愛讀致して居りますが一度投書して見たいと思ふて居りましたが何分淺學な者てすから はづかしくて致しませんてしたこれから勇氣を出して投書致しますからどうかなほして下さい おたのみ申ますさよなら（大阪府南河内郡富田林町木澤宇三郎方 松村きよ子）（記者曰、河内からは未だ投稿家が見えないやうてすから是非御奮發下さい）○今迄一通の投書もせん者てすが投書のせぬのも面白く御座いませんから一封投書しました何分よろしく願ひます（日本橋區蠣殼町三ノ一一、三上才一郎方近藤春江）（記者曰、成程投書せぬのも面白くないてせう、出來る方はする方が面白いてせう）○妾事何とて變りなふ新年をむかへましたから御安心遊ばして頂戴よ今月分の雑誌は大變早く戴きましてほんとに嬉しふ存じました其上ふつゝかな私の文迄新年の誌上にかざられまして私はほんとに〱申上様もないほど喜ばしく御座いました之も皆記者先生の御進め下さつた御陰様てす増刊は昨年と同じてすか誌上で御答をねがひますよ（福岡縣築上郡上城井村鬼木龍子）（記者曰、増刊は昨年の通りです）

諸嬢の交際

○誌友の姉様私は高等女學校の三年てすが音樂が一番好きなのてす何卒私と同級の方及び音樂のお好きなお方と御交際願ひます（岐阜縣岐阜市外加納町二丁目背沼ちゑ子）○誌友諸姉様にお願ひ致します妾は貧困の家に生れて好きな讀書が出來ません、それはお恥しいが學資がなくて、どうぞ同情の涙をお持ちの諸姉様よ、お讀み古しの雑誌や書籍を惠んで下さい、御恩は決して忘れませんから（越後中蒲原郡兩川村五十嵐美波）○諸友の諸姉嬢様妾は皆様の様に優美な繪葉書などて御交際する事が財政上の都合も有つて出來ませんが然し地理の參考になる事や文學の研究になる事など筆先の美と誠の友情とを以て永久的に御交際の程を願ます（長野縣上田在山口齋藤やすの子）○皆様私は秩父の山中に住む不束者てすが何卒御玉章の御交換を願ひますそして必ずお名前の下にお年をお書き下さい私至つて字が下手いのてすが一生懸命に書いてお返じ致します秩父の高山ふく子様秩父神社の祭禮にいらしつて私參りましたのよそして貴孃じやなかろふかと思ふ方をお見掛け申してよ扇髮て背がすらッとして肩あげのない羽織に草履ばきでした若しか貴孃じやなくつて（埼玉縣秩父郡三田川村近藤とく子）○名古屋市の縣立高等女校の二年生ていらつしやる方は何うぞ御交りして下さいな御願ひいたしますから（神戸市御幸通八丁目一五四櫻井政子）○本誌愛讀者の諸姉様私は高等小學卒業した許りの者でも二十才以上の御方と交際下さいな手許に小説二人濱子女學世界三十六年から今月迄ハガキ文學少女學等ありますから面白い小説と交換下さいな（水戸市外市九丁目小田野しげ子）○我も愛讀者の一人となりましたそして我は只今千葉女學校に在學中てあります此れよりは御交際を願ひます然し我は女學生か中學生かわかりませんから交際をしてくれるなら最初御寫眞の交換を願ひます我もすぐに寫眞を御送り申上升其れから以後は永久にレッターの交換を致します（千葉縣印旛郡臼井町台立原登樹子）○皆様私は越後の田舍者てすが實に淋しくて困りますから何卒御玉章にて御交際下さいまし私も誠に拙い筆てすが眞心を染めて御返事致します（越後三島郡深才村稻田横山俊子）○さあー妾も今度誌友の御仲間入りをしました一人なのよ以後は仲よく女子文壇を飾り亦諸孃も妾を可愛がつて下さいれ、て妾は毎日妙な事を考へて居りますよ、それは必ず多數の人を評する譯には行かないが、兎角世をはかなんで暮す方がまゝ有ります、即ち悲觀的生括

Digitized by Google　　Original from HARVARD UNIVERSITY

なして居る人があるのれえ、妾は常に樂觀的生活てすよ其の中て最も快樂とするものは、おゝそれよ、諸孃との交際てす、若し壇友諸孃の內妾に同情をよせて下さる方がありましたら遠慮なく、書信の交換を願ふのよ（群馬縣碓氷郡九十九村小日向前田中、柳澤愛子）○皆樣の中で十六才の方て裁縫好きな方と御交際が願い度御座いますが御同意の方が御座いましたら下名へ御手紙下さいましな又繪葉書の交換もどうか（近江大津市松本望月本治郎方粂子）○廣き天下の諸孃樣よ誠に結構なお寫眞や繪端書を澤山に下さいまして何共御禮の申やうもありません夫は寫眞は五枚切りてすが繪葉書は朝鮮から三枚と支那から一枚、內國から三十六枚都合四十枚てありました私は是て諸孃樣の「緣齒帖」と題して一册に綴りました何卒今月も賴みますよ御返事は一々した筈てす、又朝鮮の久滿子さんに御禮申上ます、あなたのが右四十枚の內て一番立派てした（京都寺町今出川柳風呂町眞渓房子）○皆樣私は至つて筆跡拙ない者てすが何卒御文通を祈る繪葉書も少々ありますから交換して下さい（大分縣東國東郡西安岐村小川宮野直子）○諸孃樣方妾は此度肥後の山奥から出まして讀者となりました何卒此後はお見捨なく御交際御文通くださいませ（熊本縣球磨郡ふかだ滿子）○田舍て淋しい又不幸にして學校さへ休んて居ます何卒玉章の交換を願ひます必ず御返事致します（伊豫喜多郡久米村澤田ヌイ子內白露）○妾は東北の或片隅に住んて居る不束者てすが今度本誌愛讀者の末席に加はりましたから諸姉樣方御交際して下さいな（秋田縣横手町中町平田方比良多饜子）○私は此度都合上住所を左の所へ移しました相かわらず誌友の皆樣あみもの寫眞繪ハかキ交換を願ひます（愛知縣東春日井郡瀨戶町津金方林田糸子）○なつかしき誌友の姉樣方私も女子文壇を友として、片田舍に遊んて居る者てすが、どうか永久的に交際をして下さい（備後國雙三郡君田村住田政子）○おなつかしき姉上さま妾の手許に凡そ十種程奇麗な朝顏の種子が澤山取りてあります御望みの御方は御遠慮なく郵券參錢封入遊ばしてよ（岐阜縣安八郡牧村木村淺子）○みな樣お玉章の交りを御許し下さるお方樣は御座いませんか（韓國京城斗毛浦鏡白萩子）○皆樣交際を願ひます、又編物繪葉書の送附を願ひます（岐阜縣大垣下魚屋町淺野京方五十川波江子）○玉章の交換を願ひます又舊派の和歌を添書して下されば一層喜びます下されば必定返書します（若松市材木町九九花里胡蝶女史）○誌友の姉樣方妾は極山里の曉の女てすがなにとぞ永久の御交際をねがひます（群馬縣山田郡廣澤村金子喜久子）○誌友諸孃樣私は何にも知らぬ田舍者てすがどうか皆樣と御一處に繪葉書や御玉章の御交換を願ひます（德島縣勝浦郡八多村關みれ子）○私は今秋亞米利加から歸つて淋しく片田舍に住むてる淺學無才の者てす何卒畫葉書、手紙、詩歌、英文の御交際をして下さいなきつと御禮には彼地て取つた寫眞を送ります（神奈川縣愛甲郡下川入村志賀波子）○皆さん私は交際が一番すきてす繪端書や玉章を送つて下さい返事します鬪書の交換もすきてす宛名は（滋賀縣栗太郡物部村大字大門宇野惠美子）○愛讀者御姉樣妾は不束な者てありますが愛讀の一人てあります永久に御交際を願ひます（山口縣熊毛郡高水村山部內山本文子）○妾はあの秋月澄子さんの親友よ至つて不束者てすが諸姉樣方よ!! よろしく御交りを御願ひいたします（仙臺市北材木町跡附町百四六澄乃江月子）○誌友の皆樣！私は浪風荒き土佐の者てすが二年前當地に參りまして淋しき孤獨の生活をなし慰藉を與ふるは唯詩文のみ同情深き皆樣雜誌の交換繪葉書（趣味ある）の交換を願ひます鐵面なる人の樣只取りはしません（大阪新町通四吉岡內北川正子）○私しは繪畵が大好きてす依て繪畵のお好きの方は勿論他の諸孃達も繪はがきを交換し深き御交際を願ひます（東京府下八王子町停車場前乙幡もん子）○賢こき皆樣よ此夏頃より本誌の愛讀者になりましたから宜しく御交際を願ひます（周防玖珂郡通津村字中町三井音吉方はる子）○誌友の諸姉さま方以後はよろしく交際を願ひ升繪はがき御玉章御送りください返事は必ず致します北滿洲になりますから（淸國安東縣市塲第二區天ノ二號地草刈高行內草刈ゆり）○誌友の諸姉よ私しは岩手の山里に住む不束者てすが何卒ぞ可愛がつてください、ほんに姉樣方が羨ましいわ私しには兩親も兄妹も無いのよ今は親戚の家に手傳して居るの、姉樣方のお讀みふるしの雜誌なり新聞なりお惠みくださるなら私しはどんなに嬉しいてせう、きつと出來る丈のお禮はいたしますよ（陸中江刺郡藤里村二九七高橋方高橋光子）○皆さんよ妾は出羽の草深い處に居る不幸なる者てすが、妾のアルバムを賑はして くださいませんか、猶御手紙て

も何んでもよう御坐んす、かならず御返事は上げますよ（秋田縣横手鍛冶町中文方大橋貴惠子）○諸姉様不束ながら以後宜ろ敷く御交際をれがひます又どし〳〵繪葉書の交換を願がひます（臺南小士帝街二十七番戸杉野むら子）○私共の里は風景は絶佳と云ふては無いが鶯も鳴き花も咲き涼しい满風、小川のさゝやきなど先づ不足はあるまいと思ひますから異郷の皆さんと自分の里の事情など知らせ合度いのよ（印旛沼東不動の里砂の舍にて波隠女天波子感ふ）○諸嬢さんの中で兄さんか誰れかゞ北米シヤートル市へ渡航し被在る方は妾しの親族の者が彼地らへ往て居りまして懐しふムりますから御交際下さい又雑誌新潮明星白百合文庫秀才文壇朝明御送り下さい相當な書籍を返禮します詩集は二十五弦、白羊宮、花守、銀鈴、舞姫等相當な價お譲り下さい（茨城縣那珂郡戸多村大字戸四九ノ二綿引はや子）○諸姉様方つまらん者てすが愛讀者となりましたからお交際を願ひます（大分縣大分郡日岡村三百三十四番地平田つみ子）○福岡縣の足利春枝様貴女も御淋しい御身の上私も四ツの時母にわかれ兄弟はなく今は養女て異父母の愛をうけて居ますどうか皆様御交際をなすつて下さい又玉章繪葉書交換致しませうよ（松江市灘町百三古志ます子）○仁川の松永しげる下谷區の埜村なかの二名は人道を無視する道徳上の大罪人に候速かに懺悔せずんば天に居ます我實の父の誌友其の難に罹りし愛子に代つて罰するを辭せずと告ぐ（秋田縣角間川町うら町松田せい女）○昨年十二月最愛の妹に死別れ悲しみの中にも目出度き新年は迎へたものの同じ年頃の嬢様方を見れば戀しみが一しを増しますが只だ

諸姉様の美しき繪葉書や文章を拜見しては樂しむのみにて他に心を慰む可きこと丶てはありませんから何卒繪葉書や文章を茲に倍し送つて頂戴先著三名へ妹と妾の寫眞十名へ紀念のリボン後は相當のものを送つて上げます（大阪市北區老松町二丁目一三二日原逸子）○諸姉様よ私は至て田舍者の不束者て御座いますけれ共何分宜しく御れがひいたします（鹿兒島縣加治木森山たの子）○皆さん私は樺太島に居りました頃は色々御慰めくれまして誠に有難ふ私は去る十二月十八日コルサコフ港を發廿五日着宅しましたから御安心下さい尚皆さん私は樺太風景繪はがきありますから先着二拾名丈へ差上ます繪はがき玉章の交換御願申ます（岩手縣稗貫郡湯口村字二ッ堰除山媛子）○女子文壇愛讀者の諸姉様妾も本年より本誌愛讀者の一人となりました故以後何卒よろしく御頼み申上ます亦是より御文通をも願ひますよ（山口縣熊毛郡高水村粢口まさ子）○一時的の交際でなく永久に美しき繪はがきや御玉章を下さいな妾もきつと上げますから（栃木縣宇都宮市旭町一丁目丁子屋方江面柳花子）○誌友の皆さまよ不束なる妾を以後妹と思召して玉章や繪葉書編物などの御交換を願ひます（宇都宮市旭町一ノ六五柏崎喜久子）○私は繪にごく趣味を以て居りますが皆様のお中に水彩畫、木炭畫のお好きな方て末永く御交際して下さる方はありませんかお所を誌上に知らせて頂戴（福井市豐島中町梅田正子）○誌友の諸嬢様妾は片田舍に住んで居る至つて淺學の身てす唯女子文壇を友として樂器を奏して心を慰むるのみてす何卒音樂の好みの方は交際して唱歌

等交換して下さひませんか（大分縣東國東郡西安岐村宮野直子）○誌友の皆様私しも愛讀の一人なれば妹と思つて手紙や繪ハガキの交換を願ひます御返事は神にちかつて上げます（群馬縣吾妻郡中三條町大字伊勢町小林あき子）○繪葉書の交換もおれがひいたします（仙臺二十人町針金清子）○おなつかしい誌友諸嬢様、初めてお目にかゝります、私は誠に田舍育ちの不才なる者てすけれど、これからはどうぞお仲間に入れて下さつて、末長く御交際を願ひます（德島縣麻植郡學島村堤菊惠）○親愛なる誌友の皆様、毎度美はしき御手紙ありがとう、厚く御禮申上ます、さて妾、今度都合て少し遠方の女學校へ入學致しますのよ、それて今頃は種々と準備中て、實に多忙を極めて居りますて、折角御手紙下すつても、失禮致しますから、こゝしばらくの間絶交致します、てすけれども初めの約束は忘れませんよ、かたく守つて居ります、皆様もれ、又目的地へ行きましたら、親しき方には一々御知らせ致します（播磨國飾磨郡廣村田村秀子）○皆様あけまして御目出たうぞんじます私しも今年は十四才になりました私し熊本の方と御交りを致したいのなるたけ十三四五の方とれ一御願ひます（鹿兒島市池上町是枝とく）○誌友諸嬢さまにも何卒末永く御交際をれがひます玉章寫眞の交換もれ、それから下野の新井琴子さん私も君と同感です一時的の交りてなくて永久に交際をれがひたいのよ（石川縣鹿島郡田鶴濱今村可祝）○諸姉様私は今年十七年になりました此後末長く不束者の私と御交際下さいな又私エハガキの交換は第一御願よ（横濱市富士

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

見町一ノ三奥田鶴代）○親愛なる諸姉樣妾は群馬の片田舍の小學校に奉職して居る不束者ですが以後よろしく御見捨てなく御手紙御交際下さな願ひます（群馬縣佐波郡島村小學校內力丸美智）○敬愛なる誌友の皆樣御親切なる御玉章御送り下さいまして有難う尙相變らず御交際を（大阪市北區上福島福紡寄宿舍內早枝藤子）○各地方の姉樣方私は無學無才の者ですが御交際願ひます又繪葉書の交かんも（日本橋區旅籠町入森富美）○誌友諸孃樣よ妾も此の片山里に住む愛讀者の一人ですが何卒永久にお交際を願ひます又當地は田舍の事とて美はしき繪ハガキなどはありませんから皆な樣御送り下さいなお返禮には妾のみにくき寫眞を必ず差上ます（北海道有珠郡伊達村矢內菊江）○親愛なる誌友諸姉樣以後は宜敷御交際を願ひますそして一時的でなく永久的に、然し男子の方は御ことわり申します（播州飾磨郡廣田村濵田くにゑ）○本年も相變ず御交際を願ひます（磐田郡岩田村匂坂中青邊梅子）○願くば誌友の諸姉妹よ、只ひとり、此の都にさすらふ身にて、思ひ多き妾を、エデンの花園に導き給へや（神田區三崎町二ノ二小濵方前田綾子）○越後の春江樣過日はおはがきありがたう御座いました、何かあの御言葉にお間違いのない樣に御交はり下さいまし、何れ直御文通する樣になればくわしく申上けます、私あれが本名ですの、あなた何か直接御手紙頂だいな、私の宅は北長狹ですよ（神戸市北長狹通六ノ一〇五鴨田まさ子）○妾は高等女學校に通學して居ります不束者ですが皆樣永久に御交際を願ひます、且つ繪葉書寫眞玉章の交換を乞ふ（堺市戎元町大道人登三藏內中井せい）○本年も相變りません樣に御交際下さいますやうお願ひ申上ます（日向國兒湯郡木城村吉原登美子）

○取消。　前號の當欄に於て麻布霞町十二番地海賀篤磨の名を以て、谷文子に與へたる一文あり右は全く何者かの惡戯にて海賀氏は同番地に居られず少しも覺えなき由取消を申込まれたれば茲に謹んで、前號の彼の一文を抹殺す（記者）

寫眞編物交換

○北總不動尊下の片ほとりに女學校も中途で休めて諸行無常の鐘の音を朝夕聞きつゝ身を淸めて古里をはなれさびしう學んで居る不束者ですけどもどうぞ變つた絹栞を御惠み下さいませ又寫眞も交換なすつて下さいましな醜いのですけども御返じは忘れませぬ但何名に限りなど申ませぬ故諸孃樣方よ何卒〳〵氣高い御すがたを以て妾のアルバムに美さをそえて下さいましな（下總成田日吉倉內橋爪はま子）○皆樣私は編物の雛形を以てゐますが畫ハガキ御持ちの方は御送り被下ば編物で御禮を致します（上毛吉井町以惠子）○貴姉樣樣寫眞（シオリ）の御交換を願ます早着五名には妾の寫眞に繪葉書に（シナリ）を添へて御返事申ます（秋田市東根小屋七田邊方安藤淸江子）○諸孃樣、妾は、十七八歳位の誌友姉上樣たちと對面したう御座いますから何卒お寫眞と「リボン」とを添へて御交換を願ひます、もし妾に不正がありました時は誌上て如何にはづかしめられても苦しくはありません（長野縣下高井郡日野村更科豐田たかの）○誌友の皆樣私は編物なぞの細工が大好きですからどうぞ「シオリ」「ヒザツキ」「寫眞掛」外めづらしき物御送り下さい送りて頂きましたお方には女學世界、明治の令孃、婦女家庭讀、小說等にて早速御禮致します、又繪葉書の御交換も願ます（備前西大寺町市場岡本園子）○皆さん申し兼ねますが栞や臂突を御送り下さいませぬか必ず繪はがきや雜誌等て御禮致します（近江長濵南船中山すて子）○御仲間入りの御祝として持合せの書籍品物を差上ます皆樣の御寫眞と和歌一首を半紙にしたため御送り下さい集ただけを御送贈致します人の罪我從女子の衞生文のかきぶり以上の品物書籍雜誌御送り致します（香川縣木田郡古高松字南谷山本文吉樣方同せい）○親愛なる諸孃樣寫眞栞の御交換を願ます御先着十名へは妾しの寫眞と北海道共進會紀念スタブ付繪葉書を添て差上ます（北見國利尻郡沓形村大森花子）○誌友諸孃よ栞か編物を送りて被下ませんか返禮には近江聖人紀念葉書（スタンプ附）を送りますから（近江大溝町永田田中江雨子）○我が親たしくゆかしき諸孃よ妾は山深き木津川の方邊りに淋し歳月を送りおる一少女です以後永えに御玉章や御寫眞や編物やらの御交換を願ひますきつと御返事いたします（山城國相樂郡加茂村友鍵司五十四番地吉田重子）○皆樣永らく御無沙汰致しました妾れ九月から土佐の伯母さんの所へ行つて來ましたのよどーか相變らず寫眞や玉章の交換して頂戴な聊かお土產として寫眞先着六名へ眞正サンゴーの根がけ進上致し升玉章先着十名へ胡製枝折を差上升（紀伊日高郡藤田村字吉田阪本六右衛門樣內阪本春江子）○皆樣妾誠淋敷故今柄末長くお交り下さいませよ一昨年と昨年のとを妾の寫眞三十枚

持ていますよ十八歳以上のお方で東京、京都、神戸、加古川、岡山、福山、三原、廣島、地方の お方様成るべくはご交換を願ひ升 皆様の内二三歳摘十一二歳までのお寫眞お持のお方様お惠み下さいな妾のと當地の湊エハガキを以て ご返禮申升よご文通も切にお願上升 (尾道市津地土寺町藤野秀子)○縣下の先進諸姉様 おなつかしう私は此の小村に人と成た愚者ですが御玉章あみ物未だ修養中ではございますが刺繍の交換は切におねがひいたします (群馬縣佐波郡芝町字上新田田島久太郎方膽野芋猩子)○皆様明けまして御目出度う、あの繪はがきや御寫眞送つて下さい私も必と差上げますから (小石川區原町四十八番地吉田内佐々城とよ子)○皆様妾は瀧の名所の傍に住む不束者ですが御見捨なく寫眞、繪はがき等の御交換を永久願ひますよ、大阪の伊藤初榮さま、岩手縣の飛嶽子さま、大阪齋藤芳さま、姫路の藤本鐵子さま、福島縣の河野よし子さま、伯耆の野坂みき代さま右之御姉上さま先日は美しき御はがき有り難く受取りましたから誌上を以て御禮申します (神戸市布引瀧椎常子)○みなさん妾のもとに多くの本があり升エハガキか寫眞か栞か雜誌を送くつて下さい (安藝國高田郡甲立村深瀬笑嗣とみ)○誌友の讀様よ私しは今寫眞が二十枚と編物が十五種とありますから美くしき繪葉書下さい 先着の御方から順に差上ます(愛知縣丹羽郡大口村大字上小口寺澤義子)○誌友諸讀様妾は二卷十五號からの愛讀者て、姫路の女學校の二年生てす、是までは投書した事はありませんが以後はどし／＼やるつもりてす、皆さん、編物、寫眞、栞、造花等送つて頂戴な、妾も直ぐにお返し致します (播磨國揖保郡千本國重貞美子)○諸姉様方の玉章寫眞を望む先着の方五名に私の寫眞を呈す後着の方には秀才文壇女學世界婦人世界いづれにても御送り致します (郡山本町鈴木耕子)○編物を送つて下さつた諸姉様には先着七名限り私の寫眞にて御禮致します男の方には一切御返事致しません御末長く御文通を願ひます (山梨縣東八代郡白井河原村長泉寺内おしま)○御寫眞御送り下さつた諸姉様にははづかしながら私の寫眞に寫眞ハサミを付けて 御禮致しますたゞし九枚しかありませんから先着九名限りてすよけれども男子には一切御ことわりします (山梨縣甲府市百石町中村專太郎内中村すみれ)○私の所へ脊紋の形百餘種誕掛け袋物等の雛形六拾種ほど有りますが御入用の御方は編物造花等の美術品で御申込み下されば御望みのもの拾五種づゝ着の前後を問はずいつても差上げ申します又右雛形及び編物の交換も願ひます (新潟縣南魚沼郡大卷村宮所顯子)

圖書換讀

○皆さんの中て伯爵夫人、紅葉全集、にせ紫、夏子、澄子、乳姉妹、いちぢく 等何れにてもお持の方は相當の代價又は左の書籍と御交換を願ます女夫波、茶の湯、書海、女子文壇、女子文藝、女學世界、婦人世界、ムラサキ、笹子等 (越中國福岡町地崎ふさ子)○皆様妾故鄕の北國新聞なお送り致しますから東京の何新聞ても交換なさいませんてしよーか北國新聞は石川縣金澤市の發刊て隨分よいてす (福井縣南條郡河野小學校美谷子)○妾は女子文壇五冊三十九年分秀才文壇五冊三十九年分中學文林三册不用に付郵券六錢封入申込み下さい大至急送りますからそうして諸嬢様の内に孝女白菊の歌御知りの方は教へて下さい相當謝禮す (東京神田旭町三二樋口方長井漣月)○誌友諸姉のうちて文藝倶樂部增刊俳句風流陣お持ちの方は私の古句新註、鐵幹子、不如歸のうたの何れかとかへて下さいな (神戸市兵庫門口町杉山とし子)○諸嬢の内て二筋道破戒琵琶歌御所持の御方は妾の涙子と其上添えてあげますが御交換下さいませんか伯爵夫人心の波青春不如歸等も有りますがそれは最少し後て交換致しませう (長門豐浦郡田耕町上大田伊藤明枝)○私最近の中學文壇十四五册不用になつてゐますからお望の方は美人繪葉書の上等なのてどし／＼申込まれよ (和歌山縣海草郡西和佐村大字岩橋池見俊子)○私は女子文壇初號よりの愛讀者てしたが長の病氣の爲め二卷、九、十、十一、十二、十三等を持ちませんから皆様の中て不用の方があつたら御送り下さいましな御禮には一册に對して觀兵式甲種乙種鐵道五千哩海戰一週成田新勝寺紀念成田名所繪葉書二組の中御望みの品を差上げます (下總成田日吉倉內橋爪はま子)○私は都の春離れ小島閉塞隊進行曲粹紅葉狩人體衞法水彩畫手引等を持つて居ますから露營の夢須磨の曲か又は他の新樂譜(寫せし者にてもよろし)か洋畫に付ての本と交換して下さいませんか (下總成田日吉倉内橋爪涙)○私の手許に、霧月花、貴女の玉つき、言文一致文例、貴女用文五千題、不用になつて居りますから皆様の內て、一葉全集、都の花、かげ草、小嶋のいづれかをお持ちのお方は、どう

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

を御交換を願ひます（宮城縣栗原郡金成村二階堂貞子）○誌友の皆様の中に藤村全集かみだれ髪、銀鈴、戀衣を御持ちの方は私の美辭寶鑑、明星、義雄と彌物、詩築わか草など丶御交換下さいませんか何卒御願ひたします（横濱市根岸町地藏坂上吉川白菊）○寫眞送くつて下さる人に天打つ浪をあげ升（廣島縣高田郡甲立村深瀬笑岡あき）○皆様の內で靜思錄、思出の記、明治時代文範、不如歸の歌、濱子等不用の お方があれば妾の、中學世界十二册、女子文壇二十一册、探險世界二册、今人古人、小說若紫、奇人の旅行、新海底旅行、讀書作文用字訣の內何れとても御交換下さい（讃岐大川郡三本松町松永廣子）○皆樣に御願申します小說の伯爵夫人（前後共）にせ紫（前後共）忘れかたみ、眞人の自白、緣不緣、青春、女學生、不如歸、戀衣、女夫波、小猫、小華族、小督姫、女學生訓、婦女手鑑法外に雜誌五拾册ばかり不用になつておりますから御入用の御方は小說雜誌や姉様方の御寫眞に栞や又は寫物造花などにて御申入あれなを先着二十名には妾の寫眞を一枚宛御添申して御返申します又繪葉書も送つて下さい乾度御返事致しますから（熊本市段山町七拾九番地友井孤友子）○皆樣の內に小扇、玉蟲、塔影、詠歌の栞、戀衣、銀鈴、舞姫、金色夜叉の歌、俳句季節本御不用の方は御送り下さいませ相當の御禮は致します（岐阜縣大垣郡便扇區內牧村木村淺子）○諸姉上樣の御中で離小島の略ふとノルマントン沈沒の歌と谷間の姫百合を御存じの方何とぞ御貸下さい相當の御禮を致します（東京市本所區向島須崎町牛島小學校內松上てる子）○皆樣妾の手許に英譯不如歸、黃菊白菊、眞人の自白、かくれみの、桐一葉、新夫人、胸ひとつ、詩集數種、さつま琵琶うた其他小說雜誌等不用になつて居りますから、皆さまの、夏子、女夫波、寬風戀風、慰問袋とか申す新しい小說なれば何てもよろしいから送りて下さい、相當の書籍に寫眞を添えて送ります必ず御損は悉もかけません（信濃南安曇郡温村一三六、西山方靈江子）○姉樣方の中で小扇、銀鈴、竹柏園集、小說內頭、萬朝小說傑作集、出處、佐々木先生著の玉川集、同歌集おもひ草、以上御不用なれば私の心琴、花天月地、白百合、菊池氏著の小說春日野若子、離れ小島の歌と交換又は相當代金にて御讓り下さるか或は相當品にて御返禮申すか御望みに從ひ申します（神戸市楠通二丁目高橋龜子）○誌友の孃よ妾二三年前から集めたのでまだ新らしい町の仙女、夏子、不如歸、青春三册己が罪、乳姉妹、濱子思ひ出の記黑潮寬風戀風其他種々の詩集が數十部ありましからお入り用の方は上等の繪端書に歌か俳句一つかいて希望の書名は隅に小さく書いて、又は相當の絹栞か、ひぢかけに孃の最近にお撮りになつたお寫眞なそえて申込み下さらば即刻御郵送申上升（羽後本莊古雪百五菊池柳子）○皆樣の中でソクラテース人物養成譚及フランクリン自敍傳詳解御不用の方は相當の價を以て御讓り下さいませんか私のハガキ文學及ムラサキ御望みの方に差上げます（北海道天鹽國留萠村相原蕣英子）○皆樣の御內で鐵道唱歌と世界唱歌と御存じの御方は數へて下さい數へて下さつた御方には先着五名樣へ少女世界一册と繪葉書とて御禮いたします（京都上京區千本出水上ル廣瀨紅栗生）○諸孃樣私は不束者てございますかどうかよろしく皆さまの內で小說濱子、伯爵夫人、炷子何れなりとも御持ち御方は女學世界三册づゝと交換して下さいませんか（南河內郡三都村大字岩室中林久子）○劇詩釋迦、白羊宮、春鳥集、東海遊子吟、花妖殿荒草、あらゝぎ、孔雀船、小池十種、烏水文集、麥の花、あやめ草以上の書物御不用の方は私の新曲かぐや姫シルレル詩集テニソンの詩小詩國ユーゴーの詩金帆白すみれ亂れ髮淡青花シエレーの詩小說花たば青春夏炎文眞人の自白等と交換して頂戴な。亦安く御讓りも致し升（寄宿舍舍監の證明ある方には御一報次第何時でも御送本致し升）照會は往復葉書近江甲賀郡柏木村泉辰井ふみ子○皆樣の御手許に小說伯爵夫人上下、濱子、露子夫人、寬風戀風、緣不緣、小督姫等御持ちの方は私の手許に新學士、不如歸、人世の行路、テニソンの詩、和歌作法指南、作文祕訣、乞食王子、新撰日本文典、其他種々の雜誌澤山ありますから御望みの御品と御交換下さいまし（豐後臼杵新町安部ふじ子）○私は新體詩指南、うもれ木、新潮、いざさらば、才媛文集、花がたみ、日用家庭要法などを持つて居ますから、皆さんの中で、女子懸賞文集、朝ばれ、玉むし、美文作法をお持ちのお方は交換して下さいませんか（越後中蒲原郡兩川村五十嵐美津方五十嵐よしの）○誌友諸孃の內で女子文壇第二卷第十四號と不如歸の歌お持の方は妾にどうかお讓り下さいまし原價でお引受致します（埼玉縣秩父郡吾野村高山ふく子）○諸姉樣よ私は己が罪の歌大弦小弦黃菊白菊伯爵

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

夫人間の世中夏子等不用に成つて居ります湖上の美人の歌不如歸の歌澄子等と交換して下さい高價のものには必ず御禮仕ります（羽前東置賜郡大塚村大字塚那須はるゑ）○諸孃様の內小說乳姉妹忘れ形身まだ見ぬ親人の兄不如歸の歌己が罪の歌不思議の娘やどり木等いづれにてもお不用のお方はお送り下さいお返禮には私の新小說文藝倶樂部同じく明治三十四年七月發行の增刊旅艶女學世界少女界日本家庭太陽秀才文壇女子遊嬉の栞女子遊學便覧少年時粧報明星ノルマントンの歌等いづれにてもお望みのを必ず必ずお送り致します（北海道有珠郡伊達村矢內菊江）○妾の處に、少年節用、地方雜誌、蛇苺數册、處世訓、塔中の怪、妖怪奇談、女探偵、宇和島物語、俳諧集十數册、秀才文壇數册、料理法、書法自在等不用に成つて居りますから寫眞、栞、巾着（以上絹製）などゝ御交換を願ひます決してづるい事は致しません、先着二十名に差上ます（越後龜田町字城所齋藤きよ）○皆様の御內で何か面白い小說か美しい景色の繪葉書を御持ちの方は左の書物の御交換下さいませんか小說古王宮、小說叢書、テニソンの詩、不如歸の歌、新古文林、女學世界、女子文壇、新公論などの雜誌數十册（廣島縣双三郡畢村林小枝）○大內道枝子さん私は聖書を以つて居ります、然し女夫波を御持ちなら御交換を御願ひ申します今後宜敷ふ（備後深安郡春日村大字宇山坂本蓮月）○誌友の諸孃よ何卒笑の國、水彩畫帖、作文書、園藝に關する書物、ゑはがき（字なかゝずに）等御送り下さい此外の書籍雜誌類でも面白いのなら何卒御送り下さい但し小說は御斷りいたします。唱歌、雜誌其他にて御禮いたします（山形縣西田川郡鶴岡町鍛冶町甲拾番地藤佐井）○姉様方の內に目下不用の新刊小說御もちの御方御かし下さいませ一ケ月內には必ず御返し致ます御禮は送料にエハガキをそえて致ますそれとも御惠下さればなお有難し（大分縣大野郡上緒方村阿部知竿）○妾はれ白衣婦人（幽芳作）價六十錢のを持つて居ますから、バラの造花と交換して下さる御方は御座いませぬか先着の方々へはリボンで御返し致します（金澤市泉町一四八山上節子）○誌友諸孃!! 妾の許に、言海、不如歸、乳姉妹、家庭料理法、己が罪前編、金色夜叉、心の波、露子夫人、人生の旅行、雪月花、などがありますから、女夫波、不如歸の歌、青春の詩、乳姉妹の歌、金色夜叉の歌、春鳥集、みだれ髮、俳句作法、女學生、寬風戀風をお送り下さつたお方に一册宛差し上げますから、何卒御送り下さいな（播磨國揖保郡千本國重貫美子）○誌友諸孃様皆さんの內で聖書の御不用な御方はありませんか有るならば大至急御惠投して下さいな其御方には御望により相當の金錢或は書籍にて返禮します又私に御同情ある諸孃は御寫眞、繪はがき、書籍雜誌、玉章の御交換をして下さいな附記す私は高等小學校を卒業したばかしの不束者てすから宜しく（千葉縣東葛飾郡湖北村字中峠根本仁助方利根逸女史）○みなさまの內て女子文壇第二卷第一號より第十二號までのがありましたら何號なりと御不用の方がありましたらどうか御送下さい各一册につき（一錢五厘）郵便切手五枚づゝ送ります兵庫縣飾磨郡高濱村ノ內三宅村累藤りき子）○私の手許に三十九年度の文藝倶樂部、高等美文、すみれ集、心吟等あります繡物ひつぢき玉章にて御申込みの方に送ります（東京築地南飯田町一番地長島客月）○私しは女學世界、女子文壇、秀才文壇、文庫、文藝界、文藝倶樂部、新古文林、新小說、ハガキ文學、等の雜誌を澤山持つて居ますから、皆様の內に中學生か地方雜誌を御持ちの方は、何うか私の雜誌と交換して下さい、又何んな雜誌でもよろしうございます。紀念の爲めに先着者五名に限り文庫の合本（古）を差上ます。又春駒、凌霄花、七ツ星、夏子、塔影、伯爵夫人、涼子、小詩國、鳥水文集等御持ちの方あれば一葉全集、新體辭典（誘文社）、心の泉、人かをにか、白玉姫、花守日記、女波男波、新赤毛布、空中飛行艇、露人の娘、金色夜叉の歌、源氏物語の歌、言海、世路日記、亂れ髮、夏花小女、曉鐘の中何れとも宜しき故交換致して下さい、又其の他の文集が多くありますから何の本にても宜しき故交換して下さい。又萬朝の短編小說傑作集を御持の御方あれば（いくら古るくも宜し）秀才文集と百字文粹と白露集と海草との四册と交換して下さい（愛知縣海東郡神守村大字百島渡邊倉之助方渡邊俊子）○萬國歷史、獸醫篇、新撰化學教科書、生理學教科書、家庭衞生叢書、スキントン氏英文典直譯講義、スタンダード式英語發音法、英和新辭典、冷水養生法、桂花集、作文叢話、等不用です心理、論理、哲學、等の御不用書あれば何でもかまいませんから前記の書と交換下さい又五錢以上の繪葉書二枚以上下されし方郵稅封入申込の方は御このみの書差上ます（滋賀縣甲賀郡三雲井上富子）

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

文藝遊戯 花ことば（新課題）

文藝遊戯の第四回として皆さんにお願ひするのは『花ことば』と云ふのです、花ことばとは何んな事を作るかと云ふに左の心得を讀んで下さい

▲春、夏、何れかの花の内で一つを選み其花の言葉、つまり花が何か物を言ふやうにして其ことばを書いて頂きたい ▲櫻なら櫻、菫なら菫、何でも其花が言ひさうな言葉を考へること ▲むつかしく考へると限りなくむつかしいてすけれど、歌や俳句を作る時と同じ位な考へでも作れます ▲言ふ事がらは何でもよろしい、花自分の身の上でも、花だうしの話でも、花が人に向つて言ふやうに書いても、其邊は凡て作る方の隨意にして置きませう ▲懸賞は一等から五等まで差上る事にします ▲原稿は十行以内に限つて下さい、假名はつけなくても宜しい、住所姓名は明瞭に書くと ▲時や陽春四月、滿都、花に埋めらるると云ふ頃、諸嬢の美くしい花ことばを聞くのは何よりの樂みだらうと思ひます（二月二十日しめきり）

○賀状を感謝す

新年早々祝賀の端書をお寄せ下された芳名は大概左の通り猶拜見漏もありませうが玆に掲上して感謝の意を表し此美麗なる繪葉書を永く紀念の爲めに保存しておきます

○松本よし鬼塚たみ竹中たみ子○岩本豐市）中村勝○西海の少女子 ○大津喜和○豐原れい○百合○小川初○全豐○織田のぶ ○住月まさ○酒井よし○白菊○北澤ふさ○稲本千惠○田村秀○今村さく○白蓮○武末たへ 仝八重岡村きた仝登代外數名○山本綾江○小國敏子 ○加藤里○高見學○武村琴音○赤澤誠子 ○すいてふ花○大濱かの○富山の少女 ○河野ゆき○太田樂子○近藤とく○若狹はな○重富白露 ○出田さつき ○坂田いち○太田榮子○佐藤露子○渡邊露子○内藤ひさの○宮崎千枝 ○松田きみ○曽我鐸江○楯星籔○得能復古 ○柳田白百合○永瀬かへ○大沼なみ○東澤かれ ○田原秀○中島たか○渡邊とよを○大島ちさ ○箕輪京○石原糸○紅葉○原田こと○信○河村小藤 ○秋田高雛波しげ○林田糸○野の花○金子倚 ○高木くま○坂入千代○渡邊久○津川良 ○菅原かん○八崎りん○守富以智○金森芳枝 ○今泉磯千鳥○井上常○とき○渡部たか○岩崎繁○山村芳○權隨りの○東柳○酒見むら ○金澤いし○星川千賀惠○勝目のぶ○高田眞琴 ○倉重千代○松子○朝顏○乙幡もん○節子 ○名久井さえ○深谷榮○河原瀧○吉川小草○岡芳 ○後根善○野村久○依田芳○峰岸眞佐 ○伏島なを○佐野よしを○大谷幸○湯淺すみ○八重野 ○高谷かれ○足立奥野○工藤たまき ○藤井あやめ○岩永くら○木村浚○長澤ふく○水仙花 ○小林櫻花○藤野靜○辻 俊○奥田ゑい○森川みち○竹田光枝○康○高橋きみ○吉原富 ○忍足藤○長谷川波南○波琴○中西歌○井口豐 ○森井せい○木村ひで○高木節○鈴木絹子 ○服部榮間○楓○茂見とし○伊藤きた ○五十貝すゑ關口はつ新井きち○中津江照○景石女史 ○河原花子○よれ○服部水仙○島田清○市岡まさ○角本千春○岩淵國○岩本よし ○恩木利ゆう○札幌無名氏○後田花笑○林さだ○中村ここさ ○大橋わき○青野てん○伊藤きん子

剽竊詩文の注意

▲新年第壹號の分 ▲讃岐、みつ子 の抒情文三等『失明の妹』は明治三十四年七月少年議會第三期一號帆足赤溪作『失明の妹』を ▲東京 木孫紫水の和歌三等『三年振』は明治三十六年一月女學世界一號小田つる子作の「六年振」以下な ▲安房 白百合、大井秋月女史、水哉子、夢の家の和歌秀逸は恐く薫園選の凌霄花より ▲越前 新保勝子の和歌秀逸は學生文壇一卷一號 中澤貿志久君の作を何れも剽竊

○今回注意者及前回仝樣の報告を與へられた芳名は○津輕 笑櫻花女史 ○羽前 朝岡溪外○飛騨 YSS ○上毛 天眼通女史 ○越前 野坂まさを○不動の里人 ○京都 浪風生○東洋X生○岐阜 露子女史○長月 ○鶴岡 かつ子○福山 坂本た子○津輕 加藤美枝 ○下野 露子○

◉晴着のお寫眞を！

誌友面影の寫眞を毎號御寄贈下さいますが猶一層諸嬢の温容淸姿を紹介いたし交友の栞にと存じますから此際又新春の丹精を凝された美麗な晴着をおうつしになつた寫眞がありましたら是非お送り下さいどうぞ遠慮なくお送り下さい（寫眞は御都合により御返します）

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

新出版

▲『結婚の秘訣』　結婚の秘訣と云ふと何を書いてあるかと一寸疑はれもするが内容は結婚の準備に關する特別知識を網羅せり例へば婚約の條下に婚約間の態度を論ずる如き不幸なる結婚の條下に意志なき結婚を論ずる如き其他良人の選擇、結婚の目的、戀愛の覺醒など參考となるべき記事多し、慾には今少し文態を柔かくして誰にも分るやう書いて欲しかりき、著者は鹿島櫻巷、千葉秀浦の二氏（定價四拾八錢京橋區銀座三丁目也奈義書房）

▲『小婦人』　米國に有名の女流作家ミス、アルカットのリットル、ウーメンを北田秋圃君の譯せしものなり、無邪氣なる一篇の家庭小說にして降誕祭の用意に筆を起せり、近時の小說は一體に濃彩深刻、毒々しくして女子供の神經を刺戟し過ぎる傾向あるが此の如く悲んで傷らず、樂んで淫せざる程度の小說の出て來れるは欣ぶべし體裁口繪等も美くし（定價五十五錢神田表神保町彩雲閣發刊）

記者通信

▲姉妹合せ　文藝遊戯姉妹合せの殘りた本號て發表する筈てしたが、人形の衣服があるのて姉妹合せの方は凡て本月の増刊『つぼ菫』へ載せる事としました、何うか其積りて御らん下さい。

▲懸賞文集の第二　諸孃の好評を博したる懸賞文集は其第二、乃ち女子文壇第二卷分の懸賞當選の作物全體と名家の分とを一冊として前の第一の體裁より美にし三月上旬本社より出版します、文範として永遠に保存するには便宜てせう。

▲繪葉書の筆者　本誌に毎號附錄として添えます繪ハガキは次號から白馬會の長原止水先生に依賴して先生の選定に依る事としました、又先生自己の揮毫も出る筈です、増刊の分は閨秀畵家鏑原蕉園女史に依賴する事となりました、共に一層の美觀を添えてせう

▲諸孃の奮勵を望む　社は本年から大懸賞を發しました、諸孃は是から一層お作を勵んて下さい、つまり諸孃が精勵して下さるほど雜誌も好くなるので、本社は好いお作が澤山に來て、賞品の澤山出て行く事を希望して居るのです

二月十五日増刊

女子文壇　春期増刊

つぼ菫

價拾錢

郵税壹錢

口繪
〇水彩畵（山村の梅花）　三宅克己筆
〇繪はがき（極彩色）　蕉園女史筆
〇寫眞版＝誌友おもかげ其他數葉

本誌は前號迄の女子文壇へ載せきれなかつた江湖女秀才の傑作玉什は悉く網羅滿載してあります上に今回の分よりは母誌女子文壇と同樣繪はがき水彩畵等を附して其粧飾を新に加へました其優美な『つぼすみれ』の姿を是非御覽なさい

雜報

▲津田梅子女史の渡米　女子英學塾長津田梅子女史（本誌英文欄校閲者）は海外觀遊の爲め前月八日、米國へ向け出發せられた、野口本社長も仝日新橋迄見送をしました、滯在は向ふ一ヶ年の由、切に女史の健在を祈る。

▲文藝同好會　來る十一日午後一時より芝浦大光館（本芝停留場）に於て文藝同好者の會合あり講話、活人畵、新體詩朗讀、席上繪ハガキ交換等ある筈にて會費三十錢、何人にても出席隨意、當日は醉茗、うつぼ、白羊、大濱等青年文士の談話ある由。

▲歌御會始　前月十八日午前十時宮中に於て行はせられたるが詠進和歌總數貳萬千四百拾五通の中侍講を除き御前披擕を得たる人々は六名て女子は實に左の二名

山梨縣平民　名取忠愛妻　正代子
鹿兒島縣平民森山房太郞妻まん子

家庭鞦擧の中猶此餘裕あり面目あり鑑とすべき譯です。

"I do not let people cry in my woods," said a voice. "My trees do not grow well in salt water."

The poor wives were so sorrowful that they forgot to be afraid, and the older one said, "Can we help crying? Unless I can carry to my father-in-law fire urapped in paper, I can not go home." "And I," wailed the younger, "unless I can carry wind wrapped in paper, I can never go home. What shall we do?"

(Continued)

せん」との聲があり，又續いて同聲が「私の樹木は鹽水では能く成長しません」と云ひました。哀な妻達は悲さのあまり，恐ろしい事を忘れて，年上の方が云ひます事には，「泣かずに居られましようか。私は火を紙に包んで舅に持つて行かなければ家へ歸へられない次第です」。「私は風を包んで持つて行かなくては家へ行かれませんのです」と若い方が號泣しました。

(つゞく)

* * * * *

A bird in the hand is worth two in the bush.

掌中一羽の鳥は叢中の二羽の鳥に勝る。

The pen is the tongue of the mind.

筆は心の舌なり。

A good name is better than riches.

芳名は富貴に勝る。

By the work one knows the workman.

働きにて其働人を知る。

No path of flowers leads to glory.

花の路は光榮に到る事なし。

Rome was not built in a day.

羅馬は一日に建ちしものに非ず。

Never look for birds of this year in the nests of the last.

今年の鳥を，昨年の巢に求むる勿れ。

Help thyself, and God will help thee.

己を助けよ，然らば神汝を助けん。

Delay always breeds danger.

猶豫は常に危險を生ず。

Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY

"You may go if you wish, but you must never come back unless you bring me wind wrapped in paper." The father-in-law thought, "Now I shall find out. If they care for me, they will search the country through till they find paper that will hold fire and wind."

The two young wives were so glad to visit their old friends that for almost a month they forgot all about the gifts that they were to carry to their father-in-law. At last when it was time to go home, they were greatly troubled, about what they must carry with them, and they asked a wise man where to find the strange things. "Paper that will hold fire and wind!" he cried. "There is no such paper in this land." The two women asked one wise man after another, and every one declared, There is no such paper in this country." What should they do? They feared they would never see their home again. They were so sad that they left their friends and wandered a long distance into the forest Great tears fell from their eyes.

て來なければ，決して爰へ再び歸へる事はならんぞ」。若い方の嫁には，「行き度いのなら行つても宜いが，御前は風を紙に包んて持參しなければ二度と此家へは歸へる事ならんぞ」と申ました．彼は又思ふには，「之で分るに相違なし．若し俺を大事と思ふなら，火や風を包む事の出來る紙を全國中探すだろう」と。

二人の嫁は昔の友達に逢ふのが嬉しさに，舅へ持ち歸へらなければならぬ土產物の事は全く失念して，殆んど一ケ月も送りました。終に歸宅する時日が迫つてきたので，土產物に付，大變に心配を致しましたあげく，何處て斯る品物を求められるか，賢者に尋ねましたが彼は，「火や風を包む紙だと！其麽物は此國中に無い」と叫びました。

二人の女は此人から彼人と色々の學者に問ひましたが，皆の返事は「其麽紙は此國中には無い」との事でした。如何に爲すべき塲合てしたらふ？二人は先方の家へはもう歸へられないだらうと按じました．彼等の心中亂れて，友達なども構はず捨置き，何處ともなく遠くまでブラ々々步み行き，終に森中に這入り，大き淚をば振り落しました。

「私の林中では泣く事を許しま

Digitized by Google

Original from
HARVARD UNIVERSITY

Ready to sparkle for our joy again,—
The eternal jewels
of the short-lived night.
Mary M. Dodge.

The Lantern and the Fan.

In a certain village there once lived a man who had two sons. When the sons were grown up, each brought home a wife who pleased the father-in-law exceedingly, and for many months they all lived very happily together.

At last the two young wives asked to go home to visit their friends. So they said, "Father, it is a long, long time since we have seen our friends. May we go to our old home and visit them?" The father-in-law answered, "No." Once more they asked after many months. He thought, "They care nothing for me, or they would not wish to leave me, but I have a plan, and I can soon know whether they love me or not." Then he said to the older of the two wives, "You may go if you wish, but you must never come back unless you bring me fire wrapped in paper." To the younger he said,

我等を又も　　喜ばす
時の來るを　　待つや星。
あな短夜の　　朽ちぬ寶は
なれにこそ。

提燈と扇

昔某村に二人の子息を持て居た者がありました．此子息等は大人と成り各々妻を娶つて家に伴れて來ました處が非常に舅に氣に入つて，幾ヶ月も皆一所に樂しく暮して居りました。

。

終に二人の年若い嫁は里に歸へつて友達に逢ひ度くなり，舅に斯く願ひました，「御父さん，私共は友達と逢つて咄をしてから，大層永く經ちましたから，一寸里に歸り，少し遊んで來て宜しう御座いますか」。舅は「いかん」と返事しましたが，又幾ヶ月も經た後に再び，嫁達は同じ事を申出ましたので，老人の思ふには，「如何もあれたちは俺の事を少しも思はない，若し思へば俺の側を離れるが否な筈だ．幸爰に良い策があるから，之て彼等が俺を大事に思つてるかどうだかゞ分かる」。其處て彼は嫁の年長つて居る方に云ふには，「行き度いなら行つてもよいが，御前は紙に火を包んで持つ

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

英文（二）

津田梅子閲　河井道子述

The Stars	星
They wait all day	終日待てる　晝の星
unseen by us, unfelt;	人に見られず　さとられず
Patient they bide	忍びて憩ふ
behind the day's full glare;	日の影に.
And we, who watched the dawn	東雲微に
when they were there,	てる星を
Thought we had seen them	眺むる目には　疑はる
in the daylight melt,	明け行く空に　消えしかと,
While the slow sun	急がぬ旭　かなたなる
upon the earth-line knelt.	地平線上に　坐する頃。
Because the teeming sky	星を敷きけん　空なれど
seemed void and bare,	眞晝に見なば
When we explored it	唯の虚無,
through the dazzled air,	されば終日
We had no thought	蒼天に
that there all day they dwelt.	星や住めりと　思はねど
Yet were they over us,	彼等は活けり
alive and true;	地の上に,
In the vast shades	蒼天越えし
far up above the blue—	常闇に
The brooding shades	照る日の光　とゞき得ぬ
beyond our daylight ken,—	渺茫無限の闇の界に
Serene and patient	澄みて堪せず
in their conscious light;	輝めきて

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

此社告は愛讀諸嬢の精讀を望む

募集課目

第參卷より改定

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種 ◎叙事文 ◎抒情文 ◎書簡文 ◎評論文（各半紙廿四字詰三十行以內楷書に認めらるべし）

◎短篇小說（半紙総かな付廿四字六十行內） ◎新體詩（半紙かな付十句以內）

乙種 ◎和歌（半紙半分一首宛） ◎俳句（仝上） ◎新歌謠（仝上）

◎短文（半紙かな付廿四字五行） ◎新笑話（半紙半分十六字詰） ◎圖畫（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の薄きもの）

別種 ◎文藝遊戲（半紙十六字詰） ◎誌友倶樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

▲都て各項とも課題は隨意▼

→（毎月十五日投稿〆切）←

獎學懸賞品

甲種	第一等	婦人持銀側時計……	價格金拾圓
	第二等	新柄反物……	價格金參圓
	第三等	縮緬〻……	價格金壹圓
	第四等	便利の圖書切符……	金七拾錢
	第五等	同……	金五拾錢
乙種	第一等	流行絹張洋傘……	價格金五圓
	第二等	流行帶止……	價格金壹圓
	第三等	化粧品……	價格金五拾錢
	第四等	便利の圖書切符……	金參拾錢
	第五等	同……	金拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ懸賞品贈呈すべし、右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を明細に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は『原稿在中』の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期增刊年四回（二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

		郵税共
一冊（大冊百頁）	前金拾錢	前金拾壹錢
八冊（半年分增刊共）	前金七拾六錢	同 前金八拾四錢
十二冊（一年分增刊除ク）	前金壹圓八錢	同 前金壹圓廿錢
十六冊（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢	同 前金壹圓六十錢

郵券代用は必ず壹割增

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法

此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何時でも無代で呉れます

明治四十年一月廿九日印刷
明治四十年二月一　日發行

定價 金拾錢（此外無割引）

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社 秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話〔本局六〇七番〕 女子文壇社

特約賣捌元○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂

廣告料金 改正

特等	一頁三十圓	半頁……	一行……
一等	一頁廿五圓	半頁十三圓	一行……
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切 毎號十五日前

廣告特約取扱 神田三河町一ノ十九 電話本局一四四四番 博報堂 ○ 京橋南佐柄木町二 電話新橋八二二番 日本廣告株式會社

（宮本製本）

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



産科婦人科を以て名聲世界に赫々たる醫學博士専門諸大醫の賞賛を得たるのみならず畏くも上宮様方の御用を蒙るに到る誠に本剤の名譽と云ふべし

醫學博士 慈惠病院長 高木兼寛先生（東京）
小兒科婦人科専門 醫學博士 瀬川昌耆先生（東京）
醫學博士婦人科専門ドクトル 緒方正清先生（大阪）
産科婦人科専門 醫學士櫻井病院長 櫻井郁次郎先生（東京）
産科婦人科専門ドクトル 木村順吉先生（東京）
産科婦人科専門ドクトル 佐伯理一郎先生（京都）
小兒科婦人科専門ドクトル 小林山郷先生（大阪）
婦人科専門 獨逸ドクトル 朝山義六先生（横濱）
柴田婦産兒科院長 醫學士ドクトル 柴田耕一先生（名古屋）

右の外三十餘名の大醫諸君より最も名譽ある稱賛を恭ふしたれども略す

中將湯

見よ

主治効能

●子宮病 ●血の道 ●逆上頭痛 ●腰足冷込
●下腹痛み ●胸先差込 ●白血長血 ●こしけ
●婦人神經 ●氣ふさぎ ●癇高ぶり ●夜眠られず
●産前産後 ●古血の滯 ●難産流産 ●しびれ水腫
●月經不順 ●月經滯り ●月經痛み ●血ぶとり



此外

凡て子宮血の道産前産後月經不順より起りし諸症に用ゆれば血のめぐりを調へ帯下を止め欝を開き自ら心氣を爽快ならしむ

改正定價

一日分十錢
四日分卅五錢
一週間六十錢

二週間一圓十錢
三週間一圓六十錢
五週間二圓五十錢

本舖へ御注文の方は病人の御容體詳しく御申越あれ

注意 持薬として御服用の御方は五週間分御求め被下候得者至極御德用に候

中將湯本家 東京日本橋通四丁目 電話本局一〇九七番 津村順天堂本店
中將湯本家 大阪堺筋大寶寺町南 電話東一二七八番 津村順天堂支店

女子文壇 最廉無比 定價金拾錢 郵稅壹錢

（東京秀英舍印刷）